# 魔法少女リリカルなのは　平凡な日常を望む転生者

ｂｌｕｅｏｃｅａｎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　平凡な日常を望む転生者

【Ｎコード】
Ｎ４０２１Ｖ

【作者名】
ｂｌｕｅｏｃｅａｎ

【あらすじ】
主人公、有栖零治は転生者。
神様にデバイスを貰い、８歳の姿でリリカルなのはの世界に転生した。
原作知識はほとんどなく、それでも原作介入しようとしたが別の転生者が原作介入していた。

やる気を無くした零治はフリーの魔導師として活動しながら平凡な生活をしていた。

途中、マテリアル三人娘を家族に向かえ6年が過ぎた・・・・

そして中学2年の新学期。

零治の物語が始まる。

って今更原作介入!?

# プロローグ（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

リリカルなのはの二次小説にはまり、自分も書いてみました。

作者は原作知識がほとんどないのでおかしいところがあるかもしれませんが、それでもよければ読んでみてください。

（注）ナデシコ、スパロボ、テイルズはデバイスの設定と技のみです。

# プロローグ

俺は有栖零治。

年は１４歳。

転生者だ。

俺は８歳の姿でこの世界に転生してきた。家とお金も用意してあり、一人でも生活出来るようになっていた。

神様に言われリリカルなのはの世界に転生してきたが、はっきり言って俺は原作を見たことがない。

知識はあるにはあるのだが、二次小説を読んでいたのと、所々を〇ーチューブで見たことがあるくらいだ。

数の子シスターズの名前は分かるが、顔が分からん。

ただチンクは眼帯をつけているらしいからすぐわかると思うけど。

ちなみに俺の魔法ランクはＳだ。

デバイスを使った時に言われたから間違いないと思う。

だけど、面倒ごとには余り突っ込みたくないから普段はリミッターをかけて魔力は無いように見せかけてる。

デバイスの名前はラグナル。インテリジェントデバイスで指輪だ。

普段はチェーンに通して首にかけてる。

最初の頃の俺も、二次小説の主人公たちみたいに、原作介入何て考えていたけど諦めた。

俺以外にも転生者がいたからだ。名前は神崎大悟。日本名のくせに髪は銀髪、目は赤と青のオッドアイ。イケメンのキザやろう。正直気持ち悪いし、ナルシストでかなりうざい。

こいつが原作介入し、高町たちとジュエルシード事件を解決していたため、すぐやる気を無くし、ダラダラと毎日を過ごした。

それに原作事態大雑把にしか知らない俺が介入しても意味がないと思ったからだ。

と言ってもせっかく手に入れた魔法の力だったので、フリーの魔導師として、仕事をしている。

転生者の俺には親がいないので別に何か言って来るやつは誰もいなかったし。

二つ名もついた。いきなり現れ、漆黒の鎧を纏い、敵を倒し、忽然と消える。傷ひとつ負わないその姿から『黒の亡霊』と呼ばれるようになった。

ちなみに俺はフェイトと同じマンションに住んでいる。狙ってない

ぞ・・・・・・

あと、独り暮らしでもない。

五年前の闇の書事件、それが終わってからのことだ。

いつも通り学校を帰っていた俺だが、ふとすごく微弱な魔力を感じたので、そこに向かった。

そこには高町なのはそっくりな女の子、フェイトそっくりだが髪が水色の女の子、はやてそっくりの白髪で先が赤い女の子がいた。

だが今にも消えそうなくらい薄くなっていた。

「だれ・・・で・すか?」

「通りすがりの魔導師。あんたらは?」

「わたしは・・・私達には、名前は・・・」

「ふ~ん。なぁあんたたち、生きたいか?」

「えっ!?」

「生きたいかどうか聞いている。」

「私は・・・生きたい。」

「僕も・・・」

「我もだ・・・」

三人が言ったのを聞いた俺は、

「分かった。もう少し持たせろ。」

そう言って目をつぶった。

「なんじゃ、やっと願いを言いに来たのかの？」

「ああ。」

神様は最初に俺に三つまで神様の力で出来る範囲の願いを叶えてくれると言われた。

だけど、特に思いつかなかった俺は要らないと言ったのだが、神様のプライドが許せないらしく、何か叶えて欲しい願いがあったら言えと言われ渋々了承したのだった。

「それでなんじゃ？」

「今にも消えかかってる三人娘を普通の人として生きれるようにしてやってくれ。」

「ほぅ、そんなんで良いのか？」

「ああ、そうしてやってくれ。」

「新たな力とかではなくて良いのか？」

「要らねぇよ。そんな物騒なもの。今さら原作介入なんてするきないし。」

「・・・本当にいいのか？」

「いいからやってくれ。」

「やれやれ本当に欲の無いやつだの・・・」

「それじゃいくぞ。」

『何でもいいからそれっぽい呪文を言ってくれ。』

「・・・かの者達を死の淵から呼び戻せ、レイズデット。」

三人のしたから光の魔方陣が現れ三人を包む。

「うそ！？」

「体が・・・」

「なんと！」

三人ともそれぞれ驚いている。

「ちなみに人になってるから。」

「「「えっ！？」」」

「魔法は・・・多分使えると思うけど、使えないかもしれん。」

「いや、そんなことよりも・・・・・」

「人ってどういうこと！！」

なのは（仮）が話そうとしたところでフェイト（仮）が割り込んで聞いてくる。

「原理は知らん。神のじいさんにでも聞いてくれ。」

「・・・訳が分からん。」

はやて（仮）が少し不満そうに言う。

「・・・なんなら少し手を切ってみろ。血が出るから。」

そう言われ、なのは（仮）が指をかんだ。

本当にしやがった・・・・

「本当に・・・血だ・・」

「僕も・・・・・」

「我もだ・・・・」

フェイト（仮）とはやて（仮）もやってみてそれぞれ驚いている。

「そんじゃ、俺は帰るからあとは頑張れよ～」

そう言って立ち去ろうとしたが、

「まっ、待ってください。」

なのは（仮）に手を捕まれる。

「いかないでください・・・」

弱々しい声で俺に言った。

・・・そういえばこいつら闇の書の残留思念だっけ?よく覚えてないけど・・・ってことは帰る家も金も持ってないだろうし、ここでほおっておくのは・・・・・・・・・・・・

・・・仕方ない。

「分かった。お前たちもこいよ。」

「・・・・・・いいんですか?」

「ああ、ここで見捨てても後味悪いからな。えっとなんて呼べばいいか・・・・・」

「あの・・・名前つけていただけませんか？」

「はぁ！？良いのかよ？」

「はい・・・助けていただきましたし。」

「あなたなら僕もいいかな。」

「つべこべ言わず早く考えろ！！」

はやて（仮）態度でかいな・・・

まぁ可愛いが。

暫く考えたが結局・・・

「よし、まずはなのは似のお前は星。」

「星・・・」

「フェイト似はライ。」

「おお・・・！」

「はやて似は夜美。」

「ふむ・・悪くはない。」

よかった、不満はないみたいだ。

まぁ二次小説をまんまパクったからな・・・

「そんじゃ行きますか。」

「待ってください！」

再び家に向かおうとした俺だったが、星に止められた。

「あの・・・あなたの名前は・・・」

「・・・俺は有栖零治だ。」

こんな感じでマテリアル三人娘が同居人になった。

あの後、三人はそれぞれ名字は俺と同じにし、有栖星、有栖ライ、有栖夜美と名乗ることになった。

一応、小学校に通わせるために、４年の夏休みまでにみっちり勉強させ、秋から俺とは違う学校に行かせた。

これはなのはたちと鉢合わせないようにするためである。

すごく反対されたが高校は同じ学校にすると約束して何とか静かにさせた。

そして今現在・・・

「レイ、おっきろ～！！」

ドスンッと俺の上に誰かが乗ってくる。その威力に意識が飛びそうになるが、なんとかつなぎとめた。

「たっ、頼むからその起こし方は止めろ！！いつか息の根を止めるぞ・・・」

「レイがすぐ起きないからだよ。」

俺の上に乗っているのはライ。元気っ子で一番子供っぽい。だがそれと反比例して、身長もスタイルも中学生ばなれしてきている。男子からの人気も半端ないらしい。本人は全く分かってないだろうけど・・・・・

「レイ、やっと起きたのですね。」

星が優しく語りかけてくる。

「おはよう、星。」

「早く準備してください。ご飯はできてますよ。」

星は家で一番しっかりしており、面倒見もよく、三人娘では長女みたいな感じだ。夜美から聞いたが、その性格ゆえ、中学ではマドンナ的存在になっているらしい。

家事は全般、星がやってくれていて俺は俺は大助かりしている。

ライや夜美が手伝おうとするが、遅いので一人よりも時間がかかってしまう。
つーか夜美、はやては料理もうまいはずなのに、なぜか夜美は全然できない。
王様気取ってるからか？

すぐに着替えて、リビングに向かう。
するとソファーに座って新聞を読んでいる夜美がいた。

「おっす、夜美。」

「遅い、いつまで寝ている気だ。」

夜美は原作とは違い、相手を罵るようなことは滅多に言わない。だけど偉そうなのは変わらず王様みたいに振る舞っている。中学でもそうらしい。
最近はなかなか成長しないことを気にしているらしい。

まぁ比べる二人のレベルが高すぎるが・・・

「本当はもっと寝ていたいけど。」

「・・・まだ寝る気なのか・・・・・・」

あきれた感じで言われた。

「あのな、人間で一番大切なのは睡眠でだな・・・・」

「いいから、ご飯にしますよ。」

星に横やりをいれられ、話す気を無くした俺は黙って席につく。

夜美も続いて座った。

「よし、それじゃ。」

「「「「いただきます。」」」」

朝御飯を食べ始めた。

「それじゃ、先に行きますので戸締まりよろしくお願いします。」

「了解。」

「じゃ、行ってきます。」

「行ってくるね。」

「行ってくる。」

三人がそれぞれ言い、家を出ていった。

三人は隣町の中学に行っているため、朝はとても早い。

これが有栖家の朝である。

本当は俺も三人と同じ中学にするか迷ったが、なのはたちの近くにいた方が原作の流れを把握できるのではないかと思ったからそのまま進学した。

既に違うところも出てきている。

俺が通っている聖祥大学付属中学は共学でクラスも男子と同じになっていた。

確かアニメは男子と女子は別々になっていたような・・・・・・

転生してはや6年。

転生前の記憶もほとんど忘れ始めていた。

まぁ、そんなこんなでなのはたちと同じ学校だ。

いつもと変わらない日常が続くだろうと思っていた。だが新学期、この年、俺の生活は一気に変わる・・・

## プロローグ（後書き）

ということで始まりました。

時期は空白期です。

最初は学校生活が中心になると思います。

原作知識がほとんどないので指摘ていただけるとありがたいです。

誤字、脱字の指摘、感想を頂けるとありがたいです。

# 設定（前書き）

オリキャラの設定です。

# 設定

有栖零治

１７５ｃｍ６８ｋｇ

少し茶髪気味の短髪、体はがっちりしている。

面倒くさがりで、怠け者。他人に無関心を貫いており、学校では寝てばっかりいる。だけど困った人はほおって置けないような優しいところもある。神様から三つ力を貰えると言われたが、それを拒否し、何かあった時に神様が叶えられる願いを言うということにした。ちなみにあと２回お願い出来る。

魔力ランク　Ｓ

レアスキル

空間転移

ブラックサレナフォームのボソンジャンプの劣化番。ＣＣの代わりに魔力を使って飛ぶ。距離は最大１００ｍが限界。ただ硬直時間が無いことが唯一の利点。

デバイス

ラグナル

指輪型インテリジェントデバイス

神様のプレゼントのデバイス。中は女人格でとても主人思いだが、少し口が悪い。

能力

ブラックサレナフォーム

劇場版ナデシコお馴染み幽霊ロボット。

姿は全身ブラックサレナ。ラグナルフォームの上に装甲をまとい、ブラックサレナとしている。その際顔は黒いバイザーで隠している。

近、中、遠と対応できるが、武器は少ない。だが防御力はかなりのもので、このフォームを一番利用している。ディストーションフィールドとボソンジャンプも使える。

ボソンジャンプは月へ行けるような強力なものではなく、最大１０キロ先にしか飛ぶことができない。しかも、現れた時と飛ぶときには3秒硬直してしまう。

ただ、ＣＣの代わりに自分の魔力を使う。複数で飛ぶことも可能だが、その分最大距離は短くなり魔力の使用料も増える。

武装はハンドガン、グラビティブラスト、両腰にあるレールガン、ビームソードのみ。

ディストーションフィールドを張り、体当たりも出来る。

グラビティブラストとレールガン、ビームソードはあまりにも武装が少ないため付け足した。

アーベントフォーム

無限のフロンティアのヴァイスリッターアーベント。

高機動射撃戦闘用。

ブラックサレナ同様にラグナルフォームの上から装甲をまとっている。

バルチサンランチャーを主流に高速移動しながら射撃をする。

他にも、右腕に5連ビームキャノン、Gインパクトステークを使える。

全身アーベントで顔は白いバイザーで隠している。

小学5年の時、仕事で初めて使い、高機動戦闘に体がついていけず、それ以来滅多に使わない。

フルドライブのブラスターモードを使うと、アーベントの赤い線が青くなる。その際、バルチサンランチャーもバルチサンブラスターとなる。

ラグナルフォーム

近距離専用のスタイル。
普通にセットアップすると、このフォームになる。

この上から装甲をまといブラックサレナやアーベントとして戦う。
装着は自由にできるが、装甲を分離するとしばらくは同じフォームになれなくなる。

ダメージが大きいほどその時間も長くなる。

服装はＴＯＧのアスベル・ラント。刀を使い、剣技もアスベルが使うものと同じ。

この姿だとバイザーも無く、誰だか割れてしまうため、訓練以外使わない。カードリッチシステムもあり、カードリッチを使い強力な剣技を使う。

神崎大悟

１７８ｃｍ６７ｋｇ

銀髪で目が赤と青のオッドアイ。

零士と同じ転生者。零士より先になのはたちに接触し、原作介入した。

ただ全然うまくいかず、原作とあまり変わっていない。ナルシストで自己中。最強の魔力、ナデポとニコポのスキル、赤と青のオッドアイと銀髪で完璧な容姿を神様に頼み手に入れている。だが執拗にするがスキルのことを詳しく聞いていないため、原作キャラたちには全く効いてない。オッドアイについては特に意味はない。ｓｔｓの時にヴィヴィオに懐かれるのではないのかとオッドアイにした。

魔力ランク　ＳＳＳオーバー

レアスキル？

ナデポ・ニコポ

好意を抱いている者の好意を増長させる。

自分に好意を持っている者にしか効果がない。

デバイス

ジルディス

ブレスレット型のインテリジェントデバイス。男人格。主人の行動を恥ずかしく思いながらも命令に忠実にこなす。ＢＪはＦａｔｅのアーチャーの姿みたいで上着が白。

ブレイドスタイル

大剣。大剣に魔力を纏わせ長さを伸ばして攻撃したり、魔力刃を飛ばして攻撃出来る。一番好んで使う。

バレットスタイル

両手に銃を持って戦う、中距離戦闘用スタイル。幻影を使い敵を惑わしながら戦う。

ブラストスタイル

ウイングガンダムが使うようなバスターライフルで攻撃する遠距離用スタイル。全スタイル中最大の威力を誇る。

有栖星

１５４ｃｍ４５ｋｇ

星光の殲滅者

なのはに負けたあと消えかかった後に零治に助けられそのあとは居候として共に生活をしている。

三人のなかでは一番しっかりしており、世話好きで家事全般を星に任せている。めったに怒らないが怒ると凄まじい。しっかりした性格から学校のマドンナ的そんざいになっている。

魔力ランク　ＡＡＡ＋

デバイス

ルシフェリオン

原作と同じ。

有栖ライ

１６０ｃｍ４５ｋｇ

雷刃の襲撃者

星と同様に零治に助けられ、居候している。
三人の中では一番子供っぽく、一番元気。学校でもそのキャラと中学生とは思えないスタイルで男子にとても人気がある。
ただものすごいアホな子である。
家事全般が全く苦手だが運動神経が良く、いろいろな部活に顔を出している。

魔力ランク　ＡＡＡ＋

デバイス

バルフィニカス

原作と同じ

有栖夜美

１４８ｃｍ４０ｋｇ

闇統べる王

二人と同様零治に助けられ居候している。
原作みたいに相手を罵ることを滅多に言わないが、偉そうなのは変わらない。
そのせいで学校では少し避けられがちだが、隠れファンが多い。

はやてとは違い料理がからっきし駄目。背の小さいのを気にしている。

魔力ランク　Ｓ－

デバイス

エルシニアクロイツ

原作と同じ

シャイデ・ミナード

１６４ｃｍ５２ｋｇ

２５歳

零治の仕事のクライアントで保護者。零治が独り身だったのを案じ、勝手に叔母と名乗り保護者となった。天才デバイスマスターの肩書きを持ち、特殊なデバイスであるラグナルをメンテできる唯一の人物である。

魔力ランク　ＡＡ＋

デバイス

ハンニバル

シャイデが持つインテリジェントデバイス。戦闘もできるが、主にデバイスのメンテ、改造に使う。
元は管理局で働いていたことがあり、とある事情で辞める。そのあとはデバイスマスターとして活動していた。クライアントとしてフリーの魔導師に仕事を提供したりもしている。

## 設定（後書き）

と、こんな感じです。

マテリアル三人娘も結果的に魔力持ってます。

次は本編に入ります。

次回もよろしくお願いします。

## 第1話　クラスは原作キャラでいっぱい（前書き）

スピード投稿。

量も少なめなので直ぐに書き終わりました。

では、どうぞ。

# 第1話　クラスは原作キャラでいっぱい

学校に着いた俺に待っていたのはクラス発表と言う、学生では欠かせないイベントだ。

いつも寝ている俺にとってはクラスなんてどうでもいいが、いつもちゃんと調べていることがある。

・・・高町なのは率いる原作組プラス1名のことである。

小学生の時は幸運なのか魔導師四人と同じクラスになったことはない。ただ、アリサ・バニングスと月村すずかとは、去年同じクラスになってしまった。なぜかバニングスは執拗に絡んできてうざかった。

寝ている俺によく突っかかってくる。すずかはいつもバニングスと喧嘩になりそうな所を良いタイミングで止めてくれる。

・・・・・すずかがいなかったらリアルに殴りあってたかもしれない。

そんなこともあり、去年は最悪だった。

今年は最高のクラスでありますように・・・

期待を込め掲示板を見る。

2―Aか。

さて、あいつは・・・いたよ、バニングス。悪夢の再来か・・・

あっ、すずかもいた。助かった。女子では唯一気楽に話せるからな。

そして本命、高町なのは。

・・・・・いた。

まぁ今まで接点が無かったのは異常だったのかもな。

俺自体翠屋の常連だし。

続いてフェイト・T・ハラオウン。

・・・・・・・・マジで!?

いましたよ、高町に続いて。なんだか今年は運が悪すぎる。

静かに生活したいだけなのに・・・

・・・もう勘弁してくれ・・・・三人娘同じクラスかよ・・・

八神はやての名前がそこにあった。

本当に目立たないようにしなくては・・・・・・

・・・・・・・・マジで転校するかな。

男子の所に神崎大悟の名前があった。

原作主要人物勢揃いである・・・・・・

「何この世の終わりみたいな顔をしてるのよ。」

教室に入って早々にバニングスが話しかけてきた。

「・・・バーニングか。悪い気分が最悪なんだ帰って良いか?」

「バ・ニ・ン・グ・ス!!いい加減名前くらい覚えなさい!!」

「しかも、普通なら話しかけるなじゃない?」

バニングスの隣にいたすずかが苦笑いしながら話しかける。

「すずかか、おはよう。」

「・・・何ですずかは名前なのよ。」

「はぁ?お前の名字が面白いからに決まってるだろ?燃え上がれバーニング!!」

「バニングスだって言ってるでしょ!!」

キーキー言いながら拳を振ってくるバニングス。それを椅子に座りながら器用に避ける。

「避けるな！！」

「フッ、甘い、甘い。」

「・・・・・二人って実は仲いいでしょ。」

すずかの呟きは二人には聞こえなかった。

「疲れた・・・・・」

「何で新学期そうそう・・・」

「自分たちが悪いんでしょ・・・・・」

呆れた様子で言うすずかに何も言えなくなる俺とバニングス。

そんな時・・・・

「「アリサちゃん、すずかちゃん。」」

「アリサ、すずか。」

魔導師三人娘がやって来た。

「なのは、フェイト、はやて。」

嬉しそうな声を上げ、アリサは声のする方へ行った。

「零治君、後でね。」

すずかはそう言ってバニングスの後に続く。

俺としては後もほっといて欲しいんだけど・・・

っていうかこれってお友達イベントじゃね!?

関わりたくないのに・・・・

なんとか逃げるか。

その場から立ち去る俺だった。

皆が講堂に入っていく中、俺は屋上で黄昏ていた。

あのあとすぐに席をたち、屋上に行った。

今は始業式が始まっているだろう。

それにしてもどうするか・・・・

はっきり言ってかなりやばい状況である。

フリーの魔導師として活動しているが、非公式のため管理局に目を付けられていることは明らかだ。

まぁ、全身装甲に覆われているし、バイザーも付けているからブラックサレナでいる間はバレないだろう。

けれど、管理局員にはなるべく関わりたくない。

星たちのこともあるし・・・

そんなことを考えていると生徒たちの声が聞こえてきた。

「さて、そろそろ教室に戻るか。」

新学期そうそう、説教なんてめんどくさいし。

俺が教室に入るとみんな注目するが、直ぐに自分のしていることに戻る。

まぁ俺のことなんてどうでもいいから当然だろう。

席について机に突っ付す。

「あんたどこ行ってたのよ。」

「・・・いつものとこ。」

「またか・・・あんたそのままだとろくな人間にならないわよ。」

「余計なお世話だ。寝るから黙ってろ。」

「っ、何よその態度!!せっかく人が忠告してあげたのに。分かったわよ、好きにしたらいいじゃない。」

そう言って離れていくバニングス。

余計なお世話だっての。けれどこれでやっと寝れる・・・・

「ほほう、新学期そうそう堂々と寝るなんていい度胸じゃないか。」

聞き覚えのある声に思わず顔を上げる。

そこには仕事のクライアント、シャンデ・ミナードがいた。

「皆さん初めまして。このクラスの担任のシャイデ・ミナードです。担任を持つのは初めてですけどよろしくね。」

男子から喝采が上がる。

それはそうだろう。

見た目は金髪のスレンダー美人だもん。年齢も確か25だったはず。
思春期の男共には最高だろう。

俺にとっては最悪だけど。

「ちなみに、そこにいる有栖零治の叔母に当たるの。何かみんなに迷惑をかけたら言ってね、後で“おはなし”するから」

余計なことを言うな！あとお前は高町か！！

シャイデ・ミナード
仕事のクライアントで、天才デバイスマスター。特殊なデバイスのラグナルを唯一メンテできる。

俺が独り身なのを知って勝手に叔母として保護者になった。けれどミッドチルダに住んでいるため別々に暮らしている。ちなみに星たちの保護者もやってくれている。

「俺的には何であんたが先生になっているのが謎なんだが。」

「あら、言ってなかったっけ？私、教員免許持ってたのよ。」

「初耳だね。聞いてたら転校したのに。」

「だからよ。これで少しはましになってもらわないと。」

「・・・・・一番アレな性格しているあんたに言われたくないけど。」

二人の出す負のオーラにクラスの皆は引いていた。

「っとこれくらいにして、みんなできればこの馬鹿とも仲良くしてね。それじゃまずはこのプリントを・・・・」

何事もなかったかのようにＨＲを始めたシャイデにクラスの空気も徐々に柔らかくなり、二時間目に入ったときにはすっかり馴染んでいた。

「それじゃ、今日やっていくことはこれくらいかな。よし、みんな席替えするわよ。」

それを聞いて、クラスから歓声が上がる。（主に男子）

「ここにクジを作っておいたからみんな順番に引いてね。」

そう言ったあと、みんなそれぞれ引き始める。

しかし、新学期そうそう席替えとは・・・

まぁ、一番前の席を離れられるなら別にいいか。

しかし男子の力の入れようが半端ない。

まぁ、このクラスにはこの学校五大美少女がいるんだからな。（当然原作組み。）

気持ちは分かるけど・・・・・・・

「みんなクジ引いたわね。それじゃ、みんな移動始めて。」

シャイデの一言でそれぞれ移動を始めた。

結果は・・・・・・

見事、窓の一番後ろを引いた俺!!

だけど・・・・・・・

「よろしくね、零治君。」

隣に魔王様がいらっしゃいました。

どうしてこうなる・・・・・・・

## 第1話　クラスは原作キャラでいっぱい（後書き）

ってな感じで隣に魔王様が。

次は魔王様との絡みです。

今回はアリサのからみが多かったなぁ。

零治はアリサのことは面倒くさい奴だと思っていますが、嫌いではありません。

すずかは唯一の学校で気軽に話せる女の子です。

零治は皆から不良と思われているので・・・・・

次もなるべく早く投稿しようと思ってます。

次もよろしくお願いします。

# 第2話　零治ｖｓなのは（前書き）

第二話です。

リリなの人気恐ろしい・・・・

一日でファイアーエムブレムのほうのＰＶ抜いちゃった・・・

# 第2話　零治ｖｓなのは

そんなこんなで見事魔王様の隣を引いた俺。男子の大半が俺をにらめつけている。まぁ勝ち組も何人かいるけど・・・・・・（フェイトやはやて、バニングス、すずかの周辺の方々）

だけど俺にとっては全く嬉しくない。変わって良いならいくらでも変わってやる！！

学校が終った瞬間、俺はダッシュで教室を出た。廊下を走り、階段を一気に飛び降り、下駄箱まで行き、靴を履き替え、学校を出る。

・・・・・・よし、追って来ない。

って言うか、ただのお隣さんなだけだし問題なさそうな・・・・・・

家に帰ってこの事を星たちに報告した。

星はかわいそうな人を見る目で「お気の毒ですね。」と言われた。

・・・・・ちょっとトラウマになってる？

ライはそんなの関係ないといった様子でシャイデの話になった。

ライはシャイデを母親みたいに思っているところがあり、一番甘えている。シャイデもまんざらでないみたいだけど・・・

夜美はクラスになった、八神はやてのことが気になってるみたいだ。

やっぱり自分のオリジナルだからかな・・・・

あと、いつも通りみたいに俺をパシるな!!

やってやる俺も悪いけど・・・・・・

一度夜美とはちゃんと話し合った方が良いような気がする。

その日の夕食はカレー。俺の好物だ。多分俺のためだろうな。

本当に星は優しい・・・・・・

「レイ、ゲームしよう!」

「いいぜ。よし、たまにはみんなでするか。」

ライの提案に星と夜美を呼び、Ｗｉｉのリモコンを渡す。

この世界にもＷｉｉやＰＳ３などのゲームは存在している。

ただソフトの中身は違うけど。

それでも、マリオそっくりや、テイルズそっくりのゲームがあったりする。

今回は大乱闘スマッシュロワイアルにするか。

俺は、アイク似のキャラ。星は無難にマリオ似のおっさん。ライはピカチュウ似の電気ネズミ。
夜美はカービィ似の暴食野郎。

「喰らえ、雷撃砲！！」

「そんな技あったか？」

「いいえ、私は知りませんけど・・・」

「く、やったなライ。だが、我もそう簡単に負けられん！！」

テレビの中で激しい戦いを繰り広げているライと夜美。

俺と星は早々に潰されました。

今は仲良くゲームの模様を見ています。

星はあまりゲームをしないため直ぐに負けてしまう。

っていうかハンマー持ってんのに勝手に落ちていくなんて・・・・・

才能無いとかの問題じゃないと思う。

俺ははっきり言って一番強いのだが、ライと夜美に集中攻撃され除

外されてしまった。

でもってライｖｓ夜美となっていた。

「ああーっ！！」

暴食野郎のスマッシュが決まり電気ネズミが吹っ飛んだ。

「フフ、今回は我の勝ちだな。おい、レイお茶を持ってこい。」

「了解・・・・じゃねぇ！！！」

行きそうになる体をなんとか止めた。

「敗者に口無し。いいから三人分を持ってこい。」

「ぐっ・・・・」

「あの・・・私が・・」

「星はいつもやってるからいいよ。分かった持ってくるよ。」

「僕コーラね。」

「買って来いと！？」

「そこまでしなくていいです！ライ、あなたもわがまま言わない。」

「えっ～でも夜美が言ってたじゃん。敗者は口無しだって。」

「ぐっ・・・・」

「けれどそれなら私も・・・」

「でもレイは俺に任せろって言ってたよ。」

「ぐぐっ・・・・」

「男なら二言はないよな？」

夜美がニヤつきながら俺に行ってくる。

「分かった、分かったよ！！なんでも言ってこい、買ってきてやる！！」

その後、夜の街を駆けたことは言うまでもない。

そんなこんなでわいわいと夜を過ごした。

そして次の日。

早速、魔導師組は欠席していた。まぁ管理局の仕事なんかだろう。

しかし、運が悪いと思っていたが、よく考えてみると最高だなこの席。

ポジショニングは言うまでもない。窓から入ってくる春の陽気で睡魔がアップ。先生からも一番遠いのでここまで来て起こしに来る先

生も滅多にいない。

一番の問題、隣の魔王様だが管理局の仕事で度々休む。

俺の睡眠を妨げるものはいないのだ！！

席に付いてすぐ、Ｍｙ安眠枕を取りだし、眠りに付いた。

「・・・相変わらずね、あいつ・・・・」

「そうだけど、気になるの？アリサちゃん。」

「べっ、別に！ただあいつの態度が気に喰わないだけで・・・」

「はいはい。分かってますよ。」

「・・・なんか納得いかない。」

ジト目で見るアリサに、「ごめんごめん」と謝るすずか。

そんなこともあり、零治は今日１日爆睡していたのであった。

だが、その幸せも長くは続かない・・・・・・

「零治君起きて。」

次の日の一時間目、今日は来ている高町に揺すられる。

だが、そんなことで負ける俺では無い。

俺は気にせず、寝ることに集中する。

「零治君。」

負けじと高町もゆすってくる。

「零治君！」

うん、大丈夫だ・・・

「零治君！！」

まだ・・・・・

「零治君！！！」

「うるせぇ！周りのことも少し考えろ！！」

「零治君が寝てるのが悪いんでしょ！！」

「だからって大声出すなよ！みんなの迷惑だろ！！」

「そうだ、迷惑だから騒ぐのをやめなさい。」

いつの間にかクラスのみんなが俺たちに注目していた。

高町は顔を赤くして席に着く。そして俺を睨む高町。

・・・俺のせいじゃないから睨むのやめろ。

そんなことがあっても授業は続いた。

当然俺は寝てるが。

三時間目・・・

二時間目は体育だったので普通に授業に出た。

やっぱり体を動かすことは楽しいわ。

そして再び高町との戦いが始まる。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

授業が静かに進んでいく。

高町も絡んでこない。

・・・諦めたのか？

だが不屈の心を持つ高町がこのまま終わる訳がない。
いつ何があっても身構えるようにしていた。

四時間目・・・・・・・・

失敗した・・・・・・

余りにも警戒しすぎて寝れなかった。

完全にやられた。

高町めやはりやる。

不屈のエース・オブ・エースは伊達じゃない。
(まだ、エース・オブエースではありません)

?何か聞こえたような気がするけどまぁいい。

今度は負けはしない!!

「零治君、寝てるの?」

「・・・・・・・」

・・・今度は声をかけてきたか・・・・だが今回は俺の勝ちだな。

シャープペンを刺す、などの対策は万全だ。

あらかじめ制服の中にもう一枚長袖を通し、芯を通らないようにしている。

かつて男子生徒にやられたことがあるのでいつも対策をしているのだ。

夏はさすがに無理だけど・・・・・

「零治君。」

あっ・・意識が遠くなってきた・・・・悪いな俺の勝ちだ・・・・

ゴス!!!

鈍い音を鳴らし俺は違う意味で意識を飛びかけた。

頭を抑えながら立ちあがる。

「零治君、寝てちゃ・・・・・・ダメだよね?」

「おまっ何で殴って・・・・」

「おはなし・・・・・する?」

「・・・・ゴメンナサイ。」

かなりの威圧感に謝るしか出来ない俺。

高町の手には国語辞典があった。

・・・・・・あれで殴ってる訳じゃないよね？

そう問いかけるように高町を見た俺。

・・・・・高町はニタァと笑った。

その日から零治が授業中寝てる時間が減ったのは言うまでもない・・・・・

「なのは、何でそんなに零治君に絡むの？」

お昼休み、屋上でご飯を食べているなのはにフェイトが聞いた。

「それ、私も気になる。ねぇなんでやん？」

はやても会話に入ってくる。

「別に・・変な意味はないよ。余りにもだらしがないから・・・・」

「それでもそこまでしなくてもいいんじゃない？」

「私もそう思うで。」

「アリサちゃんも？」

「私は逆に感謝かも。あいつ一年の頃からあんなだから・・・なのはのプレッシャーにビビってたからね。今まで通りではないと思うわ。」

「アリサちゃん、詳しいんだね。」

「まぁ、あいつとはいろいろ衝突してたから。」

「二人っていつも喧嘩してるけど、本当は結構仲がいいと思うんだ。」

「ちょっ！？すずか？」

「へぇ・・・ねぇすずかその辺詳しく話してくれない？」

「フェイト！？」

「私も聞きたい。」

「私もや」

「なのは!?はやて!?」

「んとね、去年のことなんだけど・・・」

「すずかもやめなさい!!」

屋上でワイワイと話していた五人だった。

## 第2話　零治ｖｓなのは（後書き）

てな感じで学校の平凡な一日を。

何かダラダラしてる気がするけど・・・・

次はマテリアル娘たちの話でも書こうと思います。

バトルになるかな・・・・

感想くれた方ありがとうございます。

何か指摘することがあったら遠慮なく教えてください。

## 第3話　有栖家の休日（前書き）

ｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

こんなに早く書けるとは・・・・・・

今回は有栖家の休日の話です。

結局バトルはないです・・・・

## 第3話　有栖家の休日

さて、学校も順調に進み新学期に入っての初めての休日になった。

フェイトやはやてとは直接接触はしていないが、バニングスやすずかが時々俺の所に来て高町と話していたりするので時間の問題だと思われる。

しかも高町の一件があってからなかなかゆっくり寝れることが出来なくなってしまった・・・・・

寝ていると頭に鈍い痛みが俺を目覚めさせるからだ。

いつか、殺される・・・・・

そう肌で感じた俺は、隣に高町がいる限り安息は無い状態になっていた。

そんなこともありながら、学校を乗り越え、やっと念願の休日がやって来た。

今回はゆっくり寝るぞ!!と思っていたが・・・・・・

金曜日の夜・・・・・・

遅めの風呂を上がり、ソファに座り湯冷めをしている時だった。
もう三人とも寝ていたはずなのに後ろから星の声が聞こえてきた。
「レイ、ちょっといいですか？」
「どうした？星。」
星はパジャマ姿でソファに座っている俺の隣に座ってきた。
・・・・シャンプーのいい匂いがしてくる。
しかもパジャマ姿がまた色っぽい。
出会ったばっかのときはガキだな、なんて思ってたけど本当に成長したなぁ。
「レイ？」
「おっと、すまない。考え事してた。」
変な事だけどな。
「はい。あの、明日買い物に付き合ってもらえませんか？」
「買い物？」
「はい、日常品がほとんどないので買いに行きたいのですけどその・

・・荷物が・・」

なるほど、だけど星に任せっきりのせいか全然気づかなかったな・・・・

明日はゆっくり寝ていたいけど・・・・

「分かった、付き合うよ。」

「本当ですか！？」

嬉しそうに近づいて聞いてくる。顔は目前にある。

ヤバイ・・この距離は・・・

「すっ、すみません！！」

顔を赤くしながらバッと離れる星。

「別に問題ないよ。」

と何事もないように振舞うが、心臓はバクバクだ。

しかし、顔を赤くしたり嬉しそうにする星って可愛いな、もっと感情を表に出せばいいのに・・・

「・・・・星はもっと感情を外に出したほうが良いよ。そっちの方が可愛いんだから。」

「な、何を言っているんですか！！からかうのは止めてください！

！」

顔を赤くしたまま怒る星。

「冗談じゃないんだけどな・・・・」

それを聞いて今度は硬直してしまう星。

・・・・・・・・・・・・面白いな、星。

我に帰ってから星と明日の時間を決め、寝ることにした。

「夜美・・・・」

「分かっている・・・・」

そして次の日・・・・

「買い物、買い物。」

「ライ、落ち着かぬか！買い物は逃げたりせぬぞ。」

・・・・・何でこの二人がいるんだ?

「すみません、昨日の会話聞いていたみたいで・・・・・・」

「マジか・・・・」

この二人が付いてくると買い物がものすごく長くなるんだよな・・・・

しかも全部俺持ちになるし・・・・

「星~、レイ~早く~!!」

「遅いと置いていくぞ!」

ずいぶん前にいた二人が呼んでいる。

「はぁ~覚悟を決めるか・・・・」

「私も手伝うので今日はお願いしますね。」

「ああ、頼むよ。」

そう星に言って海鳴町の隣町にあるデパートに向かった。

「見て見て星!これ可愛くない?」

「そうですねライ。でもこっちなんてどうですか？」

「う～ん、でも僕に似合うかな・・・」

「ふむ、なかなか良いと思うぞ。星お前にはこれなんかどうだ？」

「いいですね。ありがとう夜美。」

楽しそうだな三人とも・・・・・

たくさんの荷物に囲まれながら疲れた体をベンチに座って休んでいた。

今日もたくさん買ったこと・・・・

トイレットペーパー、食料品、洗剤、調理用具、掃除用具など様々。

お陰様で結構荷物が多い。

しかもまだ買うみたいだ。

まぁ、俺もＣＤやゲームソフト買ったけど・・・・・・

そして、案の定買い物は長くなっている。

何で女の子の買い物って時間かかるのかな・・・・

まぁ、マシになったほうか。

最初の買い物なんて大変だったからな・・・・・・・

六年前・・・・・・

「星どうだ?」

「私にはどれがいいか分かりません・・・」

まぁ普通ならそうだよな。生まれたばかりなんだし・・・・

「ねえねえ、どうこれ!!」

「我のこの服はどうだ!?」

星が普通なんだよな?

それと少しは落ち着け!!

次から次へと服を取り出さない!グジャっグジャにしたままにしない!!

その時はずいぶんお店の人に迷惑かけたし、大量の服を買う羽目になって帰りがかなり大変だったなぁ・・・・

「う~んやっぱりこれはいいか。」

「私はこれとこれを・・・・・」

「我はこれにするか。」

少しは成長したかな・・・・・・

あれ?これって親父っぽくない!?俺・・・・・・

「うまーい!!」

「やかましいライ。」

デパートにあるファミリーレストラン。そこで昼食を食べていた。

「なんで私だけ・・・・・・」

何かブツブツと呟いている夜美。

「星、夜美に何かあったのか?」

「・・・・はい。あの・・・・」

ちょっと言葉を濁している。

「夜美、自分だけが成長してないことを気にしちゃって・・・・」

「ああ、なるほど。」

「うるさい！！我だって、いつかは・・・」

「バクバク・・・・」

ハンバーグを食べているライのスタイルを見てまた落ち込む夜美。

っていうか比べる相手が悪い。

星もライも規格外っていっていいほど成長している。

まぁ、オリジナルがすごいからな・・・・

決して夜美は劣っている訳ではない。

「気にする必要なんてないぞ。今のままでも十分魅力的だし。」

「！！」

何を驚いてるんだか。

「そりゃ、この二人と比べたらスタイルとか負けてるかもしれないけど、夜美には夜美の魅力があるんだし。」

「な、何を言って・・・」

「それにほかの子よりは十分成長してるだろ？だったらそこまで気にすんなよ。お前らしくもない。」

「で、でも、やっぱり無いよりあったほうが・・・」

「まぁ、人それぞれだろ、そんなもん。」

「・・・じゃあレイは？」

「俺か？・・・まあ気にしないかな。別にスタイルで好きな人を決めるわけじゃないし。」

ごめんなさい、でかいのも好きです。

「そうか・・・・」

嬉しそうにし、再び自分のスパゲッティに手をつける夜美。

よかった。機嫌はよくなったみたいだ。

だけど、星とライの目付きがきつくなったような・・・・・・

買い物から帰ってきた頃には４時を回っていた。

「疲れた・・・・・」

「お疲れ様です。」

星がお茶を渡してくれた。

夜美もライもそれぞれ自分の買ったものをしまいに部屋にこもっている。

「ありがとう。・・・・そうだこれ。」

懐から長方形の箱をだし星に渡す。

「これは?」

「いいから開けてみな。」

そう言われ星は箱を開ける。

中には翡翠色のペンダントが入っていた。

「これって・・・・」

「いつも頑張ってる星にご褒美だ。」

「えっ、でも・・・」

「いいから付けてみろって。」

そう言って無理やり星に付けさせる。

「おお、よく似合ってるじゃん。」

そう言われ顔を赤くする星。

「・・・いいんですか？」

「日頃のお礼だよ。いいからもらってくれ。」

「はい・・・ありがとうございます。」

そう言って、大事そうにペンダントを握る。

よかった、気に入ってくれたみたいだ。

「これからも大変だろうけどよろしくな星。」

「はい、頑張ります！」

そう言った星の顔は笑顔だった。

「そうだ、二人には内緒な。星だけに買ったって言ったら二人とも騒ぐから。」

「フフッ、分かってます。」

しかし、部屋でペンダントを見て幸せそうな顔をしている星をライが目撃してしまい、二人にせがまれることになる・・・・・・

## 第3話　有栖家の休日（後書き）

ライが目立たなすぎたかも・・・・・

まぁメインは星のつもりだったのでライメインは今度で。

今度こそバトルを書こうと思います。

感想ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第４話　模擬戦（前書き）

今回はバトルです。

あまり得意ではないのであんまり自信はないですけど・・・

# 第４話　模擬戦

「お～い、準備できたか？」

「私は大丈夫です。」

「僕もＯＫだよ。」

「我も大丈夫だ。」

三人がそれぞれ返事をする。

今日は休日二日目日曜日。

仕事がない時など、なまらないように最低でも週に一回は思いっきり模擬戦をする。

平日の夜も時々するが、今週はしなかった。学校でいろいろあったからな・・・・

「じゃあ行くぞ。」

部屋に一室に置いてある二つの転送装置、シャイデに頼んで作ってもらったやつだ。

行き先はミッドチルダと第２８管理外世界トロメイヤ。

トロメイヤは危険な原生生物が少ない無人世界だ。

ミッドチルダは仕事で、トロメイヤは主に模擬戦で使用する。
そして今回も模擬戦なのでトロメイヤに向かう。

「とうちゃ～く！」

ライの大きな声に導かれながら三人は明かりのある方に向かった。
転送装置はトロメイヤの洞窟の中にあり、この星の原生生物が誤って転送されないための措置だ。

「早く行こう！」

「そんなに急ぐなライ。」

さっさと行くライを慌てて止める俺。

「全く、落ち着きがない・・・」

「嬉しいんですよ、ライは。」

「戦うことをか？」

「というよりもスポーツ感覚なんでしょう。ライって体動かすのが好きですから。」

「そうだな、学校でもそうだしな。」

ライは体育の時間など体を動かすことになると目の色が変わる。

休み時間など男子に混じってサッカーしたりするほどだ。

「おい二人ともどうした？」

「いえ。」

「なんでもない。」

「そうか？だったら早く来いよ。」

そう言われ慌てて付いていく星と夜美。

着いたのはこの星にある平原地帯。一応結界も張ってある。

「それじゃあ、始めるか。ラグナル！！」

『やっと私の出番ですね。第４話でやっと初会話なんて・・・・』

「何言ってんだお前・・・」

『マスターは私を敬うべきです！！』

「いきなり何言ってんだ？俺は結構お前を信頼しているんだぞ。」

『ふ、ふん！今更そんなご機嫌取り要りません！！マスターは女の子を落としてハーレムでも作ってればいいじゃないですか！！』

「俺がいつハーレムなんか作るって言った!?」

「レイ、そんなこと言ってるのかお前は・・・・・・」

「見損ないましたよレイ・・・・・・」

「最低だよ、レイ・・・・・」

いつの間にか三人娘が会話を聞いてました。

『しかもですね、この前マスター、アリサ様とすずか様に弁当作ってもらったんですよ。』

「「「!!!」」」

「んなことしてもらってねぇ!!!適当なこと言ってんな!!!!」

「レイ・・・・・」

「その時のこと・・・・」

「詳しく話してもらおうか・・・・」

さらに鬼の表情になった三人娘。

「ちょっと・・・三人とも・・・・デバイスの戯言だって・・・・・だからデバイス構えるのは止めろ!お願いします!!」

その場で土下座して頼む俺。

その後なんとか怒りを抑えていただきました。

『本当にこの三人はからかうと面白いですね。』

「お前、覚えてろよ。シャイデに頼んで主人格変えてもらうからな。」

『人間じゃ私の性格は直せませんよマスター。』

「・・・無駄なところで高性能だよな、お前。」

『無駄じゃないですよ！』

「レイまだですか？」

デバイスを構えたまま待っている二人。

「っとこれ以上待たせたら悪いか。ラグナル！！」

『イエス、マスター。』

「ラグナル、セットアップ。」

俺は光に包まれる。

出てきたのはえりが立っている白いコートを羽織った俺だった。

左手には刀を持っている。

「さて今日は・・・」

「レイが一人です。」

「うん、それがいい。」

「我も賛成だ。」

「いやいやいやいや・・・」

何馬鹿なこと言ってんだ!?

俺はチートキャラじゃないんだぞ!?

「問答無用!!行け電刃衝!!!」

魔力弾が高速で迫ってくる。

「っていきなりかよ!烈壊桜!!」

桜色の斬撃を放ち、電刃衝を消し去る。

「次は私です。ブラストファイアー!!」

今度は星が砲撃魔法を放つ。

「だからちょっと待てって!烈震虎砲!!」

虎の姿をした衝撃波を放つ零治。だが、ブラストファイヤーを完璧に抑えることができず、後ろに吹っ飛ばされる。

「ちくしょう、なんでそんなにマジで・・・」

「それはお前が悪い。」

砲撃魔法をチャージした状態でいた、夜美がそこに居た。

「・・・あの少しは訳を話していただけませんかね・・・・」

「おとなしくやられるのだな、喰らえアロンダイトフルチャージ！！」

巨大な砲撃が俺を包む。

「これはヤバイ！！ラグナル、ブラックサレナフォーム！！！」

『了～解。』

展開と同時に砲撃が零治を包む。

「やったね、夜美。」

「ああ、直撃はしたと思うが・・・」

「二人とも油断しては駄目ですよ。」

「・・・星の言うとおりだ。」

そこには全身黒い装甲に包まれ、顔をバイザーで隠した零治がそこに居た。

「・・・相変わらずバカみたいに硬い装甲だな。」

「ラグナルフォームだとお前の砲撃には耐えられなかったからな。ったく少しは手加減しろよ。しかも3対1って・・・・」

「でも、それなら、問題ないよね？」

「いやいやブラックサレナでも複数は・・・」

「大丈夫ですよ、レイならやれます。」

「そうだな、我の砲撃にも耐えたのだからな。」

「・・・・少しはちゃんと俺の意見を聞いてください。」

「いいから行くよ。光翼斬！」

「私も、バイロシューター！」

二人はそれぞれ追尾性のある攻撃を繰り出してきた。

「はぁ。・・・・だけどそう簡単に負けるわけにはいかないよな。」

ハンドガンを展開して二人の攻撃に突っ込む。

「ディストーションフィールド展開。」

前方にバリアを展開する。二人の攻撃はバリアの前に簡単にはじかれる。

「くっ、ルベライト！」

バインドをブラックサレナにかけるがいとも簡単にはじかれる。

「本当に・・硬い・・・」

「星、僕と一緒に、天破・雷神槌！」

「ルベライト！」

今度は二重でバインドをかける。今度のバインドはブラックサレナを捉え勢いを止める。

「今だよ、夜美！！」

「よくやった。我が闇に飲まれよ！行け、エクスカリバー！！」

アロンダイトよりも強力で巨大な砲撃を放つ。

それは一直線に零治に向かう。

零治はその砲撃に飲まれた。

「今度こそ・・・・・」

「夜美、後ろ！！！」

ライの声に後ろを向く夜美、後ろにはビームソードを展開したブラックサレナがいた。

「ほしかったな、バインドで拘束して一番威力のある砲撃で攻撃・・・確かにあの威力ならディストーションフィールドを貫くことは可能だろうな。」

「くそ、ボソンジャンプか・・・」

「そういうことだ。まずは夜美、お前は脱落だ・・・・」

「だりゃあああああ!!!」

ザンバーを展開し零治に斬りかかる。

それをビームソードで受け止めた。

「危ないな、いきなり斬りかかるなよ。」

「くっ、だりゃあああ!!」

それでも力いっぱい斬りかかる。

「ライ、どいて!!」

言った瞬間、ルシフェリオンブレイカーを容赦なく放つ。

ライは離れ高速移動でその場から消える。

（ソニックムーブか・・・だが！！）

またも零治はその場から飛んだ。

「ライ、星。」

「分かってます夜美。」

「僕たちに任せて！！」

「よし、エルシニアダガー・・・行けっ！！」

大量の魔力刃を周辺に飛ばす。

「んな！？なんだこれ！？」

転移し終わった零治に無差別に放ったエルシニアダガーが当たる。

対してダメージは大きくはないが、それでもフィールドを出来なかったため多少ダメージを負う。

「今だ！！」

「行くよ星！」

「はい、ライ！」

「ルシフェリオン・・・」

「きょっこーーざん・・・」

「「ブレイカーーーー!!!」」

二人の最大威力のある攻撃を息のピッタリあったコンビネーションで放つ。

「なっ!?あいつらいつのまにあんな攻撃・・・」

『マスター、転移間に合いません!!』

「ちっ、ディストーションフィールド最大出力!!」

『イエス、マスター!』

最大フィールドでシールドを展開する。

二つの攻撃は激しい衝撃波を発生させながらブラックサレナに直撃した。

「どう・・・なった?」

「さすがのレイでもこれなら・・・」

視線の先には装甲がボロボロになりながらもそこに立っている零治がいた。

「・・・驚いた。合体魔法か・・・出力全開でもこのざまか。それに・・・・・」

頭上ではさらにエクスカリバーを放つ準備をしている夜美がいた。

「念には念をだ。」

「・・・・俺の負けだな。これ以上ダメージ食らっちゃ三人には勝てないわ・・・・」

そう言って地上に降りてＢＪを解除する零治。

それを見て・・・・

「「「やったー！！！」」」

大いに喜んでいた三人がいた。

「だけどさ三人とも大人げないと思うんだよな・・・・・」

「悪かった・・・」

「あははは・・・」

「すみません・・・・」

「コンビネーションよく攻撃してきたからこっちは攻撃できなかったし・・・」

草原に座り込みのの字を書き続けている。

『ボソンジャンプの事を詳しく知っている相手だと簡単に攻略されますからね・・・』

「なんだよ、もう少しデバイス強くならないのかよ。レベルアップみたいに・・・・」

『私はデバイスですよ・・・・』

「あ～あ、まだ魔王様の方が優しかったな・・・・」

「・・・それは聞き捨てなりませんね。」

この場の空気が変わる。星のまとっていた雰囲気が一気に変わった。

その変化にライや夜美も顔をひきつる。

当然、いじけていた零治もぱっと正座に変わる。

「私があの女に劣っていると？」

「いえ・・・決してそのようなことは・・・・」

「・・・ライあなたはどう思う？」

「は、はい！！星の方が１００倍優しいです！！」

「・・・・夜美は？」

「わ、我も当然星だな・・」

無理やり言わされた感を感じるが、星は満足そう顔をした。

「それはそうでしょう。あの女より劣るはずはありません。」

なんでそこまで高町を毛嫌いしてるんだ？

高町顔負けの怖さだぞ・・・・

「レイは分かってないみたいですね。少し“おはなし”しましょうか・・・・・」

「いや、ちょっと！？取り敢えず落ち着こう！！」

「私は冷静ですよ。さぁ、覚悟を決めてください・・・」

「ラ、ラグナル！！」

『ただいま留守にしております。ピーと音が鳴りましたらお名前とご要件をお話ください。』

「何で留守電！？っていうかマスターを見捨てんのかよ！！ライ、

夜美！！」

だがそこには二人の姿はなかった。

「あの二人逃げやがった！！」

「フフフ・・・・・」

ニコニコしているが、ものすごく怖いです。

俺は幻想殺しではないけど、

「不幸だぁーーー！！」

叫ばずにはいられなかった。

次に意識を取り戻したときには朝になっていました。

何されたんだ！？

## 第４話　模擬戦（後書き）

零治リンチ・・・・・

いくら強力なバリアがあってもあんなに攻撃食らったら持ちません。

ましてや魔力もそう変わらないですし・・・

星、魔王化・・・

やっぱ星が一番有栖家で強いかも・・・・・

デバイスラグナル、会話に登場。

新たなギャグ要因ですね。

いろいろ絡ませていきたいと思います。

感想毎回ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。

## 第5話　みんな、翠屋へ行こう！！（前書き）

ＰＶ３万、お気に入り２００件突破。

皆さん読んで下さってありがとうございます。

これからも頑張りますのでこれからもよろしくお願いします。

# 第5話　みんな、翠屋へ行こう！！

「ふぁ～、やっと終わった・・・・」

今日は水曜日。日曜の影響で生じた体の不調もやっと楽になって来た。

高町も居なかったのでぐっすり寝れたことが大きかった。

でも、一体星は俺に何したんだろうか・・・・・まぁいいか。

そうだ、気分転換に翠屋に行こう！

あそこの士郎さんの入れるコーヒーは最高だからな・・・・

桃子さんのシュークリームを買って帰ればあの三人も喜ぶだろう・・・

ならば善は急げだな。

チャイムが鳴った瞬間ダッシュで教室を出ようとする。

「待ちなさい！」

誰かの足に引っかかってそのまま廊下の壁にダイブした。

「だ、大丈夫！？零治君。」

「大丈夫よフェイト。そいつかなり頑丈だから・・・」

「このやろっバーニング！危うく天に召されるところだったぞ！！」

「ね。」

「あ、アハハハ・・・・・」

苦笑いするしかないフェイト。

「それとバニングスだから。っとそんなことよりこのあと暇？」

「・・・今俺ダッシュで帰ろうとしたよな？」

「あんたが慌ててるのはいつものことでしょ？」

「まぁそうだけど・・・・・ってフェイト！？」

「キャッ！？」

「いきなりでかい声出すな！！それと何でフェイト名前なのよ。確かハラオウンって呼んでなかったっけ？」

「あれ？俺ハラオウンって言ってなかったか？」

「ううん、名前で呼んでたよ。」

マジか！？すっかり油断してた。これって不味くないか・・・

「あ・・・悪い、名前の方が言いやすかったから・・・」

「ううん、良いよ名前で。」

「そうか、ならこれからはフェイトって呼ぶな。」

「うん。」

うわっ、笑った顔綺麗だな・・・・

しかし優しいな。スタイルもいいし確かにこれはみんなから人気が出るわ。

・・・ってそうじゃない!!

「何で学校にいるんだ!?」

「えっ!?何で?」

「いや、隣の高町が居なかったから・・・・それに八神も。」

「ああ、今日は私は用事なかったから・・・」

「じゃあ、高町帰ってきてないんだよな?」

「うん、多分そうだけど・・・・・」

よし!これで問題はクリアされた!!

「何でなのはのこと気にするの?」

「ん?い、いや特に他意はないんだ。」

「そうなの？」

「お、おう。」

あの目は怪しんでるな・・・・

「・・・それに俺はどっちかって言うとフェイトの事の方が気になるかな。」

「えっ！？」

「フェイトの金髪って綺麗じゃん。どこの国の人なのかなって。」

「えええええええ！！」

何でいきなり大声出すかな・・・・

「あ、あああの、きき綺麗って誰？」

「？フェイトの事だけど。」

「・・・・・えええええええ！！」

またかい・・・・

いったいどうしたんだ！？

「お、おい！大丈夫か！？」

「だ、だ、だいじょうぶだよ。」

まだ変なような・・・・

まぁ大丈夫って言ってるしいいか。

って言うかバニングスやけに静かだな、どうしたんだ?

「・・・・なんで私だけ・・・・」

「どうしたバーニング?」

「何で私だけいつまでたっても苗字なのよ!!しかも間違ってるし・・・」

「何でってやっぱり面白いから・・・・・」

「やっぱりか!!」

ボクサースタイルで拳をくり出すバニングス。それを俺が華麗に避ける。

「避けるな!!」

「ははは!!甘い、甘い。」

争っている男女二人とその横であわあわしている金髪美女。

変な絵面ができていた・・・・・

その後、バニングスの誘いを断り、予定通り翠屋に向かった。

「はぁ～やっぱこの味だよな・・・」

コーヒーを頼み、なごむ俺。

「いい飲みっぷりだな、零治君。煎れた方のこっちも嬉しいよ。」

「零治君いつものでいいのよね？」

「はい、ありがとうございます桃子さん。」

俺にチョコレートケーキを出してくれる桃子さん。

その後、１２個入りのシュークリームをお土産として作ってくれている。

しかし初めて来たときは本当に驚いた。

３人の子供がいるとは思えないほど若いんですよ、お二人さん。

読んだ小説で、お姉さんと間違えた主人公たち。

君たちの気持ちはよ～く分かった。

これは本当に化け物かと思うくらい変わってない。

未だに二人とも大学生でも通りそうだもん。

「あっ！零治君来てたんだ。」

キッチンから出てきたのはなのはの姉美由希さんが出てきた。

・・・・・料理してないよな？

昔、美由希さんのシュークリームを一度食べてみたことがある。

・・・・・その時はゆっくり神様のじいさんと話せたもんだ。

「零治君、今私が作った・・・」

「士郎さん！！トイレどこでしたっけ！？」

「待って！別に無理やり食べろなんて言わないから逃げないで！！」

美由希さんがいるときはこのパターンになる場合が多いから、流石に分かってるか・・・

「じゃあ、なんです？」

「ただ、私が作った、チーズケーキ食べてみないかなぁって。」

「・・・どちらにしても食べさせるつもりじゃないですか。」

「細かいことは気にしないべきだよ。」

ニコニコしながらチーズケーキを差し出す、美由希さん。

見た目は普通なんだよな・・・・・・

「あの・・・さっきのチョコレートケーキでお腹いっぱいに・・・」

「大丈夫。ケーキは別腹って言うし・・・」

それって女子に対する言葉じゃなかったっけ？

「だったら彼氏にでも食べさせてあげたら良いじゃないですか。」

「彼氏なんていないもん・・・・・」

マジか！？

こんな美人ほっとくなんてなに考えてんだ男達。

まぁ魔導師でものしちゃうかもしれないけどほど腕っぷし強いけどな。

ここ、高町家は戦闘民族だし。

士郎さんは御神流の達人。恭也さんは免許皆伝。

美由希も御神流を使う。　そんで高町は移動砲撃要塞。

神速は目にも止まらぬ速さらしい。

唯一桃子さんは普通だけど・・・・

「・・・なんか失礼なこと考えてない？」

「いえいえ、こんな美人をほっとくなんて男どもはバカだなって思って。」

「本当に？」

「本当ですよ。」

「フフ、ありがとう。だけどチーズケーキは食べてみてね。」

流されたうえに、逃げられないようだ。

ここは覚悟を決めるしかないか・・・・

昔は百発百中だったけど、今は3割くらいの確率で大丈夫だからな。

今週の運勢は最高のはずだ・・・

自分を信じろ！

俺なら出来る！！

「南無三！！」

ソロモンの悪夢さんの口癖を言いながら、一気に食べた。

「よっしゃあああ！！」

見事成功！！

ありがとう、ソロモンの悪夢さん。

「・・・・・何でそんな大声だしてるの？」

「そりゃ、命の危機を脱したから。」

「私のケーキに毒なんて入ってないのに・・・・・それでどうだった？」

「へ？」

「どうしたの？」

「・・・・・一気に食べて分かんなかった。」

そのあと二個目を食べることになりました。

「ふぅ。」

「大変だったね。」

少し暗くなってきたころ、翠屋にもお客さんがほとんどいなくなり、俺の机に士郎さんが座っている。

あのあとまた、美由希さん作、ロシアンチーズケーキを食べたけど無事だった。
本当に今週はついてる。

「いやあ、いつも悪いね、美由希のケーキ試食してもらって。」

「・・・そう思うなら士郎さんが食べてあげてくださいよ。」

「家ではいつも食べてみてるよ。まぁ失敗作のときは毎回意識が飛んでるけと・・・」

本当にすごい威力だな・・・

「だけど今回はうまくいったみたいで、家族以外の人にも感想が聞きたいって言ってたから零治君にも食べさせてみたんだ。」

「・・・食べても大丈夫なんでしたら言ってくださいよ・・・」

「アハハハハ、いやぁ零治君のリアクションは素直で面白いからね。」

豪快に笑う士郎さん。

少しかっこつけて南無三とか言った自分が恥ずかしい・・・

「・・・けれど美味しかったですよチーズケーキ。」

「そう言ってくれると、美由希も嬉しいだろう。そういえば零治君、今なのはと同じクラスなんだよね。」

「はい、そうですけど。」

「授業はちゃんと受けるべきだよ。」

高町め、余計なことを・・・

「まぁ、善慮します。」

「普通は気を付けますとかだと思うが・・・」

苦笑いしながらそう言った。

「ただいま～お父さん。」

「お帰り、なのは。」

・・・あれ!?もう帰ってきたの?

「あれ?零治君?」

「こんばんわ。ま、タカマチサマ。」

危ない、危ない。口が滑るところだった・・・・

「何かおかしい気がするんだけど・・・・」

キニシナクテイイデスヨ・・・・・・

「じゃあ、士郎さん。もう遅いので帰ります。」

返事を聞かないで席から立とうとする。
だが腕を捕まれ、椅子に座らせられる。
「良いじゃないか、今日は夕食をご馳走するから家においで。」
「いや、でも・・・」
「桃子、一人分追加な。」
「ハイハイ。」
「いや、ですから・・・」
「なのは、零治君を先に家に案内しなさい。」
「うん、わかったの。」
・・・拒否権はなしか。
何で俺の回りには話を聞かないやつばかりなんだろ・・・・・
「ふぇ、零治君翠屋の常連だったの!?」
「ああ、小４の頃からよく通ってたよ。」
三人もここのケーキやシュークリーム好きだし。
「・・・私、一度も見たことない。」

そりゃ、鉢会わないようにしてたしな。

「たまたまだろ？」

「・・・本当に？なんか零治君私のこと避けてる感じするから。」

本当に鋭いな・・・

「んな分けないだろ。美人を避けるなんて男として駄目だろ。」

「美人って誰？」

「はい？高町お前のことだろ。」

「ふえぇぇぇぇ！！」

いきなり大声だすなよ。

フェイトとリアクションほとんど一緒だし。

「わ、私なんか全然だよ！他にもフェイトちゃんや、アリサちゃんや、すずかちゃんや、はやてちゃんもいるし・・・」

「フェイトもそうだったけどなんで自分を過小評価すんだよ。もっと自分達に自信をもっていいだろ。」

だから美人なのに１９歳になっても、男の噂がないんだよ。

告白とかはされてたらしいけど・・・

「で、でも・・・私なんか・・・」

「でもじゃないって。男子に聞いてみな。多分全員が皆口を揃えて美人だって答えるぜ。」

「そんなこと・・・」

「まぁ、謙虚なのもいいけどあまりにも謙虚すぎると周りから取り残されるぞ。」

「そう・・・なのかな?」

「多分な。」

「そう・・・なったら零治君・・・私を・・・・」

最後の方よく聞こえないけど何言ったんだ?

「なに言ってんのか聞こえないぞ。」

「ううん。何でもないの!!さぁ早く行こう。」

俺の手を掴み走り出す高町。

「お、おい!高町。そんなに慌てて走るなって。」

そう言ったらいきなり止まる。

走ったり止まったり忙しい奴だな・・・

「なのはだよ？」

「名前か？」

「なのは。」

「いや、知ってるけど。」

「なのは。」

「・・・知ってるって。」

「なのは。」

「・・・どこかおかしくなっか？高町。」

「なのはって呼んで！！フェイトちゃんが名前なのにおかしいでしょ！！」

ってそう言うことか！！

でもフェイトからいつ聞いたんだ？

メールで聞いたのかな？

名前だけ言うからおかしくなったのかと思ったじゃないか・・・

「はいはい、分かったよなのは。」

「うん！！」

笑顔のなのは。

こりゃあ男子に人気があるのは分かるわ・・・

「行こう！零治君。」

また、手を掴まれ走り出す。

高町家の食事はとても美味でした・・・

帰ったら、星にこってり絞られました。

連絡し忘れたからな・・・・・・

ライと夜美はシュークリームを美味しく食べてたけど、二人がだいたい食べちゃったから、二人も星に怒られてました。

本当に翠屋のスイーツは有栖家には大人気だな。

今度星だけにケーキを買ってくることで怒りを沈めて頂いた。

リビングでは足がしびれて這いずり回っていた三人がゾンビみたい

だったそうな・・・・・・（ｂｙ星）

## 第5話　みんな、翠屋へ行こう！！（後書き）

と言う訳で高町家のみなさまでした。

恭也さんは忍様と結婚しているらしいので家にはいません。

いつか出そうかな・・・・。

今回ちょっとフェイトを出しました。

次回ははやてを出そうかな・・・・

実を言うとはやては作者大好きです。

だから優遇する気はないですけど・・・

皆様、感想ありがとうございます。

次回もなるべくはやく投稿しようと思います。

## 第6話　零治とはやての不幸（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はやてと初絡み。

何かすっごいギャグになったな・・・・・

# 第6話　零治とはやての不幸

高町家にお世話になった次の日。

「なあなあ、昨日なのはちゃん家でご飯食べたって本当なん？」

「いきなりなんだ八神？」

「はやてでいいよ。それでどうなん？」

「本当だけど・・・何で？」

昼休み、昼食を食べて寝る気だった俺は、八神に話しかけられた。

「まぁ気になったからや。なのはちゃんが男の子を自分の家に呼んだの初めてやし・・・」

なるほどね、納得。

ああ、そうだ！今更なような気がするけど、もう原作キャラと関わらないことについては諦めました・・・・・

明らかにイベント多過ぎだもん。

高町家は自業自得だけど・・・・

それでも翠屋のスイーツは食べる価値がある！！

だから戦闘など危ないことに巻き込まれなければいいです。

うん、それでいいや・・・・・

「・・・・何悲しい顔してるん?」

「いや、今までの覚悟を曲げようと。」

「わけ分からんわ。」

苦笑いしながら言うはやて。

「と、そんなことより高町家はどうだったん?楽しかっんか?」

「うん?まぁ桃子さんの料理は最高だったけど。」

「そう言う意味じゃないんやけど・・・・」

「どういう意味だ?」

「・・・・もういいわ。」

「そうか。」

なんかつまらなそうな顔してるけどなんでだ?

「なぁ、零治君・・・・」

「零治!昨日翠屋にいたらしいじゃない!昨日本当は暇だったんでしょ!!」

いきなり大声上げてバニングスがやって来た。

「ちげぇよ。翠屋に行くのが用事だったんだよ！」

「なっ！？だったら別に今日とか明日でもいいじゃない！」

「分かってないなぁ。その時の気分で行きたい時とかあるじゃん。そういう時に行くのが最高なんじゃないか。なぁ、はやて？」

「そやな、私も時々そういう気分になるわ。」

「だろ！それぐらい翠屋は素晴らしいところなんだよ。」

「私だってあそこはすごくいい店だとは思うけど・・・何か妙に翠屋の事を熱く語るわね・・・」

「だって六年くらい通ってるもん、あの店。」

「マジか！！私も結構な日数行ってんやけどな。零治君一度も見たことないわ。」

「そう言えば私も・・・」

そりゃそうだ、鉢合わせないように十分警戒してたから・・・

「たまたまだろ、たまたま・・・」

「・・・目が泳いでるで、零治君・・・」

「分かりやすい奴・・・」

「そんなことはどうでもいい！それより俺もはやてに聞きたいことがあるんだ。」

「ん、なんや？」

「恥ずかしいからちょっとこっちに・・・・」

そう言ってはやてを手招きする。

来たはやてに耳打ちする。

「お前がおっぱい星人だって本当か？」

「！？どうしてそれを！！！」

「しっ！声がでかい。そうなら俺が聞きたいのは一つ。いつもいるはやて含めての胸の大きさ、詳しいサイズは言わなくていいからランキング形式で教えてくれ。」

「なんでやねん！！って零治君は引かんの？」

「？何をだ？」

「私がおっぱい星人だって事とか・・・」

「何で引く必要があるんだ？別に女の子が好きってわけでもないんだろう？それにこうやって胸の大きさも聞けるし・・・・」

「・・・零治君って意外と変態なんやなぁ・・・・・」

「男なんてみんなそう言うもんだよ。」

「まぁサイズ言わなくていいなら構わへんけど・・・」

「ホントか!?なら頼む!!」

「・・・何話してるんだろ?」

少し悪いと思いながらもアリサは聞き耳を立てることにした。

その様子に気づいた俺ははやてに提案した。

「ここじゃ場所が悪い、場所を移動しよう。」

「了解や、アリサちゃん悪いけどほな。」

「ってちょっと待ちなさい!!」

アリサの声むなしく二人はダッシュで教室を後にした。

「ではでは、はやてさんお願いします。」

「めっちゃうれしそうやなぁ。・・・・・最近測ったのは春休みに行ったスーパー銭湯の時や。」

スーパー銭湯とは、一年前位に新しく出来た健康ランドみたいなと

ころだ。

プールみたいに遊べるところもあり大人から子供まで楽しめる。

ちなみに有栖家は行ったことがない。

「スーパー銭湯か・・・俺行ったことないんだよな。」

「あそこはほんといいとこやで。遊べるし、お風呂も色々な種類もあるし、混浴だからカップルもオーケーや。」

「ってことは女子も裸で・・・」

「んなわけあるか!!」

どこから出したのか巨大なハリセンで叩かれる。

・・・あれ?痛くない。

「フッフッフッ、すごいやろ。この子はハリセン君57号!!改造に改造を重ねついに出来た私の最高傑作!!どんなに力が強い人が叩いても痛くない優れもの!!」

「おおお!!」

「さらに、さーらに!この柔軟さ。簡単に壊れないようになってるんや。どうや、すごいやろ!!」

そう言ってかなりねじるはやて。

「こ、こんなハリセンが世界に存在していたなんて・・・」

ボケ要因に優しい世界になったな・・・

「これを作るのにどれだけの犠牲を払ったことか・・・・」

「過酷だったんだな・・・・・」

「特に家族の視線が・・・・・」

「・・・まぁ危ない奴だとは思われただろうな。」

「だが私は負けなかった!どんな目で見られようともどんなことを言われても!!そして私は作った!!!この世で一番最強のハリセンを!!!!!」

ダダーン!!と漫画みたいに文字がはやての後ろにあるように見えた。

右手にハリセンを持ち、高々と上げている。

まるで、伝説の剣を持った勇者みたいだった。

「・・・素晴らしい。素晴らしいよはやて!!」

「ふふん、これさえあれば怖いものなしや!!目指せお笑い日本１!!!!」

「掴みとれ!!勝利の栄光を!!!」

はやてと二人でポーズを取る。

こんな馬鹿なことをやっている二人に突っ込む人は誰もいなかった・・・・

「まぁそんな訳で完成したんや。」

「しかし本当にすごいなこの柔軟性３６０度曲げても問題ない。」

「それにフニャフニャでもないやろ。だからこんなに柔らかくてもちゃんと叩けてなおかつ、いい音なるのに痛くないんや。」

なるほど、これほど科学って進化したんだ・・・・

人間の進歩は止まらないな。

・・・・ってあれ？

「俺何しにここまで来たんだっけ？」

「・・・そうやおっぱいランキングについてや！！いやぁ零治君と話があってすっかり忘れてたわ・・・」

「俺も恐ろしいくらい感じた。・・・・・で、はやて。」

「そう、焦らんといて。でなそこのスーパー銭湯に行った時や。」

「そう言えばスーパー銭湯って中学生何円？」

「えーっと確か１３００円やったと思う。」

「・・・ちょっと高くない？」

「でも仲は広いしい色々なお風呂も入れるし、遊ぶ場所もいっぱいあるんやで。ウォータースライダーもあったし。」

「本当にそれお風呂なのか？」

「どっちやって言ったら温水プールっていったほうがいいかも。」

「・・・だけどそっちの方が喜ぶ奴いるし、いいかも。今度行こうかなぁ。」

「一度行ってみるべきやと思うで、私も。」

いやぁいいこと聞いたな。はやて物知りだし。それじゃ早速今日にでも三人に聞いてみるか・・・・・・

け、けっして三人の水着姿を見たいわけじゃないからな！！

・・・・・ってあれ？

「はやて、なんか忘れてない？」

「奇遇やな私もや。」

二人でうーんと思い出そうとする。
そこで昼休みが終わる鐘が鳴る。
「ヤバッ早く戻んないと！はやて行くぞ！！」
「そやね、急ごう！」
結局零治は思い出すことはなかった。
「で、一体何を話してたのよ？」
放課後ダッシュで帰ろうとしたときにバニングス、すずか、なのはが俺の前に現れた。
「どうしたん？みんなそろって・・・・」
「いやな、はやて。何か昼休み何してたかって聞いてきたんだよ。」
「なんや、そのこと・・・・ってか何で二人になったんやっけ？」
「いきなり零治がはやてに耳打ちしたんじゃない。」
「そうだっけ？」
「そうよ。」

うーん、何でそんなことしたんだっけ？

「別に隠れて話す内容でもなかったし・・・」

「そやなぁ。ハリセン君57号の話とスーパー銭湯の話ぐらいしかしてないしなぁ。」

うーんと唸りながら思い出そうとする二人。

「「そうだ（や）おっぱいランキング！」」

「「「はい？」」」

俺たちが言ったことに？を浮かべる三人。

「いやな、はやてがおっぱい星人だって聞いたことあるから、仲良し五人組で胸の大きさでランキング付けてくれって頼んでたんだ。」

「そうやった。いやぁ～話がおもろくてどんどん脱線していったからなぁ。すっかり忘れてたわ。」

ハッハッハと笑う二人。

だが3人から漏れるドス黒いオーラに自分たちが口を滑ったことに気づいた。

「へぇ・・・」

「はやて、零治、ちょっとお痛しすぎじゃない？」

「・・・二人とも“おはなし”なの・・・・」

その様子にガタガタと震える二人。

教室はいつの間にかほとんど人はいなくなっていた。

「ちょっと待て!!三人とも。あれは単なる冗談で・・・」

「そうやって、アメリカンジョークってやつや!」

ニコッと親指を立てるはやて。

「そんな嘘に・・・」

「騙されると!!」

「思ってるの?」

徐々に二人を追い詰める三人。

「零治君。」

「なんだはやて?」

「私な、言っとくことがあったねん。もう少しで新しい家族ができそうなのよ。だから・・・」

「待て!はやて!!それは死亡フラグ!!!」

そう教えるがはやてには聞こえていないみたいだ。

「必ず・・・生きて帰るんや!!!」

まるでアニメの主人公みたいに叫びながら三人の脇を通るように逃げようとする。

うまく虚を着いて向けられたような気がした・・・・・・だが・・・

・・・・気づいたらはやては魔王様にアイアンクローされてました。

「・・・・どこ行くのかな?はやてちゃん。」

「待ってなのはちゃん、マジでしゃれになら・・・ぎゃあああああ!!!」

嫌な音が教室に響く。

「はやてえええええ!!!」

戦友先に没・・・・・

「・・・さて次は・・・・」

「零治・・・・・」

「だね。」

ニコッとはにかむ魔王様。

「ごめん。星、ライ、夜美、おれもここまでみたいだ・・・・・今行くよはやて・・・・」

そう呟き俺はなすがままになった・・・・・・

満身創痍で帰った俺に三人は驚き、事情の説明を求めてきた。

心配してくれた三人に嬉しかったのか、油断して、今日の出来事全部話してしまった。

三人から大目玉食らったのは言うまでもない・・・・・

あれ!?今週は付いてるはずなのに・・・・・・

## 第6話　零治とはやての不幸（後書き）

こんな感じのどんな時でもボケを忘れない零治君とはやてさんでした。

何かすらすら書けた気がする。

三人娘にもイベントが追加されました。

感想に有りましたがマテリアル娘結構人気高いです。

結構他の小説だと出てないので人気ないのかと思ってました。

あと、はやての関西弁おかしくないでしょうか？

おかしいところがあったらご指摘お願いします。

## 第7話　もう一人の転生の話（前書き）

こんにちは、ｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回は一番出来が悪いと思います。

時間も一番かかりました。

こんな感じで中2になったんだなぁ～

と軽く流しながら読んでくれれば幸いです。

# 第7話　もう一人の転生の話

初めまして、俺の名は神崎大悟。

完璧な容姿、最強の魔力、主人公だけが持っているニコポ、ナデポのスキル、銀色の髪に赤と青のオッドアイ。

これほど愛されている転生者は居ないだろう・・・・・

さて、今ではこんなに恵まれた男になっているが、前世はひどかった。

引きこもりのデブオタ。

女の子なんて出会いもクソもなかった。

そんな人生に絶望し、自殺した俺だが、神様は俺に転生の機会を与えてくれた。

本当に神様には感謝しきれない・・・・・・・・

「ふむ、いきなりで悪いが、お前にはリリカルなのはの世界に転生してもらう。」

「転生フラグキタ――――（ ゜∀ ゜）――――!!」

「・・・・前のやつとは１８０度違うやつじゃの・・・・・」

「あ、あなた様は神様ですか？」

「まぁ、人間からはそう呼ばれているの・・・」

「な、ならばお、俺にも転生者としてチート能力が・・・」

「それについては自分で決めて欲しい。」

「じ、自分が決めて良いのでありますか？」

「そ、そうじゃ・・・・（前の奴の方がよかったのぉ・・・）だが叶えられるのは３つまで、さらにわしに叶えられるものだけじゃ。よく考えて欲しい。」

「俺の願いは決まってます！まずは最強の魔力。次にナデポ、ニコポのスキル。最後に銀色の髪と、赤と青のオッドアイを持つイケメンにしてくれ！！」

「本当に前の奴とは正反対だの・・・・・それにやたらと細かい・・・」

「前のやつとは？」

「お主より先に転生させたやつじゃ。お主とは違い、欲が無くてな。３つの願いも一時間以上考えても思いつかなったから保留にしたんじゃ。」

「・・・別になくてもよかったのでは？」

「それじゃ、わしの気が収まらん。」

「まぁいいですけど・・・・そいつの名前はなんと言うのですか?」

「前世の名前は・・・・佐藤考輔だったはずじゃが・・・・」

「転生後は?」

「分からんわい。転生後の名前は自由に決めてるからの。」

「そうですか・・・・」

まぁ、俺のことは前世でも知らないだろうし、転生者だって分かるわけないか・・・・

だが大悟は気がついていない。

明らかに普通の人じゃありえない容姿をしていることを・・・・・・

「それで、これがおぬしのデバイスじゃ。」

『初めまして、マスター。』

どうやら男人格のようだ。女人格の方が個人的にはよかったけど・・・・

「能力もおぬしが決めるがいい。ただし自分の魔力で出来る範囲じゃ。まぁお主の魔力ならだいたい問題ないだろうがの・・・」

「そうします。」

「それじゃ、幸運を祈るぞ。」

そう言われて大悟の意識は暗くなった。

「おっと、スキルの説明を忘れたの。・・・・・・まぁ別に良いか。」

神様はそう呟き自分が転生させた二人の事を思い返す。

「さて・・・どっちもクセのありそうな奴らじゃったし面白くなりそうじゃの・・・」

そう小さく笑ったのだった。

そのあとの俺は、面白いようにうまくいった。もう一人の転生者より早く原作介入出来た。

どうやらもう一人は介入する気はないらしい。

こっちにしては好都合。

このままハーレムに一直線だ！

まずはＰＳ事件。いきなりＳＳＳオーバーだと色々と問題のではないのかと思い、なのはたちと同じくらいにリミッターを付けた。

これなら変にも思われないだろう。

原作と同様にプレシア・テスタロッサは虚数空間に消えた。

原作ブレイクと思ったが、やっぱりあのおばさんを俺は許せなかった。

それに、その分フェイトを慰めることが出来たし、ニコポやナデポのスキルも使った。

堕ちたのは確実だろう・・・・・

ただ、お別れイベントは俺の知らないところで終わってた。

恥ずかしかったのかな？

ったく、俺は気にしないのに・・・・・・

次の闇の書事件。なのはがヴィータに襲われたところを華麗に助けた。

ヴィータが睨んでたが、なのはを助けるためだ。悪いがその場は退場してもらった。

けれどデバイス強化イベントはなくてはならないと思い、シャマルに蒐集させました。

後のはやてにも影響することだからな・・・・・

一度助けたからなのはたちには悪い印象はないだろうし・・・・

あっ、俺は蒐集させませんよ。ＳＳＳオーバーの威力を誇る化け物が出来ちゃいますから。

そんなこんなでアースラ組について協力していきました。

ヴォルケン組の攻略は後ですればいい。

そんで最終決戦。

あの暴走した防衛プログラムに対しての一斉攻撃イベント。

その間にフェイトが取り込まれたりとかあったけど全部俺が関係ないところで終わってた。

俺はリーゼ姉妹の相手をしてたのでそんな暇がなかった。

・・・・やっぱりリミッター付きじゃきつい相手だった。

そして防衛プログラムが登場。ここでみんなの株を上げておくか・・・・

リミッターを解除し魔力を解放。

流石に、みんな驚いてるな・・・・

「行くぞ、ジルディス！！」

『・・・イエス、マスター。』

ブレイドフォームになり、魔力を大剣に集中させる。

大剣が、何倍にも巨大になる。

「いっくぜえええええ！！」

その大剣をそのまま降り下ろす。

「グギャアアアアアア！！」

いろいろな声が混ざったような悲鳴をあげる。

プログラムを守っていたバリアはすべて破壊される。

それを見てみんなの目が点になっている。

「今だ、行け！！」

その掛け声で我に帰り、みな原作通りに攻撃し、闇の書事件は解決した。リインフォースは消えてしまった。

俺と同じ銀髪で、ボインねぇちゃんだったので助けたかったんだけど、やっぱり俺の力じゃ無理だ。

はやてフェイト同様に慰めた。

これではやても堕ちただろう・・・・・・

将来が楽しみだ。

そのあとはいたって平和。

なのは撃墜イベントのことをすっかり忘れていた事以外特に何もなかった。

俺は学校に行きながら魔導師として活動している。

その分会える時間が無いのか、なかなか会えない。

恥ずかしがらずに会いにくればいいのに・・・・・

学校でも同じクラスなのに話すことがなく、俺から話に行くことが多かったが、行くと楽しそうに話すから嫌われてはいないのだろう・・・

・・・・・それとも余りにも周りからもてすぎるから嫉妬してるのか？

お前たちが一番なのに。

そんな感じで中2になった。

去年とは違い、アリサとすずかも同じクラスになった。

久しぶりにみんなと同じクラス。

「う、うん、これからよろしく。」

「・・・・・・」

「アリサちゃん・・・」

「・・・よろしく。」

そんなにかしこまるなよ・・・・

俺は別に気にしないのに・・・

もしかしてまだ嫉妬してるのか？

「前も言ったけど俺はお前たちが一番だから。」

かっこよく決まったな。

「そ、そう（いきなり何言ってるんだろ・・・・）」

「・・・・・・（キモイ）」

「なのは、フェイト、はやて、今年もよろしくな。」

「う、うん・・・（はぁ、また同じクラス・・・）」

「よ、よろしく・・・（何でいつも一緒なのかな・・・）」

「ま、また・・・・よろしくな・・・（最悪や・・・）」

何か顔が引きつっているような気がするけど気のせいだよな・・・

全く彼女たちを理解していない大悟だった・・・・・・

ある、昼休み。

「また同じクラスだよフェイトちゃん・・・」

「そうだね・・・なんでいつも一緒なのかな・・・」

「いい加減にして欲しいわ、何で頭撫でようとしてくるわけ？気持ち悪いんだけど！」

「アリサちゃんきついなぁ～。まあ私も同意見やけど・・・」

「三人はずっと一緒だからね。私とアリサちゃんはまだましだね。」

「そうね、何であんな奴がモテるのか分かんないわよ。」

「ね、誰にでも頭撫でようとするし。最近私たちに対する目線もいやらしいよ。」

アリサが言った言葉にフェイトが付け足す。

「とにかくなるべく近づかんようにしないとな。」

「そうね。特に魔導師の三人は気を付けなさいよ。」

「私たちは大丈夫、違う部署だから。・・・時々来るけど・・・」

「そ、そう。でもそれなら学校だけだね。」

すずかの問いにみんな頷いた。

大悟は彼女達にかなりの嫌われていた・・・・

最近おかしい・・・・・

彼女たちが、一人の男に集まっているような気がする。

変化があったのはなのはがあいつの隣になってからだ。

いつも授業は寝てばかりで、全く目立たない普通の奴。

体は鍛えているのかたくましい体つきしているが、それ以外は何もない。

なのに、アリサやすずかとはいつも話している。

しかもアリサやすずかからだ。

それに続き、なのは、フェイト、はやてもだ・・・・・

はやてに限っては昼休み二人でいることがあったらしい。

男子で大変、話題になっている。

もしやはやては無理やり・・・・・

他も、もしかしたら奴の魔の手に・・・

何か弱みでも握られてるのかもしれない。

だったらみんなは俺が守らないと！

これ以上好きにはさせない！！

## 第7話　もう一人の転生の話（後書き）

やっぱいまいちな気がする。

大悟ははっきり言って嫌われています。

その事に本人は気づいていませんが・・・

ナデポ、ニコポについてですが、他の小説に出たりしますが、読んで意味がわからかったです。

そんなことで簡単に女子が堕ちていたら世の男どもは苦労しない気が・・・

なので、今回は原作組には通用しないことにしました。

これからのこの男の勘違いっぷりも楽しみにしていただけると幸いです。

## 第8話　有栖家、スーパー銭湯に行く（プール編）（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はマテリアル娘のお話。

メインはライです。

原作キャラ好きな人はごめんなさい・・・

# 第8話　有栖家、スーパー銭湯に行く（プール編）

学校も終わり、休日。

はやてに教えてもらったスーパー銭湯に早速行くことにした。

当然、有栖家全員である。

星たちは誘ったあと、わざわざ新しい水着を買いに行っていた。

・・・わざわざ新しいのを買う必要無いだろって言ったら「私達は常に成長しているんです!!」と言われ、怒られました。

楽しみだってことはないからな!!

そして約束の土曜日・・・・・

「へぇ、確かにこりゃ銭湯じゃねえわ・・・」

今、スーパー銭湯のプールエリアに来ていた。

レジャーランドみたく、ウォータースライダーだけでなく流れるプールまであった。

「遊びたい!遊びたい!!」と駄々をこねたライ。その結果、先に遊んでからお風呂エリアに行くことになった。

あとからはやてに聞いたんだが、それが正しい回り方らしい・・・
俺は風呂だけで満足だったんだが・・・・・・
「お待たせ～！」
ライの元気な声を聞いてそっちを振り向く。
「遅いぞ、三人・・・」
その後、言葉が出なかった・・・・
そこにはいつもとは違う四人がそこに居たからだ・・・・・・・・
「何でシャイデがここにいるんだ!?」
「私が呼んだの！せっかくだからシャイデさんも一緒の方が楽しいと思って。」
ライが嬉しそうに言う。
「私も今日は暇だったからね。たまにはみんなで一緒に遊ぼうと思ったのよ。」
「本当にそれだけだよな・・・・・・」
「・・・少しは私を信用なさい。」
紫のマイクロビキニと青少年には優しくない水着を着ているシャイデ。

大きな胸が揺れているのを男共が横目で見ている。

・・・・まぁ気持ちはわからんでもない。

だけど色気以上に悪意を感じる俺は全然気にならなかった。

「あ、あの・・・私の水着はどうですか？」

星がモジモジと聞いてくる。

星にしては珍しい赤のセパレートだ。

赤なんて珍しい。清純な白色を選びそうだけど・・・

だけどアリです！！

「珍しいな目立つ赤なんて、でもそれがまた似合ってるな。」

「ほ、本当ですか！？」

「ああ、自信もっていいぞ。」

「はい・・・」

っていうか星で駄目なら大半の女子は駄目な気がする・・・・・・

「おい、レイ！！我はどうだ！！」

両手を腰に当て、白いビキニの胸元を突き出す夜美。

・・・こっちも星と同じで、普段とはかけ離れた色を選んだな。

「で、どうなんだ？」

「・・・いや、普段で考えたら選びそうもない色を選んで驚いたけど、結構似合ってるじゃないか。」

「フフフ、そうだろ！！」

嬉しそうだな・・・・・

でもそのポーズは止めろ。

星やライよりはないとは言え、平均以上なのは変わりない。

男共がこっちを見てるぞ！！

ところでライは・・・・・・

「んしょ、んしょ・・・・・」

泳ぐ気まんまんでした・・・

しかし、お前が来てる水着分かってんのか！？

何で三角ビキニなんて選んだ！？

しかも黒！！

体が中学生レベルを超えてるから似合ってるんだけど。

エロすぎる！！

しかも仕草が子供っぽいからそのギャップがいい感じに色気を出してる。

誰だこんな水着勧めたのは。

そう思って周囲を見渡すと・・・

俺の慌てっぷりを見てシャイデが笑っていました・・・・

犯人はお前か！！！

「レイ、ウォータースライダー乗ろう！」

ライに腕をつかまれ引っ張られる。

「ライ、走ったら転びますよ。」

「大丈夫だよ。ねぇ早く行こうレイ！」

「分かったから、そんなにあせるな！！」

引っ張られながらも付いていく俺。

「全く、本当に子供だな。」

「ふふ、だから可愛いいんじゃない。」

ビーチパラソルの下で優雅にトロピカルジュースを飲んでいた二人だった。

「ワクワク、ワクワク・・・」

「・・・・・・」

「ワクワク、ワクワク・・・」

「・・・頼むから少し落ち着いてくれ・・・・」

並んでいる間、ライの落ち着きのなさはすごかった。

止まっている時間はなく、必ず体のどこかが動いていた。

・・・バイクで車をあおってるみたいだ。

「次のお客様。」

「ねぇねぇ！あとどのくらい！？」

「頼むからひと組行くたんびに同じことをなんども聞くな！」

「だって・・・・」

だってじゃねえよ！

後ろの人達にクスクス笑われてんじゃねぇか！！

「次のお客様。」

「ねぇ、レイ・・・」

「あと四組だよ！ちくしょう・・・・」

まるで幼稚園児を相手しているみたいだ・・・・

「楽しみだね。」

「・・・ああ、そうだな・・・」

やっと順番が回ってきて、ループ地獄から開放された・・・

やっと順番が来たときにはかなり目をキラキラさせてたなぁ。

かなり疲れたけど、嬉しそうな顔を見れて、まぁ悪くなかったかな・

・・・

「それじゃ、どうぞ。」

係員の声に俺たちはウォータースライダーを滑った。

ちなみに二人で一緒に滑っている。乗り物みたいな浮き袋に二人で乗るやつだ。

「キャアアアア！」

「ウオオオオオオ！」

結構速いし、長い。

カーブも多いしなかなか楽しいな。人気があるだけはある。

「ゴールだ！」

ライの声に前方を見る。

おっ、もう終わりか。

「それじゃ、最後に行くよ大技！」

「はい？」

「いくぞぉ！ローリングサンダー！」

出口の出た瞬間、ライはジャンプ。

一回転して着水しやがった。

俺はというとライがいなくなりバランスが崩れ、まさかの後ろ向きで着水する羽目になった。

めっちゃ鼻に水が入ったし・・・・

「てめ、ライ！いきなり危ない・・・ってどうした？」

「レイ・・・」

そこには腕組みして動かないライがいた。

よく見ると、水着がない。

「水着、外れたのか？」

「うん、どうしよ・・・」

着水したプールは、結構広く、普通に泳いでいる人たちもいる。

さて、どうする・・・・

「・・・ライ、お前は人目がつかない端にいろ。俺が水着探すから・・・」

「待って、行かないでよレイ・・・・・」

そんな泣きそうな顔するなよ。

ったく、仕方ない・・・・

「なら、俺の背中にくっつけ、それなら周りにも見えないだろ。」

「う、うん・・・・」

そう言ってくっつくライ。

当然豊満な胸もくっつく。

ぼ、煩悩退散!!

「い、行くぞライ。」

「う、うん・・・・」

頼むから恥ずかしそうにしないでくれ、俺はもっと恥ずかしい・・・・

頭を振り、水着を探す。

黒だから見つけやすいはずだけど・・・・

「ライ、一回潜って見てみる。胸隠せ。」

「うん・・・・」

ライが離れたのを確認してから、ゴーグルを着け、潜る。

見事なm・・・・・・

って違う！！

切り替え真面目に探す。

おっ、あった。それほど遠くないな・・・

水から出てゴーグルを外す。

「あったぞ、ライ。それほど遠くない。」

「本当！？」

「ああ、また遠くに行かないように早く回収しにいくぞ。」

「うん！！」

やっと元気になったか・・・・

良かった、良かった。

さて確かあそこに・・・・

あった、あった。

「ほい。」

水着を拾い、ライに渡した。

「あ、ありがと・・・」

「俺の背中に隠れながら着替えな。そうすれば見えないだろ。」

「うん・・・・」

そう言ってから静かになった。

多分着替えているんだろう。水の弾く音が聞こえる。

「終わったよ。」

「そうか、なら早く星たちの所へ・・・・ってオい！」

いきなりライが俺の背中に乗ってくる。

「・・・レイの背中おっきいね・・・」

「そりゃ、背が伸びたからな・・・って違う降りろって！」

「いいじゃん、おんぶ～！」

「良くない！！」

胸があたってんだよ！胸が！！

「ふ～ん、いいんだ。おんぶしてくれないと水着、レイに外されたってみんなに言うよ。」

「なっ！？誰がそんな嘘を・・・」

「星や夜美は僕を信じてくれると思うよ。それにシャイデさんもいるし・・・」

確かに・・・星は夜美はライを信じるだろうな・・・シャイデは・・・絶対悪乗りするだろうし・・・

「分かったよ、おんぶしてやるよ・・・」

「うん、ありがと・・・」

そう言って顔を背中に付けてくる。

「おんぶも懐かしいね・・・」

「そうだな、あの時以来か・・・」

俺が言ったのはライたちが家に来て間もないころのことだ。

星はその頃から家事を、夜美は何故か分からんがドラマの再放送にはまっていた。ライは・・・・

「行ってきま～す。」

「行ってらっしゃい。」

「気をつけろよ。」

放課後に外で遊んでいる子供たちと遊ぶのが日課になっていた。

ある日・・・・・

「ライ遅いな・・・」

時刻は7時、いつもなら5時半頃には帰ってくるはずなのだが、今日は帰ってなかった。

「どうしたのでしょう・・・」

「何かあったのかな・・・ちょっと探してくるわ。」

「私も・・・」

「星はご飯の準備を。それに星達はまだあまりこの周辺を知らないだろう?」

ソファから我もと言いそうになっている夜美にも言う。

「そうですね、分かりました。」

上着を持ち玄関に向かう。

「レイ、気をつけろよ。」

「ああ、行ってくる。」

夜美に見送られ外へ出た。

２０分後・・・・・

「ったくどこにいるんだよ・・・・」

今いるのは海鳴市にある３つの公園のうちの一つ。

家に一番近い公園も見てみたがいなかった。

ここしか教えていなかったはずなんだが・・・・

そして次の公園で、

「うう・・・・ぐすっ・・・」

「ん？この声は・・・」

その公園に入って周囲を見渡す。

すると少し奥のベンチに座る青い髪の女の子がいた。

「お腹減ったよ・・・星・・・夜美・・・・・・・・・・・・レイ・・・・」

「呼んだか？」

「えっ！？」

驚いた顔で俺を見るライ。

「レイ！！！」

俺に飛び込んできた。

「ったく、あれほど遠くに行くなって行ったのに・・・」

「だって、みんな違う公園で遊ぶって言ってたから・・・・」

落ち着いたライに近くの自販機で買った暖かいお茶を買ってあげた。

春先だが、今日の夜は一段と寒い。

なぜこうなったのか、

どうやらみんなでこの公園で遊ぶことになったらしく移動してきたらしい。

途中まで友達と帰ってたけど友達も家に着き、ライが一人だけになったみたいだ。

いろいろ歩いたが、結局迷って、この公園にまたついたらしい。

・・・素直にこの辺りを知らないって言っておけばよかったのに・・・

「まぁいい。それじゃ、帰るぞ。二人とも腹空かして待ってるだろうから。」

「うん・・・・」

立ち上がり、缶をゴミ箱に捨てる。

だが、ライは一向に動こうとしない。

「どうした？」

「・・・お腹減って動けない・・・」

アンパンマンか・・・

アンパンマンは顔だけど。

「仕方ないな・・・ほら乗れよ。」

しゃがんで背中を向ける。

「う、うん・・・・・」

ライは恐る恐る俺の背中に乗る。

「それじゃあ、行くぞ。」

「うわぁ！？」

立ち上がったとき、驚いた声を上げたライだったが、直ぐに笑顔に変わった。

「凄い、凄い！！」

「それと、これを羽織れよ。」

そう言って俺の上着を渡す。

「ありがと・・・・うん、あったかい。」

「それじゃあ、帰るか。」

「うん!!」

こうして俺はライをおぶって家まで帰った。

その次の日は腰が思いっきり痛かったな・・・・

「あの日の次の日は腰がマジで痛かった・・・・」

「僕はそんなに重くないよ!!」

ポカポカ俺の頭を殴るライ。

「分かったからやめろ!それにしてもいきなりどうした?」

「うん、ちょっと懐かしくなったから・・・それでね、僕、今とても幸せなんだ。レイがいて、星がいて、夜美がいて、シャイデさんがいて・・・・・毎日がとても楽しい!あの時レイに助けてもらえなかったらこんなに幸せなことを味わえなかったと思う。」

「ライ・・・・」

「それにいつもレイは私達を助けてくれる。今日もそうだし、あの時も・・・」

「・・・馬鹿だなライ。」

「えっ!?」

「お前たちは俺にとって大事な家族なんだよ。一人しかいなかった俺に、家族の温もりを与えてくれた・・・本当に嬉しかったんだ。強がってもやっぱりひとりは辛いんだ・・・・」

「レイ・・・・」「だから気にしなくていい。これからもお前たちを助けてやる。俺は有栖家の家主だからな。」

そう言って上を向く。

本当に助けられたのは俺なんだよ・・・・・・

恥ずかしいから口には出せないけど。

「でも、そんなレイだから僕は・・・・・・」

声が小さくて聞こえない。

なんて言ってるんだ?

「なぁライ、お前なんて言って・・・・」

「二人とも仲良さそうですね・・・・」

「心配して来てみれば、何をしているんだ貴様ら！」

声のする方を見てみると星と夜美がそこに居た。

「星、夜美、心配してきてくれたのか。」

「・・・余計なお世話みたいでしたけど・・・」

「わ、我は心配などしておらぬぞ！星の付き添いだ付き添い！！」

「そうか・・・ありがとうな二人とも。」

いつもと違う俺に戸惑う二人。

そんな二人の様子を気にすることなくライに話しかけた。

「・・・本当に最高だよな有栖家は。」

「うん！！」

俺の背から降りて、星と夜美の手をつかむライ。

「二人とも行くよ！」

「ちょっと、いきなり引っ張らなでライ。それとさっきのことを詳しく・・・」

「そんなに力強く引っ張るな！！それとさっきのことを詳しく・・・」

・・・二人ともかぶってるぞ。

けれど、本当に転生してきて良かった。

できればこの穏やかな日常がいつまでも続きますように・・・・・

## 第8話　有栖家、スーパー銭湯に行く（プール編）（後書き）

てな感じでライの過去をちょっと。

今までで一番長かったな・・・・

シャイデさん出したけどだいぶ空気・・・

後半の方で生かしていきたいと思います。

けれど次のメインは夜美のつもり。

夜美が好きな人、楽しみにしててください。

## 第9話　有栖家、スーパー銭湯に行く（お風呂編）（前書き）

お待たせしました。

ＰＶ１０万突破！！お気に入り６００件突破！！！

皆さん読んでくださって本当にありがとうございます！！！

これからもよろしくお願いします。

さて、スーパー銭湯後編です。

予告通り夜美メイン。

なんだかんだギャグにはならなかった・・・・

# 第9話　有栖家、スーパー銭湯に行く（お風呂編）

「はぁ～気持ち良い～」

俺はジャグジー風呂でリフレッシュしていた。

他四人もそれぞれ違う風呂を堪能している。

しかし、本当にいろんな風呂があるな・・・・・・・

ジャグジー風呂もいろいろな種類があるし、電気風呂や薬風呂や露天風呂も豊富だ。

・・・・本当にここ銭湯なのか。

プールといい、クオリティが高すぎると思う。名前を変えるべきだな。

「さて、次は電気風呂でも堪能するか・・・」

俺はジャグジー風呂を出て電気風呂へ向かった。

そこには電気風呂を堪能している、夜美がいる。

「気持ち良さそうだな夜美。」

「ああ、レイか。最高だぞ！ここの電気風呂は。特に肩こりによく効く。」

「それは助かる、結構こってるからな・・・」

そう言って夜美の隣に座る。

「ああ～やべぇ効くわ～」

「・・・本当に疲れていたんだな。」

夜美が俺の様子を見ながら、そう呟く。

「そうなんだよ。なのはが隣に来てから俺の生活リズムがかなり崩れてさ、お陰様で全然疲れが取れなくて・・・」

「な・・・の・は?」

「ああ、言ってたよな?」

「いや、その事ではない。お前は何故なのはと呼んでいる?」

「いや、なのはの家にお邪魔になったとき、そう呼べって言われたから。」

「な・・・んだと!?」

かなり驚いているのか、大きな口を開けて俺を見ている。

「いつの間にそんな名前で言うような仲になったんだ!?」

「?別に名前で呼ぶのは普通じゃないか。」

「・・・・本当にそう思ってるのか？」

「？ああ。」

「ならいい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・天然女たらし・・・」

「何か言ったか？」

「なんでもない！！！」

そう言ってそっぽを向く夜美。

わけが分からん・・・・・・

「夜美、せっかくだから一緒に風呂回らないか。」

「！！レ、レイが一緒に回りたいって言うなら一緒に行ってやってもいいが・・・」

「そうか、なら一緒に行くか。」

「そ、そうだな。仕方ないから一緒に行ってやろう・・・」

「はいはい、それじゃ薬湯に行こうぜ。」

「ああ。」

そう言って電気風呂から出て薬湯に向かった。

しかし、相変わらずの上から目線だな・・・・・

最初はうざっ！と思ったけどなれるとどうでもよくなった。

何か口癖っぽいし。

他の人に使って怒らせなきゃいいけど・・・・・

「っとさて、どこの薬湯に・・・・」

「レ、レイ・・・あれを見ろ！」

そう言って、夜美が指さした看板を見る。

『この薬湯は美容、健康によく、ケガの治療や、スベスベのお肌を目指す方にオススメです！！』

おお！大した自信だな。

よく見ると女性が多い。

・・・・・ちゃっかり星もいるし・・・・

「レイ！！行くぞ！！！」

おもいっきり俺の腕を引っ張る夜美。

「分かったから！そんなに思いっきり引っ張るな！！」

「一秒でも惜しい、だから早く！」

そうして引っ張られながら俺と夜美はその薬湯へ向かった。

「レイと夜美。二人も看板を読んでですか？」

「星もか？」

「はい。恥ずかしいですけど、最近お肌が荒れ気味で・・・・」

・・・・全然分からないんだけど。

ふと、俺は夜美を見てみる。

「わ、我は違うぞ。レイが最近疲れてるって言ってたから、疲労回復にと。け、決してお肌をスベスベにして星とライに負けないくらい綺麗になりたいなど・・・・」

「・・・・本音ただ漏れですよ夜美・・・」

「まぁ、気づいていないフリしてやりな。」

しかし買い物の時といい、気にしすぎだと思うんだけどなぁ。

普通に夜美も可愛いのに・・・

「・・・顔も着けた方が・・」

「それはやめるべきですよ。夜美・・・・」

本当にマジだな夜美・・・・

仕方ない、そんなに気になるなら俺も協力するか・・・

「夜美、サウナ行かないか?」

「今、我は肌をスベスベにするのに忙しい。邪魔をするな!」

そう言った、夜美に耳打ちする。

「サウナっていっぱい汗かくじゃん。それってかなり美容にいいってすずか辺りが言ってたんだけど・・・」

「何!?それは本当か?」

すずかはものしりだと家の三人は思っているので、すずかの名前を出せば大抵は聞く。

なのはたちの知識の影響かな。

「なんでも汗と一緒に老廃物を出すらしい。だから、長時間入って、汗を出せばその分綺麗になるんじゃないか?」

「綺麗に・・・」

その言葉に目がキラキラしているような・・・

「レイ！行くぞ！！もたもたするな！！」

「ハイハイ。星はどうする？」

「私はまだ入ってます。サウナは苦手なので・・・・・」

そう言えば星って暑いの苦手とか言ってたっけ？

「分かった。俺たちはサウナに行ってくる。」

そう伝えて、夜美と共にサウナに向かった。

「さて、まずは湿度を上げて・・・・」

水をたし、湿度を上げる。

「・・・・・息苦しい。」

「・・・キレイになるためだろ、我慢しろ。」

「ああ、分かってる・・・・」

まぁ、きついのはよく分かる。

俺もこういう蒸し暑いの苦手だし・・・・

「暇だし、しりとりでもするか。」

「ふん、新聞を読破している我に勝負を挑むとはいい度胸だな。叩きのめしてやろう。」

しりとりで叩きのめすって・・・

「じゃあ、俺から。・・・・リス。」

「スイカ。」

こうして、しりとりバトルが始まった。

15分後・・・・・・・・・・

「スマイル。」

「るるる・・・・・・ルーズソックス。」

「スコール。」

「るるる・・・・・・るばっかり汚いぞ!!」

「勝負の世界に汚いもあるか!!さぁどうする?ギブアップするか?」

「くっ・・・・だがそのる攻めが自分の首を締めるのだ!行くぞ、ルール。」

「ルル。」

「風邪薬かぁ！！！！」

まだまだ甘いな。

それにるなんていっぱいある。

フランスの王様はルイ６世から１９世までいるからな。

他にも地名ならいっぱいあるし。

知っている奴なら全然問題ない。

ギブアップした夜美が「もう一度するぞ！」と言ってきたのでやってあげた。

今度は夜美がる攻めしてきたので、ルイ王様戦法で粘りつつ、逆にる攻めしてやりました。

ちょっと泣きそうになってたのでやりすぎたかも・・・・・

４５分後・・・・・・・

「あつ・・・・・・」

流石にきつくなってきたかな・・・・・

既に、夜美は言葉を自分から言わなくなってきた。

返事はするしまだ大丈夫かな・・・・・

1時間後・・・・・・

ヤバイ・・・・俺もマジできつい・・・・

夜美もとてもきつそうだ・・・・既に汗びっしょりかいている。

顔も赤く、少しやばそうだが、目が死んでないのでもう少し待ってみよう・・・

1時間30分後・・・・・

夜美を見る。

・・・・限界だな。

夜美はかなりの負けず嫌いだからな・・・・・

自分からは出るなんて言わないだろう。

「夜美おれもう限界だ。一旦出ようぜ。」

そう夜美に言うが、返事が無い。

夜美を見る。

!?目がうつろになっている、ヤバイ!!

俺は夜美をお姫様抱っこしてサウナ室から出る。

俺もクラクラするがそれどころじゃない。

周りの視線を気にせず、給水所まで行く。

もうすぐ・・・・

ついた俺は、夜美を優しく壁に寝かせ水を飲ませる。

「大丈夫か?」

「ああ。・・・・・少し頭がぼ~っとするが・・・・・」

「なんとかなったな一時はどうなることかと・・・」

あれ?頭がクラクラする?

「レイ、一体何があったんですか?なぜレイが夜美を・・・・」

どんどん視界が暗くなっていく・・・・・・

俺は意識を無くした・・・・・・

「ここは・・・・・・」

「レイ!!大丈夫なのか!?」

俺はベットに寝ており、横に夜美が座っていた。

「ここは・・・・」

「スーパー銭湯の医務室だ。」

「!そうだ、夜美大丈夫だったか?おまえもう少しで・・・」

「こっちのセリフだ、馬鹿者!!!一体どれほど心配したと思ってる!!!」

よく見ると夜美の顔には涙の痕があった。

「頼むから心配させるな!!私たちにはお前しかいないんだぞ!!!」

「・・・ごめん。」

「我だけじゃなく、三人にも謝るんだな・・・・」

俺から顔を逸らしながら言う。

「そうだな・・・・後で言うよ。」

「そうしろ。それと・・・・・・・・・今日は無理やり付き合わせてすまなかった・・・・」

「何言ってんだ、俺が誘ったんだ。夜美のせいじゃない。」

「でも・・・・・・」

「・・・だったら今度一緒に映画でも見に行こう。」

「そんなことでいいのか？」

「ああ。その代わり、最近やっている映画知らないから面白そうなのを選んどいてくれ。」

「ああ、分かった！楽しみにしとけ！！」

・・・やっといつも通りになった。

夜美のせいじゃないのに気にしすぎなんだよ・・・・

「それじゃあ、我はみんなを呼んでくる。」

「ああ、頼むな。」

そう言って夜美はドアに向かうが、開ける前に止まった。

「レイ・・・今日はありがとう・・・」

そう言って部屋から出ていった。

素直じゃないな・・・・・・・

部屋にに来た星とライも顔に涙の跡があった。

本当に心配させちゃったな・・・・・・・

シャイデは苦笑いしてたけど。

多分、星とライをなだめるのに大変だったんだろうな・・・

シャイデがいて本当に助かった。

その後軽く星のお説教を聞き、スーパー銭湯を後にした。

・・・・・いろいろあったけど楽しかったな。

また有栖家でどこか遠出したいものだ・・・・・

## 第9話　有栖家、スーパー銭湯に行く（お風呂編）（後書き）

時間食ったな・・・・・

なかなか思いつかなかった・・・

お知らせです。

今日から一週間ちょっと、少し忙しくなりそうで、前みたいに一日二本は投稿できなさそうです。

むしろ一本も怪しいかも・・・・

でも頑張ろうと思うので、これからもよろしくお願いします。

さて、次回は大悟と零治の初絡み。

頭の中には大体出来上がっているので案外早く投稿できるかも・・・・

## 第１０話　転生者ｖｓ転生者（前書き）

やっぱり時間がかかちゃた・・・・・

書いた時間は短かったんだけど・・・・

書いてる時間がなかった・・・・

午後には書けると感想で書いた人すみませんでした！！！

# 第１０話　転生者ｖｓ転生者

「おい、ちょっといいかい？」

今は昼休み、はやてと談笑していた俺はいきなり神崎に声をかけられた。

「有栖を借りたいんだが・・・・」

「俺！？」

「何で零治君を？」

「ちょっとね・・・・」

笑顔ではやてを見る神崎。

あれがニコポなのかな？

実物を見たことが無い俺にとってニコポと普通の笑顔の違いが分からん。

はやてはひいてるけど。

これじゃあ、ニコヒのような・・・・

「俺は別に構わないけど・・・・・」

そう言ってはやてを見る。

「はやては？」

「わ、私もかまへんよ。」

「そうか。なら有栖、ちょっと来い。」

そう言われ俺は神崎について行った。

「さてここなら構わないだろ・・・・・」

そう言って連れてこられたのは体育館裏。

何かベタだな・・・・・

「話ってなんだよ？」

「・・・俺のなのはたちに近づかないでくれ！」

「・・・・・・は？」

いきなり何言ってんだコイツ。

「だから俺のなのはたちに近づくなと言ったんだ！！」

コイツ本当に本気で言ってんのか？

「なのはたちって誰だよ。」

まぁ、分かってるけど・・・・

「とぼける気か?なのは、フェイト、はやて、すずか、アリサのことだよ!!」

はやてとすずかの二人には俺から話しかけたりするけど、なのはやフェイト、バニングスには滅多に俺から話しかけないぞ。

「彼女たちは俺に惚れているんだ。君に話しかけられて困ってるじゃないか!」

・・・・・目が腐ってんのか?コイツ。

「・・・・確かにはやてやすずかには俺から話しかけたりするけど、他は滅多に話しかけないぜ。」

「嘘だな!!よく話してるじゃないか!!」

「俺が行って話してるわけじゃないだろ!」

「違うね。君が話しかけてるのさ。」

・・・・・馬鹿すぎてすぐにでも消したいわコイツ。

「・・・だったらお前があいつらに俺に話しかけるなって言えばいいじゃん。話しかけられても軽く流せとか・・・・」

「当然言ったさ。けれど弱みを握られたらしく、「私たち、零治君

のこと嫌じゃないんだけど・・・」とみんな言ってた。」

弱みって何!?

こいつの頭の中どうなってんだ?

「もしも、この忠告を受け入れられなかったら・・・」

キーンコーンカーンコーン。

チャイムが鳴った。

「じゃ、教室にもどるな。」

そう言って俺はその場から立ち去る。

「ま、待て!」

俺を追って、奴が付いてくるが、既に俺の姿はなかった。

「クソっ、なんて逃げ足に速いやつだ・・・」

『ラグナル、バレてないか?』

『モウマンタイです、ご主人様。一瞬だったので気のせいだと思うでしょう。』

俺は自身のレアスキル、空間転移を使って、その場から転移した。

バレないように最小限に魔力を抑え、誰もいなさそうな所に転移した。

『おい・・・ご主人様って何だ?』

『男はこう言われると嬉しいと夜美様と見ていたテレビで言っていました。』

『夜美はいったい何の番組見ているんだ・・・夜美は言わないだろうな・・・・・』

『夜美様に言われたらご主人様気持ち悪いほどハイテンションになるでしょうね。』

『気持ち悪いってなんだよ・・・・』

『ハイテンションは否定しないんですね・・・・』

そりゃ、あんな可愛い女の子に言われてハイテンションにならない男なんていないだろ。

『・・・何か悔しい・・・・』

そんなデバイスの言葉を流し、俺は教室に向かった。

「大丈夫だった?」

授業中、隣のなのはが声をかけてきた。

「何が?」

「大悟君のこと・・・」

「ああ、お前たちは俺に惚れているんだから近づくなとか言われたけど。」

「大丈夫なのかな・・・・・・」

当然頭の心配だぞ。

「お前たちもはっきり言わないとあいついつまでもあのままだぞ・・・」

「・・・私たちも言ってるんだけど、「嫉妬してるんだろ。俺はお前たちが一番だから気にするな。」しか言わないの。」

勘違いもここまで来ると救いようがないな。

「・・・・・苦労してるんだなお前ら。」

「・・・・・零治君も他人事じゃないと思うよ。」

確かに。

今もこっちを見て睨んでいるし。

「何でこうなるのかな・・・・・」

俺の呟きは先生の声にかき消された。

「零治君、ちょっとええか?」

「何だ?はやて。」

「この前テレビでな・・・・」

「はやてなんの話なんだい?」

はやてが話しかけようとしていた所に、神崎がやってきた。

「いや、もうええねん。ほな、零治君。」

話の途中なのにかかわらず、はやてはその場を後にする。

名前さえ言ってもらってないし・・・・

「ったく、はやても恥ずかしがりやだな。」

そう思えるお前に少し尊敬するよ。

「零治君。」

「おう、すずか。どうした?」

「あのね・・・」

「やあすずか。僕も混ぜてくれないか。」

「ごめん、零治君また後で・・・・」

はやて同様、すずかもさっさとその場を後にする。

「すずかもか・・・・みんな恥ずかしがりやだな。」

こいつのネガティブの発言を聞いてみたい。

「ちょっと零治!!あんた・・・」

「アリサ。」

「きゃあ。」

とうとう悲鳴か。

「何であんたがここにいるのよ?」

「どんな話をするのか気になってね。」

「あんたには関係ないでしょ。あっち行ってよ！」

「いいじゃないか、僕にも聞かせてよ。」

「嫌よ！」

「そんなこと言わずに。」

「嫌！！」

「そんなこと言わずに。」

「もうこいつ嫌だ～！！」

そう言ってバニングスはどこかへ行ってしまう。

「本当にツンデレだなアリサは。待てよ～。」

そう言ってバニングスに付いていった。

・・・・ツンデレってあんなだっけ？

「ちょっと何で付いてくるのよ～！！」

「何でってアリサが逃げるからだろ～」

・・・・悲鳴あげながら逃げるアリサが面白いと思ったのは内緒だ。

そんでもって放課後・・・・・・・

学校を出ようと階段を降りようとした時だ。

「ちょっと、あんたなんのつもりよ！！」

女子生徒の怒鳴り声を聞き、そっちへ行ってみる。

そこには４人の女子に囲まれているフェイトがいた。

・・・・おそらく見たことがないから他クラスだと思う。

険悪な雰囲気なため無視できず俺は話しかけることにした。

「おい、どうした？フェイト。」

「あ、零治・・・・・・」

「あんた誰よ？」

「・・・有栖零治。零治でいい。」

「この女との関係は？」

「同じクラスの友達かな。」

「・・・・気を付けたほうがいいわよ。この女誰にでも色目使うか

ら。」

「私、そんなこと・・・・・」

「違うっていうの！！」

忠告した女子にでかい声で言われ押し黙ってしまうフェイト。

「・・・・何を怒ってるのか分からんけど、フェイトはそんな奴じゃないぞ。」

「・・・・やっぱり男はこの女の味方をするのね。」

「違うな、俺はフェイトの友達として言ったんだ。それに・・・・」

一つ間を置いてまた俺は口を開く。

「お前らはただ単にフェイトに嫉妬してるだけだろ。」

「わ、私たちは別に・・・」

「仮にフェイトがそんなことしているのなら、男子たちにもこんな人気が出るわけがないだろ。」

「・・・分かってるわよ・・・分かってる！そんなこと！！けれど、私の好きな人がこの女に告白して振られているのよ！！そんなの許せる訳ないじゃない！！！」

「そんなの、今度は自分に振り向かせればいいじゃないか。」

「えっ！？」

「フェイトが悔しがるほどその男と仲良くなって、フェイトを見返してやればいい。」

そう聞いて、騒いでいた女子が静かになる。

「・・・・まだ何かあるか？」

「・・・・もういいわ。」

騒いでいた女子がその場を後にする。他の女子もそれに付いていく。

「フェイトさん。」

「えっ！？」

「あなたを許せそうにないけど、必ずあなたを悔しがらせてあげるわ。」

最後にそう言ってその場を後にした。

「大変だったなフェイト。」

「うん・・・」

帰り道まだ少し元気のないフェイトと共に帰っていた。

「いつもあんなことがあるのか？」

「うん・・・結構な頻度で。」

もてすぎるのも問題だな。

「結構大悟のことを好きな子もいて・・・見た目はあれだから。」

まぁ見た目はな・・・・・・

「大悟は私たちが一番なんて言うから、なのはたちもたまにああいう目にあったりするらしいし・・・」

本当にはた迷惑な奴だな・・・・

「今日はありがとう。本当に助かったよ。」

頭を下げるフェイト。

「気にするなよ。たまたまそこに出くわしただけだし。困ったらお互い様だよ。」

「うん、ありがと。・・・・あのねお礼に一緒に翠屋にでも・・・」

ブルブル俺の携帯が震える。

「悪い、フェイトちょっと電話だ。」

「・・・・零治、学校に携帯持ってきてるの？」

ジド目で俺を見るフェイト。

「まあまあ、バレなきゃ構わないでしょ。」

「・・・・本当に不真面目だね零治。」

「お前らが硬すぎるんだよ。」

主に、バーニングとか魔王様とか・・・・・・

「それよりでなくていいの？」

「おおっと。」

携帯を取り出し、ディスプレイを見る。

・・・・シャイデか。

仕事の話はいつも夜なんだけどな・・・

フェイトから少し離れて電話に出た。

「ほい、どうした？」

『零治、依頼よ。』

「一体どうしたんだ。普通なら夜だろ？」

『それがね日時が今日だからよ。』

「・・・本当にいきなりだな・・・場所は？」

『海鳴市。』

「ここだと！？仮にもなのはやフェイトたちがいるんだぞ！！」

『依頼人から管理局より先に始末して欲しいらしいわよ。』

「・・・敵は？」

『人造魔導師。』

かなりヤバイ敵じゃないか・・・・・

「・・・依頼人は？」

『・・・・・ジェイル・スカリエッティ。』

・・・・・

## 第１０話　転生者ｖｓ転生者（後書き）

とこんな感じで、物語が進みます。

このままバトル一直線になることはないです。

あと、この小説の親玉の名前が一応出てきます。

スカさん登場。

どういう感じにになるのかは次の投稿で。

あと、明日は時間が無く、丸一日空くかもしれないです。

申し訳ありません・・・

# 第１１話　襲撃者との戦い（前書き）

どうも、ｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

更新遅くなって申し訳ありません。

それと、プロローグと設定を修正しました。

原作知識がほとんどないのに、リリなのの世界だって来て分かるのはおかしいと指摘をいただいたので、そこを神様に言われたということにしました。

設定については本編でも説明をするつもりなので、読まなくても問題ないです。

これからもこの小説をお願いします。

# 第11話　襲撃者との戦い

零治はフェイトに謝り、シャイデの家へと向かった。

「来たわね。」

「正気か!?相手は次元犯罪者だぞ。」

「だからよ。海鳴市が狙われる理由が分からない・・・それと私たちに始末を頼む理由がね・・・」

確かに意味が分からない。

だから接触か・・・

相変わらず凄い度胸だな・・・

「だからブラックサレナを展開しといて。」

「・・・分かった。」

『オッケー、そっれじゃあいっくよ!!!』

「・・・・少しは空気読め・・・」

そう言いながらブラックサレナを装備する。

「・・・それじゃあ連絡するわよ・・・」

『おや、やっと返事が来たか。初めまして私はジェイル・スカリエッティと言うよ。』

部屋にモニターが移され、そこに紫の髪をした白衣の男が写った。

「・・・・・知っている。」

『おお、君が噂の黒の亡霊かい？』

「そうだ、依頼内容の中身を詳しく言え。」

『ということは引き受けてくれるのかい？』

「それは聞いてからだ。」

『そうか、ならば話すとしよう。実は私の基礎理論を使って人造魔導師を作った男がいる。』

「プロジェクトF・・・・」

『よく知っているね・・・・・まぁそれを使い、人造魔導師を作った男、クレイン・アルゲイル。彼が今回の首謀者さ。』

「クレイン・アルゲイル・・・・」

『彼は一体の人造魔導師を作り上げた。・・・・まぁ、名前はないのでアンノウンとでも言おう。目的は、闇の書関連を解決した者た

ちを倒し、自分が作った魔導師が最強だと見せ、自分の首を切った管理局に復讐するためだろう。』

「・・・・・くだらないな」

『私も同意見だよ。だが、今の彼女たちでは敵わないだろう。』

「なぜ敵わないんだ?」

『・・・詳しくは分からないが対処に向かった管理局員の全員が一撃も与えられず敗れたらしい・・・』

「一撃も!?」

『そうらしい。詳しい能力は分からなかったが・・・・』

本当に分からないのか?これほどの次元犯罪者が・・・

何かにおうな・・・・・

「あのバカみたいな魔力を持つあいつは?」

『神崎大悟のことかい?確かに彼なら問題なく戦えそうだが、彼は今ミッドチルダにいるだろう?』

あれ?今日学校にいたような・・・・・・

その後仕事だったのか?

「だが高町なのは達がかなわない相手なんだろ?だったら俺でも勝

てないかもしれんぞ？」

俺もなのはたちと魔力ランク変わらないし・・・・

『・・・黒の亡霊はそう簡単に負けないさ。』

「知ったような口を。」

『それでアンノウンは今海鳴市に向かっている。あと４５分位で到着する予定だ。できれば海鳴市に着く前に始末して欲しい。』

「もう一つ聞きたいことがある。なぜ、管理局にバレてはならないんだ？」

『簡単だよ。アンノウンのサンプルが欲しいからだ。アンノウンには私にも興味がある。』

マッドサイエンティストめ・・・・・

「要するに始末はついでであり、アンノウンのサンプルを取ってこいってことが今回の本当の依頼ってとこか？」

『その通り。でどうだい？』

俺にとって一番は無視するのが一番安全だろう・・・

だけど、それだとなのは達が危ない。

本当に彼女達がかなわないかは怪しいけど・・・

彼女達は今日こっちにいるし・・・・

・・・・・仕方がない。

「分かった受けよう。戦闘の場所はどのあたりがいい？」

『海鳴市の隣にある遠見市の森林地帯がいいと思うよ。あと１５分くらいで到着するみたいだけど。』

「了解した。それでは、今から行く。」

『よろしく頼むよ。』

そう言われ通信が切れる。

「・・・本当に構わないの？」

しばらく黙って聞いていたシャイデが聞いてくる。

「どこまで信じられるか分からないけど、高町なのは達が敵わないというのなら俺がやるしかないだろう。それに俺にはボソンジャンプもあるし、いざというときは思いっきり逃げるさ。」

「・・・気を付けてね。あなたはもう一人ではないのだから。」

「肝に命じておくよ。行くぞ、ラグナル。」

『はいは～い。スカ野郎から送られた座標にジャンプしま～す！！』

俺はジャンプして指定された座標にジャンプした。

『到着で～す。』

ここは・・・森林地帯のようだ。遠くには、遠見市の街並みが光っているのが分かる。

「今日はやけに軽いな・・・」

『雰囲気が暗すぎます!!私には耐えられません!!』

「マイペースな奴・・・・敵の反応は?」

『まだみたいです・・・・・いや、反応あり!』

「どこだ!?」

『二時の方向、目視・・・・・出来ます。』

「結界張っておいてくれ。」

『了解です。気休め結界張ります。』

気休め言うな。

そろそろ・・・なんだ?女の子?年は俺と変わらないか少し下くらいか?

「照合・・・・・不認知・・・敵と判断し・・・殲滅します・・ＡＭＦ機動。」

『マスター！！まずいです！！アンチマギリンクフィールドです！！。』

アンチマギリンクフィールドって確か魔力結合、発生を妨害する奴じゃなかったっけ？

ってことは・・・・・

『結界は無効化。ボソンジャンプも出来ないです・・・・』

ここらは人目が少ないはずだけど長く戦っているわけにはいかないか・・・・逃げ道も無くなったっわけだし・・・

「武器やフィールドは？」

『武器は大丈夫そうです。けれどフィールドは張り続けると魔力が持ちそうにないです。あとグラビティブラストは最高でも５発が限界ですかね・・・』

「ちなみに今の濃度はどのくらいだ？」

『・・・・恐らく８０％程ですね・・・まだ出力は上がりそうですけど・・・』

そう確認していると、アンノウンが先に動く。

「目標・・・殲滅します。」

そう言って相手は動き出す。

「ブレード展開。」

右腕から白いブレードを展開し俺に構える。

アンノウンが動き出したと思ったら、

俺の目の前にいきなり現れた。そして・・・・・・

「グッ!!」

そのまま斬り付けられた。

「ラグナル!」

『損傷軽微。しかしとんでもない速さですね。恐らくスピードならライ様のソニックムーブより速いです。その分攻撃力が低いですけど・・・・』

「相手の・・・・・損傷・・・・軽微。防御力・・・・攻撃力に３０％移行。」

アンノウンは再びブレードを構え、突撃してくる。

「ラグナル、ビームソード!」

『イエス、マスター』

両手にビームソードを展開し、迎えうつ。

「グッ!?さっきより重い!?」

『マスター、さっきより威力があります!』

アンノウンは俺の後ろに回り込み、背中に斬りかかってきた。

だが、ラグナルが咄嗟にフィールドを張ってくれたため、ダメージを受けずにすんだ。

「ラグナル、ダメージは?」

『ダメージは無しです。フィールドが間に合いました。』

アンノウンは再び俺から離れる。

「バリア確認・・・・防御力を８０%攻撃力に移行。」

「何言ってるか分かるか、ラグナル?」

『防御力を攻撃力になんとかかんとか・・・・』

防御力を攻撃力に?

・・・・・まさか!!

「攻撃、開始する。」

アンノウンが再び、高速移動し、俺の目の前に現れる。

「ラグナル、グラビティブラストチャージ！。」

『無茶ですよ。相手のスピードが速すぎます。避けられますよ！』

「構わん、始めろ！！」

『イ、イエスマスター』

俺の怒鳴り声を聞き、チャージを開始する。

俺は相手の攻撃をできるだけビームソードで対応する。

だが全部防ぐのは難しく、すこしずつ攻撃が通る。

「高魔力反応確認・・・・・緊急回避。」

『マスター！！』

「いけっ！グラビティブラスト！！」

腹部にチャージした魔力を一気に開放する。

だが、アンノウンには簡単に避けられ、空に向かって進んで行き、消えていった。

『やっぱり避けられましたよ、マスター・・・・』

「いいんだ、奴を離すのが目的だったから。それよりラグナル、奴を倒す方法を思いついた。」

『一体何ですか?』

「それは・・・・・」

俺の考えていることを簡潔に言う。

『何という大博打を打つつもりなんですか!!下手をすると大怪我じゃすみませんよ・・・』

「大丈夫。ブラックサレナの硬さは伊達じゃないさ。」

『装甲自体中破しているんですよ!?耐えられるわけないじゃないですか・・・それにマスターが言った通りかも分かりませんし・・・・』

「他に奴に勝つ方法あるか?」

『・・・アーベントのブラスターモードなら奴のスピード以上の速さが得られるはずです。』

「ブラスターモードは今まで一度も使ったことないんだぞ?それにアーベント自体あのときから一度も使ってないし。」

『ですが・・・・・』

「俺は大丈夫だ。なんとかなるさ!それに・・・」

「防御力を１００%攻撃力に移行・・・」

「相手は待ってくれないみたいだぜ。」

「ハイブレード始動・・・・」

右腕のブレードに魔力を纏わせ、1．5倍ほどの魔力刃を作り出す。

「・・・・取っておきがあるのか・・・・」

『マスター、作戦変更を・・・』

「しないさ、下手にアーベントを使って操作できず、逆にやられたら話しにならないだろ。」

『・・・・分かりました。マスターの悪運にかけます・・・・』

「よし、全ては俺次第!!」

そう言って俺はビームソードをしまい、手ブラになる。

「目標補足・・・・攻撃開始・・・」

アンノウンは突きの構えをし、俺に目掛けて高速移動してくる。

俺はなすがまま。そのままハイブレードは俺の体を貫いた・・・・・・

『マスター!!!』

「賭けは俺の・・・・勝ち・・だな・・」

俺は左脇腹に刺さっているハイブレードをそのままにしてアンノウ

ンの腕を掴む。

「肉を・・・切らせて・・・・・・骨を・・・・・断つ!!」

『グラビティブラストフルチャージ!!』

俺の腹部に魔力が高まる。

「高魔力反応・・・・威力S＋オーバー・・・・・・機動力を１００％防御力・・・・・」

「させる・・か!!グラビティ・・・ブラスト!!」

『シュート!!!』

腹部から放ったグラビティブラストはアンノウンを貫き、飲み込んだ・・・・・・・

『マスター!!今直ぐに応急処置を!!』

俺は地上に落ちていくアンノウンをなんとか捕まえ、地上に降りた。

左脇腹からは出血しており、中に着ているバリアジャケットが赤く染まっていた。

ラグナルが応急処置として回復魔法をかけてくれる。

『マスター！！マスター！！！』

「大丈夫だ・・・回復魔法のおかげで血は止まったよ・・・」

『駄目ですよ。私の回復魔法は気休めですから、無理をしないでください・・・』

「大丈夫だって。戦うのは流石に無理そうだけど・・・」

『流石は黒の亡霊と言うところか・・・』

「ジェイル・スカリエッティ・・・見てたのか。」

いきなり目の前にモニターが現れ、そこにジェイル・スカリエッティが映し出される。

『一部始終をね。肉を切らせて骨を断つ・・・君の世界のことわざだったかい？無茶をするもんだね。』

「・・・・余計なお世話だよ・・・」

『そうそう、アンノウンについてだが、私の部下が迎えに行っているよ。その子に渡してくれ。』

「分かった・・・だが、奴を使って何をするつもりだ？」

『それを聞いてどうする気だい？』

「・・・お前次第だな・・・」

威圧感を含んだ声で俺は威嚇した。

『怖い怖い・・・なるべく君とはいい関係でいたいのだが・・・まぁ、君に迷惑がかかることはしないよ。』

「・・・そうか。」

『それと報酬は君のクライアントに渡してある。それとこれはサービスだ。』

「サービス?」

『・・・今回の人造魔導師、と言っても恐らく私が作っている戦闘機人に近いか・・・他にも違うタイプを製造している可能性がある。』

「何だと!?」

『恐らくだがね。それを調べるためにもそのサンプルが欲しいのさ。』

「なぜ分かる?」

『私の場合ならあれ一体ではなく、違うタイプの機体を造り、それらのデータを含めてさらに上の機体を造る。彼も私と同じタイプならそうするさ。』

「・・・信じろと?」

『それは君の自由さ。』

・・・まぁ警戒するに越したことはないか。

「もう一つ聞きたい。」

『なんだい？』

「なぜ、こいつらを倒す必要があるんだ？こいつらに高町なのはたちを倒させればお前も後に楽に研究が出来るんじゃないのか？」

『・・・私以外の戦闘機人が活躍されると私のスポンサーにも首を切られるからね。それを阻止するためさ。』

なるほど・・・そりゃあ優秀な方を選ぶに決まっているか。

「・・・そろそろいいですか？ドクター。」

『ああ、済まない。回収してきてくれ。』

紫のショートカットの女性がいきなり目の前に現れ、Ｄを担いでいた。

『ラグナル。』

『私も全然気づきませんでした・・・・』

ラグナルをもごまかすステルスを持っているのか！？

『いきなり驚かせてすまないね。この子はトーレ。私の助手だ。』

トーレ!?確か戦闘機人だったよな?

ＩＳはなんだっけ?

ステルス系の能力じゃなかったはずだけど・・・・・・

「それではドクター今からラボに戻ります。」

『ああ、よろしく頼むよ。』

そう言って、トーレはまたいきなり消えた。

『何で、反応がなくなっているの!?』

ラグナルがかなり驚いている。

この能力使う奴いたような・・・・・・

スカリエッティに似ている・・・・・・・・

クワトロ?

そんな感じのような・・・・

『それでは私は失礼するよ。』

「・・・・ちょっと待て。最後に聞きたいことがある。」

『なんだい？』

「お前、俺を試したろ？」

『・・・・さてね・・・また依頼があったらよろしく頼むよ。』

「・・・考えておく．」

そう言ってディスプレイは消えた。

「ドクター、どうでした彼は？」

「実に興味深いよ彼は・・・あのフィールドもただのプロテクションとは違うみたいだ。壁というよりはバリアだね。」

ここははジェイル・スカリエッティのラボ。ジェイルの研究室だ。

今そこにはジェイルと紫のロングヘアーの女性が話していた。

「それとウーノ、アンノウンの様子はどうだい？」

「生体ポットに入れて治療中です。」

「グラビティブラストと言ったかい？威力はＳ＋オーバー。彼の切り札と言ったところか・・・」

「しかし驚きました。自分の体を使って、相手の動きを封じるとは・

・・」

「それほど自分の耐久力に自身があったんだろうね。」

「他にも気になる事を言っていましたね。」

「アーベント・・・ブラスターモード・・・多分それが彼の本当の切り札なのだろう。」

そう言って自分の目の前のディスプレイに写っているブラックサレナのデータを見る。

「本当に興味が尽きないな彼は。恐らく今度は彼に戦闘機人を送ってくるだろう。彼がどう攻略するか楽しみだ・・・・」

そう言ったあとジェイルは少し考え込んだ。

「ドクター？」

「ウーノ、チンクを呼んできてくれないか？」

「チンクをですか？」

「ああ、ちょっとチンクにやってもらいたいことができたんでね。」

そう言ってジェイルはニヤリと笑った。

## 第１１話　襲撃者との戦い（後書き）

ってな感じでスカさんまた何か企んでいます。

またしばらくは日常になるかな・・・・・

スカさんは零治に興味を持っています。

ブラックサレナが零治だとはまだ気づいていませんが・・・

次こそなるべく早く投稿しようと思いますのでこれからもよろしくお願いします。

## 第１２話　時期外れの転校生（前書き）

こんにちは、ｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

いきなりですが、また設定に修正を加えました。

今回は大悟のナデポとニコポが原作キャラに効かない理由を決めたほうがいいと多く指摘を貰ったので、付け足しました。

設定は好意を抱いている人の好意を増長させるというものです。

オッドアイについても同じ理由で指摘いただきましたが、特別な能力はありません。

そういうことでよろしくお願いします。

あと今回、席順を図で書いているんですが携帯電話で読んでいる人には分かりづらいと思います。

ご了承を。

なんども大きく修正して申し訳ありません・・・・

# 第１２話　時期外れの転校生

「・・・今日は転校生を紹介します・・・」

不機嫌そうな様子でシャイデがみんなに言った。

「うおおお！！」

「女の子かな？男の子かな？」

「こんな時期に転校してくるなんて、何か事件性が・・・・」

クラスメイトもそれぞれ思うところがあるみたいだな・・・・・・

真ん中の女の子以外まともじゃないような・・・

事件性ってなんだよ・・・・

俺は机にうつ伏せになり、シャイデの言葉を聞きながらクラスメイトを観察していた。

隣のなのはは俺が寝ているのかチェックしているのか、度々俺の方を見ている。

寝ないからカバンから見えてる広辞苑しまってくれ・・・・

いつの間にか分厚くなってるし・・・・・

昨日の戦闘の後、シャイデに怪我の治療をしてもらい家に帰った。
もう時計の針は12時を回っていたのだが三人とも起きており、俺を迎えてくれた。
ライはとても眠そうだったが・・・・・・
本当に心配かけてばかりのような気がする。
だけど今回の依頼人と退治した相手についてはごまかした。
あいつらを巻き込みたくない。
俺は三人に先に寝るように言って、遅めの夕食をもらい風呂に入って寝た・・・・・
ちなみに報奨金は普通の仕事の5回分。
治療費込みらしいが大変太っ腹である。
流石スカさんってとこか。

「静かに！それでは入ってきなさい。」

シャイデの注意に我に帰った俺は入ってくる転校生に目を向ける。

ふんふん、背はずいぶん小さいな。小学生と言われても間違えないかも。

髪は長い銀髪を束ねたポニーテール。

・・・・転生者？

なわけないか・・・・

そして、顔を見る。

人形みたいに綺麗な顔立ちだな。右目の黒い眼帯がなければ人形とも間違えるかも。

・・・・・・・・・？眼帯？

小さい体にロングの銀髪、黒い眼帯？

チンクじゃね？

「私の名前はフェリア・イーグレイだ。家庭の事情でこちらに転校

してきた。皆、よろしく頼む。」

フェリア？なんだ人違いか・・・・

「うおおおおお！！銀髪美人キタ━━━（ﾟ∀ﾟ）━━━！！」

でかい声出すなよ神崎・・・・・・・

隣のなのはがヤバイほど引いてるぞ・・・・

「神崎！！あの子の点数は？」

「・・・・・８５点だな。」

「その心は？」

「あの綺麗な顔立ち、美しい銀髪。それにミスマッチのように見えて、ものすごく似合う眼帯。それだけで確実に９０点だ！！」

「？なぜ５点マイナスなんだ？」

「・・・・貧乳なところか・・・あのロリボディで巨乳なら１００点だったんだが・・・・」

「だが、貧乳もステータスと聞くが・・・・」

「だからこその８５点なのだ！！」

「なるほど！！」

ってな感じで神崎と周りの男共はくだらない会話を繰り広げていた。

これで、まだもてるから不思議なんだよな・・・・・

まぁこのクラスの女子は本性が分かってきたみたいだけど・・・・

ニコポ、ナデポってこの世界ではあまり強くないスキルなのかな？

今度、じいさんに聞いてみるか・・・・

「静かにしろそこの男共！！それじゃあフェリアさんは・・・・・・」

と言ってクラスの空いているスペースを確認している。

空いているスペースと言ってもどこにも・・・・・

なのはの隣にスペースがあるか・・・・

ちなみに、

黒板

・・・・　・・・・　・・・・　・・・・　・・・・

すずか　・・・・　・・・・　・・・・　・・・・

はやて　・・・・　・・・・　・・・・　フェイト

・・・・　・・・・　神崎　・・・・　・・・・

・・・・　・・・・　・・・・　・・・・　アリサ

俺　　なのは　　・・・・・・・・・・

神崎の周りは男子ばっかです。

しかも思考が似ている奴が多く、何気に仲がいい。

まぁどうでもいいか・・・・・・

「なのはさんの隣に行ってね。零治、用具室から机と椅子持ってきて。」

「やだ。」

何でそんな面倒なことを・・・・・・

「・・・・零治君？」

「謹んで行かせていただきます！！」

だから右手に持っている広辞苑下ろしてくださいなのは様！！

俺はダッシュで教室を出た。

「済まないな。」

「構わねぇよ。」

机と椅子を急いで持ってきて、フェリアのスペースに置いた。

「・・・次はこれで机と椅子を拭いてあげて。」

そう言って綺麗な雑巾を渡される。

「・・・・・なぜに？」

「ついでに拭いてあげなさい。」

・・・・もう反論するのもめんどくさいや。

さっさと終わらせよう。

俺は言われた通り机と椅子を拭いた。

「さて、フェリアさんちょっと前に来て。」

シャイデにそう言われ前に行くフェリア。

「さて、今日は特に連絡事項もないし、一時間目まで質問タイムにしたいと思います。」

クラスから歓声が上がる。

「じゃあ、スリーサイズは？」

いきなり爆弾発言する男子Ａ。

当然、神崎周辺の男子である。

「いきなり何言ってるのよ！！」

アリサも慌てて注意する。

「スリーサイズか？上から・・・」

「言わなくていいのよ、フェリアさん！！」

シャイデが慌てて言おうとするフェリアを止めた。

「じゃあ、私が。どこから来たのですか？」

すずかが定番の質問を聞く。

「私はオーストリアの田舎に住んでいる。」

「兄弟とかいるん？」

今度ははやてが質問する。

「い、いるん？」

「いる？って意味よ。」

やっぱり関西弁知らないか・・・

「なるほど。自分を含め7人姉妹だな。」

「多っ！！」

はやてのツッコミも分かる。かなりの大家族だな・・・・

「じゃあ、両親は何をやっているの？」

俺の隣から大きな声でなのはが聞く。

・・・・そんなにでかい声出さなくとも聞こえるっての。

「父は科学者をしている。母は父の助手だ。」

「そうなんだ。」

科学者？

だから田舎暮らしなのか？

「好きな食べ物は？」

フェイトが定番その2を聞いた。

「主食にしているのは栄養ブロックと言う簡易に栄養を取れるものだ。」

その答えに唖然となるクラス。

「なんと質素な！結構苦労してるんだな・・・・」

「そうだね・・・・今度、私の家に招待しようかな。」

桃子さんの料理は美味しいからな・・・・

唖然とした空気をシャイデが和ませ、再び質問タイムが続いた。

「では、好きなタイプは？」

おっ、男子Ｂ（神崎周辺の男ではない）が踏み込んだ質問をしてきたな。

「好きなタイプとは？」

「居ないの？優しい人とか、たくましい人とか、頭の良い人とか、運動が出来る人とかないの？」

「？運動とかできると良いのか？」

・・・・何かズレてるなぁ。

「ならば俺とかどう思います？」

にっこり笑顔を浮かべながら神崎が聞いた。

本当にどうしようも無い奴だな・・・・

「？同じ銀髪の男ぐらいか。ただその笑顔は気持ち悪い。ニヤニヤする男は嫌われるぞ。」

真顔で言うフェリアに激しく頷く原作組一同。

・・・・あいつらは仲良くやれろうだな。

「やっぱり、人前で言うのは恥ずかしいか・・・・」

「シャイデ先生、彼を早く病院に連れていった方がよろしいのでは？」

「・・・・私も何度も言っているんだけど・・・・」

シャイデも餌食になってたのか・・・・・

あいつ、女性なら必ず手を出してないか？

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、授業五分前を知らせる。

「それじゃ、これまで。あとは各自休み時間にね。」

こうして、質問タイムはお開きになった。

「しかし、凄い人気だな・・・・」

今は昼休み。

「そやねぇ。やっぱり転校生は注目の的なんよ。それにかなりの美少女やし。」

よだれが垂れているのは気のせいですよね？はやてさん。

「はやてちゃん、よだれ、よだれ。」

「おおっと。」

なのはの注意にはやてがよだれを拭う。

やっぱりよだれ垂れてたのかよ・・・・・

俺は今自分の席にいる。

なのはは自分の席、はやては俺の前の席に座っている。

現在、クラスの大半と、他クラスの奴から質問攻めにあっていた。

それをバニングスがうまくまとめている。

・・・・あいつああいうことをさせると天下一品だからな。

「でも、本当にすごい人気だね。」

「・・・・・揉みたいとか思っただろ？」

「いややな、私そんなに変態じゃないやろ。」

そう言って俺となのはを見る。

「・・・・何で目を合わせてくれへんの?」

そりゃ日頃のおこないと話を聞くとな・・・・

「はやてちゃんは少し自重したほうがいいと思うの・・・」

「俺は構わないけど人前で揉むのは止めたほうがいいぞ。」

「あ~ん、二人がいじめるぅ~」

そう言って教室に入ってきたフェイトとすずかの方に走っていき、飛びつく。

「きゃ、どうしたのはやて。」

「いきなり飛びつくとびっくりするよ。」

「すずかちゃん、フェイトちゃん。あの二人がね・・・」

そう言って俺たちを指さしながら、後ろにゆっくり回り、

「チェストォォォ!!」

二人の胸を揉んだ。

「「キャアアアアアア！！」」

「ギャフ！！」

二人にビンタを貰い吹っ飛ぶはやて

「自重しろって・・・・・・」

そう言って俺はため息を吐いた。

それに合わせたようになのはも同時にため息を吐いたのだった・・・

・

「零治ちょっといい？」

「何だ？」

「ちょっと話があるんだけど・・・」

そう言ってシャイデに教室から連れ出される。

「それで話って？」

みんなの定番、体育館裏！

ではなく・・・・・・

屋上に来ました。

「それで話って？」

「フェリアについてだけど・・・・・・」

そう言って、言葉を濁す。

「ん？フェリアがどうしたんだ？」

「まさか、気づいてないの？彼女戦闘機人よ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ハァ！？

「その顔は本当に気づいてなかったのね・・・」

「いや、だって普通に眼帯している女の子だろ！」

「まぁ、気づかないのは無理かな。私のデバイスって元が整備や調整用でしょう。私のデバイスが気づいたんだけど、僅かに体から機械音が聞こえるらしい。」

なるほど・・・・

「で、何が目的なんだ？」

「・・・なんでも調べものがこの街にあるらしい・・・」

何を調べているんだ?

「それと誰が彼女を?」

「ジェイル・スカリエッティ・・・」

またあのマッドサイエンティストか・・・・

「本当に面倒ばかりだな・・・・」

「同意見よ・・・」

二人でため息を吐く。

「・・・それでね、まだあるのよ・・・・」

「何だよ・・・・」

「・・・・拠点が欲しいらしいんだけど・・」

「・・・・で?」

「あの子、世間知らずのところあるじゃない。」

・・・確かに、栄養ブロックとか簡単に言うし、スリーサイズも簡単に言いそうになるし、お嬢ちゃんおじさんといいことしようぜ!って誘われたら簡単について行きそうだからな。

「それでね、零治の家にホームステイをさせようと思っているんだ

けど・・・・」

はあああああああああ!?

「ちょっ!!無理だって!!俺の家には星たちだって居るんだぞ!!」

「分かってるけど、私の家って私ほとんどいないし、一人にさせちゃうと結局同じになるでしょ。」

「けれどよ・・・・・・」

やばいだろ!?星達たちもジェイルから見ても研究対象になりそうだし・・・・

「大丈夫よ。星たちには私から説明する。それに彼女たちは今は人間でしょ?興味持つはずないと思うわ。」

「だけど!!」

「・・・・大丈夫どう調べても彼女たちは普通の人間だし。」

だけどよ・・・・・・

「むしろ私はあなたの方が心配。ジェイル・スカリエッティの目的はあなたじゃないかと私は思うの。」

「!?なんでだ?」

「あなたの能力とデバイス。かなり珍しいし、もしかすると・・・・

」

「俺が研究対象か・・・・・」

ありえる・・・・装甲を展開して戦う魔導師なんていないからな。

「で、どうする？」

「・・・・分かった。こちらで預かるよ。」

「いいの？」

「他で好きにされるより近くで監視出来た方が良い。」

勝手に何かされるより全然マシだ。

「そう、分かったわ。なら彼女たちには私から言っとくわ。」

「そうしてくれると助かる。」

俺から言ったら何されるか分からんからな・・・・

「それとフェリアは教室で待ってもらっているから迎えに行ってきて。その間に私が連絡しとくわ。」

「了解。」

本当にいろいろ面倒を持ってくる科学者だな。

なんにせよ目的を調べるのが先決だな。

そう思って、零治は教室に向かった・・・・・

## 第１２話　時期外れの転校生（後書き）

ということでチンク、中学生になります。

しかも有栖家に居候。

次はもちろんマテ娘との絡みです。

チンクについてですが、世間知らずということにしました。

戦闘ばっかで世間には疎いだろうと思ったので・・・・

これからもよろしくお願いします。

## 第１３話　転校生、有栖家に行く（前書き）

こんにちは、ｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はマテリアル娘とチンクのお話。

それとお気に入りが１０００件超えました！

皆さん登録してくださってありがとうございます！！

# 第１３話　転校生、有栖家に行く

「おかえり、レイ。・・・・・初めまして、有栖星と言います。」

家に帰ってくるなり、星が出迎えてくれた。

「こちらこそ、私はフェリア・イーグレイと言う。これからお世話になる。」

フェリアも礼儀正しく言葉を返した。

「フフ、よろしくお願いします。さあ、中にどうぞ。」

そう言って中に案内する星。

「フェリアさんの部屋は既に準備してあるので荷物はそちらに・・・・」

さすが、星は準備が早い。

「フェリアで構わない。」

「分かりました、呼び捨てで呼ばせてもらいます。」

・・・・・けど、フェリアって荷物どうしてるんだ？

「・・・・・・フェリア。」

「何だ？有栖。」

「俺も零治でいい。そんなことよりお前荷物は？」

「？学校のカバンだけだが？」

・・・・スカリエッティ、もう少し世間を教えてあげるべきだ。

っていうかスカリエッティもちゃんと分かってるのか？

「本当にそれだけなんですか？」

さすがの星もそれには驚いているらしい。

「ああ、そうだが？」

「・・・・・星。」

「分かってます・・・・」

さすが星。アイコンタクトで理解したか。

「直ぐにデパートに行くぞ。夕食もそこで食う。」

「了解しました。二人にもそう言ってきます。」

そう言ってリビングにいるだろう二人に話に行く星。

リビングから「やったー！」とか「新しい夏服もそろそろ見ておくかな。」とか聞こえたのは忘れよう・・・・

そうしてやってきましたデパート。

ライと夜美の自己紹介は何事も無く終わって、すぐさまデパートへ向かいました。

「さて、それじゃあよろしく頼むな三人とも。」

「はい、任せてください。」

「買い物～買い物～」

「ふむ、あれが新しいデザインか。」

他二人は大丈夫なのか？

「零治。」

「なんだ？」

「私は別に服など・・・・」

「駄目ですよ。」

俺に話しかけてきたフェリアの言葉を星が遮る。

「女の子なんですから、オシャレには気を遣わないと。せっかくこんなに綺麗なのに・・・」

「だが、私はこういうものを買ったことが無い。何がいいのか分からないんだ。」

「そのための私たちですよ。さあ、行きましょう。」

星はフェリアの手を掴んで、服屋へと入っていく。

「それじゃ、時間つぶしに本屋でも行くか・・・」

俺もその場を後にした・・・・

「さてどうしているかな・・・・」

1時間30分位たってから俺は皆の様子を見に服屋へ戻った。

さすがに終わっているだろう・・・・・

あれ?何か人ざかりができてる?

その中に俺は入っていった。

「どうよ～!!」

ライの声が聞こえる。

「「「「「おお～!!」」」」」

？みんな、何に関心しているんだ？

やっと前の方に進めたので、ライの声の方を見てみる。

ナンデメイドフクヲキテイルノデスカ？フェリアサン・・・・・・

人ざかりから携帯のシャッター音が聞こえる。

「ぬっ、なかなかやるな。次は私だ。」

そう言って夜美は試着室にフェリアを連れていく。

「わ、私はこれ以上・・・・・・」

「いいから来い！」

フェリアの反論もむなしく、夜美と一緒に入る。

「次はこれだ！」

「・・・・これを着るのか？」

「今更、なんでもないだろ？」

「・・・・・・分かった。」

・・・・あいつら。

「レ、レイ～」

少し後ろの方で星の声が聞こえる。

「星？どこだ！？」

「こ、ここで～す。」

ああ、いたいた。

俺は星のところまで行き引っ張って、俺のもとに引き寄せた。

「あ、ありがとうございます。」

「構わないよ。しかしなんでこんなことになっているんだ？」

「実は・・・・」

回想・・・・・・・

「これはどう？」

「うん！いいと思うよ。」

「これはどうだ？」

「いいですね、髪の色とも合っていると思いますよ。」

三人でそれぞれフェリアさんの服を選んでいました。

フェリアさんは本当になんでも似合うので、結構いろいろ着せてみてたんですけど・・・・

そのうちライと夜美が・・・・・

「・・・・・でどう？」

「・・・・・面白そうだな。」

何か二人で耳打ちして、店の店長に話に行ったんです。

「ＯＫ面白そうね。分かったわ、準備するから少し待ってね。」

そう言って店長は店の奥に入っていったんです。

店長とは買い物していくうちに仲良くなって、安くしてもらったり、新作とか入った時にメールくれたりしてくれる仲なんですけど・・・・

しばらくして、

「お待たせ、二人とも。」

そう言って持ってきたのはコスプレ衣装でした。

「では・・・・・」

「始めようか・・・・・」

そう言って二人はフェリアの着せ替えショーを始めたんです。

「そのあとは店の人から少しづつ観客が集まっていって、今の状態になってしまったんです。」

「・・・・・・・納得。」

確かに恥じらいながら着ていたメイド服はとても可愛かった・・・・・

こりゃあ、周りの人にも人気が出るわ。

男だけじゃなく女の人も人ざかりの中にいるし・・・・・

じゃない!!なんでコスプレ衣装があるんだ!?

「さあ、お披露目だ!!」

元気よく、夜美が試着室のカーテンを開けた。

「こ、これは！！」

く、黒のゴスロリだと！！！！

夜美、なんてものを・・・・・

「レイ、何やってるんですか・・・・・・」

「ハッ！？」

いつの間にか携帯で撮っていた。

無意識に写真を撮らせるとは・・・・・・

周りのシャッター音が半端なく鳴っている。

「フフフ、これは我の勝ちかな・・・・」

「くっ、まだ何かあるはず・・・・・」

さて、ライは何を繰り出すかな・・・・・・

「レイ・・・・・？」

星、顔が恐いです・・・・

「だ、だけど、こんなにギャラリーがいるんだし、もう少しやってても・・・・」

「おはなし・・・・します？」

「おい、ライ、夜美それまでだ！！いい加減止めろ！！！」

ちくしょう・・・もっと見たかった・・・・

けれど観客の人から撮影した写真を送って貰いました。

ラッキー！！

「・・・・・大変な目にあった。」

「お疲れ様。」

いつものファミレスで食事を食べに来た。

あのあと普段の生活に最低限必要なものを揃え、ファミレスに入った。

そんでもって今、ライと夜美は星の説教を受けている。

「しかし、おとなしく説教を受けているな・・・・」

「まぁ、星は怒ると恐い事を分かってるからな二人共・・・」

俺だって、おはなしをされたときの事は覚えてないし。

普段気配りの出来る優しい星だからこそ怒らせると一番恐いんだよな・・・・・・・・

「おっ、来たぞ。星もそれぐらいにして飯にしよう。」

「はい・・・・帰ったら続きを話しますからね・・・・・」

まだ説教する気かよ・・・・

「全く、私も着せてみたかったのに・・・・・・・」

それが本音か！！

「これは何だ？」

箸を指差し、フェリアは俺に聞いてきた。

「ああ、箸だなこの二本の棒を使って、食べ物を挟んで食べるんだ。」

そう言って俺は自分のとんかつ定食のとんかつを挟んで食べる。

「器用に食べるな。」

「日本に住んでいる人はみんなこうして食べてるよ。」

そう聞いて星達を見るフェリア。

星は焼き魚を綺麗に分解して綺麗に食べている。

夜美は天丼をガツガツと食べている。

夜美や星も最初はうまく使えなかったからな・・・・

まぁすぐ使えるようになったけど。

問題は・・・・・

「はむはむ・・・・・・」

ピザを食べるライ。

ライは箸を使うの苦手なんだよな。

外で食べるときは箸を使わない物しか頼まないし・・・

「ライとフェリアは箸の練習したほうがいいかもな。」

「何で!?僕は使えるよ!!」

「お前はもっと綺麗に使えるようになれよ。家で焼き魚食べるとき、星にばらしてもらってるだろ?お前。」

「だって星の方がうまいんだもん・・・・」

ふてくされたように頬を膨らませながら言う。

「だってじゃないっての。給食のとき恥ずかしくないのかよ?」

ちなみに星たちが行っている中学は市立なので給食なのだ。

「みんな別に気にしないもん。」

今の子達ってあまり気にしないのかな?

「だけどこれから恥ずかしくなってくるぞ。」

「ううー・・・・」

唸ってもダメだ。

「・・・・私もやってみるか。」

フォークを使ってナポリタンを食べていたフェリアは箸を使ってみる。

「・・・・やはり難しい・・・・」

「うまいもんだよこれなら直ぐに上手くなるさ。」

それから4人楽しく食事をし、帰路に付くのだった。

『ドクター、チンクです。今回、シャイデ殿の知り合いの中学生の家に居候することになりました。黒の亡霊についてはまだ手掛かりはありませんがシャイデ殿の近くにいられれば必ずつかめると思います。
それと余段ですが、居候先の人たちは優しい人たちです。先日、私の為に買い物に付き合ってくださいました。食事の際、箸を初めて使いましたが、あれはとても食べるのが難しいです。是非ドクターも試してみてください。』

「ドクターそれは？」

「ああ、チンクの報告書だよ。・・・・・・ウーノ。」

「なんでしょう？」

「箸を使ったことがあるかい？」

「橋？道をつなげる道のことですか？」

「違うよこれのことだ。」

モニターに箸の映像が映る。

「これが箸？ですか？」

「ああ、この二本の棒を使って食事をするらしい。」

「・・・・難しそうですね。」

「だが、あの世界では使うのは常識らしい。そこで！！」

バン！とディスプレイを叩く。

「我々も挑戦してみるとしよう。難しいと言われて引き下がる私ではない！！」

右手を高々と上げて宣言するスカリエッティ。

「・・・・またドクターの悪い癖が・・・・」

ウーノは頭を悩ませるのだった。

しばらくの間、スカリエッティのアジトでは箸に苦戦するナンバーズとマッドな博士がいるのだった・・・・

「チンク、いいなぁ。私もあの世界の料理食べてみたいな。」

箸を一番早く使えるようになったセインが呟いた。

ちなみに一番使えるのが遅かったのはクアットロだったりする。

## 第１３話　転校生、有栖家に行く（後書き）

チンクって完璧、ＩＳのラウラにそっくりだな・・・・

もしやパクッた？

なんて思ってしまった今日この頃。

バイトが忙しく、しばらくはこの時間辺りに投稿することになるかも・・・

これからもよろしくお願いします。

次は久々翠屋に行きますか。

## 第１４話　転校生、翠屋に行く（前書き）

こんにちはｂｕｌｅｏｃｅａｎです。

今回はチンク、翠屋に行くです。

どんどんスカさんがまるくなっていく気がする・・・・・・

# 第１４話　転校生、翠屋に行く

学校のフェリア人気も落ち着き、普段通りの日常が戻ってきた。

だが、フェリア人気は衰える事を知らず、未だに見に来る生徒がいたりする。

ちなみにフェリアが家に居候していることは秘密にしてある。

・・・・バレると神崎軍団（神崎周辺の男共）がうるさいからな。

フェリアは世間知らずな所があるが、勉強に関してはトップレベルの頭脳を誇っている。

・・・・・・さすが、戦闘機人と言ったところか。

バニングスはかなり対抗意識を持ったようだが・・・・

小テストの際、

「次は負けないわよ！覚えてなさい！！」

なんてありきたりな負けゼリフ。

さすがバニングス。

てな感じであっという間に放課後・・・・・

「ねぇ、フェリアちゃん。」

「なんだ？」

「今日、翠屋に来ない？」

おっ、いいアイディアじゃん。

まだ美味しいスイーツとか食べたことかないからな。

「翠屋とは？」

「なのはの親がやっている洋菓子店だよ。この街一番と言っても過言じゃない旨さを誇る店だよ。」

おお、驚いてる、驚いてる。

俺ってあまり絶賛したりしないからな・・・・・

「ちなみに零治君は翠屋の常連だよ。」

「そうなのか！？」

「ああ、５年前から通ってるな。うちの奴らも翠屋のスイーツは好きだし。」

なのはたちに星たちの事は言わないように言ってある。

理由は話していないけど、居候させてもらっているからと理由を聞

かず了承してくれた。

「そうなのか・・・」

興味ありそうだな。

「行ってみるか？」

「ああ、興味がある。」

じゃあ、決まりだな。

「・・・・何か仲がいいような・・・」

「？気のせいだろ。」

「そうかな？」

「そうだろ。」

何か納得いかない顔をしている気がする。

「それじゃあ、放課後な。」

「あれ、零治君も来るの？」

「ああ、家族に買って帰ってやろうと思ってな。」

「うん、分かった。今日の放課後ね。」

取り敢えず話はお開きになった。

「ここだ。」

そう言って俺は翠屋を指さした。

時刻は１６時３０分頃。

翠屋は大変繁盛している。

「凄い人気だな・・・・」

「俺の言ったことはあながち間違えじゃないだろ？」

「ああ、そうだな。」

「・・・・何か私たち蚊帳の外じゃない？」

「まあまあアリサちゃん・・・・」

「何か姉妹みたいだよね。」

後ろで何か話しているバニングス、すずか、なのは。

はやてとフェイトは休みだった。

ちなみに大悟も。

・・・・魔導師はやっぱり忙しそうだな。

「おい、後ろの三人も早く入ろうぜ！」

おれは3人を催促して店に入った。

「いらっしゃいませ。」

いつも通り桃子さんの綺麗な声が聞こえる。

「ちわ～す。」

「・・・・・アンタは友達か！」

バニングスのツッコミで頭を叩かれた俺。

・・・・・相変わらずの馬鹿力。

かなり痛い・・・・・・

「あらあら。いらっしゃい、アリサちゃん、すずかちゃん、零治君。
それと・・・・・・」

「私はフェリア・イーグレイと言う。都合によりこちらに転校して

きた。これからよろしくお願いする。」

「あらあらご丁寧に・・・こちらこそ。」

そう言って双方おじぎする。

「あちらにいるのが主人の高町士郎よ。」

カウンターから手を振る士郎さん。

「・・・・・主人？」

やっぱり最初はそう思うよな。

「私のお母さんとお父さんだよ。」

なのはの答えを聞いて驚愕するフェリア。

「お前の両親は人間ではないのか！？」

そうきたか！！

・・・・あながち間違えじゃない？

「フフフ、私はれっきとした人間ですよ。さぁ、こっちの席にどうぞ。」

笑いながら、俺たちを空いている机に案内をしてくれた。

「なのは、後でお手伝いよろしくね。」

「分かったの。」

そう言って厨房に走っていった。

・・・嫌な予感がする。

「零治君!!」

「すいません!電話がかかってきました!!ちょっと外に・・・」

「鳴ってないみたいだけど?」

すずか!?

余計なことを・・・・・

「・・・・・また逃げようとしたんだ。」

「・・・・天国には行きたくないので。」

俺の名前を呼んだのは、なのはの姉美由希さんだった。

相変わらず俺に自分のケーキを食べさせようとする。

「まぁまぁ零治君これでも飲んで。」

そう言って俺にコーヒーを出してくれる士郎さん。

「こんにちは、士郎さん。」

「こんにちは。」

「こんにちは。アリサちゃん、すずかちゃん。それと・・・」

「フェリア・イーグレイと言う。都合によりこちらに転校してきた。よろしく頼む。」

「ご丁寧にどうも。私は高町士郎、なのはの父だよ。」

「・・・・本当は兄とか?」

「私は正真正銘なのはの父だよ。」

「ちなみに士郎さんの長男には子供もいるよ。」

さらに驚愕の表情を浮かべるフェリア。

・・・・本当にこの家の人たち化け物だよな。

「零治君、今度もうまくいったから・・・」

忘れてなかったか・・・・・

「士郎さん・・・・」

「・・・・・・・」

何で返事がないんだ!?

「さあさあ・・・」

今回はピーチタルトか、何で手の込んだ物を・・・

今日は厄日なのかな・・・・・

「・・・私がもらっていいか？」

「ちょっ！？フェリア！？」

死ぬ気か！？

「フェリア！？死ぬ気なの！？」

バニングスも犠牲者か・・・・

よく見るとすずかとなのはもソワソワしている。

「何を言っているんだ？バニングス。こんなに美味しそうじゃないか。」

大胆にもタルトのひと切れを掴み、全部一気に食べた。

だが、その場でフェリアは固まる。

「フ、フェリア？」

心配そうに声をかけるすずか。

「うまい！！何だこの味は！！こんな食べ物食べたことがない！！」

大絶賛かよ！？

「本当に大丈夫なの？」

バニングスも心配するように見ているが、どんどん食べていくフェリア。

「ねぇ、大丈夫だったでしょ！！」

嬉しそうにはしゃぎながら答える美由希さん。

「・・・・だけど。」

進んで食べる気にはならないんだよな・・・・

「零治、お前も食ってみろ！！」

嬉しいんだろうか興奮しながら言うフェリア。

「・・・・・・・・・・・・それじゃあ。」

最後の一個を

「あっ、それは私が試しに作った試作品よ。」

ちょっ！？それを先に・・・・・・・グフッ！！

俺は目の前が真っ暗になった。

「大丈夫かい？」

目覚めたらいつもとは違う天井が見えた。

「ここは？」

「私の部屋だよ。」

そう答えたのは士郎さん。

どうやらここは士郎さんの部屋みたいだ。

「すまなかったね。また美由希がやってしまったみたいで・・・・・」

言われながらも時計を見る。

１７時２５分・・・・４０分ぐらい気を失っていたのか。

まだ少しだるいな・・・・

「みんなはどうしてますか？」

「みんな君を心配して、帰ってないよ。」

そりゃ、悪いな。

早く行ってやるか。

「もう大丈夫なのでみんなの所へ行きますね。」

「そうかい？それじゃあ私も。」

ベットから出てみんなの所へ向かった。

「心配そうね・・・・」

話が弾んでいるのか笑い声が聞こえてくる。

「帰ってきたのか。」

「ああ、心配かけたな。」

一番早く気づいたフェリアが声をかけてくる。

「遅いわよ！！全く、こんな時間になったじゃない！！」

フン、っとそっぽを向くバニングス。

「・・・・・一番動揺してたのにね。」

「ねぇ。」

「なのは!!すずか!!」

・・・・やかましいな。

まぁ心配してくれてたのは確かか。

「ごめんね、零治君・・・」

沈んだ様子で俺に謝ってくる美由希さん。

「別にいいですよ。いつものことじゃないですか。こうやって体もピンピンしてますし。」

その場でジャンプし、元気なところを見せる。

「・・・・いつものことは余計じゃない?」

「でも、反論できないでしょ。」

「うぅ・・・」

余計なことをしなければもう大丈夫だと思うんだけどな・・・・

「零治!!」

「な、何だよ・・・」

いきなりでかい声を出して俺に指を指してくるバニングス。

「あ、あんた心配かけたんだし、一つ私の言うこと聞きなさい！！」

「・・・・いきなり何言ってるんだよお前。」

「反論はなし！！これは強制だから！！」

本当に何言ってるんだか・・・・・・

でも、心配させたのは確かか・・・・・

さて、どうするか。

「・・・で、俺に何させる気だよ？」

それを聞いてバニングスは口を開く。

「私の・・・・私の事を名前で呼びなさい！！！」

・・・・・・・・・・えっ！？

「・・・・・そんなことでいいのか？」

「ええ！？」

「いやぁもっと凄いこと言われるのかと思ったよ。『明日私の奴隷になりなさい！！』とか。」

「えええ！？」

「ありがとな“ア・リ・サ”」

ブチッと何かが切れる音が聞こえ、

「このッ馬鹿やろー！！」

リバーブローが俺に入ったのだった。

「零治君、流石にそれはないと思うの・・・」

なのはの呟きにすずかも頷くのだった。

そのあとはちょっと雑談していき、それぞれ帰路に着いた。

リバーブローが効いたのか食べ物を食える状態じゃなかったので結局何も食えずに帰る羽目になり、お土産として買っていったケーキセットは俺の分をライに食われたのだった。

グスン・・・・・・

『ドクター、こっちの生活にもやっと慣れてきました。これから怪しまれないように情報収集を始めようと思います。今回は美味しい洋菓子店に招かれました。そこのスイーツは今まで食べたことがないほど美味しかったので、ドクターにも送っておきました。皆で食べてください。』

「ふむ、これが。」

そう言ってチンクから送られた箱を開ける。

中にはチョコケーキ、ショートケーキ、いちごのタルトやシュークリームと色々なケーキが入っていた。

「ほぉ、確かに美味しそうだ。」

「ドクター、その箱をこちらへ。」

「ん？構わないが。」

そう言ってスカリエッティはウーノに箱を渡す。

「これからお茶にしますから、ドクターもラボから出てきてください。」

「いや、私はもう少し研究を・・・・」

「ドクターも出てきてくださいね・・・・」

「いや、私は・・・・」

「ドクター？」

「分かったよ・・・」

そう言ってウーノとラボを出たのだった・・・・

「全く、ドクターももっとラボから出るべきなんです。せっかくですから体を洗ってからこっちに来てください。臭いでせっかくのケーキもまずくなってしまいます。

「・・・・・そんなに臭うか、私は・・・」

ウーノの容赦ない言葉に少なからずショックを受けるスカリエッティ。

それから、5日に1回が3日に1回になったらしい・・・・

その後、スカさんとナンバーズは翠屋のケーキを箸で美味しく頂いた。

（チンクばかりいいなぁ・・・・私も行ってみたいな。）

そう心の中で思うセインだった。

## 第１４話　転校生、翠屋に行く（後書き）

突然ですが、ウェンディを稼働させたいと思います。

本当はあと一年後ぐらいなのですが、口調など作者は大好きなので出したいと思います。

と言ってももう少し先になると思いますが・・・・・

こんな感じでナンバーズもちょこちょこ出していこうと思います。

。

## 第１５話　アリサ・バニングスの憂鬱（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はアリサメイン。

書いてなかったなと思って、書きました。

# 第15話　アリサ・バニングスの憂鬱

次の日の学校、

「うっす、アリサ。」

私は胸が飛び上がるほど嬉しかった。

いつもはバニングスとかバーニングしか言わなかったアイツがやっとわたしの名前を呼んでくれるようになった。

「き、昨日は災難だったわね。」

「まあな。まぁいつものことだし、慣れたけどな。」

苦笑いしながら言うアイツ。

・・・・・悔しいけど、少しキュンとしてしまった。

「そう言えばアリサ、今日は一人か?」

「な、何でよ!一人でいちゃ悪い!?」

何で怒り口調になっちゃうのかな・・・

「いや、いつもすずかとセットじゃないか。それにちょっとすずかに用があるんでな。」

「・・・すずかは珍しく寝坊したから遅れるって言ってたわ。」

「あちゃあ、やっぱそうなったか・・・」

「何か理由知ってるの？」

「いやな、昨日貸したゲームが原因だと思うんだよ・・・」

「ゲーム？」

確かにすずかはやる方だけど、寝坊するほどやり混むかしら・・・・・

「・・・おはよう。」

眠そうな声で挨拶をするすずか。

「やっと来た。おはよう、す・・・・」

「零治君！！」

いきなりアイツの所へ行くすずか。

何かテンションがおかしいような・・・・・・

「名作だよ！あれ。テイルズ・ストーリー！！気づいたら朝になっちゃってたよ！！」

徹夜するまでゲームしてたんだ・・・・

心なしか異常なテンションの高さにアイツも若干引いてるじゃない。

「そ、そうか。気に入ってくれたなら何よりだ。」

「うん、でね・・・」

そのあと、すずかはアイツとゲームの話で盛り上がっていた。

完全に私、空気だな・・・・・・・

何か悔しい・・・・・・・

昼休み・・・・・・

「アリサちゃん。」

はやてに声をかけられ私は我に帰る。

今は屋上で昼食中。

ちなみに今日はなのはとフェイトは仕事だ。

「すずかちゃん、どないしたん?箸持ったまま眠ってるで。」

私が慌てて見ると、コックリコックリ頭を軽く揺らしながら夢の世界に行っているすずかがいた。

「・・・・・実は・・」

「成る程な、確かにあれは名作や。私も借りてプレイしたし。休みの時はヴィータと協力プレイもしてたで。」

あれって、協力プレイも出来るんだ・・・

「あれを初めてやったとき、雷が落ちた気がしたんや。あんなゲームあるやなんて知らんかった!!」

あ、墓穴掘ったかも・・・・・・

「そうだよね!!はやてちゃんもそう思うんだ!!」

いつの間にか起きた、すずかがはやてに便乗する。

そのあとは朝と同じように私は完全空気だった。

「アリサ、ちょっといいか?」

アイツが私に声をかけてきた!!

いつもなら私が話しかけるのに!!

「な、何よ・・・」

何でこんな時も怒り口調になるのかな・・・

「そう怒るなよ。本当はすずかに頼もうと思ったんだけど速攻で帰っちゃったからノート貸してくれるやついないんだよ・・・悪い、ちょっと貸してくれ!!」

私はすずかの代わりか・・・

「フン、アンタが悪いんじゃない!これからは寝ないようにしなさい。」

私はなるべく強気にならないようにアイツに言う。

これでアイツは頼み込んで・・・・・・

「・・・仕方がない、フェリアに頼むか。」

そう言って私から離れていく。

「あ、ちょっと!!」

「フェリア!悪い、ちょっとノート見せてくれ!!」

アイツはフェリアに話しかけながらフェリアの席に行った。

「何で私はいつも・・・・・・」

私は小さく呟いた。

「はあ・・・・・・」

家でため息をつく私。

考えていることはアイツのこと。

いつもアイツに対して怒り口調になってしまう。

そもそも初めて話した時もあまり印象が良くなかったな・・・

アイツと初めて話したのは去年の秋。

席替えでアイツの隣になった時だ。

アイツの印象はいつも寝ていて取っつきにくい奴。それくらいの印象だった。

「今日からよろしく。」

「・・・ああ。」

不機嫌そうに返事をするアイツ。

何が気にくわないんだか・・・

「不機嫌ね。」

「・・・ほっとけ。」

そう言って寝てしまった。

・・・・・嫌な奴。

その時は特に何事も起きなかったが、問題が起きたのはその二日後にあった文化祭の出し物を決めるときだった。

私は文化祭実行委員でみんなを指揮する立場だった。

今回、意見が出たのは喫茶店とお化け屋敷。

ちょうど半分に別れていた。

だけど私のクラスは３３人。

半分に別れるなんて絶対あり得ない。

「誰か手を挙げていない人いない？」

私はみんなに聞いてみるが反応がない。

「アリサ。多分有栖君だと思う・・・」

そう言われてアイツを見る。

みんな、初めての文化祭でやる気に満ち溢れている中、いつも通り

変わらず寝ている。

「有栖、起きなさい！！アンタはどっちにするの？」

私が揺すり、起こそうとするが起きない。

「有栖！！！」

大きい声で呼んでも反応がない。

「有栖！！！！」

「うるせぇよ！寝れねぇじゃねぇか！！」

何故か逆ギレされた私は当然言い返した。

「アンタが票を入れないからでしょうが！！寝るんなら帰って寝なさい！！」

そう言われたアイツは直ぐにカバンを取りだし、荷物を入れている。

「・・・何してんのよ。」

「帰る準備。このままじゃ、オチオチ寝れないからな。あっ、喫茶店の方に票を入れておいてくれ。」

そう私に言って、カバンを持ち、教室を出ていった。

「なんなのよアイツ・・・」

学園祭のやることは決まったが、納得がいかなかった。

だが1つ、アイツに興味を持った。

・・・・・何でアイツはいつも何事にも無関心でいるのだろう？

アイツは基本、寝ていてばっかでクラスの人とも滅多に話しかけないし、話そうともしない。私が見かけるのは時々すずかにノートを借りる時だけ。

話しかけられても無視するし、みんなアイツを避けている気がする。

何でなんだろう・・・・・・

喫茶店と決まった文化祭の出し物。

だけど事件が起こった。

「男子がボイコット！？」

「そうなの・・・」

男子の大半がお化け屋敷をやりたかったらしく、女子の偉そうな態度に腹を立て、お化け屋敷を選んだ男子がほとんどボイコットしてしまった。

「どうしよう・・・アリサちゃん。」

「・・・取り敢えず私たちで出来るところまでやりましょう。」

そう言って残っているみんなと共に作業に戻った。

「お願い、このままじゃ間に合いそうにないの!!協力してください。」

授業が終わった後、みんなの前に立ち、頭を下げてお願いする私。

だけど男子には届かず、時間ばかり過ぎていってしまった。

「アリサちゃん・・・」

「・・・何で聞いてくれないのよ。やっぱり私が悪かったのかな・・・」

「そんなことない!アリサちゃんは精一杯やってるよ!!」

「・・・・ありがとうすずか。」

すずかが私の手を取り勇気をくれる。

・・・・・もう少し頑張ってみよう。

「・・・・・・・・・・はぁ、仕方ないな。」

教室を覗いていた一人の生徒がそう呟いたのだった。

放課後・・・

今クラスに残っているのは私とすずか。

時刻はすでに１８時３０分を回っており、他のみんなは帰ってしまった。

「・・・すずか、もういいよ。後は私がやるから。これ以上はどうしようもないよ。」

「ううん、私もアリサちゃんが帰るまで帰らないよ・・・」

「すずか・・・」

私って本当にいい友達を持ったな・・・

しばらくして・・・

「二人とも下校時刻はとっくに過ぎているんだ。そろそろ帰りなさい。」

担任の先生に注意され、強制的に下校させられてしまった。

「アリサちゃん・・・」

「明日、朝早く行って準備するわ。すずかは・・・」

「私もやるよ。これ以上遠慮したら怒るからね！」

「・・・ありがとう、すずか。」

でも、それでも間に合わないだろうな・・・

すずかに感謝しつつ、心の中では諦めていた。

翌日・・・

「どういうことよ！！これ！？」

朝早く、教室に来た、私とすずかは驚いた。

絶対に間に合わないと思っていた、教室の準備が終わっていたのだ。

しかも、装飾なども時間がなく諦めていた物もちゃんとしてあった。

「・・・誰が準備を？」

すずかの問いに私は当然答えられない。

教室に入り、再度確認する。

「・・・完璧ね。」

「本当に。でも誰が・・・・・」

ふと、すずかが教卓の上に置いてある紙に気付いた。

『これで文化祭の準備してないとか抜かすなよ!!俺は眠いから欠席する。男どもの説得は自分でやれバニングス。

有栖零治』

「アイツ・・・」

「有栖君・・・」

そんなことするなら最初っから来なさいよ。

かっこつけちゃって・・・・・・

「すずか。」

「うん、頑張ろうアリサちゃん。」

その後、私はしつこく頭を下げ、無事男子を説得することができ、クラスを団結させることが出来た。

「・・・・・その頃からかな。アイツに構い始めたのは。」

ふと、携帯を開き、画像を出す。

はやてと話している零治がそこに写っていた。

「・・・頑張ってもう少し素直になろう。そしていつか・・・・・・」

アリサは静かに決意を新たにしたのだった。

余談・・・

「お疲れさまでした。」

「ああ、みんなありがとな。」

時刻は朝の４時３０分。　作業を終えた俺たちは帰路についていた。

横には星と眠そうな夜美。

俺の背中にはライが眠っている。

「本当に終わるかどうか分からなかったぞ。」

欠伸をしながら夜美が言う。

「本当に悪かった。どうしてもほっとけなかったんだ・・・」

ライを落とさないように頭を下げる。

「まぁ私たちも楽しかったですし、その性格がレイの良い所ですから。」

「そうだな。」

星と夜美が顔を見合せ笑いあう。

・・・・・なんだか照れ臭い。

「なんだ?照れているのか。」

「まさか。」

平然を装い返事をした。

「それより今日は何処かに遊びにいかないか?」

「お、良いではないか。」

俺の提案に真っ先に反応する夜美。

「でも、学校が・・・」

やっぱり躊躇する星。

「たまにはいいだろ。それに眠くて授業なんて受けられないだろ。」

「そうですが・・・・」

「分かった。だったら夜美とライと3人でいくよ。なっ？」

夜美に問いかける。

「そうだな、星は留守番ってことだな。」

「そんな・・・」

本当に悲しそうな顔をする星。

「じょ、冗談だって。一回帰って少し寝たら行こうぜ。」

「そうだな。」

「・・・二人とも意地悪。」

夜美の返事と星のすねた返事をもらった。

その後、昼まで寝た俺たちは、午後から四人で遊びにいくのだった。

この翌日、あの二人からあの時の事をしつこく聞かれることはなかったが、よく話しかけてくるようになった。

## 第１５話　アリサ・バニングスの憂鬱（後書き）

一年前のアリサと零治の過去話も載せました。

零治、何かかっこいいかも。

アリサ、少し素直になるかなぁ・・・・

これからのアリサに期待しててください。

次はゴールデンウィーク編。５連休と言う設定にしようと思います。

# 第１６話　ゴールデンウィーク前夜（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

やっとゴールデンウィーク。

有栖家とナンバーズの話になります。

魔導師組や、アリサ、すずかは出さないと思います。

ご了承を・・・・・

# 第１６話　ゴールデンウィーク前夜

「・・・よし、大丈夫そうだ。」

「完成ですね、ドクター。」

「ああ、あとデータを送ればすぐにでも最低限の活動はできるだろう。この子のナンバーは１１だからウェンディにしよう。」

「了解です、ドクター。」

「それでは教育係にセインでも・・・」

「大変だドクター！！」

ラボに慌てた様子で、入ってくるノーヴェ。

「どうしたんだい？ノーヴェ。」

「セインがこんな手紙を残して・・・」

『チンク姉の所へ遊びに行きます。あっちの世界だとゴールデンウィークと言う５連休なので。』

「全く、あの子は・・・」

手紙を読んで呆れるウーノ

「ふむ、ならばちょうど良い、ノーヴェ。」

「なんですか？」

「今稼働したウェンディを連れて、セインの所へ行ってきなさい。」

「えっ！？でも私、後でトーレ姉と戦闘訓練が・・・」

「そうですよドクター、稼働したばかりでいきなり外に出すなんて・・・・」

いきなりの提案に驚くノーヴェとウーノ。

「他のナンバーズはそれぞれすることがあるし、あっちにはチンクもいる。それにあっちの事に慣れておくのも悪くはないだろう。」

「・・・・・ドクターがそう言うのでしたら。」

少し不満げにウーノは答える。

「でも、ドクター私は別に・・・」

「チンクと会えるわよ。」

「謹んで行かせていただけます！！」

姿勢正しく敬礼するノーヴェ。

「全く、調子のいい子・・・」

「まあ、いいじゃないか。くれぐれもウェンディの事を頼んだよ。」

「はい！」

そう返事をして、ノーヴェはスカリエッティの研究所を出ていった。

「はぁ！？ナンバーズをそっちに送った！？」

ゴールデンウィークの前日の夜、明日のために早めに寝ようと布団に入った時だった。

仕事用の通信器に連絡が入り、連絡してきた相手はジェイル・スカリエッティだった・・・・・

『ああ、そっちで経験を積ませようと思ってね。１人はもう向こうに行ってしまった。すまないが休日中３人そっちで面倒を見てもらえないか？』

「・・・・私、このゴールデンウィークにミッドに行かなくてはならないから。」

『ならば、君の知り合いはどうだい？』

「零治のことか・・・・」

また零治に押し付けることになるのか・・・・・

本当は断りたいけど。

1人向かったってことは断ったら逆に問題になりそうだし・・・

まぁあいつにはあの3人がいるから大丈夫か。

「分かったわ、零治に頼んでおくわ。」

『すまないね、今度その零治君にお礼に行くとしよう。』

「・・・・・・お願いだから、目立つことはやめて。」

『ハハハ、冗談さ。報酬は既に送っておいたから使ってくれたまえ。ではよろしく頼む。』

そう言って通信が切れる。

「本当に大丈夫かしら・・・・」

不安を覚えるシャイデだった。

「はぁ～仕方がないな・・・」

何でおとなしくしていられないのかねあの変態ドクター・・・・・

『ごめんね、零治。私はこのゴールデンウィークはミッドに行かなくちゃいけないから手伝えそうにないの・・・』

「まぁそれほど期待はしてなかったよ。」

忙しいのは分かってるし。

『ごめんなさい、報酬は先に貰ってるから半分振り込んでおくわね。』

「了解。」

『それとフェリアに変わってもらえる?』

「あいよ、フェリア!シャイデが電話に変わってくれだってさ。」

「ああ、分かった。」

ソファに座り、テレビを見ていたフェリアがこっちに来る。

「はいよ。」

「済まない。」

俺の携帯を受け取って自分の家に入っていった・・・・・・・

「・・・ということなんだが。」

「私たちは大丈夫ですよ。ゴールデンウィークも予定はありませんから・・・」

「うん、僕も大丈夫。」

「我も大丈夫だ。」

「本当に済まないな・・・」

みんなに頭を下げる、フェリア。

「今更構わないよ。それよりも妹さんたちに満足してもらわないとな。」

「ああ！」

「それで、どうしますか？」

「悪いんだが、彼女たちの服を買いに行きたいんだが・・・」

・・・そう言えばフェリアも荷物とか全く持ってきてなかったもんな。

「じゃあまずはまた服屋かな。」

「夜美・・・」

「分かってる・・・」

「・・・・・二人とも？」

二人の言葉の意味を察したのか、睨む星。

「まあまあ。それじゃあ一日目は買い物で、そこで飯を食べるか。」

「そうですね、それがいいと思います。」

「そのあとは妹さんたちに意見を聞こうぜ。」

「そうだね、もしかしたらどこ行きたいかとか決めてるかもしれないし。」

「我もその方針でいいと思う。」

俺の意見にライと夜美の二人も同意する。

「それじゃあ、明日来たらそうするぞ。」

俺が締めて話は終わった。

ピンポーン。

話がちょうど終わったその時インターフォンが鳴った。

「あ、私が出てきますね。」

星が立ち上がり、インターフォンを見る。

「どちら様ですか？」

『私、チ、フェリア姉の妹のセインです。フェリア姉がお世話になっている家がここだとシャイデさんに聞いたので・・・』

「分かりました、少々お待ちください・・・」

そう言って玄関に向かう、星。

「・・・・早すぎない？」

その呟きに反論する者はいなかった。

「初めまして、フェリア姉の妹でセインって言います。」

青いセミロングの女の子が元気よく言った。

セインか・・・・

確か、地面に潜る女の子だったはず。

っていうか偽名は使わないのか？

「美味しいものを食べにやってきました。」

右手を上げて高々と宣言するセイン。

「そんなことより・・・・」

「・・・・ええ、分かってます。」

アイコンタクトで俺の言いたいことが分かったらしい星。

・・・・・・さすがだ。

星はセインを自分の部屋に連れていく。

五分後・・・・・・

「美味しい物を食べにやってきました。」

星の服を着たセインがさっきと同じことを言う。

よくあんなびっちりした服で外に出たこと・・・・

「・・・随分お前と性格が違う奴だな。」

「姉妹で一番明るい奴だからな・・・」

う～ん、ナンバーズを全員覚えてないからなんとも言えないけど、確かにセインはナンバーズの中だと一番明るいかもな。

しかし・・・・

「フェリアの方が妹に見えるな。」

その時空気が重くなった。

あっ、墓穴ほったかも・・・・・

「・・・誰が小さいと？」

ワナワナと震えながらそう呟くフェリア。

「い、いや誰もそんなこと・・・」

「レイはもう少し言葉に気を使うべきです。」

「最低だよ、レイ！」

「今のはお前が悪いぞ、レイ。」

「言ってはいけないことを言ってしまいましたね、零治さん。」

４人ともかばってくれないようだ。

セインよ、お前は少なからず思ってるだろ・・・・

「・・・覚悟はいいか？零治・・・」

「・・・・・優しくして・・ね。」

その申し出は当然却下され、俺はフェリアにおはなしされました・・・・

「おいしーーーーーい！！！！」

家にセインの絶叫が響く。

「そう言ってもらえると嬉しいです。」

ちなみに今日の夕飯はシチュー。

その残りをセインに出しました。

今、ライと夜美2人と話しながら食べている。

「いきなりＭｙ箸を出して食べようとしたときは驚いたけどな・・・・」

「一体日本をどう勘違いすればそうなったんでしょうか・・・」

本当に驚いたよ・・・

出したのはご飯にかけたシチューだったから別に食えないことはなかったけど、日本人は食事をするとき全て箸で食べると思っているとは・・・・・

スカさん、ちゃんと教育してやりなよ。

でも、箸使いはフェリアよりもかなり上手でした。

「・・・・・・・・」

端でセインに見えないように箸の練習をしている。

・・・・負けず嫌いだな。

「でも本当に美味しいよな星の料理は。お嫁さんにもらったやつは最高だろうな。」

「そ、そんなことないですよ・・・それに私はレイだけに・・・・」

「レ、レイ!明日のことなんだけど!!」

「お、おう・・・」

星との話の途中でライにいきなり声をかけられる。

?星がライを睨んでいるような・・・・・

まぁ、気のせいだろう・・・・

「で、何だ?」

「セインが明日はお寿司が食べたいって。」

「私、資料で見たんだけど回ってくるんでしょ!!」

ああ、回転寿司か。

確かに珍しいよな・・・・・

外人だと写真撮る人もいるらしいし。

でも、最近はアメリカとかでも回転寿司ってあるんだっけ？

今度、グーグル先生に聞いてみようかな・・・・・・・

「レイ？」

おっと、かなり脱線したな。

「分かったよ、買い物したら食べに行くか。」

「ほんとう！？ありがとうレイ！！。」

笑顔でお礼するセイン。

・・・・・ん？今レイって言ったか？

「・・・・ダメ・・・かな？」

「別にダメじゃないよ。好きに呼んでくれれば良い。」

「ありがとう！これから『レイ』って呼ぶね。」

本当に明るい奴。

ナンバーズってこんなに感情豊かだったっけ？

「・・・・・本当にレイって女の子と仲良くなるのが早いね。」

「全くだ。この女たらしめ。」

「だから男友達が居ないんですよ・・・・・」

3人ともなんだか冷たいような・・・・・・

それと星!!俺にだって男友達ぐらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ?

「・・・俺って結構寂しいやつじゃない?」

「・・・・今更気づいたのか?」

転校してきたばかりのフェリアにまで言われた!!

「いいもん!俺には士郎さんがいるから!!」

「・・・・・・友達か?」

ちくしょう、フェリアのツッコミが胸に響くぜ・・・・

ぶっちゃけ思春期真っ盛りのヤロー共と話なんて合わないし、合わせる気もないんだけど。

その辺、神崎はすごいと思う。

・・・・絶対に混ざりたくはないけど。

「そんな事はどうでもいいんだよ！！」

「・・・・よくはないと思うが。」

「いいの！！」

「・・・・・・分かった。」

俺の強気の返事に折れるフェリア。

「それに学校にはフェリアもいるし、別に問題ねぇよ。」

「そ、そうか・・・・」

少しうつむきながら返事をするフェリア。

何か星達3人が睨んでいるような・・・・

「・・・・何だよ？」

「「「変態！」」」

「なんでだよ！！」

「アハハハハ！」

俺と3人のやり取りを見ていて笑うセイン。

しばらくの間、俺たちのやりとりを見て笑うセインの姿がそこにあ

った。

「いい人達だね・・・・」

「ああ・・・・・」

あのあと、皆順番に風呂に入り寝ることになった。

セインはフェリアが使っている部屋に布団を敷き、そこで寝ている。

「面白いし、暖かいし、何よりみんな優しい。」

「ああ、私の時もそうだった。」

「みんなが私たちが戦闘機人だって分かったらどう思うかな・・・・・」

「さぁ、どうだろうな・・・・」

セインに背を向けるフェリア。

「チンク姉、黒の亡霊のこと何か分かった?」

「何も・・・・シャイデもなかなかしっぽを出さないからな。」

しばらくシャイデの通信を傍聴していたが、黒の亡霊と連絡をとっていることはなかった。

「そうか・・・・・ねぇ、私も手伝おうか？」

「いや、お前の能力は貴重だ。お前に何かあったらドクターの計画も崩れてしまう。お前までここにいる必要はない。」

フェリアはセインの方へ向きはっきりと言う。

「そうだよね・・・・・分かった。」

セインはそう言って布団に潜った。

「布団って気持ちいい・・・・」

布団の柔らかさを感じ、セインは呟く。

「チンク姉だけずるいよ・・・・」

そう文句を呟いてから眠りにつくセインだった。

「ずるいか・・・・」

セインの呟きが聞こえたフェリアは同じ言葉を呟く。

「ここの家の者たちは暖かいからな。」

有栖家の面々を思い浮かべる。

「いつか私たち姉妹もこの家のように・・・・・・」

そう思いながらフェリアは眠りに付くのだった・・・・・・

## 第１６話　ゴールデンウィーク前夜（後書き）

ということでセイン登場。

遊びに来たナンバーズをもてなそうという感じでゴールデンウィークを進めていこうと思います。

ノーヴェですが、チンク大好きっ子になっています。

それ以外は変える気はありませんが暴走するかも・・・・

ノーヴェ好きな方は申し訳ありません。

# 第17話　ゴールデンウィーク初日（自己紹介）（前書き）

最初に言っときます。

申し訳ありません！！！

ゴールデンウィーク編一日目と本当はしたかったのですが、いつの間にかいつもの量になってしまったので分けることにしました。

ゴールデンウィーク編予想以上にかなり長くなるかも・・・・・

# 第17話　ゴールデンウィーク初日（自己紹介）

「私がフェリア姉とセインの妹のノーヴェだ。」

「さらに妹のウェンディっス。」

俺はシャイデに言われた集合場所に迎えに行っていた。

また変わったナンバーズがやって来たな・・・

先にノーヴェと答えた女の子は少しイライラしているように見える。

ウェンディについて逆にほわほわとした印象。ちょっとセインに近いかな・・・・・・

二人ともティアナにやられたんだっけ？

まぁそんなことはいい。

まずは・・・・・・

「着替えだな・・・」

「な、何言ってんだ！！この変態！！」

「イヤらしい兄さんっスね～」

「お前らの格好の方が変態だろ！！」

なんでナンバーズはピッチリしたボディスーツしか着ないんだよ！？

一緒にいる俺が恥ずかしいわ！！

俺は文句を垂れる二人を無理矢理家に連れていった。

「ノーヴェ！ウェンディ？」

ん？何で疑問形なんだセイン。

（セイン、あれはウェンディで間違いない・・・）

（ありがと、チンク姉・・・）

・・・・なんか内緒話してるし。

「いらっしゃい、よく来たわね。」

玄関にやって来て挨拶する星。

「おお～！美人さんっス。兄さんの嫁さんっスか？」

いきなり何言ってるんだか・・・・・

「そ、そんな・・・・私は別に・・・・・」

・・・・・いいのか！？星。

「改めまして、私は有栖星です。」

「僕は有栖ライだよ。」

「我は有栖夜美だ、よろしく頼む。」

我が家の3人娘がそれぞれ挨拶する。

「それで、俺が「変態だろ?」違う!!」

ノーヴェ、そんなこと言うなって!!

ほら4人の目が恐い・・・・・

あれ?4人?

「貴様、私の妹に手を出そうとしてたのか!?」

「だからしてないっての!!」

フェリアがカンカンになってました。

さすがはお姉さん?

「私は姉だ!!」

「心を読むなよ」

昨日のこと未だに根に持ってるんじゃないだろうな？

「それより兄さんはなんて言うんっスか？」

「こいつのことなんて変態でいいだろ！！」

「ふざけんなって！俺は着替えだなって言っただけだろ！！」

「俺が着替えさせてやるって言ってたじゃないッスか～」

「言ってないわ！！」

頼むからこれ以上悪ノリしないでくれ、ウェンディ・・・・

ほら、また3人が恐ろしい顔に・・・・

（何か感情豊かすぎじゃないかな・・・）

（ドクターが言うには少し性格に支障が出たらしい。だが、思考などはあまり問題無いと分かっているから問題ないのだろう・・・）

（・・・まぁいいか。）

セインとフェリアが内緒話している中、俺は星たちに詰め寄られていた。

「ったく、ゴールデンウィーク初日から厄日だ・・・・」

「す、すみませんレイ・・・・・」

「ごめんねレイ・・・・」

「すまなかったレイ・・・・」

あのあと半ギレしながらも3人をなんとか説得し、ウェンディに拳骨を食らわせた。

「痛いっス～、フェリア姉～兄さんがいじめた～」

「今のはお前が悪い。」

「セイン～！！」

「何で私は姉を付けてくれないの？」

「ノーヴェが付けてないからっス。」

「・・・・また姉って呼んでくれない・・・」

落ち込むセイン。

・・・・ナンバーズたちにもいろいろあるんだな。

「って俺の紹介！！」

「今更いいっスよ～兄さんでオッケーっス。」

「いやいやいや、お前の兄じゃないし。一家の大黒柱だし。」

「大黒柱？」

「むしろ星ではないか？」

「わ、私ですか！？」

「ふむ、今までの様子を見ると確かに星一番偉いな。」

「そうだね、レイより星だね。」

ライや夜美だけでなくフェリアやセインのも言われる俺。

・・・・泣いていいかな？

「ほらレイ兄、私の豊満なおっぱいで泣くとイイっスよ～」

「何が豊満だ、せめて胸って言え。慰めたつもりかもしれないが一気にさめるぞ・・・」

「姉妹の中ではなかなかナイスバディだと思うんっスけど・・・・」

まぁセインとどっこいどっこいってとこだな。

「「・・・・・ウェンディ。」」

「な、なんスか？チンク姉、ノーヴェ・・・」

「「ちょっとこっちに来い・・・」」

「えっとまずは怒りを収めて欲しいんっスけど・・・ちょ！？レイ兄～ヘルプ～！！」

ウェンディを引きずりながらフェリアの部屋に入れるフェリア、それにノーヴェが続く。

「・・・セイン、フェリアにこれを渡してきてくれ。」

「レイ、これ何に使うの？」

俺が渡したのは広辞苑だ。

「かの魔王様が間違った人間を修正するために使う凶器だ。」

「・・・違うと思うんですけど。」

星の言葉をスルーし、俺はセインにさらに補足説明する。

「特のここの角で叩くとかなり痛い、とても痛い！・・・受けてみるか？」

「え、遠慮しとく・・・」

「フェリアに伝言も頼む。俺の分までよろしくって。」

「・・・分かった。」

そう返事をして広辞苑を持ち、ウェンディを連れていった部屋に入っていった。

「フェリア姉、これ、レイから。」

「これは・・・」

「これは魔王様が使う凶器だって。これで俺の分まで頼むって。」

「なるほど、受けている零治ほど恐ろしさが分かるか・・・感謝するぞ、零治。」

セインから広辞苑を受け取り高く構える。

「高町ほどうまくいくか分からんが、覚悟しろウェンディ!!」

「嫌だぁ!!妹暴力反対っス!!」

「やかましい、チンク姉次は私な。」

「分かっている。セインお前もやるか?」

「・・・・遠慮しとく。」

そう言って静かに部屋を出たセイン。

「ちょ！？セインお助け～！！」

「さぁおはなしだ。」

今、ウェンディの地獄が始まる・・・・・

「レイ、自己紹介しなくていいの？」

「・・・・・・・忘れてた！！！！」

今、おはなし中でいない3人が帰ってくるまで大乱闘スマッシュロワイアルをセインを入れてやっていた。

ちなみにセインはナンバーズのようなスーツを着ているぴっちりお姉さんを使っている。

「もういいんじゃないの？今更自己紹介してもあ～！！」

地雷にハマる電気ネズミ。

バカめ、俺の仕掛けた地雷にはまったなライ。

「うん、私もそう思うよ。あっ、ハンマーだラッキー。」

ハンマーを振りまわし始める、ぴっちり姉さん。

「くっなんてタイミングの悪い・・・レイ邪魔だ！！」

暴食野郎に軽く吹っ飛ばされる、俺のダンボール傭兵。

夜美は意見すらないんだな・・・・

「私はちゃんとするべきだと思います。何事も最初が肝心です！」

星が言いことを言っているぽいが、ぴっちり姉さんがハンマーで暴れているため、誰も返事をしない。

「ですよねレイ！！」

「だああ！見えない！！分かったからそこどk」

「チェスト！！！」

夜美が使うピンクの暴食野郎のストーンが俺に落下。

吹っ飛んだ所にぴっちり姉さんのハンマーがさらに直撃。

最後に吹っ飛ばされた先に雷を落とす電気ネズミ。

何この三連コンボ・・・・・・・

当然、俺のダンボール傭兵は場外に吹っ飛ばされ、俺のダンボール傭兵は星になっていった・・・・

「「「イエーイ！！」」」

ハイタッチする3人。
狙ってないよね!?

「うう、ひどい目にあったっス・・・・・・」
ボロボロになりながらも帰還するウェンディ。
「お前が余計なことを言うからだ!私は人並みなんだよ。」
人並みねぇ・・・・・
「何見てんだ!?変態。」
「見ただけで変態扱い!?」
「フェリア姉にそんな目を向けてみろ!この拳でぶん殴ってやる!!」
グッっと拳を見せるノーヴェ。
俺どんなふうに思われてんだよ・・・・・・
「俺は変態じゃなくて有栖零治!!それが俺の名前だっての!!」

やっと言えた・・・・・・

「ああ～！！私の亀さんが星になったっス～！！」

ウェンディはいつの間にかフェリアと共にゲームに参加していた。

ウェンディはもういいや・・・・・・・・・・なにげに名前で言ってるし。

あとはコイツだけなんだが・・・・

「ふん！！お前は変態で十分だ！！」

ちくしょう、このままだと変態のままじゃないか！？

それは世間的に悪い・・・・・

そう言えばコイツ、フェリアの事を話すときは態度が違ってたような・・・・

ならあれを使うか・・・・

「ノーヴェ、なら条件を出そう。俺を変態と呼ばないって約束したらこの画像をやる。」

そう言って俺はフェリアの位置を確認する。

よし、ゲームを観戦している。

そして携帯を取り出し、コスプレの時の画像を見せた。

「これは！！」

「どうだ？ノーヴェはフェリアのことが好きだと思ったんだが・・・・・いらないか・・・」

「いや、欲しい！！」

「なら・・・」

「ああ、変態って呼ばない！！」

「よし、交渉成立だ。」

これで問題はクリアされた。

単純な奴め・・・・・

「後でお前の携帯に送っとくよ。」

「でも、私携帯もってないぞ・・・・」

そうだった・・・うっかりしてたな。

「じゃあ、今日服とか買いに行くついでに買いに行くか。」

「いいのか？」

「お金はお前さんたちの親から受け取っているから大丈夫だよ。」

「ドクターが・・・・」

ドクターはやめたほうが良くないか？

それに俺の報酬からだし・・・・

まぁトンデモない額をくれたのは確かだけど。

中学生が億単位もってもいいのかね・・・・・・

あのドクター金銭感覚が絶対狂ってる。

「ということでそれまでおあずけな。」

そう言って頭をなでる。

「・・・なでんな気持ち悪い・・・」

「っと悪い、つい・・・な。」

ちょっと妹を思い出したな・・・・・

よく頭をなでたもんだ。

生意気なところとかソックリだったからダブったかな・・・・

「・・・・・ありがとよ・・・」

「ん？何か言ったか？」

「なんでもねぇよ!!それよりゲームって奴をするぞ。お前をケチョンケチョンにしてやる!!」

「ハイハイ分かったよ。」

名前は呼んでくれないか。

まぁ一歩前進したしいいか。

「おっ、今度はレイ兄とノーヴェが相手っスか!ギタギタのゴテンゴテンにしてやるっス!!」

・・・・・ゴテンゴテンってなんだよ。

「へん!!妹に遅れをとる姉じゃねぇよ!!」

「・・・・だとさ。」

「・・・言うな。」

端っこで落ち込んでいるフェリアに声をかける夜美。

ギタンギタンもゴテンゴテンにされたんだな・・・・・

「行くっス~!!」

「来いよ!!」

「えっとえっと・・・・」

「星、いい加減慣れようぜ・・・・・」

結果は言わずともがな星がビリである・・・・・

「えっと・・・買い物行くんだよね？」

ライの言葉に反応するものはいなかった・・・・・

## 第17話　ゴールデンウィーク初日（自己紹介）（後書き）

てな感じで自己紹介とゲーム大会でした。

ノーヴェはチンク大好きっ子にしています。

あと口調が少し男っぽいかも。

ご了承を・・・・・

あとウェンディの性格に少し支障があるとありますが、最初っから～っスって話させようと思い、そうしました。

別に変な設定を加えようとしている訳ではないのであまり気にせず、軽くスルーして下さって構わないです。

次は買い物編。一日目は終わらせたいと思います。

## 第１８話　初日、ファッション？ショー開幕（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

いやぁ長くなった長くなった・・・・・・

これでも少し短縮しました。

ではどうぞ。

# 第１８話　初日、ファッション？ショー開幕

「じゃあ、そろそろ・・・」

「ああ・・・・」

「行くか・・・・」

今は昼の１３時。

あのあとゲームで盛り上がり、ざるそばをみんなで食べた。

ノーヴェは箸をうまく使えており、皆驚いていたな。

ウェンディは全くダメダメだったけど・・・・・

星に食べさせてもらってました。

妹を世話する姉みたいだったな。

その後はゲームで盛り上がったせいか、みんなでグダグダテレビを見てました。

こっちの昼ドラはあっちよりかなりドロドロしてたな・・・・

普通に面白かった。

そんなこんだダラダラしてやっとみんな重い腰を上げて・・・・

「やっと買い物に来ました。」

「レイ？」

「ああ、独り言。」

俺と星が並んでみんなを見る。

初めてのデパートの広さと人の多さに驚いているセイン、ノーヴェ、ウェンディ。

ライと夜美も嬉しそうだ。

何か企んでいるような顔だけど・・・・・・・・・

着いた途端誰かに電話してたし。

フェリアは騒いでる妹達を一生懸命抑えようと走り回っている。

頑張れ、お姉ちゃん・・・・・・・・

「レイ、見てないで私たちも行きますよ。」

「ハイハイ。」

俺と星もフェリアの手伝いをしに行った。

「・・・・やっと到着したか。」

「長かったな・・・・」

「もう疲れました・・・・・」

服屋の前のベンチに座る、俺と星とフェリア。

目的の服屋に着いたのは一時間後。

途中寄り道が多く、なかなか進まなかった。

ウェンディとセインについては勝手にどこかへ行くもんだから迷子にならないか心配でならなかった。

ライと夜美はそんな二人と一緒に走り回るし。

唯一、ノーヴェが言うことを聞いてくれたのは助かった・・・・・

「どうしたの三人とも？これからが本番だよ！！」

「そうだ！今からそんなだとこの先もたないぞ！！」

やけにテンションの高いライと夜美。

一体何を企んでいるんだ？

「ライちゃん、夜美ちゃん、準備オッケーよ！」

店から店長が現れる。

「分かったよ！それじゃあ星とフェリアはこっちにきて。」

手招きするライ。

渋々二人が立ち上がり店の中に入っていく。

店の店員が高い台座を準備し始めたけど・・・・・

何してるんだ？

「ちょ！！ライ、夜美、これはどういうことですか！！」

「私も聞いてないぞ！！」

「言ってないもん。」

なんの話をしているのやら。

何かフェリアと星が怒ってるけど・・・

そう思っていると人が集まり出す。

・・・・・嫌な予感がする。

取り敢えず近くの男の人に聞いてみた。

「この集まりはなんですか?何かイベントでも?」

「かつて一人の少女がここに舞い降りた・・・・・・」

何か語り始めたよ・・・・・

「その少女は黒い眼帯と長い銀髪をなびかせ、様々な服を着飾り、観客を魅了した。その少女が帰ってくるってデパートの掲示板にあったのだ!!!」

感動を抑えるように拳に力を込め叫んでいる。

「本当に今日は付いている神よ私は今日という日を感謝します!!」

今度は祈り始める男の人。

話しかける相手間違えたな・・・・・・

っていうかまたあの二人だろうな・・・・・

妙にテンションが高かったのはこのためか。

「零治、ちょっと・・・・」

店からライが俺を呼ぶ。

「すみません、準備中なのでもう少々お待ちください。」

そう言って店の奥に入って行った。

俺もそれに続く。

「で、俺に何のようだ？」

「これから一本引いて。」

そう言われてボックスの中に入った４つの棒から１本引く。

その棒には星の名前が書いてあった。

「おい、これなんだ？」

「レイは星だね。それじゃ次は私・・・」

ライも俺と同様に棒を引く。

「僕はセインだね。」

「やったー！よろしくね、ライ！！」

「こちらこそ！！」

手を取り合い喜ぶ二人。

意味がわからん・・・・・

「次は私だ。」

今度は壁際にいた夜美が棒を引いた。

「我はフェリアか、よろしく頼む。」

「・・・・・・帰りたい。」

かなりテンションが低いなフェリア・・・・

壁際で丸くなりながらつぶやいでいる。

「と言う事は私はノーヴェっスね!!私が完璧にコーディネートするっス!!」

「なんでお前じゃなくて姉の私なんだよ!!」

「ノーヴェの方が面白いからに決まってるじゃないっスか。」

「お〜ま〜え〜な〜!!」

「きゃ〜ノーヴェがいじめるっス〜!」

そう言ってフェリアに抱きつく。

「こら!!フェリア姉から離れろ!!」

「フェリア姉ガードっス!!」

「・・・・・・帰りたい。」

・・・どんだけトラウマになってるんだ?

さっきから小さくまくるなってそのままだぞ!!

あれ？

「ところで星は？」

「あっちに隠れて出てこない。」

そう言って試着室の方を指さす。

何のため引いたか分からないけど取り敢えず俺も星に声をかけるべきか・・・・

そう言って星の所へ向かう。

「星？」

「・・・・私は絶対出ませんからね。なんで私がこんな恥ずかしい事を・・・・・」

「星、俺だ！」

「レ、レイ！？どうしたんですか！？」

何を慌てているんだか・・・・

「何かよく分からんけど俺、星と組むことになったからその報告を・・・」

「私がレイと・・・・・・」

なにやら考え込む星。

「やります！やってみます！！レイと一緒なら問題ありません！！」

「お、おう・・・」

何故か分からんがやる気を出した星さん。

っていうかあの棒の意味を聞いてないんだが・・・・

「それじゃあ、みんな始めるわよ。」

店の店長に呼ばれ、それぞれ動き始める。

「いや、だからこの棒の意味は・・・」

「レイ、頑張りましょう！！」

だから、この棒はなんなんだよ・・・・

「さぁチーム戦、ファッションショーの開幕よ！！」

その店長にの言葉に俺は全て理解した。

「あのさ、言ってくれれば俺も協力したよ？」

「あ～ごめんごめん、前怒られたし、また止められるかもって思ったから・・・」

ライが手を合わせながら俺に謝る。

まぁこの状況だったら俺も止めてたかもな・・・・・

「で、一番止めそうな星を巻き込んだか・・・だけどよく星を巻き込めたな。」

「そこは企業秘密です。」

禁則事項です、って可愛く言うお姉さんみたいに言うライ。

結構可愛い・・・・・

「そろそろ始まるぞ、静かにしろ。」

凄いマジだな夜美・・・・・

『ただいまより、ファッションショーを開催します！！！』

ワアアアアアアア！！！

歓声が響きわたる。

店の前に用意してい高い台座をのぼり、そこで店長がマイクを使いしゃべっている。

店の周辺は超満員、観客は二階にも集まっている。

っていうか、周りの店には迷惑だよな・・・・・

あっ、他の店の人も見てる。

『今回は前回とは違い対戦方式で行いたいと思います！！結果は皆さんの投票によって決まりますのでよろしくお願いします！！！』

ワアアアアアアアアアアア！！！

さっきより盛り上がり方が半端無いな・・・・

『では出場者の紹介です。まず最初に、黒い眼帯がキュート。長く綺麗な銀色の髪がトレードマークの少女、フェリア・イーグレイちゃん！！』

「・・・・・・・・帰りたい。」

ドントマインド、フェリア。

「うおおおおおおお！！」

「フェリちゃーーーーーん！！！！」

「生きててよかった・・・・・・」

そんな人生で良かったのか？

『続いて2人目、フェリアさんの妹、水色い髪のセミロングの元気っ子、セイン・イーグレイちゃんです！！』

「イエーイ！！」

元気よくピースしてアピールしているセイン。

「かわいいーーーーー！！！！」

「セインちゃーーーーん！！！！」

女の子も居るんだな・・・・・

『3人目、またまたイーグレイ姉妹の一人、少し睨みが聞いた赤髪少女。だけどそのツンデレ具合が素晴らしい、ノーヴェ・イーグレイちゃんです！！！』

「私はツンデレじゃねぇ！！」

「おおっ！！ツンデレ最高！！」

「萌ーーーーーーー！！」

気持ち悪い奴らに人気が高いな・・・・・・

「最後に緊急参戦、私のお気に入りのお客様。大和撫子の清純さと気品の良さを兼ねそろえたザ・日本美女。有栖星ちゃんです！！！』

「よ、よろしくお願いします・・・・」

「うおおおおおお！！」

「照れてる星ちゃんかわゆい～！！！」

最後の男出てこい、ぶっ殺す！！

『続いて、コーディネートする４人の紹介です。まずフェリアちゃんを担当するのはこの人。きつい言葉の裏には優しさがある。厳しいコーディネートの裏には素晴らしいコーディネートがあるはずです。紹介しましょう有栖夜美ちゃんです。』

「よろしく頼む。」

歓声に包まれる夜美。

『続いて、セインちゃんに担当するのはこの人。セインちゃんと同じ明るい性格でみんなの人気者。コーディネートの方でも皆さんの期待に応えてくれるでしょう。有栖ライちゃんです！！！』

「みんな、よろしくね～！！」

またも歓声が上がる。

『３人目は、イーグレイ姉妹の末女が登場。そのノリの良さから何が起こるかわからない。だけど見せてくれるはずです。ウェンディ・イーグレイちゃんです！！！』

「よろしくっス、みんなぁ～！！」

手を振りながらアピールするウェンディ。

『最後に有栖星ちゃんのコーディネートに参戦するのは唯一の男性。ハーレム一直線、男の憧れ、有栖零治ちゃんです！！』

「っておい！！なんでそんな悪いイメージを・・・・」

案の定ブーイングの嵐。

こりゃ、下手なコーディネートしたら帰れないぞ・・・・・・・

『それではコーディネート対決開始します！！！』

そして対決の火蓋がきっておとされた。

『それでは参りましょう、まずはフェリアちゃんです！！』

出てきたフェリアは少しずつ壇上に上がっていく。

その姿は青い制服を着ていた。

「・・・・逮捕しちゃうぞ・・・・」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

男共が魂の雄叫びのごとく叫んでいる。

何がファッションショーだよ、結局こうなってるじゃないか・・・・

・

『さすが、人気もありますから盛り上がり方が違いますね！！次はセインちゃんです！！』

次にセインが壇上に上がる。

その姿は白い純白の妖精。

ナース服だった。

「お注射しちゃうぞ。」

注射を右手に持ち、左手を腰に当て言うセイン。

「あああああああああ！！！」

絶叫する男共。

盛り上がってるな・・・・・・

『予想以上の盛り上がり。さて、次は三番目はノーヴェちゃんです！！』

台に上がるノーヴェ。

短いスカートと胸元が開いているメイド服を着ていた。

「・・・・別にお前のためじゃないからな！！」

「ツンデレメイドキタ――――（ ゜∀ ゜）――――！！」

・・・・ここに神崎がいたらアイツ暴動起こすんじゃないか？

『最後は店長期待のホープ、星ちゃんです！！！』

やっと星の番か・・・・

頼むぞ星、俺の命はお前にかかっている。

台の上に上がる星。

俺が選んだのは・・・・・

「・・・・にゃんにゃんにゃんにゃんにーはおにゃん、ごーじゃすでりしゃすでかるちゃー・・・・」

銀河の妖精のＣＭみたいに赤いチャイナ服を着て猫耳をつけている星。ちゃんと振り付けもさせてます。

恥ずかしがってるけど・・・・

「かわいいいいいいいいいいい！！！」

「星ちゃん萌ーーーーーー！！！」

「恥ずかしがりながら言ってるところも最高！！」

おっ、好評みたいだ。

しかも女子からも支持が高いみたいだな。

「くっ、やる・・・・」

「さすがレイだね・・・」

「次は負けないっス！」

残念ながら俺にはまだ奥の手があるんだよな・・・・

『それでは二回戦と行きましょう！！』

こうして大会は続いていく・・・・

『さぁ、三回戦です。これが最後。皆さん心の準備はいいですか？』

「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

ヒートアップしてるな・・・・・

『では参りましょう。まずはフェリアちゃん！！』

出てきた、フェリア。

「こ、これは!!!」

旧スク水!!!!

そんなの有りかよ!?

「・・・・・・恥ずかしいからあまりジロジロ見るな・・・・」

「グハッ!!」

吐血して倒れる男が続出・・・・

気持ちはわかる・・・・

『さすがフェリアちゃん!!男共に凄いダメージだ!!次のセインちゃん、姉に負けるな!!』

台座に走っていくセイン。

「みんなどう~?」

ブルマ!!!

なんてものを・・・・

元気っ子にかなりマッチしてやがる・・・・

「もう死んだっていい・・・・・・」

「幸せ・・・・・」

悶絶する奴までいるし。

『さすが、ライちゃん。かなりマッチしているぞ!!これは分からない!!次はノーヴェちゃんだ!!』

台の上に登ってくるノーヴェ。

今度は何を・・・・・

「ジロジロみんなよ!!恥ずかしいだろ・・・」

照れながら言うノーヴェ。

まさかこんなものがあったなんて・・・・・

ノーヴェが来ているものは黒のゴジックドレスだった。

小さい黒いシルクハットがよく似合っている。

「可愛い!!!!」

「すごく似合ってるよ!!」

「家に一体欲しい!!」

「抱きしめたい!!」

特に女性の人気が半端ないな・・・・・

『こちらも大変な人気です!!さて今度の星ちゃんで最後!!さぁダークホースとなった零治君。一体何を選んだのか!!』

さぁ、これが俺のジョーカーだ!!

星がゆっくりと歩いていく・・・・・そして台の上にたった。

「・・・・・幸せにしてくださいね・・・・・」

静まる会場・・・・・

「うあああああああああああああああああ!!」

「きゃあああああああああああああああああ!!」

男女関係なく観客の歓声が響きわたる。

『これは、これは凄すぎる!!!今までにない盛り上がり、これほどの感動を呼び起こすとは・・・この二人化け物か!!!』

俺が星に着せたのはウェディングドレス。花束のブーケも忘れていない。

俺はこれを見つけた瞬間、俺は直ぐに確保した。

奪われたら負けだと思ったからな・・・・

「星・・・・綺麗・・・・」

「これには流石に・・・・」

「勝てないな・・・・」

「綺麗だな・・・星さん・・・」

「さすがっス星姉！！」

「いいなぁ、私もああいうの着たかったぜ・・・」

上からライ、夜美、フェリア、セイン、ウェンディ、ノーヴェ。

それぞれみんなが星に見惚れていた。

綺麗だな、星・・・・・・・

結果は星が優勝だった。

お礼として店の商品をプレゼントしてもらったためお金は掛からずにすんだ。

是非ともまたやりたいと店長に言われたが、もう勘弁願いたい・・・・

余段・・・・・・・

「ドクター。」

ウーノがスカリエッティのラボにやって来た。

「どうしたんだい？ウーノ。」

「まずはこれを・・・・・・」

そう言ってディスプレイを展開する。

そこに写っていたのは今回の報告書とファッションショーの映像である。

『ドクター、セイン、ノーヴェ、ウェンディとも無事にこちらにこられました。最初は驚きましたが、久しぶりに妹達の顔を見れたのは嬉しかったです。ありがとうございました。今回初めて妹たちとファッションショーというものを体験しました。こっちの世界のネットに映像があったので送ります。皆で見てください。』

「おお、似合ってるじゃないか3人とも。」

「・・・いや、そう言う意味ではなくてですね・・・」

「せっかくだから保存するとしよう。」

「ですからドクター・・・・・」

「それと他の子達にも見せてやろう。みんなを呼んでおいてくれ。」

「・・・・・分かりました、ドクター・・・」

ウーノは黒の亡霊の事はどうしますかと聞きたかったのだが、それ以上言わなかった・・・・

## 第１８話　初日、ファッション？ショー開幕（後書き）

星の優勝！！

本当はナンバー全員でやりたかったんですけど、急遽星にしました。

どうだったですか？

次回は回転寿司の話ですかね・・・・

次回もよろしくお願いします。

## 第１９話　数の子シスターズ、回転寿司に行く（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

更新遅くなってしまった・・・・

昨日は一日バイトで気がついたら寝ていました。

申し訳ないです。

それと６０万ＰＶとお気に入り１５００件突破しました。

これからもよろしくお願いします。

# 第１９話　数の子シスターズ、回転寿司に行く

「今日は回転寿司に行きます。」

家にいるみんなだがずっとダラダラしていて正直見ていられない・・・

昨日のデパートではっちゃけ過ぎたせいか、燃え尽きたようにダラダラとしていたのだった。

ゴロゴロしながらテレビを見るかゲーム。

休みだからってだらけすぎだ！！

唯一キビキビ動いていたのは星とフェリアだけだった。

最近フェリアが率先して星の手伝いをしている。

料理などは流石に無理があるが、洗濯や掃除は完璧にこなしてくれる。

俺にとっても星の負担が減って安心している。

働きすぎなんだよ星・・・・・・・

俺も手伝おうとするが、星は必ず遠慮する。

もう少し頼ってもらいたいんだが・・・・・

「回転寿司ってなんだ？」

「寿司が回転するんじゃないんっスか？」

なんのメリットがあってそんなことすんだよ・・・・・・

ノーヴェとウェンディは分からないんだな。

セインが行きたいって言ったからみんな知っているもんだと思ってたぜ・・・・

「お寿司がベルトコンベアで流れてくるから回転寿司って言うんだよ。」

ご丁寧にライがお姉さん口調で教える。

「そうなんスか・・・・ありがとうっス、ライ姉！」

「エヘヘ・・・・」

嬉しそうにするのは構わんがあまりだらしない顔してるとお姉さんっぽく見えないぞ・・・

「で、一昨日にセインが食べに行きたいって言ってたから行こうって言ってるんだよ。」

「え～動くのメンドイっス～」

「私も今日は動きたくねぇな。」

こいつら・・・・・

「・・・だったらお前らは夕食抜きだな。」

「「えっ!?」」

「だって食いに行かないんだろう?二人でふりかけでも食べてな。」

「な、なんてこと言うんっスか!?ふりかけはただのご飯に色々な味をくれる素晴らしい物なんスよ!!」

ってそっちかよ!?

「わ、私は食いに行くぞ!!」

慌ててノーヴェは行くこと俺に伝える。

「じゃあ、留守番はウェンディだけと・・・・・」

「嫌っス!!一人だと寂しくて泣いちゃうっス!!」

だったらくだらないこと言ってんなよ・・・・・・

「だったら準備しろ早めに出るぞ。」

リビングにいるみんなに俺は言った。

「何で?」

「レイが連れていってくれるところは休みの日だと凄い混むのよ。

前にライの準備に時間がかかちゃって、１９時頃について食べ始めたのは確か２０時半位だったはずだけど・・・・・」

質問したセインは星が言ったことに驚愕している。

「だけどとても美味しかったよ。私も寿司は好きだから楽しみなんだ。」

嬉しそうに言う星。

こうして早めに寿司屋へ向かう有栖家だった。

「着いたぞ、ここだ。」

そこには回転・鮮と看板に書いてある店に着いた。

時刻は１７時半。結構早い時間に来た方だと思っていた。

「・・・・すごい人ですね・・・・」

「まだ五時半なのに・・・・・」

「どういうことだレイ?」

夜美の言葉で皆が俺を見る。

「キャンペーン中だってこと忘れてた・・・・・」

旗が入口に立っており、そこに『大トロキャンペーン実施中』と出ていた。

「・・・・・取り敢えず予約だけしてくる。」

そう言って俺は皆を置いて店の中に入った。

「・・・・・1時間待ちだってよ。」

早めに来といてこれか・・・・・

「なんだよ、結局直ぐに食べられないじゃないか。」

携帯をいじりながら言うノーヴェ。

その携帯は昨日のデパートで購入した奴だ。

一応ウェンディとセインにも渡したが、ウェンディはアプリに夢中で暇さえあればやっている。

現に今もドラクエに似ているＲＰＧをやって時間を潰している。

「悪かったって。それに1時間なんてあっという間だろ。それに19時とかだったらまた20時半位になってたかもしれないし・・・・」

「そうかもしれないけどよ・・・・・」

そう言いながらも携帯をいじる手を止めないノーヴェ。

「っていうか何してんだ?さっきから。」

「ど、どうでもいいだろ!!」

慌てて携帯をしまうノーヴェ。

気になる・・・・・・・・

まぁ無理やり見たら殺されそうだし、止めとくか・・・・

「ノーヴェ、フェリア姉の画像を整理してたんだよ。」

「ちょっ!?セイン!!」

ああ、俺が送った画像か。

よっぽどフェリアが好きなんだな・・・・

「で、よかったか?」

「ああ、どれも最高だ!!流石、フェリア姉!!」

ボリュームがデカいせいで周りの人にも聞こえてしまう。

フェリアは恥ずかしそうにうつむいてる。

「迷惑だからでかい声出すのは止めろよ・・・・・」

「お、おう。悪い・・・・」

周りの目を見てボリュームを下げるノーヴェ。

これで静かになると思ったが・・・・

「ああ～!!何でここでＭＰ切れを!!あともう少しなんだ!!頑張れレイ!!」

ウェンディが携帯をいじりながら興奮している。

今度はウェンディか・・・・・・・

っていうか何で俺の名前!?

「星、頼む・・・・・」

「はい、分かってます。」

そう言って、星はウェンディを外に連れ出した。

少しは反省してこい・・・・・・

「うう、星姉～ひどいっス・・・・」

「ウェンディが悪い。少しは反省しろ。」

フェリアにも厳しいことを言われ、何も返せなくなるウェンディ。

今、ウェンディの携帯は星が持っている。

「暇っス、暇っス～!!レイ兄、まだっスか?」

「後３０分位だ・・・・」

「暇っス、暇っス～!!」

あーやかまし!!

少しは姉達を見習えよ!!

フェリアは自分の読みかけの本を読んでるし、セインはライと静かにしりとりをやっている。

ノーヴェは相変わらず携帯をいじってるが、静かにしている。

何でこいつだけ・・・・・・

「・・・・・これ貸すから少しは静かにしててくれ・・・・」

そう言って貸したのはＰＳＰ。ゲームはぷよぷよに似たパズルゲームだ。

「おお、流石レイ兄！！では早速。」

これで少しは静かに・・・・・・・

と期待していた俺が馬鹿だった。

「ヤバイ、ヤバイ、ヤバイっス！！もう少しでゲームオーバーに！！」

ＰＳＰを持ちながら体も動くウェンディ。

フェリアと同じように文庫本を読んでいる星と夜美はとても邪魔そうだ。

「ああ！！こんな時に！！！なんて奴っス。鬼畜っス！！この外道！！！」

・・・・・頼むから本当に静かにしてください！！！

周りのお客様の目がとても痛い・・・・・・

このままだと店から追い出されんじゃないのか？

「やっと食べられるっスね。」

「・・・・・ああ。」

お前の所為で俺の疲労感は半端ないよ。

「うわぁ～」

セインが目をキラキラさせながら言うセイン。

「本当に寿司が回ってきてるぜ・・・・・」

そう言いながら写真を撮るノーヴェ。

「それくらいにして早速食べようぜ。」

この人数だと少し狭いので二つに別れてそれぞれ食べ始めた。

「これは何スか?」

「ぶりだな。」

「うまいんスか?」

「・・・・・食ってみろよ。」

「それじゃあ・・・」

皿をとって、ぶりを食べるウェンディ。

「うまいっス！！ヤバイっス！！最高っス！！」

「醤油がこぼれてるぞ。もう少し落ち着いて食べろよ・・・・」

ウェンディは楽しそうに食べているのだが、俺の食事に支障が・・・・

同じ席に座っている夜美とノーヴェは黙々と食べてるし・・・・・

セインやライの事を星頼んで別の席にしたけど失敗だったかな・・・・

俺は小皿に醤油を入れ、わさびを大量に入れる。

やっぱりわさびは多く入れないとな。

「レイ、何だその緑の物は。」

「ノーヴェ、舐めてみるか？」

俺は少しいたずらしようと提案してみる。

「じゃあちょっと・・・・・・」

箸にわさびを付けて舐めてみるノーヴェ。

いきなりそんなにいったら・・・・・・・

「%$#&#$%!!」

言葉になっていない声を上げ悶えるノーヴェ。

速攻で水を飲んだ。

「どうしたんスか？ノーヴェ・・・」

「ウェンディも舐めてみるか？」

「じゃあ、私も舐めてみるっス。」

ウェンディも箸でわさびを取り、それをそのまま食べる。

コイツ、ノーヴェの状況見てなかったのか？

「そんなに大丈夫か？」

「せっかくなんだから多い方が良いに決まってるっス!!」

その欲張りが今回は失敗だったな・・・・・

「%$#%&%$!!!」

ウェンディも言葉にならない言葉を叫ぶ。

「鼻が・・・鼻がツーンとするっス・・・・・」

流石に効いたのか今度こそ静かになるウェンディ。

「レイ兄にはめられたっス・・・・・・」

「覚えてろよこのやろう・・・・・・」

二人に睨まれる俺。

そんなことは気にせずえんがわを食べる俺。

「夜美、つぶ貝取ってくれ。」

「分かった。・・・・・・そら。」

「サンキュー。二人は食べないのか？」

いつまでも俺を睨んでる二人に声をかける。

「・・・・食べるっス。」

「私も・・・・・」

何か企んでそうだな・・・・・・

「ウェンディ・・・・」

「うん、レイ兄をギャフンと言わせるっス！！」

二人が結束した瞬間だった。

「まずはセインで試してみよう。」

「がってんっス！！」

まず、ノーヴェがやりいかを取り、上のやりいかをどける。

「わさびを大量に・・・・」

ウェンディがご飯の上に大量のわさびを乗せやりいかをまた乗せた。

「セインこれ美味しかったっスよ。どうスか？」

後ろの席に座る、セインに聞く。

「ウェンディ、行儀が悪いぞ！！」

「ごめんっス、フェリア姉。でセインどうっスか？」

「せっかくだしもらおうかな。」

ウェンディからやりいかを貰い、セインは箸を持つ。

「それじゃあ、いただきます。」

醤油をつけて口に入れた。

「＆＄％＃＄＆％＄＃！！」

「ちょっと!!セイン!?」

様子がおかしいセインに慌てる星。

「の・・・みもの・・・・を・・・・・」

「は、ハイ、セインお茶!!」

ライがすかさずお茶を渡す。

「ゴクゴクゴクゴク・・・ぷは。う～鼻がツーンとするよ・・・・・」

熱いお茶を一気飲みするセインに驚く星、ライ、フェリア。

「どうしたの?」

「わさびが強かったのか、ものすごく鼻にツーンと・・・」

「わさびが?」

星が疑問に思い、ウェンディを見る。

口笛を吹きながらそっぽを向いている。

・・・・・怪しい。

フェリアもそう思ったみたいだ・・・・

「行儀悪いから後ろ向くのは止めろ、ウェンディ。」

「分かったっス。」

俺の言葉にウェンディは後ろを向くのを止め、元の位置に戻った。

「ノーヴェ・・・・」

「ああ、いけるな・・・・」

そう確信した二人だった。

「レイ!!」

「ん？」

「このとろサーモン美味しいっスよ、どうっスか？」

俺にとろサーモンを渡してくるウェンディ。

「おお、ありがとな。でも今の俺はねぎとろ食べたいからお前で食べろよ。」

笑顔で進めていたウェンディの顔が一気に苦笑いとなった。

「来るまでの口直しとしてどうっスか？」

「・・・なんでとろサーモンで口直し？もう限界も近いし、無理して食べることもないだろ。」

「でも・・・・・・」

「もったいないからお前らでしっかり食べろよ・・・・」

お前らの考えてることなんてお見通しなんだよ。

「レイ、戻したら・・・・・」

「ダメだ。」

「ノーヴェ。」

「お前が最後に受け取ったから責任持って食べろよ。」

「ひどいっス！！姉なら『ここは任せろ！！』って言ってくれる場面っス！！」

「姉と呼ばないお前が何を言うか！！」

そう言われ、何も返せなくなるウェンディ。

「・・・まぁ無事を祈るぞ。」

こそこそやっていたのに気づいていた夜美が自業自得だと言っているように呆れて言う。

「うう・・・味方がいないっス・・・・」

「だったらノーヴェ、姉のお前が半分食べてやれよ。」

「な、何で私が・・・・」

「元々はお前もやってただろうが！逃げるとフェリアに嫌われるぞ。」

そう言われ押し黙るノーヴェ。

フェリアの名前を出すと簡単に従うよな、コイツ。

「わ、分かったよ。だからフェリア姉には言うなよ。」

「了解。」

そう言ってウェンディの方を見るノーヴェ。

「ウェンディ・・・・」

「覚悟は決めたっス・・・・」

「じゃあ・・・・」

「逝くっス・・・・」

二人は大量にわさびの入ったとろサーモンを口にいれたのだった。

「よく吐き出さないな・・・・・」

「俺なら吐き出すな・・・・・」

見事、とろサーモンを食べた二人。

二人とも今、燃え尽きている・・・・・・

「さて、我はそろそろ限界かな。」

「だな、俺も大トロ食えたし満足だな。」

「私たちも大丈夫ですよ。」

「うん、とっても美味しかった!!」

嬉しそうに言うセイン。

満足してもらえてよかったよ。

「じゃあ、帰るか。」

「「えっ!?」」

「もう満足だよな。」

「私たち全然食べてないんだけど・・・」

「もう少しいないっスかね?」

「自業自得だろうが・・・・」

まぁみんなで満足して帰りたいし、もう少しぐらい待つか・・・・・

二人は慌てて寿司を食べるのだった・・・・・・

『ドクター、ウェンディは問題なく稼働しています。少しいたずらが過ぎますが・・・それと黒の亡霊について分かったことがあります。どうやらあの夜から一度も行動を起こしていないみたいです。何かあるのか不明ですが、一応報告しておきます。それとこれはノーヴェが撮った回転寿司の写真です。美味しいのでドクターも出来たら食べてみてください。』

「寿司・・・・美味しそうだわ・・・」

「ウーノ?」

「い、いえ何でもありませんドクター。それよりチンクの報告の・・・」

「ああ、何かあるのかもしれないね・・・・・ウーノ。」

「なんですか、ドクター？」

「ミッドチルダの情報から彼の出現があったか調べておいてくれないか？」

「分かりました、ドクター。」

そう返事をして、ウーノは部屋を出ていく。

「本当に姿を掴めないな黒の亡霊・・・」

一人になった部屋でスカリエッティはそう呟いたのだった。

## 第１９話　数の子シスターズ、回転寿司に行く（後書き）

今回はウェンディがメインだったな。

いや～ウェンディは書きやすい書きやすい。

結構原作から離れてしまった感がありますが・・・・・

こんなバカの子じゃなかったはず。

なんかだんだんとお父さん化してきている零治。

まだまだ零治の苦労は続きます。

## 第２０話　暗躍する影、新たな転生。（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです・・・・・・

またもやすみません・・・・・・

一日一回が途切れてしまいました。

本当に申し訳ありません・・・・

これからもなんとか一日一回は投稿したいと思うのでよろしくお願いします。

# 第２０話　暗躍する影、新たな転生。

「行きたい！！行きたい！！」

駄々をこねるライ。

「今日は無理だって！！明日に行くからいい加減我侭言うな！！」

なぜこのような状況に陥っているかというと、昨日の夜に見たＣＭが原因だったりする・・・・・

『ゴールデンウィークにゴットスライダーついに解禁！！君はこのスピードに耐えられるか！！』

「うわぁ・・・・・」

目をキラキラさせてＣＭを見ているライとセイン。

ライは絶叫系が大好きだったりする。

前に遊園地に行ったとき、ライは絶叫系ばっかりに乗るため、俺や星、夜美は全く楽しめなかった。

以来、遊園地にはなるべく遊びに行かないようにしていたんだが・・・・

セインはライと一番気が合う仲だ。
恐らくライと似たような状態になる気がする。

「すごいねぇ！ライ。」

セインもやっぱり興奮しているようだ。
なんか嫌な予感が・・・・・

「ねぇレイ・・・・・・」

「今日は行かないぞ・・・・」

「分かってるよ。今２１時だよ。」

「で、何だ？」

「行かないぞって言っている時点で分かってるくせに・・・・」

ちっ、余計な事を言ってしまったな・・・・・・

「だってお前行くと止まらなくなるじゃないか！俺たちどれだけ大変だったか・・・・」

「でもセインも行きたそうだよ・・・・」

そう言われてセインを見る。

ウルウルと泣きそうな顔で俺を見る。

「・・・・・行きたいのか？」

まぁ気づいているけど・・・・

コク。

頷くセイン。

「・・・・分かった。じゃあ明日行くか・・・・・」

しょうがない、また明日気張るか。

「ありがとう！！レイ、大好き！！」

そう言いながら飛びつくライ。

嫌じゃないんだが・・・・・

他の人たち（主に星と夜美）の視線が痛いからやめてけれ・・・・

俺達は明日、遊園地に行くこととなった。

・・・・・・・・・・・・・・・だが、

「・・・・・雨か。」

そうあいにくの天気は雨。

それもザーザーとどしゃ降り。

で、最初に戻ります・・・・・・

「大丈夫だよ!!これくらいの雨なら普通にやってるよ!!」

「やってるか!!どう考えたって休みだよ!!」

涙目になりながらもライは諦めない。

しかも時間を考えて欲しい。

朝の5時半って馬鹿ですか?

俺の部屋に押し入りやがって・・・

いつもはギリギリまで寝てるくせに・・・・

「行ったら止むもん!!だから・・・・」

「・・・今携帯で天気見たら今日は一日中80%だって。」

「レイの・・・・・バカ!!!!!」

平手を俺に食らわせ、俺の部屋を出ていったライ。

俺のせいじゃなくね!?

叩かれた所を抑えながら俺は呆然としてた。

「はよ～」

「おはようございます。今日は随分と遅いですね。」

「いや、朝方ライが俺の部屋にやって来て、『今日雨降ってるけど遊園地行くよね!?』って俺を起こしてきたから・・・・」

「二度寝したんですね・・・・」

呆れながら言う星。

「全く・・・楽しみにするのは構わないけどさ。」

「かわいいじゃないですか。」

「そのかわいいライはどうしたんだ?」

リビングを見るとライの姿が見えない。

「・・・・朝からセインと部屋でずっとてるてる坊主作ってます。」

「・・・・・大丈夫かあいつら。」

「雰囲気が恐くてとても止められませんでした・・・」

どんだけ行きたいんだよ・・・

「分かった。俺が部屋に行ってみるよ。」

「お気を付けて・・・」

普通、よろしくお願いしますじゃね？

少々不安を覚えながら俺はライの部屋に向かった・・・・

「・・・・・これは。」

思わず絶句してしまった・・・・・

床を埋め尽くすてるてる坊主達。

未だに二人は手を止めていない。恐らく俺が入ってきていることにも気づいていないのだろう・・・

「おいライ、セイン。」

「「・・・・・・・」」

「無視するなって！！」

「「・・・・・・・・・」」

「おい!!!」

「「・・・・・・・・・」」

こちらに全く気づいていない。

というよりもはやてるてる坊主を作ることにしか興味がないみたいだ。

そんな様子をみて居ても経ってもいられなくなった俺は思わずライを抱きしめてしまった。

「えっ!?レ、レイ!!何してるの!?こんなに明るいときにダメだよ・・・・」

「俺が悪かった!!ちゃんと明日は遊園地にも行くようにする!!だから帰ってきてくれライ!!」

「な、何を言ってるのレイ。わ、私は正気だよ。ど、どうしたのレイ?」

少し緊張した声でライは言う。

「お前気づいてないのか?今まで何をしてたのかも分かってないみたいだな・・・」

俺はライから離れる。

ちょっと残念そうな顔をしているような気がするが気のせいだろう。

「周りを落ち着いて見てみろ。」

ライは言われた通りに周りを見る。

「えっ!?何これ!!」

自分の部屋の状態にやっと気づくライ。

「セイン!!何やってるの!?」

セインは未だにてるてる坊主を量産している。

「セイン!セイン!!」

「・・・・・・・・・」

ライが声をかけても反応がない。

「レイどうしよう!!セインが!!」

しょうがない・・・・・ライでうまくいったし、セインもうまくいくだろ。

俺はセインに近づき、ライと同様に抱きしめた。

「レ、レイ!?」

どうやらセインも元に戻ったらしい。

いやぁ良かった、良かった。

「な、な、何をしてるの!!」

ライが叫び声を上げながら俺とセインを引き離す。

「男の人に初めて抱きしめられた・・・・・・」

「セイン!!大丈夫!!」

「えっ!?私はいつも通りだよ?」

お前も同じか・・・・・

「セイン周りを見てみて。」

ライにそう言われセインは自分の周りを見てみる。

「うわっ!?何でてるてる坊主がこんなにあるの?」

「私も分からない・・・幽霊の仕業かな・・・・」

「・・・・・・」

俺は頭を抑えながら二人のアホな会話を聞いていた。

「・・・・二人とも正座!!!」

俺の大声に二人は慌てて正座する。

「お前たちは自分たちが何してたか分かってるのか？」

「「いいえ・・・・・」」

そんな二人に俺は今日の事を説明した・・・・・

「「ごめんなさい・・・・」」

「まぁ、分かってくれればいいが・・・・」

このてるてる坊主どうするんだよ・・・

取り敢えず大きなゴミ袋に無理やり詰めた。

袋、５個分になったが・・・・・・

紙どんだけ無駄にしたんだよ・・・・

「ねぇ、レイ・・・・」

ライがおずおずと俺に話しかけてくる。

「明日、遊園地行くよね・・・・・？」

「・・・・行くよ。」

今回は少なくとも俺にも非があると思ってるしな。

「・・・・本当に？」

「ああ。」

「・・・・絶対？」

「ああ。」

「・・・・嘘じゃない？」

順番に俺に聞いてくる二人。

「本当だ！！明日は必ず行く！！だから今日はおとなしくしとけ！！」

「「うん・・・！！」」

二人とも嬉しそうだな。

明日は覚悟するか・・・・・・

「ねぇ、レイ・・・」

「？どうしたんだセイン。」

モジモジと俺に話しかけるセイン。

「あの・・・・・ありがと・・・・・」

「どういたしまして・・・・さてリビングに出て星達にも挨拶しないとな。」

「「うん！！」」

こうして三人は部屋を出た。

「・・・・・どうだ？」

『能力正常・・・・ＡＭＦ展開可能・・・・スキル魔力吸収発動可能・・・』

「どうやらうまくいったようだ。」

男、クレイン・アルゲイルはディスプレイに浮かんでいるデータを眺める。

「さて、前の教訓を生かし、魔導師の弱点となるスキル、魔力吸収・・・どこまで使えるか。また実験をしてみるか・・・・」

そしてクレインは違うデータを見る。

「黒の亡霊・・・その場で転移するだけでなく、特殊なバリアと頑

丈な装甲に守られた特殊な能力。魔力ランクはS＋ほど・・・これほどの相手はいないだろうな。」

クレインはニヤリと笑みを浮かべる。

「どのくらい彼に通用するか楽しみだ。プロト2この魔力をたどって彼を殺せ。」

『イエス、マスター。』

そう言われた女性、プロト2は入っていた生体ポットから出てくる。

「さあ、楽しませてくれ黒の亡霊よ・・・我が望みを叶えるために！！」

おとこはその場所で笑い続けているのだった・・・・・

「さて、話はこれくらいじゃ。それではお主等にはリリカルなのはの世界に転生してもらう。」

「リリカル？」

「なのは？」

「おや？知らないのかの・・・・まぁ行けばわかるじゃろ。」

「嫌そんなこと言われても・・・・」

「なんだか不安・・・」

ここは零治達が転生する前にいた場所。

そこに新たな二人の男女がいた。

「それでは特典として３つお主達の願いを叶えてやろう。ただしわしに叶えられる願いだけじゃ。」

「えっと・・・」

「いきなり言われてもな・・・」

二人ともいきなりの展開に驚く。

そして男が口を開く。

「えっと、一つ聞きたいんだけど、俺たち意外に転生者っている？」

「おお、おるぞおるぞ。ただし別の世界のリリカルなのはの世界じゃがな。」

「・・・・・その人たちの名前は？」

「名前か?確か・・・・佐藤考輔と神崎大悟と言ったはずじゃの・・・」

その名前を聞いて二人は驚く。

「おにい・・・ちゃん?」

「何で考輔が・・・」

「ん、知り合いかの?・・・・・そうかその娘は零治の妹か。」

「零治って?」

「ああ、転生した世界で名乗っている名前じゃよ。有栖零治と名乗ってるよ。」

「有栖・・・零治?」

「あいつ生きてるのか?」

「そうじゃ。・・・・・それで願いはどうするのじゃ?」

神様はきりが無いと思い、無理やり話を切り替えた。

「願いか・・・・」

男の方が再び考え始める。

「じゃあ、まず一つ。俺と加奈ちゃんを考輔のいる世界に転生させ

てくれ。」

「・・・・二人は無理じゃな。一人なら問題ないが・・・」

「なら私も同じお願いでお願いします。」

「・・・・分かった、それならＯＫじゃ。それでは二つ目の願いはなんじゃ？」

「二つ目は転生した場所を考輔の近くの場所にしてくれ。」

「だが二人は・・・・」

「私も同じで！！」

神様が話そうとしたところを女の子が遮る。

「・・・・分かった、そうしよう。それでは最後はどうするのじゃ？」

「・・・・その前に聞きたい。転生した時の年齢ってどうなるんだ？」

「年齢は物語の始め、８歳になるはずじゃ。」

「なら願いは考輔と同じ年齢にしてくれ。」

「私もそれで・・・・」

「・・・・了解じゃ。」

そう言って神様はなにやら呟き始める。
しばらくたち神様が口を開いた。
「完了じゃ。転生したとき、零治と同じ１４歳で転生されるじゃろ。」
「そうか・・・」
「ありがとうございます・・・」
女の子は神様に頭を下げた。
「構わん。わしが好きでやっていることじゃ。・・・しかし零治と同じく欲がない奴じゃの。」
「あの・・・兄はどんな願いにしたんですか？」
「ああ、零治はまだ１回しか願いを言っておらんよ。」
「「えっ！？」」
「もう一人の方はチートな能力を頼んだのじゃが、零治は時間をかけても出てこなかったから保留にしたのじゃ。まぁ一回は使ったのじゃが・・・」
「そうなんですか・・・なんか兄らしいです。」
少女から笑みがこぼれる。

男は逆にあきれているが。

「それじゃあ、デバイスを渡すぞ。」

「「デバイス？」」

「・・・説明面倒じゃの・・・デバイスはあっちの世界の武器みたいなものじゃ。各自好きな能力を考えておくが良い。」

「戦いがあるのか！？」

「それはお前たち次第じゃ。関わらなければ戦いをせずにも済むじゃろ。ただし零治は戦いに巻き込まれているがの・・・・」

「そんな・・・・」

「考輔・・・・」

二人に重苦しい雰囲気が流れる。

「まぁ、零治なら大丈夫じゃ。あ奴には頼もしい仲間を大勢居るしの。」

二人ともその話を聞いて安心する。

「おっと、もう時間じゃ。すまんが早速行ってもらうぞ。まず着いたらデバイスの能力を考えておくことじゃ。」

「ってデバイスは？」

「おっと、こりゃすまん忘れておったわ。」

神様は男に言われ、慌てて懐から首飾りと腕輪を取り出した。

「首飾りをお主に。」

首飾りを少女に渡す。

「腕輪はお主に。」

腕輪を男に渡した。

「首飾りの名前はエタナド。」

『よろしく頼むぞマスター。』

「よ、よろしく・・・」

「腕輪はレミエル。」

『よろしくなの。』

「あ、ああ、よろしく頼む。」

二人はそれぞれデバイスがしゃべることに驚く。

「今度こそ大丈夫じゃな。それじゃ、頑張れ若人。」

手をかかげる神様。

二人の目の前が真っ暗になった・・・・

「まさか零治の知り合いじゃったとはの・・・・さてあいつがどんな表情をするか楽しみじゃの。」

神様は誰もいないその場で呟いた。

こうして佐藤考輔の妹、佐藤加奈と考輔の親友加藤桐谷は考輔のいるリリカルなのはの世界に転生した。

## 第２０話　暗躍する影、新たな転生。（後書き）

とこんな感じでシリアスが少々。

新たなオリキャラも出てきましたし、設定をまた作りたいと思います。

（恐らく、ゴールデンウィーク編が終わったら）

次回は遊園地のお話。

次回もよろしくお願いします。

## 第２１話　有栖家遊園地に行く、ＧＷ最大の厄日（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

早めに投稿できました。

遊園地のお話です。

それではどうぞ。

# 第２１話　有栖家遊園地に行く、ＧＷ最大の厄日

「ここが！！」

「そう、ここが遠見ハイランドパーク！！」

「凄いっス！！感動っス！！」

入口で騒ぐ三人。

我が有栖家元気っ子３人組だ。

「すごいなこいつら・・・・」

「朝からテンションが高すぎる・・・」

「またあの悪夢が・・・」

ノーヴェの呆れた様子と違い、明らかにテンションが低い二人。

まぁ気持ちは分かるが・・・・・

しかもその負担はセインとウェンディが加わり、更に増えることは目に見えている。

フェリアとノーヴェがいる分、幾分かはマシになるだろうが・・・・

「まぁ今日一日頑張ろうぜ・・・・・」

俺はテンションの低い二人を励ますのだった・・・・・・

「まずはあれに！！」

「おお！！」

「いいっスね！！」

「ちょっ！？待て、いきなりか！！」

だが、俺を無視し3人はさっさと行ってしまう。

今回の目玉、ゴットスライダーに・・・・・・

「レイ～！！早く～！！」

「やっぱり俺も乗るのね・・・・・」

「レイ、私が乗りますか？」

星が俺に聞いてくる。

「いや、今回は俺が行くよ。嫌でも連れ回されるんだし・・・・」

「・・・・分かりました。」

俺の言ったことが理解できたのか、星は素直に引き下がる。

「ノーヴェとフェリアはどうする?」

「私も行く!!」

「私は今回はいい。」

ノーヴェは乗り、フェリアは乗らないそうだ。

「レイ~!!!」

青色のお姫様がご立腹みたいだし早く行くか・・・・

「ああ!!面白かった!!」

「うん!最高だったよ!!」

「あのスピードはたまらないっスね~!!」

興奮しながら3人は出口から出てくる。

「ああ~凄かった。」

「ふ、ふんあれくらいじゃ大したこと無いな・・・」

言葉が硬いぞノーヴェ・・・・

「じゃあ星達の・・・」

「もう一度乗ろう！！」

「そうだね！！」

「賛成っス！！」

「えっ！？」

やっぱりそうなったか・・・・・

ノーヴェの驚きを無視し、３人はまた並び始める。

「レイも～！！」

「悪い、ちょっと休憩を・・・・」

「大丈夫っス、グロッキーになっても私がおんぶするっス。」

「わ、私も手伝うよ・・・」

そう言う問題じゃないんだよウェンディ君、セイン君・・・・

「じゃ、私は・・・・・」

逃げようとするノーヴェ。

「ま、待てノーヴェ！！」

「い、嫌だ！私は乗らないぞ！！」

「違う！！伝言を頼みたいんだ。」

「伝言？」

「多分今回も前と同じになりそうだから星達で好きに遊んでいいよって言っておいてくれ。」

「・・・・お前は？」

「こいつらの面倒。昨日約束したし、相手してやるつもりだよ・・・」

そう言って3人を見る。

嬉しそうに喋り合っている3人。特にライとセインは乗れたことに本当に嬉しそうだった。

「それにあの笑顔を見たら少しは疲れは取れるさ。」

笑顔で俺はノーヴェに言った。

「そうか・・・悪いな、姉と妹をよろしく頼むな。」

「ああ、何かあったら連絡してくれ。」

「了解。」

そう返事をして、ノーヴェは星たちの所へ戻って行った。

「レイ～！！！」

「さて、有言実行だな。」

俺はまた気合を入れ直して3人について行った・・・・・・・・

「そうですか・・・」

予想通りでした。レイならそう言うと思ってました・・・・

無理をしなきゃいいんですけど・・・・

「星・・・」

やはり夜美も同じことを考えていたみたいです。

「大丈夫ですよ。せっかくだし私たちも楽しみましょう。」

「そうか・・・そうだな。せっかくレイが楽しんでこいって言ってくれたんだ、楽しむか。」

夜美も切り替えたのか声を張り答えました。
前は絶叫系ばかりになってしまったのでここはレイの言葉に甘えましょう。

「フェリアは何か乗りたいものありますか？」

私はノーヴェと一緒にパンフレットを見ているフェリアに聞きました。

「これ・・・・・・・・」

そう言って指を指した場所は動物ふれあい広場。

・・・正直いつもクールなフェリアには似合わない組み合わせと思ってしまいました。

「ここで・・・いいのか？」

夜美もどうやら同じみたいです。

「ああ・・・ひよこさん・・・触ってみたい・・・」

少し頬を赤く染めながらフェリアは消えそうな声で言いました。

ノーヴェ、携帯のカメラで撮るのやめなさい。

気持ちは分からなくも無いですが・・・・・・

それくらいフェリアの仕草は可愛かったです。

「ああ、じゃあ行くとしようか。」

私たち夜美の声でふれあい広場に向かいました・・・・・

「今度はここ！！」

そう言って指さしたところは大きな滝から乗り物が落ちてくる、フォールマウンテンだ。

簡単に言えばディズ〇ーランドにあったスプラッシュマウンテンだと思ってくれればいい。

むしろそっくりだ。

「いいね、いいね！！これにしよう。」

「いや～あそこから落ちたら気持ちよさそうっス。」

「また絶叫系・・・・・・」

あの後、合計3回もゴットスライダーに乗った3人娘。

早くもグロッキーになりそうな俺にまた試練がやって来た。

「どうしたの？レイ。」

「いや、また絶叫系かなって・・・・・」

ライが俺に声をかけてきたので望み薄だけど、遠まわしに言ってみた。

「何言ってるのレイ、当たり前じゃん。」

「そうだよ、遊園地に来んだから絶叫系を楽しまなくちゃ。」

「そうっス、それが常識っス！！」

いつからそんな常識が出来たんだよ・・・・

まぁ予想通りの結果ということで気合い入れていかないと・・・

マジでウェンディにおんぶされたら恥ずかしさのあまり、自殺しそうだもん。

「さぁいっくよ～」

「「オオー（っス）！！」」

「おおー・・・・」

でもこのテンションにはついていけない俺だった・・・・・・

「可愛い・・・・・・」

それには私も納得ですが・・・・・・

恐る恐るひよこを持つフェリア。

ものすごく和みます・・・・

ノーヴェ激写するのやめなさい！

「しかしこういうのもいいな。」

「同感です。前に来たときはライに引っ張られ、絶叫系だけでしたから。」

これもレイのおかげなのですが、レイは大丈夫でしょうか・・・・・・

「次はあれっス！！」

「うん、そうしよう！！」

「早く、早く！！」

「頼む・・・少しは・・・休憩を・・・」

フォールマウンテンも結局3回も乗った。

何で今日はすいてるんだろうか・・・・

余りにもスムーズに乗れすぎている。

頼む!もっと混んでいてくれ・・・・

俺の思いもむなしく、大きな山の中をグルグル高速で回るマウンテンスライダーにすぐ乗る羽目になった・・・・

「はぁ面白かった。」

「あの3Dというのは迫力があって面白かった。」

ノーヴェとフェリアも満足そうです。

ふれあい広場を後にして私たちは半分ほど回ることができました。

絶叫系は避けてきたのでレイたちと遭遇することはありませんでしたが・・・・

レイは大丈夫でしょうか？

そろそろお昼ですし連絡を・・・・

と思っていたときに電話が震えたので私は直ぐに出ました。

『もしもし～星？』

「ライですか。今どこにいます？そろそろお昼にしようと思ったのですが・・・」

『今、マウンテンスライダーの近くのベンチ。』

「・・・・ならこっちに来てください、こっちの方がお店が多いのでこっちの店でご飯を食べましょう。」

『そうしたいんだけど・・・・』

なぜが言葉を濁すライ。

『レイが少しグロッキーになっちゃって今休憩中なの。』

「レ、レイは大丈夫ですか！！！」

『ちょっ！？大声出さないでよ～。普通にしゃべれるし、今休んでるから大丈夫だよ・・・』

「今すぐそっちに行きます！！そこを動かないで！！！」

『ちょっ！？星・・・』

私は無理やり電話を切り、携帯をしまいました。

「どうしたんだ星?」

「レイ達を迎えに行ってきます!!みなさんはここで待っていてください!!」

返事も待たず、星はレイの元へ駆けていった・・・・・・

「あ~何か星妙に焦ってたな・・・・」

「いや、ライの説明が悪かったと思うよ・・・」

セインに呆れた様子でライに言う。

「ほら飲み物ですよレイ兄、はい、あ~ん。」

「一人で出来るから止めろ・・・・」

ベンチに寝ながら俺は文句を言う。

「ぶ~つまんないっス。せっかくレイ兄で遊べると思ったのに・・・・」

「お前な・・・・・」

怒りたいがそんな元気がない俺。

「ウェンディ、私もやる～」

「ウェンディとライだけずるいよ。私もやりたい！」

3人で飲み物を取り合いになる。

そんな様子を見て俺は一人小さく呟くのであった。

「星、早く来てくれ・・・・・・・・・」

本当に今日は厄日だな・・・・

「レイ！！」

私が来たときには、何故かレイはライに膝枕され、その両端にセインとウェンディがいました。

「ライ、そろそろ・・・・」

「え～もう？・・・・・仕方がないなぁ。ハイ、セイン。」

そう言ってライはセインと場所を変えました。

・・・・・今度はセインがレイに膝枕を。

「どうですか？」

「頼むからやめてくれ・・・・・」

レイは否定することを言っていますが、まんざらでもない様子・・・・・

一気に私の心は氷点下まで下がりました。

「レイ・・・・・・・・？」

私は怒りを隠し、レイに声をかけました。

「レイ・・・・・・・・？」

この響きは・・・・・

俺は声のした方を見てみる。

「・・・・・何をしているのですか？」

これはヤバイ・・・・

他の3人もただ事ではない星の雰囲気を感じているみたいだ。

「レイ・・・・おはなし・・・しますか?」

「いや、でもレイは・・・・」

ギロっと星に睨まれ、何も言えなくなるセイン。

「だ、ダメだよセイン。こうなった星は止まらないよ・・・・落ち着くまで待つしか・・」

「じゃあ、お腹も減ったしご飯にするっス。」

「いいですよ・・・・長くなりそうなので、皆さんと一緒に先に食べていてください・・・」

「えっ!?いいの?」

「ええ、3人ともお腹減ったでしょ?」

「あ、ありがとうございます星!!ほら行こう!!」

「ま、待てお前ら・・・・」

「レイは駄目ですよ・・・・」

セインの腕を掴もうとした俺の腕は星によってつかまれる。

「じゃあ頑張ってレイ・・・」

「ごめんね、レイ・・・」

「ファイトっス、レイ兄！！」

さっさと行ってしまう三人。

ウェンディに関してはグッとガッツポーズまでされた・・・・・・

「さて、それじゃあ始めますか・・・・・・？」

星がニヤリと笑いながら言う。

ものすごく怖いです星様・・・・

取り敢えず俺はこう言うことにした。

「不幸だぁ～～～～～～！！」

俺はとある主人公の口癖を言ったのだった・・・・・・

「到着・・・・目標索敵・・・・・・・・・・発見。場所、遠見市

ハイランドパーク・・・・」

遠見市よりかなり離れた上空。

浮かんでた少女は目的地に向かって飛んで行った。

「ここは？」

「分からない、どこかの森みたいだが・・・・・」

気づいたら二人は何もない森にいた。

「取り敢えず、ここの場所を確認しよう。まずはどこか目印になる場所を・・・・」

そう言って周りを見渡す、桐谷。

そこに・・・・

「遊園地？」

遠くに観覧車が回っているのを見つけた。

「取り敢えずあそこを目印にして進もう。その間にデバイスのことも詳しく聞かないとな。」

『お任せなの。分かる範囲でならなんでも答えるの。』

「ありがとうレミエル。」

『私もです。なんなりとご質問を・・・』

「うん、ありがとうエタナド。」

こうして二人もハイランドパークへと進む。

## 第２１話　有栖家遊園地に行く、ＧＷ最大の厄日（後書き）

とこんな感じで。

次がバトルかその直前となると思います。

これが終わればマテリアル娘と魔導師組の出会う話まで持っていけると思います。

新たな転生者についてですが、この二人は零治の親友のポジションとブラコン気味の妹のポジションで話を進めようと思っています。

ここからバトルものにはする気はないので、これからもよろしくお願いします。

## 第２２話　遊園地、巻き込まれた星（前書き）

ちわっすｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

また一日空いてしまった。

申し訳ないです・・・

# 第２２話　遊園地、巻き込まれた星

「・・・・・・・」

「すみませんでした！！」

俺に頭を下げて謝る星。

あの後しっかりおはなしをくらいました・・・・

で、落ち着いてから経緯の説明をし、今の状況が出来たのだった。

「早とちりしやがって・・・イテテ。」

「本当に・・・すいませんでした！！！」

一生懸命謝ってるな。

「ク・・・ククク。」

「レイ？」

「アハハハハハハハハ！！」

「レ、レイ！何がおかしいんですか！！」

「いやだってな、余りにも星が一生懸命謝るもんだから・・・ククク。」

「えっ！？」

「俺はそんなに怒ってないよ。心配してくれてありがとな。」

「ええっ！？」

まだ事態を飲み込めていない星。

ポカンとした顔で俺を見ながら固まる。

「さて、俺たちも飯を済まそうぜ。」

「え、ええ！？」

分けの分からなくなっている星の手を引いて、近くにあったファーストフード店に入った。

「全く、レイにも困ったものです。」

文句を言いながらチーズハンバーガーをほおばる星。

「悪かったって。でも星にも非があるよな？」

「ううっ・・・・意地悪です・・・」

それぐらいで済んで感謝して欲しいくらいなんだけど。

なのはには負けるだろうが、星のおはなしも普通の人なら精神を折るぞ・・・・

「さて、これからどうする?」

「みんなと合流しましょう。あの3人を夜美に任せるのは・・・・」

「・・・・たまには二人で遊ばないか?」

「えっ!?」

「星、ここ最近は一人で頑張ってばかりだったし、少しでも楽しんでもらおうと思ってさ。」

本当に星には一番感謝してる。星がいなかったら成り立たなかったところもあっただろうし。

たまには息抜きぐらいして欲しいんだけど・・・・

これで少しでも息抜きできるなら夜美には犠牲になってもらおう。
それにノーヴェとフェリアもいるだろうし大丈夫だろう。

「嫌か?」

「い、いえ!いきなりだったのでビックリしてしまって・・・・」

「で、どうする?」

「行きます・・・・行きたいです!!」

星は力強く答えた。

「そうか、なら早く行くか。」

「ハイ!!」

こうして俺は星と二人で遊園地で遊ぶこととなった・・・・・

「レイ、これ・・・・ですか?」

ここは遊園地の端っこにある不気味な病院。

まぁお化け屋敷だな。

俺たちはあの後順番に回ることにした。

既に星は半分ほど回っていたので、その続きだ。

しかしこのお化け屋敷はすごいなぁ。規模が大きく、小さな市民病院と同じ大きさぐらいあるぞ・・・

「ああ、戦慄病院だってさ。」

「戦慄・・・・病院・・・・」

少し顔が青ざめているような・・・・・

そう言えばホラー映画を借りてたときに星はその場にいなかったような・・・

もしかして。

「星、怖いか？」

「こ、怖くなんてありませんよ！！さぁ早く行きましょ！！」

強気な発言をしながら星は入っていく。

足と腕が一緒に出てるぞ・・・・・

「大丈夫かな・・・・・」

まぁ途中で抜け出せるし、問題ないかな。

俺も星を追って中に入っていった・・・・・

「ううう・・・・・」

「星、あまり強く掴まれると動きづらいんだけど・・・・」

入ってすぐ、ここの雰囲気にビビッた星が早速俺の腕に捕まってき

た。

胸の感触や星のにおいなど悪くはないんだが痛いです。

力強すぎ。

「だ、だって・・・・・」

「出るか？」

「こ、怖くなんてありません！！」

こりゃあ、いくら言っても聞きそうにないな。

俺は諦めて奥にへと進むのだった・・・・・・

「えっぐ、えっぐ・・・・・・」

「星出ないか？」

「まだ、まだ大丈夫ですよ・・・・・」

もう半泣きじゃないか。

しかしクオリティが高いよなこのお化け屋敷。

這いずりよってくる患者とか、いきなり追っかけてくる医者とかリアルすぎて俺もビビッたわ・・・

しかもまだ半分以上もある。

「星、やっぱり出ないか？ここでないと当分外に出れないよ。」

「だ、大丈夫・・・・ですよ・・・・」

これ以上先に進んだら本当に泣き出すかも。

仕方がない・・・・

「やっぱり出よう。」

「で、でも私は・・・」

「俺が限界なんだ！ほらさっさと。」

「あっ・・・」

俺は星の手を掴み、無理やり引っ張る。

「ありがと・・・」

星が何か言っていたような気がするが気のせいだろう。

こうして俺と星はリタイアしたのだった・・・・・

「で、正直に言うと？」

「・・・怖かったです。」

俺達は戦慄病院から離れて近くのカフェで休憩していた。

「まぁ、あれは怖いよな。這いずり寄ってくる患者とかマジでビビッたもん。」

「もうあそこには行きたくありません・・・」

ちょっとトラウマになったか？

「俺は星が頼ってきて嬉しかったけどな。」

「えっ？」

「だってお前なんでも大丈夫って言ってなんでも一人でこなすじゃん。たまには俺も頼って欲しいんだけど。」

「ですが本当に私は一人で・・・」

「それじゃあ余計に気を使っちゃうもんなの！！これからはたまには俺に頼るようにしろ。これ、決定事項な！！」

俺は星の言葉も聞かず、無理やり言った。

「で、ですが・・・」

「決定事項!!反論は受け付けん!!」

「・・・分かりました。これからはレイを頼るようにします。」

「でもたまにな、たまにで頼む。」

「さぁ?どうしましょうか・・・・」

笑顔で俺に言う星。

「そんなことより次のアトラクションに行きましょう!」

今度は俺が星に手を引っ張られ、カフェを後にした。

「うわぁ!!」

観覧車の上から下の景色を眺める星。

時刻は夕方の１８時。

あの後も俺は星と二人で行動した。

なんども夜美から電話があったが、電源を切って出ないようにしていた。

すまん！！夜美。今度必ず埋め合わせする。

「レイあっちに！！」

「どれどれ・・・」

星が指さした方向。

そこには海鳴市が見える。

海の夕日がとても綺麗だった。

「綺麗です・・・」

「ああ・・・・」

俺と星は、言葉少なく夕日に見惚れていた。

「来てよかったな。」

「はい・・・」

俺はふと星を見た。

夕日に照らされた星はとても美しかった・・・・・・

『マスター！！！』

ラグナルの声に俺は我に帰る。

「目標発見・・・・・ターゲットロック。」

「戦闘機人!?」

俺が目を向けた先には、アンノウンと似ている女の子が浮いていた。

その女の子は前と同じように手からブレードを展開した。

「ブレードブラスター・・・・・ファイア。」

ブレードの先を俺たちに向けて魔力弾を発射してきた。

「!ラグナル!!」

『なんちゃってプロテクション!!』

俺は咄嗟にリミッターを外し、ラグナルに指示を出した。

俺の魔力の壁に相手の魔力砲が当たる。

『マスターやっぱりキツイです。』

「すぐに脱出する。それまで持たせろ!!星、デバイスは?」

「大丈夫です。持ってきてます。」

「よし出るぞ。ラグナル!」

「ルシフェリオン!」

「「セットアップ！！」」

二人はそれぞれ自分たちのバリアジャケットを纏う。

そして二人は観覧車の入口から外に出た。

その直後、なんちゃってプロテクションは壊され、俺たちのいた観覧車は吹っ飛んだ。

「レイ、ブラックサレナは？」

星の言葉通り、零治はブラックサレナではなく、襟のたった白いコートを着ている。

「今回はパスだ。どこで誰が見ているか分からんからな・・・」

「？」

理由の分からない星が頭をかしげる。

そんなことより・・・・

「ラグナル、リミッターかけてたよな？」

『ええ、リミッターは完全でした・・・なぜ気づかれたのでしょうか？』

「分からん、何か前に奴に手掛かりでも与えたか？」

『いえ、そんなこと無いはずですよ。それにあいつは変態マッドが持っていったじゃないですか。』

そうだった。でも何でだ？

管理局員にも一度もバレたことがないのに・・・

「ＡＭＦ起動。」

『マスター、また！！』

「ああ、面倒だな・・・星、ＡＭＦだ！魔法が使いづらくなるからむやみに使うなよ。」

「ええ。」

既に体が少し重そうに見える。

「今度はどのくらいだ？」

『８０％ですね。前回と同じぐらいです。』

「この姿だとどうだ？」

『この姿はブラックサレナより魔力を使わないのでそれほど問題はないです。ただ、魔力を込めた技やオーバーリミッツは普段よりきついですね。ですがカードリッジをうまく使いながら戦えば問題無いと思います。』

「・・・・あれはだるくなるからあまり使いたくないんだけど。」

『文句を言ってる場合じゃありません！！この姿ということはご自身の姿を晒すことになります。ブラックサレナが誰かバレなくても、マスターが魔導師だってバレてしまいます！！』

「だよな・・・っていうか星、結界張ってくれ！！これじゃあ普通の人にもバレバレだ。」

「は、はい！」

慌てて星が結界を張ってくれる。

「ＡＭＦでキツイと思うが頑張ってくれ。」

「はい！」

よし、これで準備はＯＫかな。

フェリアたちには魔導師だとバレるのはもう仕方がないだろう。

星とブラックサレナに面識があるって思われる方が問題だし。

管理局は・・・・為せば成るだろう。

『ダメだと思うんですけど。』

「心を読むな。それより何でアイツ仕掛けてこないんだ？」

「そういえば・・・」

俺たちが空に出てから相手はＡＭＦしかしていない。
今も不気味に俺たちの様子を見ている。
何を企んでいるんだ？
「取り敢えず仕掛けます。」
「そうだな。じゃあ行くぞ！！」
俺は腰にある剣に手をあて、いつでも抜刀出来るようにする。
「まずは私から。行けバイロシューター！」
星お得意の追尾弾が相手を襲う。
「スキル、魔力吸収・・・・」
相手は自分の剣を追尾弾に向ける。
何をする気だ？
「発動。」
直撃するはずだったバイロシューターは相手のブレードに吸収されてしまった。
「え！？」
「ラグナル！！」

『魔力反応がありません。考えられるのは違う場所に飛ばしたか、吸収したか・・・』

「吸収!?」

それって魔導師の天敵じゃないか!!

「バイロシューター・・・・・行け・・・」

相手はブレードの先から星と同じバイロシューターを放ってきた。

「何で!?」

「星!!」

アイツ、ぼーっとして!!

「ラグナル!!」

『ソニックムーブ!!』

俺は即座にライが使うソニックムーブを発動。

星の目の前に立ち、抜刀の構えをとる。

「ラグナル、カードリッジ!!」

『カードリッジロード!!』

剣の鞘から薬莢が一つ飛び出す。

「くらえ、裂空刃!!」

俺は見えないほどの速さで剣を振り、発生させた真空波でバイロシューターを全て撃ち落とした。

「レイ、ありがとうございます・・・」

「ボーッとするな!これは実戦だ。下手したら殺されるぞ。」

俺の言葉に星の顔は引き締まる。

「俺が突っ込む。相手の技がまだはっきりしないからまだバイロシューター以外使うな。」

「分かりました。」

「ラグナル。」

『分かってます、ソニックムーブ。』

俺はまたソニックムーブを使い相手の前に移動する。

「魔神剣!」

俺は奴に衝撃波を放つ。

「魔力吸収・・・」

やはりさっきと同じで簡単に吸収されてしまった。

「バイロシューター！」

すかさず星が俺の言った通りにバイロシューターを放つ。

だが・・・・

「魔力吸収・・・」

やはり同じ剣で吸収されてしまった。

ん？剣で？

「ラグナル・・・」

『ええ、どうやらあの剣でないと吸収出来ないのでは？』

そうだったらいくらでもやりようはある。

だがそんなに簡単なのか？

「取り敢えずやってみるか・・・」

『ですね。』

「星、もう一度バイロシューターを頼む。」

「了解・・・です！！」

相手から飛んできた魔神剣を躱しながら答える。

「行って、バイロシューター！！」

再び星がバイロシューターを放つ。

「よし、行くぞ！！」

『イエス！！』

「風牙・・・絶咬！！」

高速の踏み込みで高速の一突きを相手に食らわせる。

だが、相手は無言で俺の一撃を紙一重で躱し、バイロシューターを吸収した。

「だが、まだだ！！」

『カードリッチロード！！』

今度は二つの薬莢が鞘から飛ぶ。

「魔王炎撃波！！」

剣に炎を纏わせ、左から右になぎ払った。

これは予想できなかったのか相手はもろに食らう。

「これで！！」

相手は空から地上に落ちていくが直ぐに踏みとどまる。

「損害４０％・・・作戦続行可能・・・」

「まだ動けるか・・・」

『ＡＭＦの所為でやっぱり威力が下がってるみたいです・・・」

「本当に面倒だな。」

「レイ、どうします？」

「作戦はそのままで行く。俺は今出せる最大の威力の技を使う。それで倒せなかったら星がルシフェリオンブレイカーでしとめろ。」

「分かりました。」

俺たち二人は相手に目を向けて構える。

「バイロシューター・・・」

「バイロシューター！！」

二人で双方バイロシューターを放ってくる。

だが・・・

「数が多い！？」

相手の放ってきたバイロシューターの数はかなり多く、3倍以上あるほど多かった。

「星!!」

俺が星を援護しようとしたときに今度は相手から攻撃してきた。

「ハイブレード・・・」

さっきのブレードよりも長く分厚いブレードで俺に斬りかかってくる。

「クソっ、邪魔だぁ!!」

俺は剣で受け止めながら声を荒らげる。

だが、なかなか離れることができず時間がかかる。

「クッ、数が多い・・・」

星も一生懸命対応するが、数が多く手間取っている。

「どけろって!!裂壊桜!!」

剣を突き上げ、発生した衝撃波を敵にぶつけて吹き飛ばす。

だが、相手もただ吹き飛ばされただけでなく吸収しながら吹っ飛んでいた。

「星!!」

それはソニックムーブで星の所へ行き、前と同様に裂空刃でバイロシューターを吹っ飛ばした。

「大丈夫か？」

「私は大丈夫です・・・レイ！！」

星も声で敵の方を向く。

敵は大きなブレードの先に魔力を集中していた。

「やばっ！！」

「目標・・・ロック・・・・・ギガブレードブラスター発射。」

最初に放ったブレードブラスターよりも大きく威力のある砲撃を発射した。

『これは！！マスター、アイツ、マスター達の魔力を吸収した分も込めて発射してます。』

マジか！！それじゃあ、食らったらただじゃ済まない。

「星！！」

俺は星に触れ自分のレアスキルを使う。

空間転移。ブラックサレナよりも距離が跳べないが、それでもこれなら！！

発動させた俺は敵の魔力砲が直撃する前になんとか回避することが出来た。

「大丈夫か星・・・」

「ええ、ありがとうございます。」

本当に紙一重だった。

「目標・・・回避・・・再度ギガブレードブラスター。」

なっ!?そんな早く撃てるのか?

転移し終えたばかりで油断していた・・・

俺はすかさず離れた星に近づく。

『ダメですマスター、間に合いません!!』

「クソっ!!ラグナルカードリッジ!!」

そう言って鞘から薬莢が3つ飛び出す。

「星!!」

星を突き飛ばし、剣を構えた。

「覇道・・滅封!!」

巨大な炎の衝撃波で敵の砲撃を相殺しようとする。

「はあああああ！！」

だが、その衝撃波でも完全に敵の砲撃を防ぐことが出来ず、少なからずダメージを受けてしまった。

「クッ・・・」

「レイ！！このぉ！！」

ブラストファイアーで敵を攻撃する星。だが同じように吸収されてしまう。

「返す・・・ブラストファイヤー。」

相手は星より大きいブラストファイヤーを放つ。

「くっ、プロテクション。」

プロテクションを張った星だが、それも破られ、攻撃が星に直撃する。

「星！！」

星はそのまま下に落ちていく。

「ギガブレードブラスター・・・」

「またっ！？」

『マスター！！』

俺は星のことで気をそらしたため反応できない。

「クッ、まずい！！」

だが、それも遅く、俺に砲撃が直撃・・・・

「・・・・・・あれ？」

だが俺には砲撃は届いておらず、消えていた。

ふと前を見ると俺の前にガンダムのビットみたいな小型機がシールドを作っていた。

「これは？」

「私の妖精よ。」

声の方を見ると星を抱いている女の子がいた。

その姿はＴＯＷに出てくるエステル・・・って！！

「お前、加奈！？」

「久しぶり兄さん。」

笑顔で答える加奈。

何でお前がこの世界に？

「目標増加・・・・任務続行。」

ブレードを今度は加奈に向ける。

まずい！！

「加奈！！」

「・・・どんなモノでも打ち貫けぬモノなどない！！」

構えている敵に突っ込む赤い装甲の姿・・・

あれは・・・・

「アルトアイゼン！？」

アルトアイゼンは右腕のステークで敵のブレードを貫いた。

「ブレード破損・・・・修復開始。」

「させるか！クレイモア行け！！」

両肩部のハッチから大量のベアリング弾が・・・・

ってベアリング弾！？

「思いっきり実弾じゃないか！！」

「魔導師だからって魔力だけに頼るのはいただけないな・・・」

この声って・・・

「お前、桐谷か!?」

「そんなことより止めを早く!!」

桐谷に言われた通り、

『マスター彼の言うとおりです。今なら魔力吸収もできないはず・・・」

「よし、ならたたみかけるぞ。オーバーリミッツ!!」

『発動!!』

そう言って俺の体は青い光に包まれた。

『ソニックムーブ。』

即座に相手の裏へ移動。

「一気に決めるぞ!!」

『イエス、マスター!!』

「全てを斬り裂く!!」

居合から炎を纏った剣で横に薙ぎ払う。

「獣破轟衝斬！！」

剣を持ち直し勢いよく斬り上げた。

「損害９５％・・・・行動続行不能・・・」

今度こそボロボロになり遊園地の近くにある湖に落ちていった。

あれならもう挑んで来ないだろ。

って！！

「そうだ、星！」

俺は慌てて星の所へ飛んでいく。

「星！！」

「うるさいわよ！！この子なら無事。」

見てみると星の傷を加奈が治していた。

回復魔法？

「・・・・レイ？」

「星、大丈夫か！？」

「はい、心配かけて申し訳ありません。」

「構わないよ。星が無事でいてくれたなら。」

「レイ・・・・」

「・・・何か面白くない。」

ぷぅ～と頬を膨らませる加奈。

「まぁ取り敢えず無事でよかったよ。」

そんな中、桐谷がこっちにやって来た。

「ああ、だけど何でお前まで?」

『マスターそれよりもここから離れた方がよろしいのでは?ライ様達も何をしているか気になりますし・・・』

「そうだな、取り敢えず俺の連れと合流したい、いいか?」

「ああ、挨拶もしたいしな。」

「・・・・その人たちって女の子?」

「ああ、そうだが?」

「スケベ・・・」

「何もしてねぇよ!?」

何だよせっかく久しぶりにあったのに何その態度は。

「レイ、あの人達は？」

「ああ、みんなと合流したら話すよ。取り敢えずみんなと合流しよう。」

地上におり、バリアジャケットを解除してライ達を探しに行った。

「これは・・・」

フェイトが見ていたのはサーチャーから送られてきた映像。

隣の遠見市でこの前に戦闘があった形跡があった。

それで一応遠見市にサーチャーを飛ばしていたフェイトは今回のサーチャーに写っていた映像に驚いていた。

「何で零治君が？」

そこには白いコートをまとって戦っている零治。

そして・・・・・

「確かこの子は・・・・・」

そこには星の姿も写っていたのだった・・・・・

「やはり敗れてしまったか・・・」

遠見市のハイランドパークの近くにある湖。

そこに白衣の男、クレイン・アルゲイルが一人立っていた。

「だがいいデータが取れた。これで次の作品にも活かせるだろう。」

クレインは笑いながら湖を後にした。

## 第２２話　遊園地、巻き込まれた星（後書き）

と言うことで今回はバトルで。

いろいろと展開が進みましたが、マテリアル娘と原作の魔導師との話も目前。

次は零治と新たな転生者の関係の話となります。

次回もよろしくお願いします。

## 第２３話　これが有栖零治（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回は暴露大会。

会話が多くなっちゃった・・・

読みづらいと思った人申し訳ありません・・・

# 第２３話　これが有栖零治

「まずは自己紹介かな。初めまして、俺は加藤桐谷と言う。」

「私は佐藤加奈です。」

二人はそれぞれ挨拶をする。

あの後俺たちは無事ライたちと合流出来た。

いきなり観覧車が爆発したことでかなり遊園地はパニックになっていたようだ。

その人ごみに飲まれライ達は遊園地からかなり離れたところまで流されていた。

合流したとき、フェリア達が驚いた顔をしていた。

やっぱり見ていたんだな・・・

ライと夜美は気づいていたが人ごみが余りにも多く、近くにフェリア達もいたため救援には行けなかったらしい。

取り敢えず俺たちはこの場所を離れ、近くの公園へと移った。

結界も張り、近くの公園に普通の人に聞かれないようにした。

「さて、どこから話すか・・・・」

「まずは、私の疑問から。零治達は魔導師なのか？」

手を挙げ発言するフェリア。

「ああ、俺達全員一応リンカーコアも持ってるし、デバイスも持っている。」

「なぜ隠していた？」

「魔法とか関係なく普通に生活していきたかった。俺たち全員な。」

そう言って俺は星、ライ、夜美の顔を見る。

三人ともうなづいてくれた。

「そうか、嘘ではなさそうだな。それでは私たちの正体も知っているのか？」

もう隠してもしょうがないか。

「ああ、俺はシャイデから聞いている。だけどこの三人は知らないけどな。」

「そうか・・・・」

そう言って下を見るフェリア。

「「「フェリア姉・・・」」」

セインたちも心配そうにフェリアに声をかける。

「なぜ、正体を知っていながら受け入れたんだ?」

「不振な行動をしたときに即座に対応するため。」

「そうか・・・」

「だけどセインが来た辺りから家族として向かえ入れていたよ。フェリアと過ごしてきて普通の世間知らずの女の子にしか見えなかったからな。」

この答えにはさすがのフェリアも驚いているな。

だけどこれが俺の本音。こいつらと生活してきて戦闘機人と言うより年頃の女の子だったから。

「だから俺はお前らを家族だと思っている。」

「私もですよ。」

「僕も!」

「我もだ。」

「みんな・・・」

セインは涙を見せながら言った。

「だからお前たちをどうこうするつもりは無い。だから安心してく

れ。」

「レイ兄・・・・」

ウェンディが申し訳ないような顔で俺の名前を言った。

「さてフェリア、他にあるか？」

「・・・私もある。」

「フェリア姉！？」

「ここまで信用してもらったんだ。これ以上隠し事をするのも悪い。」

「でも、ドクターに言ったら廃棄処分になるかも・・・」

「そんなことさせないよ！！」

セインが口に出した言葉にライが反論した。

「友達にそんなことさせるもんか！！絶対セインの事を守ってみせるよ！！」

「ライ・・・」

「廃棄処分とはどういうことだ！？」

セインの呟いた言葉に夜美が反応した。

「それはこれから私が説明する。・・・・・実は私たちは戦闘機人なんだ。」

その言葉を聞いて驚く星達。

「造った人はジェイル・スカリエッティ・・・」

その名前を聞いて更に驚く。

「ジェイル・スカリエッティって次元犯罪者の・・・」

「なぜこの世界に?」

ライ、夜美が順番に質問する。

「私はこの世界で調査の依頼を受けていた。調査の内容は黒の亡霊について。」

また驚く3人。

「そのためにシャイデ先生にドクターが依頼し、学校に通いながら調査していたんだ。それが私の目的だ。」

「で、調査の方はどうなっているんです?」

星がフェリアに聞く。

「分かったことは少ない。最近活動をしていないと言うことだけだな。」

3人がチラリと俺のことを見る。

しょうがないじゃん。目の前にいるのにむやみになれるか！！

「セイン達は？」

ライがセインに聞く。

「私はゴールデンウィークって言う長期休みがあるって調べて分かったから遊びに来たの。」

「そんな理由なのか！？」

「うん。」

夜美、お前の気持ちは分かる。

俺も最初は何考えてるんだコイツと思ったもんな。

「ノーヴェ達は？」

星がノーヴェに聞く。

「私はこのアホのめんどうをみるためと、こっちの世界の勉強にって。」

「アホじゃないっス！ウェンディっス！！」

「うるせぇ！デカイ声で叫ぶな！！」

「めんどうって・・・」

呆れながら言う星。

「私って稼働してからまだ一週間たってないんス。」

「そうなの！？」

「全然そう見えなかったぞ・・・」

ライと夜美が声を上げた。

そういえば箸も普通に使ってたもんな。

「ウェンディは何か少し不具合があって、それが原因かもってドクターが言ってたけど。」

「心外っスノーヴェ。私はよいこで賢い子っス！！」

えへんと胸を張るウェンディ。

「ネジが外れてるけどな・・・」

「同感。」

俺の言葉にセインが賛同すろ。

「私はアホの子じゃないっス！！」

ポカポカと俺を殴るウェンディ。

へん、それくらいなら・・・・

「いい加減にしなさい！！！！」

いきなりの怒鳴り声に話していた全員が怒鳴り声を上げた本人を見る。

「私たちそっちのけで何勝手に話進めてるのよ！！」

「いや、先ずはこっちの話を先にするべきだと思ったから・・・」

「だからって勝手に話しすぎなのよ！！話が分からない私たちにとってはつまらないの一言しかないわ。本当に気が利かない兄ね。」

「「「「「「兄！？」」」」」」

「まあそう言う反応になるだろうな。」

「ほのぼの言ってるんじゃねぇよ桐谷。それで俺から説明して欲しいことがあるんだが・・・」

「まずは私から！！この子達が家族ってどういうことよ！！」

本当にやかましいな加奈は。

前は冷めてたような気がするんだけど。

「そのまんまの意味だよ。一緒に生活してる。」

「そ、それって同棲じゃない！！」

「まぁそうだが・・・・」

「この変態！！美少女並べてハーレムとか楽しむつもりなんでしょ！！」

失敬な、オッドアイの変態と一緒にしないで欲しい。

「待ってください。」

文句ばかりたれる加奈に星が割り込んだ。

「私たちのことですが・・・・・」

星は俺達が初めて出会った時の話を語り始めた。

「ごめんなさい・・・」

俺じゃなく、星達3人に謝る加奈。

・・・・俺は？

「こちらこそすみません、勝手に家族なんて名乗ってしまって・・・私たちは出ていきます。本当の家族がいるのに私たちは邪魔ですか

ら・・・・」

それに頷くライと夜美。

こいつら・・・・

「ふざけんな!!」

星の言った言葉を否定した俺。

「さっき言ったよな、お前ら全員俺の家族だって、勝手に名乗って?俺が家族になろうって言ったんだろ!?俺にはお前らが必要なんだ!!今度勝手なこと言ったらぶっ飛ばすぞ!!」

「す、すみません・・・」

「考輔落ち着け・・・」

「俺は有栖零治だ。こいつらと一緒に生活している中学生だ。佐藤考輔じゃ無い。」

「・・・本当に前の名前は捨てるのか?」

「前の名前なんて必要ない!俺は今この世界で生きているんだ!!」

「分かった、すまなかったな零治。」

「ああ・・・熱くなってこっちこそ悪かった。」

そう言って手を繋ぐ俺達。

「だが一般的に同い年の男女が同棲するのは良くないと思うぞ。」

「関係ねぇよ。俺は自由に生きてるんだから。」

「・・・・やはりお前は変わってないな。」

いきなり変な事を言い出す桐谷。

「そう?結構変わったと思うわよ。主に女の子をこんなに連れているところとか。」

「そういうことじゃないんだが・・・」

加奈の言葉に呆れる桐谷。

「私からも質問いいですか?」

セインが手を上げて桐谷に聞く。

「何だ?」

「レイとはどういうご関係なんですか?」

「昔、隣近所に住んでいた親友ってところかな。」

何でみんな驚いた顔してんだ?

「レイ!!お前友達いたのか!?」

フェリア、それはないんじゃないか？

ってあれ？みんなも驚いているような・・・

「私、安心しました。休日はずっと私たちと一緒にいましたから、友達いないのかと・・・」

星がホットしながら言う。

他のみんなも頷いている。

みんなに心配されてたんだ俺。

何か恥ずかしい・・・・

「・・・お前どんな生活してたんだ？」

「違うよ！？嫌われてるわけじゃなくて、こっちから近づかないだけだよ！！」

「それじゃ、いい訳にしか聞こえないわよ。」

「本当に変わってないな・・・」

ふん、友達の一人や二人・・・

自分で言ってて悲しくなってきた。

「もう俺の事はいいんだよ！！それより桐谷。お前何普通に実弾使ってんだよ！！」

ミッドの方だと禁止になってるんだぞ！？

「お前こそ何言ってるんだ？魔法でモノを言っている世界だったら違う手段の方が有効だろうが。」

「魔法の世界だと質量兵器は禁止されているんだぞ！！」

「ここは地球だろ？実弾武器なんて普通にあるじゃないか。」

「いや、そうだけど・・・・」

「それに非殺傷設定だっけ？それもついてるから殺すことは無いさ。」

「そんなことが出来るのか！？」

「出来るって俺のデバイスが。」

「・・・ラグナル？」

『わ、私は言いましたよ！聞かなかったマスターが悪いんです！！』

『全く、相変わらず使えないデバイスですね。』

『お、お前はレミエル！？』

『久しぶり、駄デバイス。』

『駄！？その言葉そっくりそのまま返します！！』

『どの口がそんなこと言えるのかな？』

『わ、私はちゃんとマスターのために・・・』

『でも、質量兵器でも非殺傷設定出来ることも言ってないのに？』

『うっ・・・』

『こんなことも出来ない駄デバイスなのに？』

いきなり光が輝き、収まると２０代くらいの金髪美人がいきなり現れた。

「「「「「「「「えっ！？」」」」」」」」

「お前は誰だ！？」

皆が驚いている中、フェリアだけ手にナイフを持ち臨戦体制に入っている。

「ちょっ！？そんな物騒なもの出さないでくださいよ！！」

両手を上げ、慌てて言う。

「私ですよ私。桐谷様のデバイスのレミエルです！」

「「「「「「「「はあああああああ！？」」」」」」」」

「まぁ最初に見たらそうなるよね。」

「持ち主の俺もびっくりしたからな・・・」

冷静に話す加奈と桐谷。

本当にビックリだよ!!

人になれるデバイスなんて・・・あ、リインフォース?がいた。

『私もなれますぞ。』

そう声を聞いた時、加奈のデバイスが輝き、目の前にたくましい紳士服をきた男が立っていた。

「初めまして、私、加奈様のデバイスのエタナドと申します。以後お見知りおきを。」

執事の礼でみんなに挨拶するエタナド。

「凄い、デバイスなのに。」

ライがそう呟くが、皆が頷いている。

「レイ、ラグナルも出来るのではないのか?」

そういえば!

「ラグナル、どうなんだ?」

『・・・・出来ません。』

「ん?よく聞こえなかったんだが・・・」

『出来ないって言ってるんです!!ああ、そうですよ!私は人になれません!マスターを満足させるどころかあのクソデバイスにも劣る駄デバイスですよ私は!!』

「満足って何だよ・・・」

「ふんやっぱり。ポンコツのくせにでかいこと言ってるんじゃないです。」

「レミエル、少し黙れ。」

静かに威圧し、桐谷がレミエルを黙らせる。

『ぐすっ、恥ずかしい・・・』

「ラグナル・・・」

『マスターすみません、私何もできない駄デバイスで。レミエルみたいにできればもっとマスターを助けられたのに・・・」

「いいよ。ラグナルは今のままで。」

『えっ!?』

「今のままでいいって。それに今までラグナルにどれだけ助けられたか・・・戦いのときは忠実に俺の命令に素早くあたってくれるし、星達が来るまではずっとラグナルが話し相手になってくれてたから

な。ラグナルがいなかったら星達と会う前に俺は生きることを諦めてたかもしれなかった。ありがとう、ラグナル。」

『ううっ・・・マスター！！』

びーびー泣き始めるラグナル。

泣くデバイスって気持ち悪い。

・・・・ってそうだ！！

「ラグナル、人になりたいか？」

『えっ！？なれればなりたいです・・・』

「よし分かった。ちょっと待ってろ。」

そう言って俺は目をつぶる。

『マスター？』

俺は神様に会いに行くため意識を飛ばした。

「用件は分かっておる。」

「話が早くて助かる。２つ目の願いＯＫか？」

「大丈夫じゃが・・・・本当にいいのかの？」

「ああ、それでよろしく。それと・・・」

「なんじゃ？」

「あの二人は死んだのか？」

「・・・・ああ、わし以外の神のミスでな。」

「そうか・・・・」

「怒らんのか？」

「まぁ久しぶりに会えた事は嬉しかったし、あいつらが怒ってないのに俺が怒る事じゃないだろう。」

「本当に変わっとるの・・・」

「よく言われるよ。じゃ、戻るな。」

「ああ、あと願いは１つじゃからな。」

「そんときはよろしく。」

毎度お馴染み、目の前が真っ暗になった・・・・

目を開けると。

何故か星の顔が近くに・・・・

何故に？

「レイ、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。それよりラグナル。」

『はい？』

「なれるぞ、人の姿に。」

『えっ？』

「やってみろ。」

『やってみろって・・・・・あ、あれ？』

そう言って、ラグナルが輝き出す。収まると２０代ぐらいの銀髪の美人がそこに居た。

「なれた・・・」

「よかったな、ラグナル。」

「マスター！！！！」

俺に思いっきり飛び込んできた。

「ありがとう、マスター！！これでマスターとあんなことやこんなことも・・・」

「「「「ラグナル・・・？」」」」

そこにはセットアップしていた星、ライ、夜美、加奈がいた。

「皆さん・・・デバイスなんか持って何してるんですか？」

「「「「覚悟はいい（な）（わね）？」」」」

「おはなしです・・・」

「ま、マスター！！・・・ってあれ？」

俺は素早く離れて桐谷の側に退避した。

「マスター！私たちは一心同体じゃ・・・」

「いや、痛いのは嫌なんで・・・」

「マスター！！！！！」

お前たち、壊さない程度にしろよ。

そんな中、

「私もこの姿ならマスターを・・・・」

レミエルがそんな事を呟いていたのだった・・・・・

「どう？」

「間違いないよフェイトちゃん・・・」

私はなのはを呼んで、この前のサーチャーの映像を見せていた。

はやては仕事があってこの場にいないけど。

「この子あの時に戦った星光の殲滅者って名乗ってた子だよ。バリアジャケットも同じ・・・」

「でも・・・」

「うん、消えていったはずなんだけど・・・」

映像を見ながら考えているなのは。

「それとこの人はやっぱり・・・」

「うん、零治君・・・」

なのはにも聞いたけどやっぱり間違いはないようだ。

「どうするのフェイトちゃん。」

「取り敢えず明後日に私が帰りにでも聞いてみるよ。・・・・いや尾行しよう！」

「フェ、フェイトちゃん！？」

「今思えば零治君の家って知らないし、もしかしたら彼女にも会えるかも。」

「でもフェイトちゃん、それってストーカーだよ？」

「違うよ尾行だよび・こ・う。」

なのはは少し納得出来てないみたい。

だけど私は執行官だし尾行も普通にやったりするんだけど・・・

「なのは、嫌なら私だけでやるよ？」

「ううん、私もやる。私も気になるし。」

「じゃ、明後日の放課後ね。」

「うん、はやてちゃんにも教えとくね。」

「よろしく。あとこのことは内密にね・・・」

「うん、分かったよ。」

だが、フェイトは気づいていない。

このマンションに零治達が住んでいることを・・・・

## 第２３話　これが有栖零治（後書き）

ＧＷ明け、なのは達がストーカーします。

マテリアル娘がなのは達と遭遇するのはもう目前。

暴露大会や新たな転生者の話のはずなのに、なんかデバイスが目立ったような・・・

次はストーカーの話！

と言いたいところですが、ＧＷ最後の日の話になると思います。

次回もよろしくお願いします。

# 第２４話　大宴会、ＧＷ終了（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

まず最初にお知らせですが、親友キャラについて出さない方がいいと沢山の意見を貰いました。後付っぽく出してしまったことにとても反省しています。

本当に申し訳ありませんでした。

ただ、どうなるか期待してくれた意見も少数ながらあったので修正せず、このままで行こうと思います。

これ以上メインでオリキャラや転生キャラを出す気はありません。

これからの展開も今までと同様に主人公中心で進めていきます。

こんな駄目な作者ですがこの小説を読んでくれれば幸いです。

# 第２４話　大宴会、ＧＷ終了

「それじゃあ、セイン、ノーヴェ、ウェンディのお別れ会と・・・」

「加奈と桐谷の歓迎会を・・・」

「「開催します！！！」」

我が家のマスコットガール、ライとセインの宣言により大宴会が開催された。

マンションでやってるのにマイクはいらないような・・・

あの後、ラグナルがオシオキされてからみんなで家に帰った。

取り敢えず加奈と桐谷も家に泊めた。

居候はこれ以上無理だから家は別にしてもらうつもりだ。

皆、いろいろあってか言葉少なく食事を取り、皆さっさと寝てしまった。

そんでもって次の日・・・・

何があったのか、あんな態度だった加奈とみんな仲良くしていた。

今はかわりばんこでゲームをしている。

俺が起きたのは１１時頃。一番遅かったが、いつの間に・・・・・

「やっと起きたか・・・」

俺に声をかけたのはコーヒーを片手に優雅に新聞を読んでいる桐谷だ。

「くつろいでるな・・・・」

「加奈ほどでもないさ。」

加奈たちはみんなで順番に大乱闘スマッシュロワイアルをかわりばんこでやっていた。

やっぱりみんなでやるときはこれだろ。

「お前はやらないのか？」

「こういうのは苦手なのは知ってるだろ？」

確かに・・・・

コイツ、シュミレーションはかなりやるくせにこう言う対戦系のゲームは全くセンスが無い。

星といい勝負だと思う。

シュミレーションは俺がスパロボを無理やりやらせたんだけどな。
その後はシリーズほとんどやるほどの熱狂ぶりだったが・・・・
アルトアイゼンもそこから来たんだろう。
「直ぐに夜美さんとライさんと加奈に倒されてそれでこうさ。」
コーヒーと新聞を上げて言う桐谷。
相変わらずマイペースな奴・・・
「レイ兄!!こっち来てやるっス。ボコボコのガタガタにするっス。」
今度はガタガタ？
前よりはましになったと思うけど。
「分かったよ。一回叩きのめしてその口を黙らせてやったほうがいいな。」
俺は手をポキポキ鳴らしながらライに席を譲って貰い、コントローラーを受け取る。
相手は・・・ウェンディ、フェリア、加奈か。
フェリアは大したことは無い。恐らく我が家で星に次ぐ弱さだろう。
ウェンディは本当に器用だ。その実力はライや夜美に匹敵するほど

までに来ている。

最後に加奈。転生まえからゲームは俺がやっていた影響か、結構うまい。特にスマッシュブラザーズはよく二人でやっていたような気がする。

さてこのメンツなら・・・・

「まずはフェリア、お前から除外させてもらう。」

俺は自分のベストキャラ、必殺で敵を倒す炎の紋章の王子様を使っている。

フェリアは歌う食べ物と同じ名前の生物。

ウェンディは超能力少年を使っている。ウェンディのベストキャラだ。

ウェンディめ、マジだな・・・

加奈は・・・・・ゴリラ!?

まさかのチョイスだな。

まぁいい・・・

「この勝負貰った!!」

「勝ったっス！！！」

結果、俺がビリだった・・・・

何でいつも俺をリンチするんだよ！？

加奈のゴリラがするパフォーマンスがマジ腹立つ。

そんでしてやったりな顔も。

飛べない王子様がビュンビュン空を飛んでいる。

全く俺以外には攻撃しなかった3人。

もうこのゲームやるのやめようかな・・・・

「そうだ！！」

ゲームを観戦していたライがいきなり大声を出した。

「今日でセインたち帰っちゃうし、お別れパーティしようよ！！それと加奈達の歓迎会も一緒に。」

「いいね！やろうやろう！！」

「悪くないな、ライいいこと言うじゃん！！」

勝手にライの話に乗るセインとノーヴェ。

「酒は・・・・・」

夜美、止めろ。

お前が飲むと暴れて、とばっちりを食らうのは俺なんだぞ。

「皆さん、いきなり何言ってるんですか!?パーティはいいとしてもお酒は・・・」

ピンポーン

チャイムがなる。

「おっ、来たか。」

玄関に走っていく夜美。

「遅いぞ!!」

「ごめんね、これでもダッシュでミッドから帰ってきたのよ。」

入ってきたのは酒が大量に入った袋を持ったシャイデだった。

「夜美、元から連絡してましたね・・・・」

「用意周到と言ってくれ。」

要するに飲みたいだけか。少し睨みながら星が言う。

「星、そんなに睨むな、最後なんだから無礼講で構わないだろ。」

そんな事を言う夜美。

お前、自分がどうなったか分かってるのか？

「さぁて、お酒も大量に買ってきたし、さっさとパーティーの準備を始めるわよ！！」

はじめて会う二人を完全スルーして、勝手に仕切り始める。

「零治？」

「・・・ああ、一応俺達の保護者になってくれている、俺のクライアント件デバイスマスターだ。」

「あの人がお前の言っていた・・・なんか想像と違ったな。」

「クールビューティーか？」

「まぁそんなところだ。」

最初の印象はそうだったけど、親しくなって本性を表したからな。

酒を進める中学教師ってどうよ？

「まぁ楽しそうな人で良かったじゃないか。」

「まぁ色々助けてもらってるし、あいつらがとてもなついてるからな。」

見ると楽しそうに話す、星、ライ、夜美、フェリア。

少し警戒しているが楽しそうに話す、セイン、ノーヴェ、加奈。

なぜか背中に乗っているウェンディ。

最後は置いといて、みんな楽しそうにしていた。

「桐谷・・・」

「分かってる、家のことだろ?朝からレミエルとエタナドが二人で物件を探しに行ってるよ。」

本当にこいつは・・・

「部屋空きが無いんだろ?昨日のうちに分かったさ。お前の本心も聞いたし、今を大事にするお前の考えを尊重するさ。」

「・・・悪いな、加奈のこともよろしくな。」

「了解だ。加奈はお前の顔を見ないと騒ぎそうだし、なるべく近くの場所を選ぶさ。」

「加奈がか?あいつなら俺を追い出すぐらいしそうだけど。」

「・・・相変わらずのようだな。」

「何が?」

「苦労してるんだな星さん達・・・」

いきなりダメ人間を見るような目で俺を見る。

何か気に食わないな・・・

「さぁてそろそろ準備始めましょ！！」

シャイデの一声で女性陣がそれぞれ動き出した。

「俺達も手伝うか。」

「ああ。」

俺達も立ち上がり指示を受けに行った。

「「それじゃあ・・・」」

「「「「「「「「「「カンパーイ」」」」」」」」」」

二人の司会に会わせ全員で乾杯した。

料理は俺、星、桐谷、フェリア。

準備をシャイデ、夜美、ライ。

飾りつけを残りのメンツでやっていた。

・・・・普通、男に料理やらせるか？

ライと夜美にも本格的にやらせないとまずい気がする。

加奈は触らせない方がいい。

美由希さんといい勝負な気がする。

初めて食べたときは漫画の話だけでないと学習したな。

その後、加奈が桐谷にも食べさせて大変なことになったんだよな・・・

「レイ？」

「ああ、なんだ？」

おっと、昔の事を思い出してボーッとしてたな。

星に声をかけられ我に帰った。

「夜美が・・・・」

夜美の方を見る。

「わはははははは！！我の前に跪け！！崇めよ！！」

あ～あ、始まっちゃったよ・・・・

今は一人で叫んでるだけだけどあれで誰かを巻き込み始めると止められなくなる。

「ラ～イ、みんながいっぱいいるよ？」

「ホントだ～セインもいっぱいいる～」

二人で並びながら顔を見合わせ、笑っている。

完全に酔ってるな・・・

「お～い！！ウェンディもそう思うだろ！？」

「アハハハハハハハ！！」

ノーヴェとウェンディは会話すらなってないし。

「でな、私も苦労してるのにクワットロの奴が・・・」

フェリアはテレビに愚痴ってるし・・・・

「ほ～ら、一気！一気！」

「ちょっと！？シャイデさん！？」

加奈はシャイデの悪ノリに巻き込まれてる。

・・・・・あれ？

「桐谷はどうした？」

「桐谷さんは・・・・・」

星が向けた先には、部屋の片隅に仰向けに放置された桐谷がいた。

「あいつ酒弱かったっけ？」

「はい、飲んで直ぐに眠ってしまいました。」

そんなにか？

転生前は平気だったような気がするけど・・・

何かど忘れしてるな。

こっちに来てもう6年か・・・・

もうそんなに経つんだな。

「レイ？」

「ああ悪い、またボーッとしちゃったな。星もほら。」

空になっていた星のコップにチューハイを入れる。

「ありがとうございます。」

そうして星と一緒にみんなの様子を見ながら飲んでいた。

４０分後・・・・・・・

「で、レイはその辺の気遣いが足らないと思うのですよ。」

「ああ。」

「あの時だって私が勇気をだして言おうとしたのにライの方に行ってしまって・・・」

「ああ。」

「本当に聞いているのですか！？」

ああ、聞いているとも。

もう１０回も。

星は絡み上戸だったんだな・・・

いつもは対して飲んでなかったから気付かなかった。

「レ～イ～ねぇねぇ見て見て～」

そう言われ俺はライも方を向く。

そこには黒い下着を着たライと青い下着を着たセインがいた。

って何で脱いでんだ!?

「お前ら何脱いでんだよ!?」

「えっ～暑いじゃん・・・」

「私も～」

文句をたれるセインと同意するライ。

二人とも俺にくっついてくる。

「お前ら何くっついて・・・」

「レイ兄!!」

今度は背中に乗ってくるウェンディ。

ってこいつは!!

「お・ま・え・は何でブラ付けてないんだ!!」

「だって、暑いじゃないスか～」

暑いじゃねぇよ!!俺は男なんだぞ!!

背中に当たってるモノが・・・・

「フェリア助け・・・」

「胸が大きいやつ死ね。胸が大きいやつ死ね。」

・・・・見なかったことにしよう。

何か黒いオーラが出ているような気がする。

ちくしょうこうなったら・・・

「夜美!!助けてくれ。」

いつまで我慢できるか分かったもんじゃない。これだったら夜美のほうがマシ・・・

「くぅ・・・くぅ・・・」

「夜美ーー!!!」

夜美様はお休みになっていました。

待て!!まだ助けはいる。

「シャイデ!加奈!」

「可愛いわね、みんな。」

「うぅ・・・気持ち悪い・・・」

「ウェッ・・・・」

カメラを持ってこっちに構えるシャイデとかなりグロッキーになっ

ている加奈とノーヴェ。

頼むから写真撮るな！！

ノーヴェはそこに吐くなよ！！

「星、星！！」

お願いだ！お前だけが頼りだ！！

「・・・ライ達だけずるいです。私もレイとくっつきます。」

上着を脱ぎ、俺に近づいてくる。

「誰か助けてくれ！！」

「た・・助・・て。」

「全くどんな夢を見ているんだか・・・」

夜美がため息を吐きながら呟いた。

時刻は夜の８時。

いつの間にか寝ていた夜美は目を覚まし、周りを見る。

部屋はグチャグチャに散らかっており、みんなが空いているスペースにざこ寝していた。

ただ・・・・・

「なぜ、星達はレイにくっついて寝ているんだ?」

星、ライ、セイン、ウェンディはレイにくっついて寝ていた。

「こんな男なら嬉しい状態なのに苦しい顔をしているのか・・・」

零治は苦しそうな表情を浮かべていた。

少し羨ましいと思いながらも夜美はそう呟いた。

『あっ!?夜美様、起きたのですね。』

声を聞いて、夜美は机の上を見る。

上にはデバイス状態のレミエルとエタナドがあった。

「人の姿じゃないのか?」

『朝からなっていたのでもう限界です。一日中なっていられないので・・・』

「そうなのか。」

夜美は台所に行き、自分のコップに水を入れる。

『夜美様。』

「ん？なんだ？」

『これからもマスターと仲良くしてください。マスターはズバッと素直になんでも言う所があるので嫌われやすいと思うのですが、実際は人を気遣う人なんです。なので親しくしてください。』

「私のマスターもわがままで自己中のように見えるが本当は優しい子なんだ。どうか仲良くやって欲しい。』

「大丈夫だ。二人とも話してみて好感を持てる人達だ。こっちこそよろしく頼む。」

デバイスに対しておじぎする夜美。

『『ありがとうございます。』』

デバイス達は夜美の優しさに感謝するのだった。

「気を付けてな。」

午後9時ごろ、荷物をまとめたセインとノーヴェとウェンディに声をかけた。

3人は家の転送装置からミッドに行き、そこからラボに帰るらしい。

「忘れ物は無い？」

「大丈夫っス星姉。」

「何が大丈夫だ、寿司、持って帰るんだろ？」

「そうだったっス、ありがとうっス夜美姉。」

夜美から寿司の袋を渡され、服の入った袋と一緒に持つ。

「今までお世話になりました。」

姉らしくセインが頭を下げて言う。

「元気でね。」

ライが寂しそうに言う。

「楽しかったぜ。」

笑顔で言うノーヴェ。

「明日また来るっス。」

「じゃあ、帰んなくていいでしょうが。」

加奈のツッコミにみんなが笑う。

「いつ来ても構いませんからまた遊びに来てくださいね。」

「お前らはもう有栖家の一員なんだ遠慮するなよ。」

俺と星が3人に言った。

「ドクターによろしくな・・・」

「うんフェリア姉も頑張って・・・」

セインがそう言って3人は転送装置に乗った。

「じゃあ、みんなまたね。」

そうセインが言って、3人はミッドに行ってしまった。

「行ったな。」

「ああ。」

俺はフェリアに声をかける。

「大変な妹たちだったな。」

「ああ、だが可愛い妹達だ。」

「そうだな・・・」

「零治。」

「ん？」

「これからもよろしく頼む。」

手を出しながらフェリアが言った。

「ああ、こちらこそな。」

笑顔で俺はその手を掴んだ。

「さぁ、みんなで片付けしましょう。明日は久しぶりの学校です。」

星の号令でみんなそれぞれ動き始める。

こうして波乱のゴールデンウィークが終わったのだった。

余段・・・・・

「ただいまっス～」

「今帰りました。」

「ただいま。」

「おかえり3人ともあっちの生活は楽しかったかい？」

3人をスカリエッティ一家が出迎えた。

「これ、お土産っス。」

「こ、これは！！」

ウェンディからお土産の寿司を受け取ったウーノは驚きの声を上げた。

その後みんなで寿司を食べながら。ゴールデンウィークの話をしたのだった。

後にラボでは、ウェンディに対してウーノがとても優しくなった姿が見られたらしい・・・・

## 第２４話　大宴会、ＧＷ終了（後書き）

と言う感じで3人はスカさんの所へ帰りました。

元々ＧＷの間だけだったので・・・

次はストーカーの話。

魔導師組達がストーカーします。

まえがきにも書きましたが今回のＧＷ編は反省ばかりでした。
一番は焦りすぎた事と、後付みたいに親友キャラをだしてしまった事。

その場のノリで大体書いていた所があって、それが後になって矛盾や後付をしなくてはならなくなると考えていませんでした。皆さんの指摘がなかったらこの先もっと悲惨なことになっていた気がします・・・・

これから先、上記に踏まえ気を付けて書いていこうと思います。

また指摘する点など見つけましたら気軽に教えてください。

これからもよろしくお願いします。

## 設定2（前書き）

加奈と桐谷の設定です。

性格はこれを基本に作ろうと思います。

**設定2**

佐藤　加奈

１５５ｃｍ４７ｋｇ

ウェーブのかかった栗色の短髪の女の子。

有栖零治（佐藤考輔）の妹。性格は少々高飛車気味で負けず嫌い。我侭なのだが、根は素直。ルックスも良く、運動神経抜群、学力優秀で学校ではかなり人気があった。

逆にごく普通で目立たない兄を学校では呼び捨てにするなど他人の振りをするので、教えてもらうまでは兄弟だときづくものがいなかった。家でもそれは同じで兄と呼びはするが学校と同じ対応。だが、心の中では嫌々自分の我侭に付き合ってくれたり、自分が困っているときに手を貸してくれる兄に惹かれており、その影響か彼氏を作ったことがない。今までは兄として接して来たが、転生したことによって今まで諦めていた気持ちにも頑張るつもりでいる。

魔力ランク

ＡＡＡ＋

デバイス

エタナド

男性型インテリジェントデバイス
人型になると執事口調の２０代ほどの男性になる。
一日中はなっていられない。

能力

ＴＯＷのエステルの姿。剣は使わず、杖を持っている。
基本的な戦い方はビット（フェアリー）による迎撃とエステルの使う術のみ。

杖の攻撃も出来るが非力なため対したダメージを与えられないため滅多に使わない。

回復魔法は当然、他にフェアリーを使ってのシールドや、プロテクションのようなシールドを複数使える。それぞれ能力が違い、その時の状況によって使い分ける。

加藤　桐谷

１７８ｃｍ６８ｋｇ

スパロボのキョウスケ・ナンブのような髪型で色は黒。

転生前に佐藤家の隣に住んでおり、幼馴染件零治の唯一の親友。空手で全国に出たことがあり腕っ節は強い。基本クールなのだが、言いたいことをズバッと言ってしまう所や、勝負ごとには熱くなるところがある。一匹狼なため友達も少なかった。ただルックスが良いためクールな性格と一緒に女子からとても人気があった。しかし恋愛にうとく、付き合う気もなかったため彼女がいたことがない。ちなみにあまりゲームはやらないが大のスパロボファン。（そのためロボットものが好き）アルトアイゼンの能力もそこから来た。

魔力ランク

S

デバイス

レミエル

女性型インテリジェントデバイス

人型になると金髪の２０代の女性になる。

１日中はなっていられない。

能力

アルトアイゼン

体にアルトアイゼンの装甲を付けて戦う。

武器は非殺傷設定のついたアルトの武器。

魔力は飛ぶためと飛んだ時のバランスを取るため、シールドを張るために使っている。

武器は右腕のリボルリング・ステーク、背中の脇にあるスプリットミサイル、頭のヒートホーン、左腕の3連マシンキャノン、両肩から出るスクエア・クレイモア

ちなみに魔力弾にもできるが、その時は空を飛べなくなる。

アルトアイゼン・リーゼ

アルトアイゼンの強化された姿。

今もなれるが、余りにもピーキーすぎるため、今の桐谷には使えない。

武器は右腕の巨大なバンカー、リボルリング・バンカーと背中の脇にあるスプリットミサイル、頭のプラズマホーン、左腕の５連装チェーンガン、両肩から出るアヴァランチ・クレイモア。

こちらも魔力弾を使えるが、空を飛べなくなる。

## 設定2（後書き）

2人はこんな感じなんだなと思ってくれればいいです。

## 第２５話　久々の学校、いつも通りの生活（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

前回、ストーカー話と予告しといて、そこまでいきませんでした。

今回も会話が多いです。

読みづらかったらごめんなさい。

# 第２５話　久々の学校、いつも通りの生活

さて、学校です。

今クラスではとなりのＢクラスの二人の美男美女？の転校生にスーパーハイテンション。

神崎組の熱狂度が半端ない。

転校生は桐谷と加奈なんだが。

二人とも俺と同じ学校に転校してきた。

さすがに同じクラスにはならなかったが。

「零治。」

久々の登場だな、アリサ。

何か久しぶりに見た気がする。

「懐かしいな、ちょっと老けたか？」

「・・・いきなりなに言ってんのよ。」

そんなに怒るなって、髪が逆立ってるぞ。

「零治君、いきなりそれはないんじゃないかな・・・・」

アリサの後ろからすずかが声をかけてくる。

「なに言ってんだ?すずか。これは俺達の挨拶さ。いつも通りだろ?」

「違うわよ!!」

怒りが収まりきれなかったのか、アリサが殴りかかってくる。

「甘いわ!!」

「避けるな、この馬鹿!!」

「・・・本当にいつも通りになった。」

クラスの定番、零治対アリサの絵が今日も出来たのだった。

「はぁはぁ、で、用はなんだ?」

「はぁはぁ、新しい転校生のことよ。」

「・・・疲れるならやらなきゃいいのに。」

「これはお約束って奴や。」

はやてがこっちに来ながら言った。

「ハロー！はやて。」

「ハロー！零治君。」

イェーイと俺達はハイタッチした。

「今のもお約束？」

「いや、ただアドリブでやってみた。さすがはやて、完璧に合わせてきたな。」

「当然や、関西人ならこれくらいわけないで。」

「お前、なんちゃってだろ？」

「そうやけど何かその言い方腹立つわ・・・」

「まぁ、それでも違和感ないし息ピッタリだしな。」

「私たちいいコンビだと思うで、将来二人で漫才組まへん？」

「面白そうだけど遠慮しとく。俺の可能性は未知数なんでな。」

「いつも寝ている人の言葉だとは思えへんな。」

「・・・なんか零治君、いろんな意味で凄い人な気がしてきた。」

「凄いのははやてちゃんだよ・・・」

「なんであの映像見たのに普通に話せるんだろう・・・」

廊下から覗いて様子を見ていた、なのはとフェイトが呟いた。

「ってこんなことより！！」

バンッ！！と机を叩いてアリサが言う。

「アンタ、あの子とどういう関係よ！？」

「あの子って？」

「となりのクラスに転校してきた女の子。」

加奈のことか・・・

「あの子、アンタの名前知ってたのよ。アンタとどういう関係？」

「それは取り敢えず置いといて、はやて。」

「なんや？」

「加奈の胸って何カップ？」

腕を組んで考え始めるはやて。

「・・・恐らくCやな。あれは巨乳言うより美乳の部類やで。」

Cか・・・さすがに転生前よりは小さくなったか？
少なくともDはあると思うが・・・

「何を話してるのよこの変態共！！」

アリサの拳骨が俺とはやてに落ちる。

「男なら興味あるに決まってんだろ。直ぐ手を出すなよ・・・」

「女でも同じや！！」

「アンタらみたいな変態がいるからこの世の性犯罪が消えないのよ！！」

「はやてさん、聞きました？あの子、朝から性犯罪なんて言いましたよ。」

「ホンマ、恥ずかしくないんか？普通の女子中学生が言うことじゃ無いと思うわ。」

近所のオバサン風にひそひそ話す、俺とはやて。

「アンタたち！！」

「・・・いつまでやってるのかな。」

「全くだ。」

いきなり別の声が聞こえ、一斉にそっちを向く。

「何してんだ？桐谷。」

「・・・ずっと話が終わるのを待っていたんだよ。」

「ん？何か騒がしいな・・・って桐谷か、どうした？」

教室を出ていたフェリアが声をかける。

手にハンカチを持っている辺りからトイレにでも行っていたのだろう。

「零治はいつもこんな感じなのか？」

「うん？ああ、はやてと一緒にいるといつも一緒になってアリサやフェイトを弄るのが殆どだな。たまになのはやすずかに手をだし、ボコボコにされることもあるが・・・」

「余計なことは言わんでいい。それよりどうしたんだ？」

「ああ、様子見に来たのと、目線に耐えられそうにないから話に来た。」

「ああ、確かに凄いよな。」

特に女子の目線が。

神崎じゃないけどちょっとうざい。

「だから、おまえとフェリアさん「フェリアでいい。」フェリアのいるクラスに来たんだ。」

なるほど・・・

まぁ相変わらず目線は凄いけどな。

「ちょっと零治君。」

すずかが声をかけてくる。

「この人零治君とどんな関係なの？」

「ん？腐れ縁で親友って所かな。」

「「「「「親友！？」」」」」

でかい声でいきなり叫びだした５人。

なのはとフェイトはどこから沸いてきた！？

「し、親友ってどういうこと！？零治って一人ぼっちだよね！？」

何、俺そんな風にフェイトに思われてたの！？

「大丈夫？頭打ってない？」

なのはさん、それどういう意味ですか？

「そうか！これはドッキリや！！ふふん、このはやてさん、こんなドッキリになんて騙されへんで！！」

ドッキリじゃないし！！

「親友か・・・アンタいたなら言いなさいよ！！」

「よかった・・・よかった・・・」

アリサさん、すずかさんや、なんで涙ぐみながら言ってんの？

俺ってそんなに寂しそうに見えてたのかな？

「お前の周りには面白い人が多いな。」

それは同感。

意地はってないで原作キャラと友達程度の関係だったら学校ももっと面白かったかも。

まぁ星達もいるし、どっちにしてもしなかったと思うけど。

「っと話がそれたな。改めて、俺は加藤桐谷、親の都合で隣のクラスに転校してきた。これからよろしく頼む。」

「私は月村すずかです、よろしくね。すずかでいいです。」

「私はフェイト・T・ハラオウンです。フェイトって呼んでください。」

「私は八神はやてや。はやてと読んでな。」

「私はアリサ・バニングスよ。」

「ああ、君が燃える女の子か。」

「れ～い～じ～！！」

桐谷め余計なことを。

「アリサちゃん、おはなしなら後で。私は高町なのはよろしくね。」

「ああ、君が零治が魔王と呼んでいる女の子か。見た目は可愛らしい女の子なんだが・・・・・・」

「零治君？」

「すいませんしたー！！！」

人生初のジャンピング土下座をかまし謝る俺。

「アンタ、覚悟はいい？」

「零治君、オハナシなの・・・・」

アリサは手をポキポキならしファイティングポーズをとる。

「アリサちゃん、先どうぞ・・・」

「うん、じゃあ行くわ！！」

頭を八の字に揺らし、その勢いをそのまま拳にって、

デンプシーロール！？

こいつ、マジでボクシングやったら世界狙えるんじゃね！？

なんて思っているとサンドバッグのように俺の体は左右に揺れる。

やがて、アリサが止まる。

「ふぅ、スッキリ。」

いい汗かいた、みたいな爽快な表情を浮かべるアリサ。

「・・・恐ろしいな。」

「こんなの序の口だ。本当の恐怖はこれからだ・・・」

フェリアの言葉に驚く桐谷。

「さぁ、オハナシだよ。」

「誰・・か・・たす・・」

完全に言い切る前に零治はなのはに教室から連れ出される。

「・・・助けなくていいのか？」

「巻き込まれるよ！？」

真っ青で桐谷に忠告する、フェイト。

他のみんなも頷いている。

しばらくして何処からか零治の悲鳴が聞こえてきた。

「なのはのおはなしの時には下手なことをしない方がいい。長く生き残りたいのならな・・・・」

「あ、ああ・・・・」

フェリアの忠告に頷くしかない桐谷。

この時、入る学校を星達の学校にするべきだったと後悔したのだった・・・

加奈ｓｉｄｅ

朝、学校に来てみるとやはり私達はかなり話題になった。

私自身それなりに自分の容姿には自信がある。

事実、転生前は結構モテた方だ。

兄さんには全然だったけど・・・

廊下から私と桐谷を見るギャラリーが凄い。

私はクラスの女の子から学校の事を聞いている内にいつの間にか桐谷はいなくなっていた。

どこに行ったんだろう？

私が席を立とうとした時、奴らが現れた・・・

「君が今回転校してきた女の子だね。俺は2－Aの神崎大悟って言うんだ、よろしくね。」

「はぁ。」

いきなり私の前にやって来て握手を求めてきた。しかも隣のクラスの男子。

銀髪も珍しいが、赤と青のオッドアイの方が珍しいと思った。

だけどそれだけ。

なぜ握手を求めてきたのか意味不明だし、何でこんなに馴れ馴れしいのよ。

兄さんの知り合いかな？

取り敢えず丁重にお断りして握手もせずにそのまま教室を出ようと

した。

「おや、恥ずかしいのかな?恥ずかしがらなくてもいいのに。」

「ハァ?」

こいつバカなのかな?

なんでそう思えるのかしら?

「いくら俺が魅力的だからってそんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないか。」

髪をかき上げながら行こうとした私に近づき、そんなことを言う。

何カッコつけてんだこの男。

すごく気持ち悪い・・・

「どうだい?せっかくなら俺が優しく学校案内しようか?」

優しくってなんなのよ。下心丸出しじゃない。

「いいえ、結構です。」

私が大人の対応で断る。

「そんな遠慮しなくても、別に俺なら全然構わないから。ねぇ?」

コイツ本当にしつこい。

しかもやたらと頭を撫でようとしてくるし・・・

「君は優しい子なんだね。でも僕に気を使わなくていいんだから・・・」

「余計なお世話って言ってんでしょうが！！」

私は我慢できず、回し蹴りで変態を廊下に吹っ飛ばした。

「か、神崎君！？」

後ろに付いていた男子生徒が走って様子を見に行く。

「さっきから馴れ馴れしいのよ！！しつこい男はウザイだけよ！！そこで一生寝ていなさい！！」

私は吹っ飛ばした彼に指差しそう怒鳴った。

「ッ、お痛はいけないな・・・・・」

懲りていないのか少し痛そうにしながら立ち上がる。

「でもそんなツンデレな君も悪くない。」

ヤバイ・・・コイツ生粋の変態だ。

初日から嫌な奴に目を付けられたな・・・・・

とそこに栗色の女の子が男子生徒を引きずってどこかに行こうとしていた。

「やぁなのは、どうしたんだい？」

あの子が高町なのはか・・・・

兄さんが言ってたけど、確かこの世界の主人公だっけ？

でもあの変態、本当に空気読めないわね・・・

明らかに話しかけるなオーラ出してるのに。

「・・・・じゃま。」

なのはと呼ばれた女の子は変態に裏拳を食らわせ、変態を壁の方にぶっ飛ばした。

すごく鈍い音がしたんだけど。

「さぁ早く行こうね、零治君・・・・」

「だ、誰かたす・・・けて。」

何か兄さんの名前が聞こえた気がしたけど。

気のせいよね。

だが加奈はこの後自分の兄の悲鳴を聞くことになる。
その時加奈も桐谷同様にこの学校選んでよかったのかと心から思ったのだった。
加奈ｓｉｄｅｅｎｄ

「ううっ・・・ひどい目にあった。」
「零治君が悪いんだからね。」
授業中になのはが痛がっている俺に言ってきた。
「少しは手加減しろよ。何か今日は一層きつかったし・・・」
「それは初めて会う人にあんなことを教えるからだよ。」
むぅっと頬を膨らませ言ってくるなのは。
まぁ悪いとは思うけど流石にこれはないだろう。
無事でいる俺の体も化け物じゃないかと最近思ってきた。
「それで・・・ね、あの・・・聞きたいことがあるんだけど・・・」
「ん？なんだいきなり。」

「ううん、やっぱりいい。ごめんね変なこと言って・・・」

そう言ってなのはは黒板に目を向けた。

何なんだ?一体。

その後、なのはから声をかけることはなかった。

「兄さん・・・」

自分の机で購買部で買ったパンを食べ終わり、昼休みどこで昼寝をしようかなと考えていた時に加奈から声をかけられた。

何故か加奈はこそこそと俺に近づいてくる。

「今までどこにいたのよ!?結構探したじゃない・・・」

相変わらずこそこそ喋ってるけど。

「俺はずっと教室にいたぞ。」

昼休みがらずっと教室にいたんだが・・・

「何であんな変態がこの学校にいるのよ・・・」

目線の先に教室を出ていく変態の姿があった。

「何かあったのか？」

「うん・・・実は・・・」

あの馬鹿またやらかしたのか。

こいつに手を出そうとしたのが運のつきだな。

コイツに蹴られ、なのはに叩かれ今日は散々だったな。

さて、これで少しは自重してくれればいいけど・・・

まぁないか。

「本当にいい加減にして欲しいんだけど。まぁ少しは懲りただろうし、つきまっとってこないと思うけど。」

「残念ながらそんなんで諦めたらなのはたちも苦労しないよ。」

「その通りや。」

いきなり話に入ってきたはやて。

いつ湧いてきたんだ？

「はじめましてやな、八神はやてや。よろしくな。」

「うん、私は佐藤加奈。兄共々これからもよろしくね。」

「兄！？」

「何で苗字違うのに！？」

ベランダから顔を出して聞いてくるアリサ。

よく見ると他の面々までいるし。

ってか何やってんだ？

「私が義理の妹だからよ。」

何か勝手に義理の兄になりました・・・

何考えてるんだか。

「そう、大変だったんだね・・・」

フェイト、特に何も無いからそんな悲しそうな顔しないで欲しいんだけど。

「別に。こうして兄さんとも会えたし、もう兄さんとの仲も邪魔する人もいないし。」

挑発しながら言う加奈。

俺との仲？今度は奴隷にでもする気か？

「ふ、ふん。そんなの決めるのは本人でしょ？あんたじゃないわ。」

何を慌ててるんだか。

「いいわ、受けて立つわよ。これからよろしくね。」

「ええ、こちらこそ。」

なんか知らないけど和解でいいのか？

アリサと加奈が二人で握手する。

「モテモテやな。」

「？何がだ？」

「・・・・こりゃ、苦労するわ。」

はぁとはやてにため息をつかれる。

俺なんか悪いこと言ったかな。

「アリサちゃん本気なんだ・・・」

「うん、この前決心したみたいだよ・・・」

「・・・・・私は。」

なのは、すずか、フェイトのそれぞれがこそこそと何か喋ってる。

何をこそこそと・・・

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り昼休みの終わりを告げる。

「ほら、さっさと席に付けよ。」

俺はみんなにそう言ってこの場を解散させた。

五時間目の休み時間・・・・・

「フェイトちゃん・・・・・」

「うん、分かってる。アリサのことだね。」

「そやな、もし悪事を働いてて逮捕なんてなったら悲しむやろな・・・」

屋上で魔導師組3人が話していた。

「でも、それが管理局員として、執務官としての仕事だから妥協は出来ないよ。」

「そやけど・・・」

「私だって本当は嫌だよ。大事な友達だし、優しいし・・・」

「せや、零治君に限って悪いことしてるとは思えへん。取り敢えず話は聞いてみよ、な？」

「そうだね、お話してからだね。」

「なのは、戦闘じゃないよ？」

「そんなの分かってるよ！！」

「その話・・・」

「私たちにも教えて。」

いつの間にか屋上にはアリサとすずかもいた。

「二人とも・・・」

「様子が少しおかしかったから見に来ちゃったんだ。零治君のことでしょ？」

「実は・・・」

フェイトは2人にもこの前のサーチャーの映像を見せた。

そしてこれからの行動についても話した。

「私たちもついていっていい？」

「えっ！？」

「でも・・・」

「それはアカンと思うで・・・」

魔導師3人は戸惑いながらも否定する。

「でも、私たちも気になるの。零治君が本当に悪いことをしているのかを。」

「あの子との関係も!!」

アリサは恥ずかしがることなくそう答えた。

「・・・分かったよ。」

「「フェイトちゃん!?」」

「サーチャーは既に街に配置したし、もし見失っても大丈夫だよ。それに断っても勝手に付いてきそうだもん・・・」

「ありがとう、フェイト・・・」

「うん、アリサ。じゃあみんな放課後ね。」

「「「「うん。」」」」

こうして魔導師組3人とその親友2人のストーカー作戦が始まるのだった。

## 第２５話　久々の学校、いつも通りの生活（後書き）

アリサｖｓ加奈、宣戦布告しました。

取り敢えずはっきり零治を意識しているのは今の所マテ娘３人とこの二人です。

なのは、フェイトは少し好感を持ってるぐらいか。

すずかは完璧友達。

はやては・・・・・・・・相方？

フェリアは家族ですかね。

さて、これからどうなっていくのか？

しかしはやては書きやすい・・・・

はやて、零治と誰でもいいので弄る相手がいたら永遠と書けるかも。

関西弁でなければ完璧なんだけど・・・

やっぱり関西弁は難しい。

あっ大悟君ドンマイ。

次回こそストーカーのお話。

次回もよろしくお願いします。

## 第２６話　ストーカー大作戦（前書き）

やっとマテ娘と原作キャラの遭遇です。

だけど、何かイマイチだな。

ご都合主義っぽくなった気がしますし、マテ娘にあまり触れられなかった。

これは作者の力不足ですね・・・

申し訳ない。

# 第２６話　ストーカー大作戦

キーンコーンカーンコーン

授業の終わりを告げるチャイムがなる。

今日もいつも通り終わったな。

体がガタガタのような気がするけど、まぁいつも通り明日にはなんともないだろう。

「さて、今日は・・・」

どうするかな？

桐谷達の手伝いもよさそうだが・・・

そう言えば昨日のばか騒ぎのせいで冷蔵庫が空っぽのような・・・

こんなんだったらラグナルに買い物を言っとくべきだった。

あいつに掃除しか言ってない・・・

仕方ないか。

「まずは星に電話っと。」

俺はホームルームが終わってから荷物を持ち、電話するため静かな場所に向かった。

「みんな、行くよ？」

「「「「うん。」」」」

『すみません、私今日は係の仕事で少し遅くなりそうなんです。』

「そうか、なら仕方ないな。」

『夜美が暇みたいなので夜美に手伝いを頼んでおきました。』

「助かる。冷蔵庫の中空っぽだからな。」

『それですみませんが・・・』

星に買ってきてほしいもの等をメモに書く。

『じゃあ、お願いします。』

「ああ、星こそ頑張れよ。」

『はい、ありがとうございます。』

そうして俺は電話を切る。

「さて、金を下ろして買い物をさっさと済ませるか。」

俺はそう一人呟いて、まずは近くのＡＴＭに向かった。

「誰と電話してるんだろう・・・」

フェイト達は昇降口の前で電話している零治を下駄箱から見ている。

フェイトの呟きに真っ先にはやてが反応した。

「あれは、女や！」

「ええっー！！あの零治君が！？あり得ないんじゃない？」

はやての答えになのはが失礼な事を言う。

「私もなのはちゃんと同じ意見かな。零治君、すごい鈍感だし、彼女がいるように見えないから。」

「そ、そうよ！あいつに彼女なんているわけないじゃない！！」

「アリサちゃん、慌てすぎやで・・・」

すずかはともかく、アリサはみんなに分かりやすいほど慌てていた。

「みんな、零治が動くよ。ついてきて。」

完全に仕事モードのフェイトは無駄な会話もせずに零治から目をはなさないでいた。

フェイトの言葉で切り替えた４人もフェイトに続いたのだった・・・

あの後、俺はコンビニで金を下ろし、隣町のいつものスーパーへ向かった。

夜美はあまり待たせるとうるさいからなぁ・・・

あっちの方が近いから確実に先に着くんだろうが。

そう思いながらも俺はのんびり進んだ。

２０分後・・・

「遅いぞ！いつまで待たせるんだ！！」

予想通り夜美は制服でスーパーの前に立っていた。

「仕方ないだろ。こっちまで来るのに時間かかるんだよ。」

「少しでも待たせて悪いと思うなら走ってくるものだ！！」

ごもっとも。

俺は一度も走らず右手に缶コーヒーを持ち、飲みながら来たのだから。

「悪かったと思ってるよ。だけどこの陽気の中で走るなんて暴挙、俺に出来るわけないじゃないか！！」

「いや、力強く言われても・・・」

とにかく、俺が悪いんじゃないんだ！！

「もういい、さっさと行くぞ・・・」

それ以上追及する事なく、夜美は先にスーパーに入って行った。

「ちょっ！？待てって！」

それを俺は慌てて追いかけた。

「ほんまかいな・・・」

はやては夜美の姿見て呟いた。

「あの時消えていったはずやのに・・・」

「二人確認できたってことはもう一人、クロノ君が言ってた・・・」

「うん、多分いると思う。」

なのはの確認にフェイトは即座に返事を返した。

「しかし、髪と目の色が違うだけで、本当にはやてちゃんにそっくりだね。」

すずかの言葉にはやて以外の４人が頷く。

「違うやん！私の方がナイスバディやもん！！でも確かにあの形はかなりの美乳・・・」

「バカなこと言ってるな！！」

アリサは拳骨ではやてを黙らせる。

「本日二回目や・・・」

「はやてちゃん、零治君がいないときぐらい自重しようよ・・・」

なのはの呟きもはやてには聞こえていなかった。

「でも、嬉しそうだね。」

夜美の表情を見て、フェイトが言った。

「あんな年頃の女の子の顔するんやな・・・私、嬉しいわ。」

「はやて？」

「だって、あの時は倒すしかなかったやないか。そして勝ったらあの子は消えていった・・・なのに今も元気に生活しとる。正直、嬉しいわ。出来れば友達になりたいし・・・」

はやての言葉になのはとフェイトも頷いた。

「あっ！？中に入るみたい。みんな行くよ。」

5人はこそこそと隠れながらスーパーに入って行った。

「こっちの方が得だ！！」

「絶対、こっちだ！！」

今、俺達は精肉コーナーの前にいる。

それぞれ鶏肉のもも肉を持って。

「どう考えてもこっちの大きい方がいいだろうが！！」

「夜美、違うぞ！こっちのもも肉の方が量が多少少ないかもしれないが断然安い！！」

夜美は結構星の買い物に付き合っており、意外と目利きがうまい。

だが、俺だってずっと一人生活をしてきたんだ、俺にも意地がある！！

結局このやり取りはじゃんけんを始めるまで延々と続いた。

「長い・・・」

精肉店で喧嘩している二人を商品棚から覗いているフェイトは一人呟いた。

他の４人は・・・・・・

「へぇ～今のスーパーってアボカド売ってるんだ。」

「アボカド？」

「うん、サラダに入れるととっても美味しいの。」

なのはとすずかはアボカドについて話している。

「ちょ！？キャベツ一玉５０円！？大根一本５０円！？アホちゃうんか、安すぎやろ！！」

「そんなにすごいの？」

「ここのスーパーは主婦達のメシアや！！これは買うっきゃないわ！！今日はお好み焼きにしとこ。ヴィータ喜ぶやろな。」

近くからかごを持ってきてキャベツをかごに２玉入れる。

「零治君、本当にいい主夫になれるわ・・・っとキュウリ入れ放題百円！？アリサちゃん、手伝ってや！！」

「は、はやて!?・・・もう!!」

文句をいいながらも主婦化したはやてを手伝うアリサ。

もはや真面目に尾行しているのはフェイトしかいなかった。

「お母さん、あのお姉さん何してるの?」

「シッ、見てはいけません。」

「・・・もうやめようかな。」

その時フェイトは心が折れそうになっていた。

「買ったな・・・」

時刻は夕方18時半。

買い物にかなり時間がかかってまった。

「ああ、菓子類やアイスなど余計な物もあるがな。」

アイスと菓子類の入った袋を持ちながら帰る夜美に皮肉を込めなが

ら言った。

「いいではないか、手伝いの報酬だ。」

「そう思うなら荷物をもっと持ってほしいぜ。」

俺の両手には４つの袋がある。

カバンは夜美に持ってもらっているが、学校の荷物がいつも机とロッカーにある俺のカバンは空気ぐらいしか入っていない。

故に夜美はとても楽をしているのである。

「女の子に重い荷物を持たせるのか？」

「・・・分かりました。俺が持ちますよ。」

「それでいい。」

笑顔で俺に言う夜美。

まぁたまにはいいか。

その笑顔を見て、自然とそう思えた。

そしてしばらく雑談しながら帰って、我が家があるマンションについた時だった。

「何で私と同じマンション！？」

フェイトの声が聞こえたのは。

「いやぁいい買い物やったわ。」

一人ご満悦のはやて。

結局他にも色々買ってしまい、両手はスーパーの袋を持っている。

学校のバックはすずかに持ってもらっている。

「そんなに買わなくても・・・」

「なに言ってるんやなのはちゃん、これでも我慢したほうやで。本当は米とかも買いたかったんやけど・・・」

「流石にそれは止めて正解ね。」

はやての返事に驚きながらもアリサは言った。

「フェイトちゃん、どうしたの？」

「この辺り私の家に近いなって・・・」

フェイトに言われ周りを確認する４人。

「本当だ。ほらフェイトちゃんのマンションが見える。」

「あっ、ホンマや。意外と近いんやな。」

はやての言葉に「そうだね。」と返す４人。

だが・・・

「もう、フェイトちゃんの家のマンションだよ。」

嫌な予感を感じながらもなのはが言った。

そして、その予感は見事に的中したのである。

「何で私と同じマンション!?」

何でフェイトがいるんだ!?

アイツ、今１８時半だぞ?

何でこんな時間に・・・

まさか・・・この前のことか。

「どうしたフェイトそんな間抜けな顔をして。」

「間抜けじゃないよ！」

「フェイトちゃん違う・・・」

なんだ！？なのはもいるのか？

いや、すずか、アリサ、はやてもいるな。

はやてに関しては買い物後っぽいし。

「零治君！！」

はやてが俺に近づいて、興奮しながら話しかけてくる。

「あのスーパー、めっちゃ最高やな！！何でもかんでも安すぎやで！！」

「おっ！隣町のスーパーに行ったのか。凄いよな、俺もあそこを見つけてからあそこにずっとお世話になってるわ。」

「キャベツ１玉５０円は安すぎや。おかげさんで今日、家はお好み焼きパーティにするつもりや。」

「おお、そりゃ良い。俺も初めて行ったときはそうしたな。あそこ、毎日キャベツ５０円だし、日によって色々な者が日替わりで安くなるからなるべく顔を出したほうがいいぞ。」

「ホンマなんか！？いやぁ～本当に今日はいい日やわ～」

俺とはやてはみんなそっちのけで主婦みたいな会話をしていた。

「あの・・・はやて？」

「零治お前もだ。」

フェイトと夜美にそれぞれ注意され、二人とも話を止める。

「コホン。それでね、まずこの映像を見て。」

フェイトの持っている黒い宝玉から映像が出る。

そこには俺と星が写っていた。

「あ、俺だ。」

「星もいるな。」

「いやぁあの時はいきなり襲われたからマジでビックリしたよ。」

わっはっはと大声で笑う俺を見て驚く５人。

「・・・・レイ。」

「ん？なんだ夜美？」

「お前あの時何してたんだ？」

「何してたって星と観覧車に・・・」

その続きを言おうとした俺の顔に拳が通り過ぎた。

「・・・・電話に出ず、何をしていたのかと思えば、貴様ら二人で遊んでいたのか!?私だけあの3人の面倒を見させて!!」

怒りを拳に込めるように力強く握りしめている。

「フェリアとノーヴェは二人で逃げてどこかに行くし、どれほど苦労したか・・・」

「いや、ですけど星に日頃のお礼ということで・・・・」

「星ばかり・・・な・・・」

ヤバイ、目がすわってる。

「レイ、覚悟はいいか?」

「いいや全然・・・」

「歯を食いしばれ!!」

夜美の放った右ストレートは俺の頬を強打し、俺は回転付けながら吹っ飛んだ。

「次、同じような事をしたらこんなものじゃ済まないと思え!!」

「お・・・・おす。」

夜美は怒りながらマンションの中に入ろうとするが・・・

「待ってな！！」

はやてに手をつかまれ、夜美はその場にとどまる。

「生きてたんやな・・・・ホンマに・・・・」

「ああ。あの時はすまなかったな、夜天の王よ。」

「八神はやてや。王なんて気はないから名前でええよ・・・・」

「分かった、はやて。我は有栖夜美だ。」

「有栖って・・・・」

「夜美は俺の家族だ。」

復活した俺ははやての言葉の続きを言った。

「もうバレてるみたいだし、取り敢えず上がってけ。」

俺はみんなを家へ案内した。

「「ただいま～！！」」

「おかえりレイ、夜美。買い物ありがとうございます。しかし遅かったです・・・・」

そこでエプロン姿の星の動きが止まる。

「なぜ、高町なのはが・・・・・」

「久しぶりだね。」

「レイ～夜美～アイスは？」

リビングからライもやってくる。

「あれ？フェイトがいる。どうしたの？」

そう言って夜美からアイスを受け取るライ。

反応薄いなぁ・・・

「取り敢えずお前ら上がれよ。」

俺はみんなにそう言ってリビングに案内した。

「ん？みんなどうしたのだ？」

テレビを見ながらくつろぐフェリアが挨拶した。

「な、なな・・・」

「どうしたアリサ？」

「どうしてフェリアがコイツの家にいるのよ！！」

「どうしてって居候しているんだが・・・・」

「そうなの!?」

「初めて聞いたで!?」

「言ってなかったか?」

「言ってないよ!!」

俺が内緒にしてくれって言ってたからな。

なのはやアリサは驚いてるが、はやてとすずかは意外と落ち着いていた。

フェイトは仕事の顔になってる。

「それより、これの事情を説明いただけますか?」

映像を星、ライ、フェリアに見せ、丁寧にフェイトが聞いてくる。

「取り敢えずあの時の説明な。」

俺はあの時の事を説明した。

「そうですか・・・・」

「ってことでやむなく魔法を使ったんだ。」

「なるほど・・・確かに襲われてから魔法を行使してましたね。」

「だろ?あのままだと俺と星は落ちて死ぬだけだったからな。」

「フェリアもこの時に?」

「ああ、初めて知った。この後説明されたのだ。」

「そうですか・・・・事件の詳細を詳しく聞きたいので管理局に来ていただけますか?」

「嫌です。」

俺の答えが意外なのか、驚いた顔をするフェイト。

「俺たちは魔導師登録してないし、管理局に入りたくはないんで。」

「事情を聞くだけですよ?」

「・・・俺達全員がSランクほどの実力があってもか?」

それにここに来た魔導師組の3人が驚く。

「Sランクって凄いの?」

「AAAランクが管理局の全体の5%しかいないって言われてるの。それに魔力ランクは私やフェイトちゃんと変わらないし。」

なのはの答えにすずかとアリサが驚く。

「アンタ実は凄いの？」

「この世界なら過ぎた力さ。」

「確かにこんな高レベルの魔導師は管理局は喉から手が出るほど欲しいやろな・・・」

はやての呟きにフェイトは新たに口を開く。

「勧誘はさせないようにしますので・・・」

「相手に自分以上の階級の相手が出てきてもか？」

「それは・・・・・」

「俺はお前たちみたいにバカみたいに戦いたくないんだ。今の平凡な日々を守りたい。」

「でもその力があればたくさんの人を・・・・」

「俺は自分の家族を守ることに精一杯なんでね。なのはみたいに戦えないさ。それに・・・・・」

なのはの言葉も即座に否定する俺。

なのはの考えを否定するつもりはないが・・・

「俺は管理局を信頼も信用もしてないしな。」

俺の言葉に驚く3人。

「な、なんでや!?」

「三権分立もないため上層部の人間が好き勝手やってる始末の組織に未来なんてあるか。そんな組織に入るくらいならフリーでやっていたほうがいい。」

「そ、それは・・・」

思うことがあるのか、フェイトは何も言えなくなる。

「だから俺達はミッドにはあまり行かないし、管理局にも入りたくない。勧誘がしつこくくるのも嫌だし、危険人物だと思われて消されそうになるのも嫌なんでな。」

「管理局がそんなことを・・・」

「いや、やるね確実に。」

断言する俺に何も言えなくなる3人。

「零治君は何でそんなに詳しいんか?」

「・・・・経験者から聞いたんでな。」

「教えては・・・・くれないね。」

俺が聞こうとしたフェイトを睨んだので、それ以上聞かないフェイト。

「で、どうするんだ?フェイト。できれば俺たちの事は言わないで欲しいんだが・・・」

「・・・報告したら?」

「引っ越すか、ここで始末する。」

俺の物騒な言葉に殺気立つなのは、はやて、フェイト。

「冗談だよ。俺はお前たちを友達だと思ってるんだ。できればそんなことをしたくない。」

「・・・分かったよ零治君の考えが。今回は不問にするよ。」

「「フェイトちゃん!?」」

「私は零治と戦いたくないから・・・それに魔力が今全く感じないもん。零治君、今までずっと強いリミッターかけてるでしょ。」

「正解。このリミッターのおかげで今まで管理局にバレなかったからな。」

「私たちが今まで気付かなかったのはそのせいだよ。零治君は悪いことをするような人じゃないよ。」

「まぁフェイトちゃんがそう言うのなら・・・」

「でもホンマええのかな？」

「多分私以外の人は気づいていないと思うから大丈夫だよ。」

・・・そんなんでいいのか？執務官。

俺的には大助かりだけど・・・

「直ぐに結界を使って被害も少なくすんだから。でもミッドに来て同じことやったら今度は強制だよ。」

「分かってるよ、俺も目立ちたくないしな。」

ごめん、ブラックサレナでもう使ってる。

「でも、私たちは管理局をやめないよ。この力で目の前の人を助けたいから・・・」

なのはが俺に決意を表明するように言う。

「お前たちを否定するつもりはないさ。俺はこの家族が一番大事なだけだ。それにしても立派だよ３人とも。だけどなのは、無理はするなよ。お前が大怪我したことは知ってるんだからな。」

「うん・・・ありがとう。」

「あ、それと赤いロボットみたいなのについては？」

「いや、分からない。俺達を助けたら消えたから・・・」

「そう・・・」

悪いなフェイト、これも教えるわけにはいかないんだ。

加奈には気づかなくて良かった・・・

「で、この3人がここにいる事を説明して欲しいんやけど・・・・・」

はやてがおずおずと俺に質問してきた。

「分かったよそれじゃあ初めて会った時の話だな・・・」

俺は話し始めた・・・・・

「そんなことがあったんだ・・・」

俺の話を静かに聞く5人。

「でもどうやったの?」

「それは・・・・禁則事項です。」

可愛く言ってみたけど、みんなの冷めた目がキツイです・・・

「いい加減教えてもらえないんですか?」

星が俺に聞いてくる。

「どうせ二度と使えないんだし聞いても仕方ないだろ。」

「ですが・・・・」

悪いな、これは教えるわけにはいかないんだよ。

「取り敢えずここでお開きだ。もう時間も遅いし、みんな送ってくから帰れ。」

「えっ!?送ってくれるの?」

アリサが驚いた顔で言う。

「こんな遅くに一人で歩かせるわけにはいかないだろ。早く行こうぜ。」

俺は5人を急かす。

「高町なのは。」

「何?えっと・・・・」

「星です、有栖星。ゆっくり話したいのでまた来てください。」

少し硬いが、星がなのはを誘う。

「うん、ありがとう!!また来るね!!」

なのはも嬉しかったのか笑顔でそう答える。

「僕は有栖ライ。みんなまたね！！」

「我は有栖夜美。これからよろしく頼む。」

二人もそれぞれみんなに自己紹介をする。

意外と険悪な雰囲気にならなかったな・・・

もっと雰囲気が悪くなると思ってたんだが。

「うん、私たちも少し心残りだったんだ・・・」

俺がさっき思ったことをなのはに聞いてみた。

なのはが思い出すように呟く。

「あの時は戦うしかなかったから・・・本当は助けたかったんだけど。・・・だからありがとね零治君。何をしたのかは分からないけど、また会えて嬉しかった。」

その笑顔は本当に美しくて、俺にも笑顔をくれるように感じた。

「そうか・・・ありがとうな、なのは・・・」

「？何で？」

「・・・・なんでもだ。」

「・・・変な零治君。」

なのはは本当に優しい。強い力にとらわれない強く優しい心を持っている。

こんな奴を友達として持てる俺は幸せだな。

今度星達を連れて翠屋に行こう。

士郎さん達にも紹介したいしな。

## 第２６話　ストーカー大作戦（後書き）

という訳で、顔合わせ。

やっとマテ娘達も海鳴市を自由に歩くことができるようになりました。

零治はアンチ管理局です。

原作に入ってたら、間違いなくクロノをぶっ飛ばしてたと思います。

さて、次は有栖家翠屋に行く。

これからもよろしくお願いします。

## 第２７話　有栖家、翠屋に行く。（前書き）

こんにちは、ｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

えっと、前の話の修正点を軽く説明します。

・まず、戦いで桐谷たちに触れていなかったので触れました。加奈には気付かなかったことにしてます。
・フェイトさんが零治君に釘を指しました。ミッドにきたらただじゃおかない！って感じに。

いろいろ修正してしまってすいません。

また何かあったらよろしくお願いします。

# 第27話　有栖家、翠屋に行く。

有栖零治の朝は早い・・・

「フゴッ！！」

体を襲った痛みに俺は目を覚ました。

「・・・たい。」

「ハァ？」

「翠屋に行きたい！！」

大きい声で俺の意識が完全に覚醒する。

俺の体にライがまたがっていた。

「ってまたか！！」

時刻を見ると朝は5時半。

何でいつもこう頼みごとの時はこうも朝が早いんだコイツは。

「ねぇ、いいでしょ？」

「・・・いやその前に問題がある。」

「なに？」

「そんなこと朝飯食ってるときに言え！！」

俺の怒鳴り声がうるさいとこの後、星と夜美に怒られました。

フェリアは問題なく寝ていたが・・・

こういう状況になれてんのか？

「何かお疲れだね。」

朝、来てそうそう机にダイブした俺にすずかが言った。

「いやぁ、あの後星たちとなのはの魔王化について・・・ごめんなさい、調子に乗りました！だから広辞苑しまってください、なのは様！！」

広辞苑を構えたなのは様に俺はマッハ土下座を繰り出す。

「私魔王じゃないもん・・・で、何かあったの？」

広辞苑をしまいながらなのはが聞く。

何であんな重いものを持ってこれるんだろうな・・・・・・

だからバカ力・・・

「零治君？」

「な、何でもありません！！」

最近俺の考えていることが筒抜けのような気がする。

俺って分かりやすいのかな・・・

「で！どうしたの？」

「実は、朝早くライに起こされてさ・・・」

「ライってフェイトちゃんに似てる子だよね？」

「そうだよ、すずか。で、起こした理由が翠屋に行きたいって言うお願いだったんだけど・・・」

「それって何か問題あるの？」

なのはの疑問は最もだ。

普通にやってくれれば俺もこんな状態にはならないわ。

「・・・朝５時半頃に俺の上にまたがってるんだぜ。」

「うわ・・・」

「朝早い・・・」

二人とも顔をひきつりながらそれぞれ言った。

「いつもはギリギリまで寝てるくせに・・・と言うわけで、なのは今日はゆっくり寝たいんだけど・・・」

「だ～め。」

「ですよね～」

もうなのはさん怖すぎて逆らう気もないです。

なのはと結婚したら絶対尻にしかれるな。

「ライちゃんあの中で一番大きいのに子供っぽいね。」

すずかがふとそんなことを言った。

まぁ確かに。体ばっかでかくなって・・・

胸なんて、フェイトやすずかに負けないほど大きくなったからな。

元がフェイトだから当たり前か。

「そうだな。もう少し女の子らしくして欲しいかもな。」

「えっ!?でも元気がいい女の子だと思うけど・・・」

なのはがそう言いたいのも分かる。

だけどな・・・

「俺の目の前で堂々と着替えしたり、日曜日の朝は必ず特撮ヒーロ

ーを見たりするのは女の子っぽくないだろ？」

着替えなんて何度いっても直らないからな・・・

特撮は仮面ライダーに似た方は俺も見てるけど。

「ごめん、私も朝見てる・・・」

「私も・・・」

あれ！？以外と見てるんだな。

仮面ライダーような内容が大人っぽいから見てて面白いけど、女の子向けではないと思ったんだけどな・・・

星、夜美、フェリアは食いつかなかったし。

「ま、まぁ趣味は人それぞれだよ！でも男の人の前で着替えるのは良くないよ。」

「そうだね、いつ零治君が襲うか分からないからね。」

俺は獣か！

なのはもすずかも俺をどう見てるかよく分かったよ。

「ちなみに大きさはどのくらいや？」

「う～ん、多分すずかやフェイトに負けてないな。」

「なるほどな、確かに昨日見た感じやとそれくらいあると思うわ。」

「おっぱいソムリエのはやてさん、ズバリ・・・」

「私はEと見たで！！なおかつ成長中や！」

「はやてちゃん、いつの間に・・・」

「不自然なく入ってきたね。」

なのはもすずかも慣れたのか今いち反応が薄いが、おっぱいソムリエは止まらない。

「恐らく、星ちゃんが今CぐらいやけどもうすぐDになるんちゃうか？」

「夜美は？」

「Cでストップやね。」

「成長の余地は？」

「流石のはやてさんも未来は読めんからなぁ。まぁ本人の努力次第や。」

頑張れ夜美。

「あんたたち本当に下らない話ばかりしているわね。」

「兄さん、妹として恥ずかしいから黙ってて。」

やって来たアリサと加奈に言われる。

「話すことを否定された!?」

「これは思春期の男女には当然の会話や。」

「何が当然なんだが・・・・」

「本当、一回死んだら?」

アリサと加奈のきつい言葉が俺とはやてに突き刺さる。

「何だよ、加奈の奴、自分が貧乳・・・」

「「フン!!」」

アリサと加奈の拳が俺の溝に突き刺さった。

余りの痛さに膝を付く俺。

「駄目やで、零治君。貧乳だってステータスなんや。バカにしたらあかん。」

ヒュン。

加奈が投げたシャープペンがはやての頬をかすめる。

そのままシャープペンは後ろの壁に突き刺さった。

「「はやて？」」

「すいませんでした！！」

「息ぴったりだね。」

「そうだね。」

なのはとすずかはそんな様子をのんびり眺めていた。

「翠屋？」

ああ、加奈は原作知らないからな。

「ああ、ライ達が行きたいって今日の早朝騒いだから行くことにしたんだよ。せっかくだからみんなもどうだ？」

あの後、落ち着いたのを見計らって俺はみんなを誘った。

フェイトは今日学校休みらしい。

「私は今日は用事があるから・・・」

すずかは駄目か。

まぁお嬢様なんだし仕方ないか。

「私も今日は駄目ね。」

アリサもか。今日はジムの予定でも入ってるのか？

「私も今日はお好み焼きパーティーの準備で無理やわ。」

はやても無理か。

昨日は遅かったし結局出来なかったんだな。

なら、仕方ないか・・・

「なら、行くのは加奈となのはだな。」

「ちょっと、私には聞かないわけ!?なのはも勝手に決められていいの？」

「私の親がやってる店だから・・・」

「そうなの!?」

俺、言ってなかったっけ？

「で、どうするんだ?せっかくだし士郎さん達にも紹介したかったんだが・・・」

「そ、そこまで言うなら行ってあげるわよ。ありがたく思いなさい!!」

「へいへい。」

相変わらずだな、お前。

キーンコーンカーンコーン。

「じゃ、そういうことで放課後な。」

話はそこでお開きになった。

そして一気に放課後。

桐谷は昼休みの内に誘った。

あいつは暇なのか一発でＯＫを出してくれた。

ここの校門で星達と合流するつもりなので、星達が来るまで待っている。

クラスのみんなは帰っており、今クラスには俺、なのは、フェリア、加奈、桐谷がいる。

「行かなくていいの？」

「あいつらの学校は遠いから早くても２０分はかかるよ。」

なのはの問いに簡潔に答えた。

「それまで何かしているか？」

「大富豪でもしてるか。」

フェリアの質問に俺はトランプを取り出し答えた。

「いいわね、やりましょう。」

「じゃあ、切るぞ。」

俺達はそれからトランプで時間を潰した。

２０分後、俺の予想通りに星たちの姿がそこにあった。

だけど・・・・

「いいじゃないか、俺と一緒に遊びにいこうよ。」

「だから、先約があるので結構です。」

「しつこいよ～」

「いい加減にしろ、しつこい男は嫌われるぞ。」

星たち三人がバカとその他二人の男子にナンパされていた。

「ちっ、あのクソ野郎。俺の家族に手を出すとはいい度胸じゃない

か・・・」

「零治君？」

いつもとは違う俺の雰囲気になのはが心配になって声をかけた。

「桐谷。」

「俺は構わないが、やり過ぎると停学になるかもしれないぞ？」

「その時は一緒に温泉でも行こうぜ。」

「はぁ、まあいいか。」

そんなことを話ながら俺達二人は星たちの所へ向かった。

「いいの！？あの二人止めなくて？」

「ああなった二人は何言っても聞かないわよ。」

なのはの慌てた声に落ち着いて加奈が言った。

「それに今回は奴が悪い。」

フェリアもバカをかばう気もなく、冷たく言い放った。

「おい。」

俺はバカの肩を掴み後ろにおもいっきり引っ張ると同時に、足を引っ掻けてバカを転ばした。

「うおっ！？」

驚きながらもバカは勢いよく転んだ。

「「レイ！！」」

「悪かったな遅くなって。」

「さて、お前らも帰るんだな。」

桐谷が残り二人の肩を掴んでおもいっきり握った。

「「イタイ、イタイ、イタイ、イタイ！！」」

「で、どうするんだ？」

「分かった、分かったからやめてくれよ加藤君。」

「僕も帰るから・・・」

情けない声でそんなことを言う、残りの男子二人。

「だったら早く消えろ。またこの三人に手をだしたら・・・」

「「二度としません！！」」

そう言い残して二人はダッシュで帰っていった。

「何をするんだい？有栖君？」

「俺の家族に手を出そうとするバカをこらしめようと。」

「家族？でもこの子達ってマテリアルの子達じゃないか。」

「マテリアル？なに言ってんだ？」

チンクには気づかなかったくせに。

なのは達に似てたからか？

「・・・そうか、君は知らなかったな。まぁいい、彼女達には詳しく聞きたいことがあるんだ。」

真面目な顔をしてそんなことを言う。

こいつ、なにげに考えてるんだな・・・

「だったら何故遊びにいこうになるんだ？」

よし、やっぱりぶち殺そう！！

「零治君、もういいから早くいこう。遅くなっちゃうよ。」

なのは達もいつの間にかこっちに来ており、俺に言った。

いつの間にか１６時半を回っていた。

「そうだな、さっさと行かないと遅くなるか。じゃあ行くか。」

バカを無視して、俺達は校門を通りすぎる。

「ま、待てよ！話は・・・」

「あんたは大人しく眠ってなさい！！」

加奈がジャンプして足を空に高々と上げた。

「あっピンク。」

帰り際の男子が止まって眺めながら呟いた。

たがそれは一瞬のこと。

「死にさらせ！！」

そのまま加奈は上げた足を斧のようにバカの頭に落とした。

「アガッ！？」

またも変な声をあげながら地面に沈むバカ。

何かピクピクいってるような・・・

「あんた本当にしつこいのよ！しばらくそこで寝てなさい！！」

背中を踏みつけそんなことを言う加奈。

容赦ねぇな・・・・・

「大丈夫かな？」

「あんな奴心配する必要もないだろう。」

「ライ、夜美の言う通りだ。心配するだけ無駄だから気にするな。」

フェリア、きついなぁ・・・

「分かった。みんながそう言うならそうする。」

切り替え早いこと。

「だって早く食べたいもん！ずっと楽しみにしてたんだから！！」

「実はライ、給食抜いてるんです・・・」

星に言われ、俺は顔をしかめる。

「一体どのくらい食べるつもりだ！？」

「分かりません、でもライっていくら食べても太らないから・・・」

羨ましいですよね。と呟き、黒いオーラを出しながらライを見る星。

そういえば、昨日体重計とにらめっこしていたのをチラッと見たような・・・

「そうだな、また胸が大きくなってきて邪魔とか言ってたからな・・

・」

「本当に、何故ライばかりに・・・」

全く羨ましいことだ、ああ、そうだな。と呟きながら黒いオーラを出す、夜美とフェリア。

はやての予想は正しかったな、流石おっぱいソムリエ。

そんな三人のオーラを微塵も感じず、スキップしながらライは歩いていった。

「ライちゃんいいなぁ。」

「あのスタイルで太らないとかどれだけ恵まれてるのよ・・・・」

あっ、有栖家以外にもダメージが出てる。

「女って大変だよな。」

「ああ、何でそこまで気にするのか。」

俺と桐谷はそんなことを言いながら女性陣を眺めて歩いていった。

「こんにちは～！」

俺は元気よく先に翠屋に入った。その後にみんなぞろぞろと入っていく。

今日もお客さん多いな・・・

「いらっしゃい、零治君。あっなのは、悪いけど忙しいから手伝ってくれない？」

「えっ！？私は・・・」

「あら、髪切ったの？短くても似合うわね。学校で何かあった？」

「いや、ですから・・・」

「それに誰かから制服借りたの？隣街の中学の制服なんか着ちゃって。」

「レイ・・・」

そんなこと言われてもな・・・

まぁ似てるから気持ちも分かるし。

「お母さん！私はここ！！」

なのはの声に聞き、桃子さんは声の方を見る。

「あれ、なんでなのはがこっちに？」

あれ？と言いながら星となのはを見比べる。

「士郎さん！！なのはが二人に！！」

お客さんそっちのけで慌ててキッチンに向かってしまった。

慌てた桃子さんを見るのは初めてだな。

「レイ、ケーキは？」

ライ、お前は食うことしか頭にないのか？

「桃子、お前この忙しいときに・・・・」

そこまで言った士郎さんが二人を見て固まる。

「髪の短いなのはがいる！！」

驚いた士郎さんも初めて見るな。

今日は初めてづくしだ。

「お父さん、お母さん！この子はなのはじゃないよ！！」

「初めまして、有栖星と言います。」

星の自己紹介を聞き、少し落ち着いた高町夫妻。

「そ、そうかなのはじゃないのか・・・」

「ご、ごめんなさい、余りにも似てたから・・・」

「本当だよ。星ちゃんに失礼でしょ！！」

「いや、私は・・・」

「いいからケーキ食べようよ！！！」

いい加減腹ペコなのかイライラしながらライが言う。

「取り敢えず、どこか座れる席ありますか？」

俺がそう言って、空いていた席にみんなが座った。

「へぇ、君たちがいつも零治君がお土産買ってる家族の人？」

一緒の席に座って話しているなのはの姉、美由希さん。

あの後、みんなになのはの両親を紹介したらみんなやっぱり驚いていた。

美由希さんも星を見て驚いていたが、説明したら直ぐに納得してくれた。

なんでも雰囲気がなのはじゃないらしい。

まぁ少し分かる気がするけど。

今回、美由希さん作ケーキは作ってなかったらしく、俺は命拾いし

た。

「有栖ライだよ、よろしくね、お姉さん！」

元気よく挨拶して、自分の所にある大量のケーキを消化している。

「我は有栖夜美だ。よろしく頼む。」

逆に夜美はガトーショコラのケーキを食べながら自己紹介をした。

「で、その子達が・・・」

「俺の妹の佐藤加奈と親友の加藤桐谷です。」

「初めまして、義理の妹の佐藤加奈です。」

何で義理を押すのかな？

「俺は加藤桐谷です。よろしく。」

「零治君、親友いたんだ・・・」

「よく言われます。」

桐谷が言うな！桐谷が！！

「へぇ～。でも零治君親友いたんだね。いつも一人でいるからいないのかと思ってたよ。お姉さん安心したな。」

「・・・やっぱり兄さん寂しい人だと思われてたんだね。」

「うるさいわい！！俺は一匹狼なんだよ！！」

そんな可哀想な目で俺を見るな！！

「もう一個！今度はアップルパイください！！」

「はいはい、よく食べるわねライちゃん。」

「うん！食べても太らないから。」

グサッ！！っと女性陣に何かが突き刺さった音を感じた。

「それにレイから一杯食べないと大きくなれないって言われたから。だけど最近胸回りがきついんだよね・・・またブラジャー買わないとダメかな？」

ピキッ！っと夜美とフェリアから音がしたような気がする。

「いいよね、夜美とフェリアは。ブラジャーにお金を使わなくて済むから。」

涙を流しながら立ち、ゆっくりとライに殴りかかろうとする夜美。

それを必死にフェリアが止めている。

「離せ、フェリア！あいつに一発与えないと気が済まん！！」

「落ち着け夜美！ライには悪気はない！！」

何でそこまで気にするかな・・・

「いいなぁライちゃん・・・」

「私なんて2キロ太ったのに・・・」

さっきの言葉で深刻なダメージを受けた高町姉妹。
美由希さん2キロ太ったんだ・・・

「星はそれだけでいいの？」

「最近太り気味なので・・・」

「実は私も・・・」

ハァとため息を付きながら羨ましそうにガツガツ食べるライを見る星と加奈。

「しかし凄くうまいですねこのコーヒー。俺初めて飲みましたよ。」

「その年でブラックが好きとはよく分かってるね。」

「ええ、コーヒーはやっぱりブラックですから。」

桐谷は士郎さんはコーヒーの話に花を咲かせている。

まぁみんなそれぞれ楽しんで・・・・いるかな？

何かライ以外の女性人がダメージを負っているような・・・

「いい子達ね、あの子達。」

店も大体落ち着いたのか俺の隣に桃子さんが座り、俺に話しかけてきた。

「ええ、いつもお世話になってますよ。みんながいなかったら俺どうなったか分かりません。」

「そう・・・で、零治君はどの子が好み?」

好みか・・・・・

「みんなかわいいし、俺にはもったいないかな。」

「そんなことないと思うけどな。零治君って優しいし面倒見も良いし。」

「そんな男はいくらでもいますよ。」

「・・・これはみんな大変そうね。」

ハァとため息をつく桃子さん。

何か悪いこと言ったかな・・・

その後もかなり遅い時間まで俺達は翠屋にいたのだった。

スカリエッティのラボ・・・・・・・

「ケーキが来たっス～！！」

ケーキの箱を高々と上げ、スキップしながらみんなに宣言するウェンディ。

「ウェンディ、落としたらどうする！早く下ろすんだ！！」

トーレがるんるんスキップしているウェンディに注意する。

「大丈夫っスよ。私はセインみたいなヘマはしないっス！」

と言われても止めないウェンディ。

「あれ、私の眼鏡知らない？セインちゃん。」

「知らないよ、クア姉。」

そう。と言って周りを見るクアットロ。

「あ、あったわ。」

外していた眼鏡は近くの机の上にあった。

「私としたことが眼鏡を置いた場所を忘れていたなんて・・・今度から気をつけなきゃ。」

と眼鏡を取ろうとしたら手を滑らせたクアットロ。

「あっ。」

地面に落ちた眼鏡。
そこに・・・・・・

ガシャン!!

眼鏡を踏んで通り過ぎるウェンディ。
しかも・・・

「あっ!?」

近くに落ちていたガジェットのパーツに足を取られたウェンディ。
そのまま仰向けに倒れる。

「セイン!!」

トーレの怒鳴り声に瞬時に状況が分かったセイン。
自身のＩＳ、ディープダイバーを発動させた。

「痛いっス～!!」

「トーレ姉、ケーキ無事だったよ!!」

「おお、よくやったセイン。」

「えへへ・・・」

トーレに褒められ、恥ずかしそうに頬をかくセイン。

「ウェンディちゃ～ん。」

「なんスか？クア姉・・・」

頭を抑えながらウェンディはクアットロの顔を見る。

いつも笑顔なクアットロが珍しく怒った顔をしている。

「ちょっとこっちに来なさい？」

「トーレ姉！」

「少しは頭を冷やせ。」

「セイン！！」

「グットラック！！」

綺麗に敬礼しウェンディに言うセイン。

「ここに私の味方はいないっス・・・」

そう呟きながら、クアットロに引きずられていった。

その後ケーキは美味しく食べた。

だが、ウェンディのケーキはクアットロのお腹の中に入ったらしい。

## 第２７話　有栖家、翠屋に行く。（後書き）

ということでみんなで翠屋に行きました。

ライの所為で女性人はあんまり楽しめてないっぽいですけど。

次は大悟ｖｓ桐谷を投稿しようと思いましたが、急遽八神家のお好み焼きパーティを書こうと思います。

しかし、アメフラシさんのお稲荷奇行文は面白かった。

一人で朝方まで笑ってました。

そのせいで遅れてしまって申し訳ありませんでした！！！！

## 第２８話　八神家のお好み焼きパーティ（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回は八神家のお話。

どうぞよろしくお願いします。

# 第２８話　八神家のお好み焼きパーティ

零治達が翠屋に向かっているころ・・・

「ただいま～」

勢いよく私は家のドアを開けた。

「おかえりなさい、はやてちゃん。」

家から私を出迎えてくれたんは我が家のお姉さん、シャマルや。

「はやてちゃ～ん！！」

小さい女の子が私の胸に飛び込んできた。

「リイン、ただいま。いい子にしとったか？」

「はいです。リインはいい子にしてたです。」

リインは初代リインフォースが残してくれた欠片から生まれた融合騎や。

「いい子や。っとシャマル、頼んどいた事は？」

「言われたとおりキャベツは刻んでおいたわ。別にお好み焼きぐらい私が・・・」

「ヴィータ～。シャマル、余計なことしてへんやろうな？」

「お～はやて、おかえり。ちゃんと見てたから大丈夫だぞ。」

私に返事した女の子は鉄槌の騎士ヴィータ。私の料理が大好きな小さい女の子や。

でも良かったわ、せっかくのパーティが台無しになるとこやった。

「ううっ、大丈夫なのに・・・」

信じられへんよ。今までの行いやとな。

「主はやて、おかえりなさい。」

「ああ、ただいまシグナム。」

私に声かけたんは、巨乳の元ニートざｍ・・・ヴォルケンリッターの将シグナムや。

そんな睨まんといてな・・・

「いつもより帰りが早かったですね。どうしたのですか？」

「今日こそお好み焼きパーティをせなアカンと思って、早く帰って準備しにきたんや。」

「そうですか、ありがとうございます。我々のために・・・」

「いいんやって、零治君に教えてもらったスーパーが異常に安かったからや。たまにはみんなでパァーっと行こうや。」

「主はやて・・・・何か手伝うことありますか？」

「大丈夫や、シャマルもおるし。休みも少ないんやからのんびりしてな。」

「リインも手伝います～」

「ありがとな。リインも手伝ってくれるから大丈夫や。」

「はい、ではお言葉に甘えさせていただきます。」

そう言ってシグナムはリビングのソファーに座った。

「主。」

「ああ、ザフィーラただいま。ちゃんとザフィーラのご飯も買ってきたんや。」

そう言ってはやては台所に置いてあったある物を持ってくる。

「あ、主・・・・」

「最高級ドックフードや！！パーティなんだしパァーっといったで！！」

「あ、ありがとうございます・・・」

それ以上ザフィーラは何も言わなくなった。

嬉しすぎて言葉にでえへんのかな・・・・

「よし、なら早う準備しよかシャマル、リイン。」

「分かりました。私は何をすればいい？」

「取り敢えず山芋すってもらってええか？なるべく細かくな。それ以外はなんにも触らんといてな。」

「はやてちゃん、私は？」

「リインは私の手伝いな。」

「了解です。」

「・・・それだけですか？」

不満なのかシャマルが聞いてくる。

「それ以外は私が見てへんと信用出来へんわ。」

「うう・・・いつになったら認められるんだろう・・・」

「一生ないんじゃないのか？」

「そんなことないもん！！ヴィータの意地悪～！！！」

そう言い残してシャマルは自分の部屋に行ってしまった。

「ヴィータ、余計な事言っちゃいかんよ。」

「でもさぁ～あたしはシャマルの料理なんて食べたくねぇもん。」

「まぁ私もやけど。」

ホンマいつになったらちゃんと料理作れるようになるんやろう・・・

「まぁええわ、リインさっさと作ろ。」

「はいです。」

はやてとリインはまた手を動かし始めた。

「さぁ、みんな集合や！！！」

ホットプレートを机に置き、堂々と宣言する。

「「「「おおっ！！」」」」

「今日は四種類用意したんや。海鮮、豚肉、チーズ、そして、奮発して明太子や！！」

「「「「おおおおっ！！」」」」

「なのになぜドックフード・・・」

ガリガリとドックフードをむさぼるザフィーラ。
明らかに5人と違う雰囲気を出している。
だが、5人には気づいてもらえることはなかった・・・・・

「さぁ～て焼けたで。」

ホットプレートで香ばしい香りがリビングを包む。

「まず、海鮮は誰が食べるんや？」

「では、私が。」

シグナムの返事にはやてが焼けた海鮮のお好み焼きをとってあげた。

「ありがとうございます、主。」

「あたしは明太子～！！」

「はいはい、どうぞ。」

「サンキューはやて。」

嬉しそうにヴィータがお好み焼きを受け取る。

「はやてちゃん、私のは？」

「リインは私と一緒な。」

「はいです。」

リインの声を聞いてから食べているみんなを見た。

「ホフホフ。」

「ヴィータ、頬にソースがついてるで。」

はやてはフキンでヴィータの頬を拭いてあげる。

「ありがと、はやて。」

ヴィータカワええなぁ・・・

「あっ、熱いです!!」

「リイン、そんなに急いで食べちゃだめやで。」

「はやてちゃん、私はチーズをもらいますね。」

「どうぞ、シャマル。」

いい具合に焼けて旨そうや。

「はやて、次は豚肉がいい。」

「そんな焦らんといて、もうすぐやから。」

「フフ、ヴィーダ美味しいか？」

「ああ、ギガウマだぜ！そう言うシグナムは？」

「エビがプリプリなのが最高だな。今度は明太子を食べてみたいな。」

「リインはチーズです。」

「もう少し待ってな。」

「いえ、別にあおった訳では・・・」

「焼けたで！ヴィータとシグナムどうぞ。」

「ありがとうございます、主はやて。」

「サンキュー！！」

「リインも。」

「ありがとです～」

来たお好み焼きをがっつく3人。

「もう、ヴィータもシグナムもリインも落ち着きないんだから・・・」

「いいやないか。こういうの久しぶりやから私も楽しいわ。」

「そうね、最近はなかなか全員揃って食べられなかったですから。」

シャマルの言葉に私も頷く。

みんな頑張ってるからなぁ。

やっぱ家族はいいもんや。

「さあまだまだあるで！！みんなたんと食べてな！！」

5人はこのあともお好み焼きを堪能した。

「主・・・・・」

一匹を除いて・・・・・・

「でな、みんなに話したいことがあるんや。」

片付けを終わらせみんな落ち着いた所ではやてが切り出した。

「闇の書の後に起きた事件覚えておるか？」

「確か、我らの分身・・・闇の残滓から生まれた者が起こした事件ですよね？」

「ああ、そうやシグナム。その生まれた私のそっくりさんが生きてたんや。」

それを聞いて驚く3人と1匹。

「はやてちゃん、なんのことですか？」

「リインはまだ生まれてへんかったから分からへんよな・・・」

「リイン、闇の書の事件があったあとこんなことが・・・・」

ヴィータがリインに説明を始めた。

「そんなことがあったですかぁ～」

「そうなんだよ・・・ってはやて!!」

リインに説明していたヴィータがいきなり大声をあげた。

「大丈夫だったのかよはやて!!襲われたり・・・」

「大丈夫やヴィータ。彼女らは普通の人間として自分の家族と幸せに過ごしとるよ。」

「人間ってどういう事なの？」

「詳しくは分からへんのやシャマル。でも敵意も無いし、魔力を完全に隠して隣町の中学校にも通っとる普通の女の子や。そのせいか、今までずっと海鳴市に住んどった私たちにも気づかれなかったんや。

だがら、もし見かけても襲いかからんでいてな。」

「了解です。」

「あたしも分かったよはやて。」

「私も大丈夫よ。」

「私もＯＫなのです。」

「ならＯＫや。あっちの都合がよかったら家に呼ぼうと思ってるん。そんときは仲良くしてな。」

それに頷く八神一家。

「みんな楽しみにしててな。」

そこで話も終わり、はやてはシャマルに洗い物を頼み、ヴィータとゲームで戦っていた。

『そうか、はやての家族も理解してくれたんだな。』

「そうや、ライちゃんとヴィータなんか結構気が合うと思うで。」

『でも本当に良かったよ。なのは達の時もそうだけど、襲われたこ

とにもっと怒りを持っているのかと思ってたから・・・』

今、私は零治君に電話で会話しとる。

内容はご飯後に話した夜美ちゃんのことや。

「そんな子達や無いよ。みんな優しい子達や。」

『そうか・・・いい家族だな。』

「お互い様や。そんなの零治君だってそうやろ?」

『ああ、そうだな。・・・お互い幸せ者だよな。』

「どうしたんや?急に・・・」

『なのはから聞いた。はやての家族って夜天の書の守護騎士ってプログラムなんだろ?』

「そうやけど・・・それが?」

『俺も家族がいなくて、星達が来るまで一人であそこに住んでたからな。』

「でも妹もおるし、シャイデ先生もいたやんか。」

『妹はともかく、シャイデは俺の保護者になってくれてるが、最初はあんなにフレンドリーな関係じゃなかったんだよ。』

「そうなんか!?いつもの様子を見てると信じられへんわ・・・」

『まぁいつもの様子を見ればな・・・ともかく!!俺はずっと一人だったんだよ。だからな、俺ははやてには感謝してるんだ。』

「何をや?」

『はやてが夜天の書の所有者にならなかったら俺は星達に出会うことはなかったからな。本当にありがとう。』

「な、何言ってんねん!!いつもの零治君らしくないで?」

『そうだな、ちょっと感傷に浸っちゃったかな。明日も学校があるし、これくらいにするか。』

「そうやな。」

『はやて、お互い家族を大事にしような。たとえ血がつながっていなくても。』

「そうやな。今度みんなで家に遊びにきてな。歓迎するで!』

『ああ、話しておくよ。それじゃあまた明日。』

「明日な。」

そう言って私は電話を切った。

「零治君、私と同じやったんやな・・・」

私と同じ、家族がいない。加奈ちゃんがいるけど、家庭が複雑みた

いや。

「初めて、夜天の書の主で感謝されたな・・・」

闇の書として色々と罪を重ねてきた夜天の書。

その罪滅しでシグナム達は一生懸命頑張っとる。

「リインフォース、良かったな。初めて感謝されたで。私はもっと頑張るからな。だから私達を見守ってな・・・」

はやては今はいない６人目の家族の事を思い、眠りにつくのだった・・・

## 第２８話　八神家のお好み焼きパーティ（後書き）

ヴォルケンズ初登場です。

次はいつになるのやら・・・・

ザフィーラさんがほぼ空気。

ギャグっぽく書くはずが、結局ほのぼのとした話に。

次は大悟ｖｓ桐谷です。

バトルじゃないよ！？

## 第２９話　神崎大悟ｖｓ加藤桐谷、どっちがイケメンか対決（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

いつの間にかお気に入りが２０００件突破してました。

皆さんお気に入りにしていただいてありがとうございます！！

これからも頑張って行こうと思います！！

# 第２９話　神崎大悟ｖｓ加藤桐谷、どっちがイケメンか対決

さて、季節は5月中旬。あと1週間でみんなお楽しみ中間テストである。

真面目ちゃんな皆様はもう勉強を始めている。

いや、百歩譲ってするのは構わない。

だからって休み時間まで詰め込むなよ・・・・・・・

「もう、なんであんなに頑張るんかな?」

「だよなぁ・・・テスト勉強なんて3日前ぐらいにすりゃいいのに・・・」

「・・・私たちは普段してないから。」

「難しい所が多すぎるんだよ・・・」

文句を垂れながら古典の教科書とにらめっこするなのは、フェイト。

昼休みの空いた時間を使って、なのは、フェイトの勉強を教えるためみんな、なのはの周辺に集まっていた。俺の机にはフェイトが座ってる。

俺はその前に座らせてもらい、隣に座っているはやてと談笑していた。

「ほら、無駄口叩いでないで手を動かす！！」

「フェイトちゃんそこ違うよ。そこは・・・」

その二人をスパルタで教えるアリサと丁寧に教えるすずか。

「で、あんたたちはやらないの？」

「俺はやらなくても大丈夫。」

転生者を舐めちゃいかんぜ。
結構危なくなってきたけど・・・

「私は苦手な科目は無いから大丈夫や。最低限は取れるで。」

「それでいいの？」

「大丈夫！大丈夫！！それにこんな早くに勉強なんて出来るかいな。」

はやての返事に呆れるすずか。

「零治、あんたも？」

「当然！！まだこれくらいの内容だったらオール８０点は取れるだろう。」

期末は少しやらないとまずそうだけど・・・

「何で真面目にやってないアンタがそんなで、なのは達がこんなに

苦労しなきゃいけないんだろうね。ってなのはそこ違う！！さっきも言ったでしょ！そこは・・・」

「アリサちゃん厳しいよ～フェイトちゃん代わって～」

「フェイトちゃん、そこは・・・」

「すずかが何言ってるのか分からない・・・」

駄目そうだなこの二人。

「しかし暇やなぁ・・・」

「ああ、何か起きんかな・・・」

と外を眺めていた俺とはやて。

そんな時・・・・

「加藤桐谷！！お前に決闘を申し込む！！」

バカの大きな声が隣のクラスから聞こえてきた。

決闘って・・・

「零治君・・・」

「ああ、何か面白くなりそう・・・」

「ちょっと、二人とも!?」

フェイトの声を無視し、俺たちは隣のクラスへ行った。

「決闘?」

「ああ、決闘だ!」

俺の机の前に仁王立ちに立っている男。

確か神崎大悟だっけ?

零治から俺たちと同じ転生者と聞いているが・・・

「なぜ俺なんだ?」

「この学校にイケメンは二人もいらない!」

・・・・何を言っているんだコイツ。

「お前の所為で俺の人気もガタ落ちだ!!だからどっちがいい男か勝負しろ!!」

「じゃあ、お前がいい男で。パフパフ。」

俺は口でラッパを吹き、冷めた拍手を送った。

「な、舐めてんのかぁ！！」

まぁそうなるか。

俺にとってはどうでもいいことなんだが・・・

「その話よく分かった！」

「後は私らにお任せや！」

俺がその声の方を見ると、何故かベランダから侵入してきた二人、零治とはやてがいた。

「話は大体聞いた。要するにどっちが人気があるか決めたいんだよな？バカ。」

「ああ、そうだとも。って誰がバカだ！」

「なら私たちにお任せや。三日後までに私たちがこの学校の女子からアンケートを取るさかい。その結果で多かった方の勝ちでええな？バカ。」

「ああ、望むところだ！って何でバカ？」

「なら、まず写真を撮ろう。その写真でどっちがいいか決めてもらうから。」

そう言って零治は自分の携帯を取り出した。

「よし行くぞバカ。」

「よし来い！」

何故か分からないが俺の意見を聞かずに話が進んでしまった。

神崎はノリノリで写真を撮られている。

「じゃあ次は桐谷。えっとそのままでいいや。」

パシャっと勝手に撮って勝手に終わりやがった。

「よし、これで良し。はやて。」

「分かっとる、早速行動開始やな。私は1年生から聞いてくで。」

「なら俺は3年生だ。」

そう勝手に言って走って教室を出ていく二人。

「ふん、三日後を楽しみにしてるんだな。」

ハーハッハーと笑い声を上げながら神崎も教室を出ていった。

「ということで手伝ってくれ。」

そう言った俺の腹にアリサと加奈のボディブローが貫く。

シンクロ率高ぇな・・・

「アンタたち馬鹿じゃないの!?テスト一週間前でしょ!!」

「そうよ!!何考えてるのよ!!」

「まぁ待ってな。」

そうだ相棒、言ってやってくれ!

「一週間前からやって何になるって言うねん!!学生なら一夜漬けに決まっとるやないか!!」

相棒、違う!!

「それに、これで桐谷君が勝てば、あのバカも身の程が分かって、少しは静かになるかもしれへんやろ?」

多分それは無いな。好感度を上げるために奮闘しそうだもん。

「それは・・・」

「そうかも・・・」

「すずかちゃんはなのはちゃんとフェイトちゃんの勉強を見ていないといけないから手が離せないのや。お願いや!手伝ってください!!」

「「はやて・・・」」

はやての必死さに二人も押し黙っている。

よし、相棒ナイスだ！！

「・・・なぜそこまでするの？」

加奈、なんていい質問。

これなら。

「・・・・決まってるやん。おもろいからやー！！！」

って違うだろ！！！

何でそこで本音が出るんだよ！？

みんなのためでいいじゃねぇか！！

「頼む、この通りや！！」

今更頭下げても・・・

「「いいわけないでしょうが！！」」

二人から拳骨をもらうはやて。

相棒・・・

あの後、賄賂でなんとか協力してもらいました・・・

「へぇ、面白いことやっているじゃない。」

今、俺が話しているのは生徒会長の水無月楓先輩だ。カチューシャを着け、足まで届きそうな黒いロングヘアーが特徴の女性だ。
3年生に聞いているときに興味を持たれ話していた。

「やっぱ先輩もこの2人を?」

「ええ、やっぱり3年でも人気が高いわよ。・・・ねぇ零治君?」

「はい?」

「私も協力してもいいかしら?」

「・・・いいんですか?俺的にはありがたい申し出なんですけど、先輩3年ですし・・・」

「こんな面白そうなこと、やらなきゃダメでしょ!!その日の昼休み、結果発表は体育館でやりましょ。この結果をを全校生徒にも聞けるように放送を流して・・・・」

俺はこの後、水無月先輩と3日後について話し合った・・・

当日・・・・・・

「どうしてこうなった・・・」

いつの間にか話が大きくなっていたらしく、二日目にはポスターまであった。

何故か生徒会公認になっていたし、会場が体育館になっていた。

「フフフ、今日は眠れたかい？加藤君。」

「ああ、たっぷりと。」

皮肉のつもりだろうが、俺にとってはこんなことどうでもいい。

今、俺たちは体育館のステージの上に立っている。

ステージ下には暇を持て余した生徒が大多数。

零治、覚えてろよ・・・・

『はぁ始まりました！！緊急企画！！神崎大悟ｖｓ加藤桐谷どっちの方が人気があるでしょうかイケメン対決～！！進行は２－Ａ有栖零治と・・・』

『２－Ａの八神はやてでお送りします！！』

あの二人・・・

『さぁてはやてさん、この二人の人気、本当に凄いですよね。』

『そうですね。特に加藤君なんてまだ転向してきたばかりなのにほとんどの人が知っていました。流石イケメン。』

『本当にどっちが勝つか分からない戦いです。果たして勝利し、聖祥１のイケメンの栄光を手にするのはどちらか！？・・・それでは早速参りましょう、はやてさん。』

『はい、了解しました。まずは一年生。』

そうはやてが言うと、後ろからスクリーンが下りてきた。

『結果は・・・・・・こうなりました！！』

ダダンッと効果音が鳴り響き、結果が映し出された。

神崎大悟　　加藤桐谷

５８　　４５

『おおーっと！？一年生から人気があったのは神崎大悟だぁー！！』

「よっしゃぁあああああ！！」

かなり大きいガッツポーズする神崎。

そんなに嬉しいか。

しかし、零治の野郎・・・

普段静かにしてるくせに、悪ノリすると本当に止まらなくなるな・・・

少しは自重しろっての！！

『はやてさん、一年生からのコメントをいくつかお願いします。』

『了解です。「神崎先輩の笑顔が素敵です」「気軽に話しかけてくれて優しかったです」などがありました。いやぁ本当に人気がありますねぇ・・・さてここからは駄目なコメントです。「いやらしい目で見られている気がする」「すぐ、頭や手を握ろうとするところが嫌だ」このようなコメントがありました。』

『さて、加藤桐谷のコメントは自分が・・・「クールな所が素敵です」「座って本を読んでいるところが絵になる」などのコメントをいただきました。なるほど、さっきとは違い、雰囲気が良いと言う方が多いですね。続いて駄目なコメントを。「何か恐い感じがした」「話しかけづらい」おっと加藤君はとっつきずらいんですかね？恐いや話しかけづらいとのコメントが多かったです。それがこの結果になったか！？』

余計なお世話だ。

『さて次は3年生だぁ～！！さぁどんどん行きましょう！！有栖君お願いします。』

『了解です。結果は・・・・・こうなりました！！』

ダダンッとさっきと同じように結果が写し出された。

神崎大悟　加藤桐谷

４８　　５７

『今度は桐谷君の勝利です！！これで勝負は分からなくなりました！！それでは有栖君コメントよろしく～！！』

はやても随分テンションが高いこと・・・

『分かりました！！さて同じくコメントを見てみましょう・・・まずは加藤桐谷から。「クールで大人っぽい雰囲気が良い」「年下とは思えない」などのコメントをいただきました。続いて駄目なコメントですが・・・特にありませんでした。３年生には大人の雰囲気がとても人気があったようです！！』

そういえば転生前も年上からの告白が多かったような・・・

『続いて私が神崎君のコメントを・・・「話しやすいのが良い」「あっちから気軽に話しかけてきてくれる」などがありました。話しやすいのがプラスになっていたようです。続いて駄目なコメントを「年上に馴れ馴れし過ぎ」「誰にでも声をかけていて軽そう」などがありました。先輩はにはしっかりした対応をしなければいけませんね。』

「ちっ、あまりに馴れ馴れしすぎたか・・・」

こいつはこの勝負に本当にかけてるな・・・

頑張れ神崎。

『さて、いよいよ最後です！！果たして同級生の評価はどうなっているのでしょうか！？』

『これは私も投票しております。では発表したいと思います。』

ダララララとお馴染みの効果音が流れる。

『2年生の結果は・・・・・・こうだ！！』

零治がスクリーンを指差し、スクリーンに結果が写った。

神崎大悟　加藤桐谷
１８　　７４

ああ、神崎の奴固まってるな。

『圧倒的だぁ～！！！！』

はやての今日一番の声にそこにいた神崎が我に帰った。

「馬鹿な！？ありえない！！同級生はほとんど攻略したはずだ！！」

ゲーム感覚かお前は。

『神崎君、静かにしてください。ではまず加藤君からコメントを読みたいと思います・・・「加藤君の年上の雰囲気が良い」「神崎よりマシ」・・・・・・えっと・・・やっぱり年上の雰囲気が好きな方が多いらしいですね！！では有栖君、神崎君のコメントをどう

ぞ。』

はやてもストレートすぎて、少し戸惑ってたな。

俺も驚いたけど・・・

『はい了解しました。では・・・・・・・・・・・・えっと・・・』

『有栖君?どうしました?』

『あ、では読みますね。「目がいやらしい」「変態」「女たらし」などがほとんどです・・・えっとドンマイ。』

・・・ドンマイ。

「ま、待ってくれ、良いコメントもあるはずだ!!」

勇気あるなぁ・・・せっかく零治が気を聞かせたのに自分からほじくりかえすなんて・・・

『それが・・・ないんです。』

「嘘付け!!だったら俺は0票だろ!?」

『それは「加藤君が恐いからまだ神崎君の方がマシとの意見がほとんどです。』

そう聞き、神崎は固まった。

これは・・・どうしようもないな。

『ということで神崎大悟ｖｓ加藤桐谷のイケメン対決は加藤桐谷君の勝利です！！』

はやてが多少無理やりしめた。

『勝利者の加藤君一言どうぞ。』

どうぞじゃねぇよ零治・・・

「えっと・・・勝ちました。投票ありがとうございます。」

そう言って俺はマイクを零治に返した。

『どうもありがとうございました！！これにて終了とさせていただきます。協力してくださった皆さんありがとうございました。』

零治が締め、この企画は終了となった・・・・・

「良かったよ、零治君、はやてさん。」

「どうもっス先輩。」

「ありがとうございます。」

舞台裏、企画が終わり、俺達は会長と話していた。

「でね、早速だけど次はこんな企画をやろうと思ってるんだけど・・・」

「へぇ、面白そうじゃないですか。」

「わ、私もですか？」

「そうよ。あなたも男子から人気あるんだから。」

「俺は構わないですけどいつやるんです？」

「うーん、私的には期末が終わってからにしようかなと思ってるんだ。そうしたほうが盛り上がるでしょ。」

「なるほど、俺はＯＫですよ。今回協力してもらいましたし、協力します。」

「はやてさんは？」

「私も大丈夫です。私も出るのはちょっと気が引けますけど・・・」

「いいのいいの。はやてさんは綺麗なんだからもっと自信を持ちなさい！じゃ時期が近くなったら呼びに行くわ。」

「はい分かりました。」

「じゃ、今日はありがとね。」

そう言って会長は行ってしまった。

「ああ～疲れた。」

「零治君、普通にみんなの前で話したりするの平気やったね。」

「そう言うはやてこそ。」

「私は仕事柄人前で話すのには慣れてんよ。」

「そうだったな。」

「ねぇ、零治君・・・・」

「何だ？」

「私ってそんなに綺麗かなぁ？」

「普通に綺麗だろ。」

俺の言葉に驚くはやて。

「何かおかしいか？」

「いや、真顔で言われたんでつい・・・」

「普通に男子の８割がそう言うと思うぞ。」

「お、おおきにな・・・」

？何か様子がおかしいような・・・

キンコーンカンコーン

「やばっチャイムが！！はやて、さっきのこと内緒な。」

「あ、うん。」

「ほら、急ぐぞ！！」

「待ってな零治君！！」

俺たちは走って教室に戻るのだった。

だが、その後桐谷にどつかれ、午後の授業は保健室で過ごすこととなった・・・・

「なぜ・・・・・」

俺は一人、便器に座って今日の事を考えていた。

「完全勝利のはずなのに・・・」

なぜ、負けたんだ？

ニコポなど完璧だったはず。

なのに・・・・・・

「ありえない・・・こんなことはありえない！！」

俺は便器から立ち上がり一人の男を思い浮かべた。

「あいつのせいだ・・・・あいつの・・・」

司会をしていた、なのは達を脅している元凶。

「おのれ・・・俺は決してこんなことではくじけないからな・・・」

零治に復讐を誓う神崎だった。

## 第２９話　神崎大悟ｖｓ加藤桐谷、どっちがイケメンか対決（後書き）

桐谷の勝利～！！

零治、更に大悟に恨まれることに・・・・

今回会長さんが出てきました。

次出てくるのは期末後のイベントかな・・・・

次もよろしくお願いします。

# 第３０話　みんなでテスト勉強（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

タマさんに言われて気づきましたが、自分のユーザー名を間違っていました。

ｂｌｕｅをｂｕｌｅに・・・・

めっちゃ恥ずかしい・・・

タマさんには直さないと書きましたが書き直しました。

誤字が多いとはいえ、自分のユーザー名まで間違えるとは・・・

# 第３０話　みんなでテスト勉強

「分からないー！！！」

バン！っとシャープペンを机に思いっきり置くライ

「ライちゃん、図書館では静かにね。」

「でも、すずか～・・・」

「授業中いつも寝ているライが悪いんだろうが・・・」

「うっ！！」

「そうですね。よだれを垂らしながら寝言でハンバーグって言ったときはこっちが恥ずかったです。」

「ううっ！！」

「それにこの前なんかは・・・」

「もう止めて星、夜美！！分かったよ、僕頑張るから！！」

そう言って再びシャープペンを持ち直したライ。

「そうそう、私も見てあげるから頑張ろうね。」

「ううっ、ありがとうすずか・・・」

嘘泣きだろうが涙を見せ感謝するライ。

「みんな大変やなぁ～」

「・・・何人事みたいに言ってるのよ!!」

アリサがでかい声ではやてに言う。

「アリサ、やかましい。図書館ぐらい静かにしてろ。」

「それは悪かったけど、でもはやてに問題が・・・」

「私は何も悪いことなんてしてへんよ?」

「今日は勉強するって言ってたじゃない・・・」

はやてはみんなが勉強している中、片手にジュースを持って雑誌を読んでいた。

「アリサちゃん・・・ここどうやるの?」

「だからさっきも言ったじゃない!!なのは。そこは・・・・」

アリサも大変そうだな。

でもあっちも・・・・

「フェイト、また同じところ間違えてる。ここは四段活用よ。」

「ううっ、違いが分からないよ・・・」

加奈がフェイトに古文を教えている。

フェイトはもう古文と国語以外は全く問題ない。日本史も頑張って覚えたらしい。

だが古文が絶望的で、一向に進んでいないようだ。

で、なのははと言うと・・・・・

「うう～やっと終わった・・・」

「終わってないわよ。次は日本史。ちゃんと言ってきた所は覚えてきたんでしょうね？」

「・・・・・うん。」

「なのは？返事に間があったような気がするんだけど・・・」

眉をピクピクさせながらアリサがなのはに言う。

なのはは古文、国語、日本史がアウト。

フェイトみたいに暗記が得意って訳ではないので日本史が特にまずいらしい。

戦国時代と幕末については伝説の剣豪やら、裏話まで詳しいのだが、それ以外は全く駄目らしい。そして今回の範囲は鎌倉後期から室町後期まで。見事に被っていない。

古文と国語はなんとか赤点を免れるぐらいの点数。
正直一番心配だ・・・
「だったらお前も教えてやればいいじゃないか。」
俺の隣でテスト勉強・・・というより大学受験の問題を解いている桐谷。
キモッ・・・
「口に出てるぞ、お前。ってお前も少しは勉強したらどうだ?」
そう言って俺の前に大学受験の問題集を俺の前に置く。
「・・・・こんなの出来るか。」
俺は転生してきてもう6年だぞ!?
転生して間もないお前と一緒にするな。
それでも出来なそうだけど・・・
「桐谷、そこは違うぞ。ここは・・・」
と大学受験の問題を指摘するフェリア。
お前も少しは自重しろ・・・
設定は中学生だぞ!?

このレベルの高い空気に耐えられなかった俺は急いではやての所へ退避した。

ここは海鳴市立図書館。

はやてが車椅子時代によく利用していた図書館だ。

今日はテスト前の最後の休日。月曜日にはテスト本番である。今、俺たちはここにある自習室をほぼ占領して勉強会をしている。

なぜこうなったのかは昨日の夜の出来事が発端だ・・・・

「レイ～!!助けて!!」

テストまで後3日になり、星の中学校も同じ時期にテストがあるため、我が家も俺とフェリア以外は勉強に熱が入っていた。

そんな我が家で俺はリビングのソファーに座りながら優雅にあったかい緑茶を飲んでいたときだった。

声をあげながらライが俺の背中にダイブしてきたのは。

その勢いで俺は含んだ緑茶を向かい側に座っていたフェリアにかけてしまう。

「レ～イ～?」

「待て!?これはライが、だからナイフしまってくれ!!」

俺の思いもむなしく、結局オシオキされました・・・・

「エヘヘ、ごめんね。」

「ったく、優雅なひとときを台無しにしやがって・・・・」

ボロボロになりながらも俺はライに言った。

「で、何か困ったことがあるんだろう。どうした?」

「それはね・・・・・」

何かもぞもぞし始めたけど・・・・

変なことじゃないだろうな。

「私に勉強教えて!!」

とこんなことがあり、ついでだからみんなで勉強しようと俺がみんなを誘ったことが始まりだ。

星から話を聞いたのだが、ライは授業中いつも寝ているらしい。

寝ているのは別に良い。だけど星達が勉強を教えていても直ぐに脱線して手に負えないらしい。

そこで俺に白羽の矢がたったのだ。自分たちの勉強もしたいと俺に

協力を求めてきた。

なので、俺はなのはたちも猛勉強中だったのを思い出し、一緒にしようと誘ったのだ。

というよりライの勉強をみるのが大変そうだから押し付けたかった・・・・・

見事、すずかはごねるライを上手に教えてくれている。

そのおかげで俺はゆっくり小説を読んでいられる。

今度何かお礼しなくちゃな・・・・

「分からないよ～零治君、ここ答え何？」

「承久の乱。」

「ありがとう、零治君。」

お礼を言って再び問題を解き始めるなのは。

だが直ぐに手が止まってしまう。

何かさっきからずっと同じな気が・・・

「・・・一回確認しながら答えさせたらどうだ？」

あまり口出しするつもりは無かったが、俺はアリサに聞いてみる。

「でも、本番は2日後よ。」

「でも、ただ問題を解くにしても知識が無さすぎて、中々先に進んでないぞ・・・」

アリサの勉強方法はとにかく問題を解いていくスパルタなやり方だ。

なのはも分からない所は聞いているが、何分分からない所が多いみたいで。なかなか進んでいない。

「そうね、なのはがちゃんと勉強してきたのを前提に考えていたから・・・で、何かいい案があるんでしょうね？」

「普通に分からない所は自分で調べさせる。それで取り敢えずは全部空欄を埋めさせて、それからもう一度問題をやらせて分かるまで繰り返す。そうすれば出来るようになるだろう。」

本当に理解できるかは微妙だけどな。

「それって集中力より根性ね・・・」

「数やれば流石に覚えるだろ。そっちの方がいいと思うけどね。」

しばらく考えるアリサ。

「分かったわ、それで行きましょ。なのは、方法変えるわよ。」

アリサは早速説明している。なのはの顔は青くなるばかりだが・・・

まぁ頑張れ。

俺も再び読みかけの本の続きを読み始める。

ふと、本棚に手を伸ばして一生懸命取ろうとしている女の子がいた。

俺は立ち上がり声をかけた。

「これか？」

「えっ！？うん。」

確認がとれたので俺は本を取ってあげ、女の子に渡した。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

笑顔で俺にお礼を言って、女の子は走っていった。

「優しんやな。」

「別に、普通だろ。」

話しかけてきたのは雑誌を持ったはやてだ。

どうやら雑誌を片付けに来たらしい。

「そういうことを普通に出来る人って意外と少ないんやで。」

「・・・そんなもんか？」

「そんなもんや。」

何が嬉しいのか笑顔で俺に言うはやて。

「普通にいると思うけどな・・・」

「珍しく謙虚やないか。」

「珍しくとはなんだ。俺は謙虚で優しい少年だよ。」

俺は冗談交じりに言った。

「あながち間違いやないんやけど・・・・・」

ん?聞こえなかったけど何か言ったか?

「はやて?」

「ああ、なんでもないんや。ほな、雑誌戻してくるな。」

そう言って雑誌コーナーに向かったはやて。

「・・・何かいつもと違うような。」

そう呟いて自分の席に戻った。

「レイ~教えて~」

戻った俺を待っていたのは、すずかに教えてもらっていたライが俺の席に座ってだらけていた。

「お前何やってるんだ？すずかに教えてもらってたんじゃないのか？」

「すずか、いきなり家の用事が出来て家に帰っちゃったの。」

マジか・・・

「ねぇ、だから教えてよレイ～」

俺に席を譲ったかと思いきや、背中に乗ってきたライ。

「分かったからくっついて来るな。暑いだろ！」

「いいじゃん。レイの背中って大きくてあったかいんだもん。」

「勉強するんだろう？いいから隣に座れ！」

「は～い。」

渋々俺の背中から降り、隣に座ったライ。

「いいな・・・・・」

「えっと、アリサちゃん？」

二人の羨ましそうに見るアリサ。

「何故いつもライばかり・・・」

「夜美はお姫様抱っこされたことがあるじゃないですか。私はそういう事は一度も・・・」

「なら言わせてもらうが、星が一番幸せ者だぞ！レイと二人っきりでデートして・・・」

「デ、デートなんてそんな・・・」

顔を赤くして口ごもる星。

「くっ、今度は我の番だからな！！絶対付いてくるなよ！！」

「それは約束できません。あの時は邪魔が入りましたからもう一度です。」

キャイキャイ騒ぎ始める星と夜美。

「ライ、あの無邪気さが憎い・・・」

「う～ん、う～ん・・・」

フェイトがかなり困っている顔をしているのにそれに全く気づかない加奈。

「何かみんな集中力切れてきてるな。」

桐谷とフェリアは相変わらず大学受験の問題集を解きまくってるけど・・・

あの二人は例外だな。

「レイ～ここは？」

「そこはこうして・・・」

なのはが一番まずいと思っていた俺だったが、ライもかなりまずいレベルだ。

ライは得意科目が体育のみの元気っ子な為、じっとしている事がかなり苦手みたいだ。

何が言いたいのかと言うと、得意科目がない。

恐らく今のままテストを受ければ、平均３０点ぐらいの点数になるだろう。

すずかのおかげで、英語と日本史はそれなりの点数を取れるぐらいにはなったらしい。

後は数学、国語、理科か・・・・

数学、国語はともかく、理科は一番苦手なんだよな。

「あら？席を変えたんか？」

「おおはやて、いいところに来た。ライの勉強見るの手伝ってくれないか？俺って理科結構苦手なんだよ・・・」

「別に構わへんで。」

「助かるよ。」

こうして、俺とはやてによるライの勉強会が始まった。

のだが・・・

「ねぇレイ、ここは？」

「そこは・・・」

「なぁ零治君、ここってこうやっけ？」

「違う、そこは・・・」

「零治君、終わったの。次はどうすればいい？」

「アリサー！！どこ行った！！」

「アリサちゃん、急用で急いで帰っちゃって・・・」

アリサ、お前もか・・・

お嬢様組はいったいどうしたんだ！？

上記で分かるようにまさかの俺一人に対し、３人がそれぞれ聞いてくるという、訳の分からない状況になってる。

つうか、はやて！テメェは教える側だったろうが！！

「いやぁ、全然分からへん。」

ハッハッハと笑い飛ばすが、俺は全然笑えない。

何で俺が3人のめんどうを見なくちゃいけないんだよ・・・

「そうだ！桐谷とフェリアに・・・」

「あの二人でしたら更に難解な問題を解いてみると資料を探しに・・・」

星の説明で俺は希望を失った。

誰かヘルプ！！

「レイ、私達も手伝いますか？」

「えっ！？いいのか？」

「我も十分に勉強できた。もう大丈夫だろう。」

ああ・・・こんな近くに女神がいる。

「ありがとう、二人とも。よろしく頼む。」

こうして1対1で教えることになった。

「全く、何度言えば分かるのですか？」

「ご、ごめんなさい・・・・・」

「いつまでも魔法少女でいられないのですよ。いい年なんですから魔法をぶっぱなしてばかりじゃ駄目なんです。」

「ぶ、ぶっぱなしてって・・・で、でも仕事で・・・」

「最低限勉強を出来た人がいう言葉ですよ。理解できますか？戦闘狂。」

「せ、戦闘狂・・・」

「あなたは学生なんですから勉強に支障が出るなら辞めるべきですよ。」

「そ、それは嫌！！」

「だったら死ぬ気でやりなさい。」

「は、はい！！」

・・・星、めっちゃ恐いんだけど。

なのはに何か恨みあるだろ。

「なのはちゃん、御愁傷様やな・・・」

「星、いつものお前はどこに・・・」

はやてと夜美も星の変化に戸惑っているみたいだ。

「レイ、優しく教えてね・・・」

「お前次第だが、星みたいにはしないよ。」

ライも俺が星みたいになるのかと不安になっているみたいだ。

「加奈、星っていつもあんななの？」

「いいえ、いつもは落ち着いてる子なんだけど。」

フェイトは星の事をまだよく知らないので勘違いしそうだな。

その後も星の拷問はなのはの精神を削っていったのだった・・・・・

・

「私は恥ずかしくない・・・私は恥ずかしくない・・・」

ブツブツと何かを呟いているなのは。

「な、なのは！？」

慌ててなのはに近づくフェイト。

夕方になっていたので勉強会もお開きになったのだが、なのはの様

子がおかしかった。

「・・・何があったのだ?」

「フェリア、世の中には知らなくていいことがあるんだ・・・」

「何をしてたんだお前ら・・・」

桐谷の言葉も分かるが、俺はなにも言えない。

星が恐くて・・・

「大丈夫ですよ。ちゃんとテストも出来る筈です。出来なかったら・・・」

ニコニコしながらなのはを見る。

「分かってますよね?高町なのは。」

「ひぃ!!」

怯えてるんだけど。

「ねぇ、大丈夫でしょ。」

「ああ・・・」

「そうだな・・・」

なにも言えなくなるフェリアと桐谷。

その後、星はいつも通りだったが、誰も星に逆らうことがなかった・・・

「ど、どういうこと？」

テストも終わりすべてのテストが帰ってきた。

アリサの言葉は最もだ。

何故ならばなのはが平均８０点を取ったからだ。

「どうしたの、なのは！？」

「えっ！？別に普通だよ。」

「普通ってあんなに苦労してたのに・・・」

「うん、でも点取らないと・・・」

ブルブル震え始めるなのは。

「・・・いったいあの後何があったのよ？」

「アリサ、世の中には知らなくていいことがあるんだ・・・」

次に星があんな風になったら全力で止めよう。

そう心に決めたのだった。

## 第３０話　みんなでテスト勉強（後書き）

星がなのはに勝つ話でした。

どうしてこうなった。

いつも途中で方向転換する作者です。

今回で物語も３０話に突入しました。

夏休みの暇つぶしで書いていたハズが、空いた時間はほとんど書いていたような気がします。

大学生なので、後二週間ぐらいありますが、きりがいいので人気投票をしたいと思います。

元々マテリアル娘が他の小説だとなかなか見ないと思って、書こうと思ったことが始まりでした。

いざ書いてみると3人の人気は結構高い。

なのでこの小説のキャラだとどのキャラが人気があるのか知りたいと思ったので、人気投票したいと思います。

この小説のキャラで、一人3票までお願いします。

オリキャラもＯＫです。

零治と桐谷と大悟も含みたいと思います。

今はまだ考えていないですが、ベスト3までのキャラはメインで話を書こうかなと思います。

期間は一応9月2日の金曜日までででお願いします。

これは作者の興味なので、別にスルーしても構いませんが、出来れば協力してくださると嬉しいです。

これからもよろしくお願いします。

## 第３１話　梅雨のとある一日（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

皆さん、投票ありがとうございます。

まだ投票を受け付けていますので協力お願いします。

今回は梅雨の一日です。

ほのぼの～

# 第３１話　梅雨のとある一日

「おはよう、零治！」

「おはよう、零治君。」

「はよ～す。」

テストも終わり梅雨シーズン。ジメジメと熱くなってきて寝づらい時期になってきた。

テストはみんな思った通りにいったみたいだ。

なのはは当然、フェイトもなんとか古文を４５点まで持っていた。

それでみんなハッピーといきたかった所だったが、１人問題があった。

「どうしてこうなったんや・・・」

「自業自得だ。」

はやてが苦悩して課題をやっている所にフェリアが冷たく言った。

「ふぇ～ん、フェイトちゃん・・・」

「はやてが悪い。」

「なのはちゃん・・・」

「少しは反省するべきなの。」

「すずかちゃん・・・」

「二人の言うとおりだよ。」

「零・・・」

「眠いから却下。」

「何でみんな放置なんや！！放置プレイか！？」

はやて、女の子がそんなこと言うな。

「何で私たちの名前が無いのかしら・・・」

「本当に失礼ね・・・」

「全くだ。」

それぞれ文句を言うアリサ、加奈、フェリア。

「当たり前やん。フェリアちゃんはともかく、二人はドSやないか。」

「ドSって・・・」

「いい度胸ねはやて・・・」

眉をピキピキさせながら怒りを露にする加奈。

「レイ、ドSってなんだ？」

そうか、そんな知識知るわけないか。

「ドSってのはな、なのはやアリサ、加奈のように人を痛めつけて快感を得る頭のいかれた奴らのことだ。」

「なるほど。」

ポンっと手を合わせるフェリア。

「零治君、生きてまた会おうね。」

「無事に帰ってきてね。」

フェイト、すずか？

いきなり何言ってるんだ？

まるで俺が今から戦場に行くみたいに・・・

「・・・零治君？」

「何だ？なの・・・」

その瞬間悪意に満ちたプレッシャーに俺は何も言えなくなる。

「いい度胸ね、何が変な奴ですって？」

「兄さん、本人を前にしてよくそんな風に口が回るわね・・・」

3人がそれぞれ近づいてくる。

「お、俺が一体何をした!?」

「零治君・・・」

「すずか、お前もあいつらに・・・」

「ドSで頭のいかれた奴って言ってたよ・・・」

・・・・・・そうだった!!!

「零治君おはなしする?」

「断る!!」

俺は初めてなのはのプレッシャーから逃げる。

「逃すと、」

「思ってるの!?」

逃げた先に、アリサと加奈が立ちふさがる。

「クッ、3対1とは卑怯な・・・」

「安らかに眠ってな。」

「頑張れ～零治君～！」

「「「「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね・・・」」」」」

「いいなぁ俺も罵られたい・・・」

はやてとクラスメイトが俺に好き勝手声をかけてくる。

いろいろ言いたいことがあるが・・・

神崎組、後で覚えてろ。

「零治君・・・」

魔王様がゆったり近づいてくる。

「くそ、どけ！！」

俺はフェイントを混ぜ、アリサと加奈の間を抜けようとした。

「甘いわ！！」

俺が抜ける瞬間に俺の後ろ足に足を引っ掛け俺を転ばすアリサ。

俺はなんとか手で着地し、直ぐに立ち上がろうとする。

「本当に甘いわ兄さん。」

「うがっ！？」

俺の背中に足を乗せ、立ち上がらせないようにする加奈。

「くそ・・・」

「お遊びは終わりかな?」

いつの間に俺の目の前にいたなのは。

「さぁおはなしなの・・・」

俺の制服の襟を掴み運ぶなのは。

いつも思うけど、どこからそんな力が・・・

「ちょ!?待て!!た、助け・・・」

俺の腹にアリサのボディブローが貫く。

「静かになさい。」

アリサの冷たい一言にクラスみんなも静かになる。

「さぁ行きましょ。」

俺は結局3人にズルズルと連れて行かれることになった。

「またあいつは何かやらかしたのか?」

入れ違いに入ってきた桐谷がフェリアに聞く。

「ああそうだが・・・桐谷。」

「何だ？」

「お前はドSか？」

「えっ？」

桐谷はその後フェリアを誤魔化すのに苦労したのだった・・・

「朝は本当にひどい目にあった・・・」

「お前ももう少し言葉に気をつけろ。」

昼休み、俺は肩を抑えながら廊下を歩いていた。

「「「有栖先輩、加藤先輩こんにちは。」」」

「よっす。元気だな一年生は。」

そんな俺たちに一年生の女の子3人組が声をかけてきた。

「先輩、悲鳴聞こえましたよ。いつものですか？」

「ああ、いつのもだ。お前たちもうちのクラスにいる魔王には気をつけろ。おはなしって言葉が出たら即座に逃げろ。じゃないとトラ

ウマになるぞ・・・・」

「大丈夫ですよ。有栖先輩だけみたいですから・・・」

「そうなのか!?」

「お前、気づいてなかったのか?」

桐谷にも言われる俺。

そういえば俺にしかやっていないような・・・・・

「それじゃあ、失礼します。」

「ああ、転ぶなよ~」

俺達から離れていく女の子達。

「零治、知ってる子か?」

「いいや、知らない。」

「・・・・どれだけフレンドリーに話してるんだよ。」

「いやぁ、あのときから色んな人から声かけられんだよ。」

あの時とは体育館でやった、イケメンバトルである。

あの後から、学年関係なく声をかけられるようになった。

「お前もか・・・」

「桐谷もか？」

「ああ、ラブレターなんかも渡されて正直迷惑だ。」

神崎組に聞かれたら処刑もんだな。

「そんなこと言うなよ。相手はマジなんだぞ。」

「だからいちいち答えを返すのがめんどくさいんだよ。」

ここがコイツの良いところだよな。

別に無視しても構わないのに、律儀に断りに行くからな。

だからこそ、あのバカみたいに人気が落ちないんだよな・・・

「まぁいいや、早く俺たちも教室に戻ろうぜ。」

「ああ、そうだな。」

俺たちはそれぞれの教室に戻っていくのだった。

「いったい何があった！？」

俺の言葉は最もだと思う。

教室に入った瞬間、バカが血を流し倒れているのだから。

「おい、フェイト！」

「どうしたの、零治君！？落ち着いて。」

「落ち着いていられないだろ、完全に殺人事件だぞ！！」

神崎組だって歓喜の涙を・・・・・・

って何で？

「流石、神崎君。みんなが羨ましがるおはなしを受けられるとは。」

「流石はリーダー！！」

「一生ついていくッス！！」

神崎は神崎組の二人に肩を担がれ立ち上がる。

「よく言った、同士諸君。我が宿敵有栖零治を倒し、一緒にハーレムを目指そうじゃないか。」

宿敵ってなんだよ・・・

満身創痍ながらも神崎組に宣言するバカ。

「行くぞ、みんな！！」

ぞろぞろ連れて、教室から出ていく神崎組。
後5分で授業なんだけど。

「フェイト・・・」

「神崎君、がしつこく話しかけてきて、あまりにしつこかったからアリサと加奈が・・・」

なるほどね。

それで歓喜してたのか。
お前らの人生それでいいのか？

「でもアリサちゃん、零治にやるお仕置きはこれの3倍はあるから手加減してるんだけどって。」

俺ってマジで化け物だな。

ディストーションフィールド要らなくないか？

結局、神崎組が帰ってきたのは授業が始まって３０分後だった・・・

「暑い・・・」

５時間目、雨が降ってきて、余計ジメジメしてきた。

「暑い、暑い。」

「・・・・・・」

「暑い、暑い、暑い。」

「・・・・・・」

「暑い、暑い、暑い、暑い。」

「・・・・・・」

「暑い、暑！！」

「うるさいの。」

鈍い痛みを感じ、俺はその場で意識を失った・・・

「鬼だな・・・」

その様子を見ていたフェリアは呟いた。

「あれ？いつの間に寝ていたんだ？」

俺が起きたら5時間目の休み時間だった。

「始まってすぐだよ。私も今日はちゃんと授業を受けたかったから

無視してたんだ。」

「そうなのか。でもこの頭の鈍い痛みは・・・」

「変な夢でも見たんじゃない？」

「そうか、そうだよな。なのはが俺の頭に何かしたのかと思ったよ。」

「違うぞ零治、なのはが・・・」

「フェリアちゃん、世の中には知らんでええこともあるんやで。」

フェリアの口をふさぎはやては言った。

「でも記憶がチグハグなような・・・」

「細かいことは気にしないほうがいいよ。」

「まぁそうだな。どうでもいいだろうし。」

フェリアは零治がなのはに毒されている事に不安を覚えたのだった。

ピンポンパンポン・・・

『2－A組、有栖零治君、八神はやてさん、至急生徒会室に来てください。』

ちょうどＨＲが終わった矢先、こんな放送が流れた。

「何故に！？」

「零治、また何かしたの？」

フェイトの冷たい視線が俺に突き刺さる。

「はやてちゃんもだけど・・・」

「なのはちゃん、それはないわ。今日はずっと課題やってたからなにもしてへんで・・・」

「ただ単に会長が俺たちに用があるんじゃないのか？」

「そうやね。だったら急ぐべきやないか？」

「そうだな、みんなは先に帰っていてくれ。」

俺はそう言い残してはやてと共に教室を出た。

「単刀直入に言うわ。零治君、次の生徒会長あなたがやりなさい。」

生徒会室に着いたとたんの会長の第一声がこれだった。

なぜか分からないが、カーテンをすべて閉め、部屋を暗くし、会長の机にあるスタンドだけがついていた。不気味すぎる・・・

なので俺は・・・

「間違えました、失礼します。いくぞはやて。」

「う、うん。」

俺ははやてを連れて生徒会室を後にしようとする。

「ちっ仕方がない、確保ー!!」

会長の掛け声と共に暗闇から現れる生徒会員。

「ちょ!?確保って!」

「どこさわってんねん!この変態!!」

俺とはやては最初こそ撃退したが、いきなりでしかもこちらは2人。
あっという間に拘束された。

「流石は零治君とはやてちゃんだね。」

「何の真似です?」

「だって2人、直ぐに帰るんだもん。」

「そりゃ、こんな不気味な所に入りたないわ。」

未だに電気は会長の机にあるスタンドだけ。

部屋の電気はまだ着けていない。

「で、何のようです？」

「勧誘。零治君には次の生徒会選挙に出て欲しいのよ。」

「生徒会選挙？そんなのあったっけ？」

「零治君、寝てたやろ・・・」

「生徒会選挙は生徒会長を決める選挙よ。会長だけは選挙で決めるのよ。」

そうなのか。前の学校は全部の役職を決めてたからちょっと違うな。

「他の役職はどないするんですか？」

「なんだ、はやても知らないじゃん。」

「やかましいわ。」

「他の役職は会長が自分で集めるの。自分がやり易い生徒会がいいでしょ。」

それだと遊びみたいにならないか？

まぁそれも会長次第ってことか。

「で、何で俺なんですか？」

「前の時も思ったんだけど、零治君って自分で思っている以上に人を引き付ける力があると思うの。はやてちゃんと二人のコンビだったらこの中学がもっと面白くなると思ったから。」

何かいつの間にか凄い評価高いんですけど・・・

「確かに零治君はそんな感じするなぁ。」

はやてまでかよ・・・

「嫌ですよ。俺、そんな柄じゃ無いんで・・・」

「そう、まぁいいわ。すぐいい返事をもらえるとは思っていなかったから。取り敢えず頭には入れといて頂戴。」

「まぁ了解しました。」

「じゃあ次は期末のあとにやる企画の事を相談しましょう。」

その後、俺とはやては下校時間ギリギリまで打ち合わせをしていた。

「零治君、ええんか?」

帰り道、そのままの流れではやてが会長との話をしてきた。

「ああ、俺は嫌だよ。俺は基本、静かに平凡に過ごしたいんだよ。」

「でも、私も会長が言う通りだと思うで。私達も直ぐに零治君とは

親しくなれたやん。」

「お前たちが変わってるんだよ。」

お前たちは人が良すぎるんだよ。学校の省かれ者の俺に簡単に話しかけてくるところなんかは。そんなんじゃ、いつか足元をすくわれると思うぞ。

「・・・世の中はそんなに優しくはないからな。」

「?何のことや?」

「独り言だ。それにはやては管理局員だろ。そうなると副会長に出来ないだろうが。」

「そ、それって、私が・・・・」

「はやてを巻き込めないならやったって意味ないだろ。」

「そうやろうと思ったわ!!」

頭をハリセンで叩かれた。

なして?

その後、はやては不機嫌だったが、下らない話をしながら俺達は帰路に着いたのだった。

## 第３１話　梅雨のとある一日（後書き）

零治に生徒会長のフラグが立ちました。

さて、どうなることやら。

投票は大混戦です。

２位、３位が特に大混戦。

１位との差もそんなに離れていないのでまだまだ分からないです。

このままだと４人になるかも・・・

作者としても結果が楽しみです。

次回もよろしくお願いします。

## 第３２話　マテ娘達の学校生活（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はマテ娘達の学校生活。

いつもより短いですがどうぞ。

# 第３２話　マテ娘達の学校生活

「行ってきます。」

私たちの学校は隣の遠見市にあるため、レイとフェリアよりも朝早くでなければなりません。

「ほらライ、しっかり歩け。」

「眠いよ～」

テストが終わって嬉しかったのかレイと朝方までゲームしてたらしいですからね。

レイは大丈夫でしょうか・・・

「おはよう星さん。」

「おはようございます。」

私達三人は同じクラスの２－４です。

みんな落ち着いており、周りと比べるととても静かなクラスです。

「ライ、昨日ここで詰まったんだけど・・・」

「ああ、そこはね・・・」

ライはクラスの男子とゲームの話をしてますね。

ライは活発で男子の方が話が合うみたいなのでよく話しています。

「・・・・・・」

夜美はついた途端、小説を読み始めました。

夜美はあまり自分から話しかけたりしません。けど決して省かれているということでは無いのですが・・・

ちょっと心配です。

レイに話した所、夜美はそんなに気にしない奴だから大丈夫だって言ってましたけど。

夜美もっとクラスに馴染んでほしいのですが・・・

「ほら、静かにしろ。授業始めるぞー!!」

今日もまた一日が始まりました。

「くか～くか～。」

ライは反省というものが無いのでしょうか?

また一時間目から爆睡しています。

お願いですから黙って寝てください。

「レイ～」

ああ、また男子の顔が変わりました。

ライは男子にとても人気があります。

なので、レイの存在がとても気になるようです。

レイが襲われるような事がなければいいのですが・・・

「クラス委員この教材、準備室に持っていってくれ。」

私はクラス委員をやっているので色々と先生の手伝いをしたりします。

「少し手伝うか？」

「ありがとう夜美。ではお願いします。」

よく夜美は手伝ってくれるので助かります。

私のもう一人のクラス委員はすぐサボるので話になりません。

一度、おはなしするべきですかね・・・・・

「・・・・星顔が恐いぞ。」

はっ!?危うく飛ぶところでした。

危ない、危ない・・・

「だから、なるべく一人に出来ないのだ・・・・」

何か呟いたような気がしますが気のせいでしょう。

「今日はバレーボールをします。」

3時間目の体育の時間、今日は雨が降っているので女子はバレー、男子がバスケみたいです。

「いっくよ〜」

ボールを高々と上げジャンピングサーブ。

相変わらす運動神経抜群のライ。

「甘いな。」

それを難なく受け止めてボールを上げる夜美。

夜美もライほどではありませんが、運動が得意です。

「星ちゃん、行ったよ。」

「りょ、了解です！」

私は・・・・

「あう！？」

ボールの落下地点を間違えてしまい、頭で受け止めてしまいました・・・

痛いし恥ずかしいです。

私も運動は嫌いではありませんし、走ったり器械運動などは得意なのですが、何故かボールを使う競技だと全然駄目なんです。

一体なんでなんだろ・・・・・

「星、何であんなにゆっくりなボールを頭で受け止めるんだ？」

私にも分かりませんよ・・・・・

「夜美、人には得意不得意があるんだよ。」

ライ、それはバカにしてます。

ライにはその気は無いのでしょうが・・・

「じゃあ、次行くよ～！！」

さっきと同様にライがジャンプサーブを打ち込みます。

でもそのたびに男子の目線が凄いです。

ライが動くたびに動くその・・・む、胸が！男子に直視されてます。

やっぱり男子は大きい胸が好きなのでしょうか・・・

レイもやっぱり・・・

「星ちゃん！！ボール！！」

「えっ！？ギャン！！」

スマッシュが今度は私の顔に直撃しました・・・

「全く何をしているのか・・・」

「ごめんなさい、夜美。」

手を差し出してくれた夜美の手に捕まり立ち上がります。

鼻血は出ていませんが、顔がものすごく痛いです。

今日の体育は散々でした・・・

「星、今日は大変だったね。」

「まだ顔が痛いです・・・」

ただいま給食中です。

ライとは同じ班なので一緒に食べています。

「でも見事なヘディングに顔面キャッチだったよ。」

「言わないでよ、吉井君・・・」

やっぱり男子も見てたんだ・・・・

とっても恥ずかしいです。

「星も大人気だね。」

「嫌ですよ、そんな人気。」

みんなに笑われてしまいました・・・・・

「もう、みんな酷いです・・・」

給食は笑われて終わりました。

「夜美。」

「どうした、星？」

「この前借りた本の続きってどこにあるんですか？」

「ああ、あれは・・・・」

今は昼休み。

私は大体、夜美と図書室に来ます。

夜美は本が好きなので、毎回来ているようですけど。

ちなみにライは・・・・・・

「シュート！！」

「うおっ！！」

サッカーゴールにボールが突き刺さった。

「ゴール！！」

「相変わらずえげつないシュート蹴るよな・・・」

「ああ、実にけしからん・・・色々と。」

男子に混じってサッカーをしています。

本当にじっとしているのが苦手な子なんですから・・・・

「あっ、あった。」

私は本棚にあった小説を一冊取って、夜美の向かい側に座りました。

これが私達の昼休みの過ごし方です。

「ライちゃん、テニス部に遊びに来る?」

「うん、行く!」

ライは放課後には色々な部活に遊びにいきます。

「星、先に帰るぞ。何かあるか?」

「いいえ、大丈夫です。気をつけて夜美。」

「ああ。」

そう言って夜美は帰っていきました。

恐らく市立図書館に向かったのだと思います。

私は今日はクラス委員の仕事なのでそちらに出なければなりません。

今日の晩御飯どうしましょう・・・

帰り道、私に電話がかかってきました。

相手はシャイデさんです。

『今大丈夫？』

「はい、大丈夫ですけど、どうしたのですか？」

『ちょっと聞きたい事があってね、星達ってなのは達にもうバレたわよね？』

「はい、そうですけど・・・」

『それじゃあ・・・』

シャイデさんからある提案を受けました。

その内容に心底驚いた私ですが、私だけでは決めかねません。

「取り敢えず、家に帰ってライと夜美に聞いてみることにします。」

『よろしくね。あっ、あと零治には内緒ね。サプライズで驚くあいつの顔を見てみたいわ。』

ウフフと嫌な笑い声を上げるシャイデさん。

「分かりましたけど、本当にいいんですかね・・・」

『いいの、いいの。むしろ学校側が困る所だったんだから。本当にいきなりで困ってたんだから。ＯＫだったらあなたたちの学校には私から説明するわね。それとライにちゃんと勉強させて。じゃないとあの子だけ落ちるかもしれないから。』

「了解です、多分ライも頑張ると思います。」

『そうねぇ、あの子ずっとごねてたから・・・・くれぐれも零治に気づかれないようにね。』

「はい。」

『それじゃあ、取り敢えず2人に聞いて、結果を私に連絡して。』

そう言って電話が切れました。

高町なのは達にバレたのは案外良かったのかもしれません。

おかげで私達3人の願いが叶うかもしれませんから。

そうと決まれば早く帰って2人にも教えなくては！

その後私は2人に説明し、直ぐに了承を得られたので、すぐさま連絡しました。

後は本番に成功すれば・・・
そのためにも勉強です。
今、私達は私の部屋で集まっています。
「ライ、今から猛勉強だな。」
「うん、僕頑張るよ!!」
「私達も頑張らなくては。やっぱりレベルは高いようなので・・・」
「大丈夫だ。あのはやての学力で通えるのだ。準備を怠らなければ平気だろう。」
夜美の言うことも分かりますが、はやてに失礼では無いのでしょうか・・・
「じゃあ、僕も・・・」
「ライはそれ以下だ!しっかり勉強しないと駄目だぞ!!」
「はぁ～い・・・」
「おしゃべりはそれまで。始めましょう。」
私達3人は勉強会を始めたのでした。

「フェリア、あいつら、一体何やっているんだ？」

「なんでもライの成績を上げるための猛勉強らしいぞ。」

夕飯を食い終わった矢先、珍しく俺とフェリアに皿洗いを任せた星が残りの2人を連れて、星の部屋に行ってしまった。

「ライって結果悪かったんだっけ？」

「いいや、最低限取れたと聞いたが・・・」

そうなのか・・・

だったら何かの罰ゲームか？

「それよりレイ、皿洗いが終わったら将棋をやらないか？」

「構わないけど・・・ルールは？」

「桐谷に教えてもらった。」

ふ～ん。

まぁ、暇だしいいか。

俺達はさっさと皿洗いを済ませ、フェリアと将棋をしたのだった・・

・

結果は俺の惨敗だったけど何か！？

## 第３２話　マテ娘達の学校生活（後書き）

多分ほとんどの人が気づいたと思いますが、お楽しみと言うことで。

直ぐにではありませんので。

投票は１位がダントツになって来ました。

後ろは混戦してますが・・・

今日の日付が変わる頃に、結果を書いて投稿しようと思うので、まだの人はそれまでにお願いします。

しかし、予想以上に集まりました。

皆さんご協力本当にありがとうございます！！

## 人気投票結果発表（前書き）

お待たせしました。人気投票の結果です。

## 人気投票結果発表

作者「結果発表！！」

パチパチパチ。

作「皆さん、沢山の投票ありがとうございました。自分の名前のスペルを間違っていた作者のｂｌｕｅｏｃｅａｎです。タマさん本当にありがとうございました。」

レイ「まだ気にしてるのか、主人公の有栖零治だ。」

作者「自分たち二人で進行していくのでよろしくお願いします。」

レイ「とそれよりなんで英語の名前なのに作者なのだ？」

作者「えっ！？だって英語メンドイじゃん。」

レイ「だったらなんで英語にしたんだよ・・・・」

作「そっちの方がかっこよくね？」

レイ「・・・それでスペル間違ってちゃ話にならないだろ・・・・」

作者「おっしゃるとおりで・・・・」

レイ「まぁいいや、それでは早速発表にいきたいと思います。」

作者「そうだった!!発表だ!!」

レイ「忘れてんなよ・・・」

作「やかましい!!それじゃあ発表します。票はぜんぶで１０２票集まりました。」

レイ「凄いな・・・・」

作者「本当に感謝です。それでは発表です。第１位は・・・・・・」

作者「有栖星!!」

星「えええええええ!?」

レイ「おお!!」

作者「星はダントツの１位で３７票でした。」

星「そんなに・・・・・嬉しいです・・・・」

レイ「良かったな。」

星「はい、ありがとうございます・・・・これで高町なのはにも大きい顔されずにすみますね。彼女の時代ももう終わりです。」

作者「・・・・・・・・なぁ零治。」

レイ「なんだ？」

作者「星、キャラ違くないか？」

レイ「なのはのことになるとああなるんだ・・・」

作者「触れるのはよそうか・・・」

レイ「俺もそうした方が良いと思う・・・」

星「二人ともどうしたのですが？」

作者・レイ「なんでもないです！！」」

星「？」

作「気を取り直して第2位、ここからは大接戦、四人で争っていました。」

レイ「凄いな・・・・」

星「一体誰でしょう？」

作「では発表します。2位は・・・・・・・・2人います！！」

星・レイ「おお！！」

作「それは・・・・・」

作者「有栖ライ、八神はやて!!」

ライ「やった～!!」

はやて「わ、私?」

作者「どちらも13票でした。」

ライ「星、僕二位だよ!!」

星「ええ、凄いです。これからは私たちが主役ですね。」

ライ「うん、そうだね!!」

レイ「はやて?」

作者「どうしたんだ?」

はやて「よっしゃあああ!!なのはちゃん、フェイトちゃん、すずかちゃん、アリサちゃんに勝ったああ!!」

作者「大はしゃぎだな・・・・・」

ライ「よっぽど嬉しかったんだね・・・」

はやて「次からはリリカルはやてが始まるで！！」

レイ「始まらんし・・・」

作者「どんな話になるんだよ・・・」

はやて「私を中心に起きる数ある事件を仲間と協力して乗り越えていく話や。」

作者「分かったから静かにな・・・取り敢えず3人出ましたが、3位まで書こうと思っていたので4人書こうと思います。それでは第3位です。」

はやて「ちょ！？私これで終わりなんか！？」

作者「発表が終わったら聞いてやるから静かにしてろ。」

はやて「ホンマなんやな？」

作者「本当だ。それじゃ、3位の発表です。3位は・・・・・」

作者「有栖零治！！」

レイ「へ？」

星・ライ「嘘!?」

はやて「ホンマなんか?」

作者「自分もびっくりの１０票です。意外と高評価だったみたいだな、このリア充。」

レイ「リア充?俺が?何故に?」

作者「自覚無しかよ・・・」

星「まぁ、レイですから・・・」

作者「それじゃあ、これで終了とさせていただきたいのですが、一つお知らせがあります。」

ライ「何?」

作者「主人公なのでメインは当たり前です。なので零治についてはやりません。」

レイ「ええっ!?俺の平凡な生活の話は!?」

作者「あるわけないじゃん、それに何が面白い?どうせ寝ているだけだろ?」

レイ「否定出来ない・・・」

星「否定してください。」

作者「で、差があまりなかった4位のキャラの話にしようと思います。」

ライ「別に3人でもいいじゃん。」

作者「結構投票があったし、やろうかなって思って。」

ライ「まぁいいか。」

作「ということで発表します。第4位は・・・・・・・・・」

作者「有栖夜美!!」

夜美「滑り込みだな。」

星「夜美!!」

ライ「これで3人揃ったね。」

レイ「省かれなくて良かったな。」

夜美「全くだ・・・・」

作者「夜美は8票でした。ということで、メインストーリーは星、ライ、夜美、はやてでやろうと思います。」

レイ「はやてを除けばいつも通りじゃないか？」

作者「俺が悪いんじゃない、投票した人の意思だ。これで取り敢えず発表は終わりだが、誰にどのくらい投票があったか簡潔に書きます。」

大悟　４票
スカさん　３票
美由希　３票
すずか　３票
フェイト　２票
加奈　２票
フェリア　１票
なのは　１票
桐谷　１票

レイ「何故にスカさん？」

作者「スカさんが萌えるところを見てみたいって言う人が。」

星「美由希さん３票って、主人公の高町なのはが１票なのに・・・」

夜美「星、言葉と表情が合ってないぞ・・・」

ライ「笑い顔が怖いよ・・・星、いつもの星に戻ってよ・・・」

作者「大丈夫、ここだけだと思うよ。ということで人気投票を・・・」

なのは「ちょっと待って！？」

作者「どうしたんだ?なのは。ここには受賞者しか話せないはずなのに・・・」

なのは「なんで私はお姉ちゃんや神崎君にも負けているの?それとスカさんって誰なの!?納得いかないの!!」

作者「うるさいなぁ、魔砲少女ビグザムなのは。」

なのは「ビグザム!?なんなのそれ!?」

作者「ソロモンの戦いで連邦のモビルスーツをちぎっては投げ、ちぎっては投げた、移動砲台に足がついた破壊神だ。」

なのは「何で私なの!?それと足だけじゃちぎって投げられないような・・・」

作者「じゃあ、ビグザムなのはスーパーフルボッコタイム。」

なのは「訳が分からないの!?でも馬鹿にされてることは分かったの・・・」

作者「ちょ!?痛いからアイアンクローは止めてください!!それに言ったのは俺じゃない!!」

なのは「じゃあ誰が言ったの?」

作者「空箱さんです。」

なのは「空箱さん、おはなし死にいかなくちゃなの・・・・・」

作者「あっ、行っちゃった。でも助かった。空箱さん、無事を祈ります・・・」

レイ「お前、最悪だな。」

作者「それと星。」

星「なんですか？」

作者「喜べ！フォグナスさんがなのはを恐怖させる星に冥王と言う最強の称号をいただいたぞ！！」

星「冥・・・王？」

レイ「それも言っちゃダメだろ・・・」

星「すみません、急用ができました。失礼させていただきます。」

レイ「星、落ち着けって！！ああ～行っちまった・・・」

作者「フォグナスさん、また会う日まで・・・」

レイ「お前な・・・」

はやて「それよりリリカルはやての説明を！！」

夜美「まだ諦めていなかったのか・・・」

ライ「それほど2人の活躍が妬ましかったんだよ。」

レイ「やるのか？」

作者「これを読んだユーザーさんが書いてくれることを願いな。」

レイ「だってよ。」

はやて「なんやと！？絶望した！！散々引っ張っといてカットする作者に絶望した！！」

レイ「はやて作品違う！！」

作者「じゃあ、次は・・・」

レイ「もうこれ以上カオスにするな！！ああ、えっと人気投票発表これで終了します。皆さん投票ありがとうございました！！ちょっ！？夜美、ライそこのバカ作者黙らせろ！！」

## 人気投票結果発表（後書き）

皆さん本当に投票ありがとうございました。

あと、タマさん、空箱さん、フォグナスさん名前出して申し訳ないです。

特に後の二人はお気を付けて。

取り敢えず星の人気っぷりには驚きました。

一日目から一位にいましたが、二日目からダントツでした。

そして意外なのははやて。

星以上にコメントを多数いただきました。

もう感謝でいっぱいです。

そしてもう一つ。零治の人気には一番驚きました。

男三人は遊びのつもりで名前を書いたつもりが見事に3位。

ですがこの物語の主人公なので、メインの話は書きません。

投票してくださった方々申し訳ないです。

これからも頑張って行きますのでよろしくお願いします！！

## 第1位　有栖星（前書き）

お待たせしました。

第1位星です。

それではどうぞ。

# 第1位　有栖星

「はい、皆さんにお話があります。」

休日前夜、俺は星以外のメンツを無理やり起こし、リビングに集合した。

時刻は実に午前2時である。

「ふぁ～」

「悪いなフェリア、ちょっと星に内緒で進めたい話があったから・・・」

「何故、私たちには謝罪の言葉が無いのだ?」

「お前ら起きてたじゃないか・・・」

「ぼ、僕は勉強してたんだよ!!」

「だったら右手にあるＰＳＰをしまえ。」

そう言われて慌ててしまうライ。

「で、話とは何だ?」

その様子を見ながら夜美が言った。

「実はな・・・」

俺の考えをみんなに話した。

「ん?・・・・・朝ですか・・・」

私は目を覚まし、体を伸ばします。

時刻は朝の8時、今日は休日なので皆朝はゆっくりな筈・・・

私は部屋着に着替え、ちょっと遅めの朝ごはんを作りに行きました。

「おっ、おはよう星。」

「お、おはようございます・・・」

いつも遅く起きるレイがエプロンを来て朝食を作っていました。

どうしたんでしょう・・・・・

「何ボケっとしてるんだ?席に着けよ、もうすぐ出来るから。」

フライパンを片手に持ち、言います。

「夜美、テーブル拭いてくれ。」

「了解だ。」

「フェリア、ライ起こして来てくれ。」

「分かった。」

「じゃあ私は・・・」

「星は座ってな。」

「でも・・・」

「座ってな。」

再び言われたので渋々座りました。

まぁたまにはこういうのも悪くないですが・・・

私はテレビを付けてゆったりとニュースを見ることにしました。

今日は何かがおかしい・・・

「フェリア～これどうやるの？」

「ライ、下着はなるべく隠すように干すんだ！！」

「これがレイのパンツ・・・」

「夜美、流石にそれは引く・・・」

フェリアと夜美、ライが洗濯をしています。

だけどものすごく不安なのですが・・・

「星、ちょっと付き合ってくれないか?」

「レイ?何をですか?」

「ちょっと買い物にな。」

「えっ!?でも3人は・・・」

「実はな、夜美とライに家事を教えてるんだよ。だから気にしなくていい。」

「なら私も手伝った方が・・・」

「星は俺と買い物デート嫌か?」

「「「デ、デート!?」」」

「何でライと夜美も驚いてるんだよ・・・」

「そんな話聞いてないよ!!」

「そうだぞ！昨日、星に休日ぐらいたまにフゴッ！？」

「夜美、それは内緒だろ・・・」

フェリアが夜美の口を塞ぎました。何か夜美が言っていたような気がしますが・・・・

「いいから星、早く行きたいから準備してきてくれ。」

「はっ、はい！！」

私はそう言われ自分の部屋にダッシュで戻りました。

「ど、どうしよう・・・」

まだ、ドキドキしています・・・

いきなりなんて心臓に悪いですよ。

「何着ていこう・・・」

でもレイって着飾ってる女の子ってあまり好きじゃないかもしれません。

頑張ってるって思われるのも嫌だし普通にしよう。

私はいつも着ているお気に入りのワンピースを着て、部屋を出ました。

「お待たせしました。」

「よし、じゃあ行くか。」
私達は家を出ました。

「よし、準備を始めるか。」
「うう、星ばかりずるい・・・」
「デートだと知っていれば、協力しなかったものの・・・」
「2人共、星にはいつも世話になっているだろう?だったら今日ぐらい多めに見てやれ。それより早く準備を済ませるぞ。」
フェリアの一声で3人が準備を始めたのだった・・・

「で、どこで買い物するのですか?」
海鳴市でも色々な店があるショッピングモールへやってきました。
買い物客で結構人が多いです。
「そうだな・・・たまには俺も夏のために服を買おうと思ってな。

その手伝いにと・・・」

確かに2人を連れてきたらまた暴走するかも。

レイの買い物どころでは無くなりますね。

「分かりました、それじゃああそこにある服屋に行きましょう。」

私達は近くにあった服屋に向かいました・・・

「う～む・・・」

「レイ、どうですか？」

基本、レイは目立つ色を好みません。

というより服にそれほど関心を持っていません。

ほとんどが白黒で質素です。

オシャレしたらもっとカッコよく見えるのに・・・・・

「ん～これでいいか・・・」

そうして選んだのは、また白っぽいTシャツと黒のTシャツでした・・・

「レイ・・・・・」

「ん、どうした？」

「私がコーディネートします！！」

私がレイを輝かせます！！

「買ったな・・・・・」

「そうですね・・・・」

今、私達は近くのファミレスにいます。

大量の買い物袋と一緒に・・・・・

「買いすぎたな・・・」

「買いすぎましたね・・・」

ううっ、夜美やライのセンスが羨ましい・・・

候補が多すぎて、なかなか絞れず１０着ちょっと買ってしまいました。

レイは口に出していませんでしたが、後半は投げやりだったような気がします。

「今日はすいませんでした・・・」

「何が？」

「ライや夜美だったらこんなに買わなくてもうまくいいものを選びそうだと思ったので・・・」

「ライや夜美だったら俺の服が買えなかったよ。」

「でも・・・」

「それよりも早く食べようぜ。俺、腹減ったよ。」

「そうですね。もう午後の2時を回っていますし、私もお腹が減りました。」

私達は料理を決め、二人でゆったりと昼食を楽しみました。

「えっ！？私の部屋でですか？」

昼食を食べ終え、今紅茶を飲みながらレイと話しています。

こんなに2人でゆっくり話すのは本当に久しぶりな気がします。

「ああ、最近夜美とライがお前の部屋で何かやってるだろ？ライに聞いたら女の子には秘密があるんだよ。って誤魔化されたし。」

普通に勉強しているって言えばいいのに・・・

「それなら私の口では言えません。ライから聞いてください。」

「ちぇ。」

当たり前です。

「そういえば星、昨日お前体育でバレーなのにヘディングと顔面キャッチしたんだって？」

「ブッ！？誰からそれを！？」

「昨日夜美から聞いたんだ。」

夜美、余計なことを・・・・

「あ、あれは考え事していて・・・」

「星ってボール使って運動する競技は本当に苦手だよな。前に公園でキャッチボールしたときなんか、フライをバンザイ、ゴロをトンネルしてたからな。」

「あ、あれは初めてやって戸惑ったというか・・・」

「サッカーやった時なんかは何回ボールを空振ったか。」

「動いてるボールが悪いんです。」

「バトミントンの時は・・・」

「私はどうせ運動音痴ですよ・・・」

レイのバカ・・・

私だって気にしてるんです。

「悪かった、謝るから拗ねるなよ。人には得意不得意があるからな。俺にも不得意なものくらいあるし。」

興味がありますね・・・

「何が不得意なんですか？」

「睡魔との戦い。」

期待した私が馬鹿でした。

「レイ、他にありますか？」

「う～ん、俺って意外となんでもこなしちゃうからな・・・」

私もレイはそう言う印象です。

料理も掃除も洗濯も普通にこなしますし。

「強いて言うなら知らない人に自分から話しかけたりするのはどちらかと言うと苦手かもな。特に1対1だと。」

そういえば前にも聞いた覚えがあります。

夜美の事を相談した時でしたっけ？

「なのに会長ときたら俺に生徒会長やれなんて言われてさ・・・」

「レイ、生徒会長になるんですか！？」

「いや、断るさ。こんな俺じゃ無理だよ。先生の評判悪いしな。」

驚きました、そんな話があったなんて。

そういえば・・・

「レイって今学校だとどういう風に過ごしているのですか？」

「学校で？えっと・・・・朝席について・・・ってあれ？」

「どうしたんですか？」

「いや、なんか曖昧で・・・」

レイ、それって大丈夫ですか！？

私はかなり不安になりました。

「ちょっとあそこのベンチに座ろうぜ。」

帰り道、噴水のある公園を見つけ、そこを通って帰ることにしました。

そこのベンチにレイが座ります。

「星、早く来いよ。」

「では、失礼します。」

レイにくっついて座るのは少し緊張します・・・

「綺麗なだな・・・」

「はい・・・」

噴水が夕日に照らされとても綺麗に染まってます。

「星、リフレッシュ出来たか?」

「えっ!?」

「いつも掃除、洗濯ばかりだからな。せっかくの休日なんだからもっとゆっくりしてもらいたかったんだが・・・」

もしかして朝の出来事って・・・・・・

「星ばかりじゃなくてみんなで協力していかないとな。」

笑顔で私に言うレイ。

全くこの人は・・・

「ありがとうございます。こんなにのんびりとした休日は久しぶりで楽しかったです。」

「そう言って貰えて嬉しいいよ。・・・・ん?」

レイの視線の先にはクレープ屋がありました。

「せっかくだし、クレープ食べないか?」

「はい、食べましょう。」

私達はクレープ屋に向かいました。

「はむっ・・・・美味しい。」

「ん、確かにうまいな。」

私が食べているのはブルーベリーとラズベリーのクレープです。

独特の酸味がとても美味しいです。

レイが食べているのはエビと野菜とアボカドが入った野菜クレープを食べています。

レイって意外とベジタリアンなので嬉しそうです。

「星のクレープ旨そうだな・・・・一口貰い！」

「あっ！？」

私の返事を聞かず、レイは私のクレープを食べました。

「もぐもぐ、おお、甘くない。この酸味、くせになるな・・・」

「レ、レイ・・・」

「ああ、悪い。うまそうだからつい。星も食べていいぞ。」

そう言ってレイのクレープを私に向けてきます。

間接キス・・・・

「どうした？いらないか？」

「た、食べます！！」

ううっ、嬉しいけど恥ずかしい・・・

「はむ。」

「美味しいだろ？」

「はい。」

恥ずかしくて味どころじゃないです・・・

「そうか、良かった。」

レイは問題無いとばかりにクレープを食べています。

少しは気にして欲しいです・・・

その後、顔が赤くなっていないかが気になって、クレープをよく味わえなかったです。

「ただいま帰りました。」

「ただいま。」

「おかえり二人とも。」

「おかえり～。」

「おかえり。」

家に着いたのは夕方の6時半。

遅くなってしましました。夕飯を・・・

「二人ともお腹減ってる?少し早いけどカレー食べる?」

「カレー?」

「これは・・・」

驚きました、３人とも料理はできないかと思いましたが、出来たのですね。

でもじゃがいもも、お肉も、ものすごく大きいような・・・

「具材は僕が切ったんだよ!!」

「だからでかいのか・・・」

レイの気持ちも分かります。

だってスプーンにまるまる乗りそうですから・・・

「いいじゃん、大きいほうが得じゃん!!」

「食いずらいじゃん・・・」

「我も言ったのだが・・・」

「ライが聞かなかったのだ・・・」

そうなんですか。夜美、フェリア、お疲れ様です。

「でね、星。これからはレイやフェリア達だけじゃなくて僕たちも

頼っていいからね。僕も夜美もまだ下手くそだけど、洗濯も料理も掃除も出来るから。」

「だからたまには休日ぐらいゆっくりしろ。働きすぎだ。」

そう言いながらデコピンする夜美。

「ライ、夜美、フェリアありがとう・・・」

「お礼はレイにな。」

フェリアがレイを見ながら言います。

「レイが昨日私達を起こして計画したのだから・・・」

「レイが・・・」

「フェリア、余計な事を・・・」

「ありがとうございます。」

「いいって。でもこれからは夜美やライもバシバシ手伝わせろよ。いい年して家事が出来ないって恥ずかしいからな。」

「ええっ！？」

「我は最低限できるぞ！！」

私は幸せですね。

こんなにも家族に大事に思われてる・・・

「っと冷めるしさっさと食べよう！！」

レイの掛け声で皆席に付きます。

「それじゃあ・・・」

「「「「「いただきます！！」」」」」

みんなで楽しくカレーを食べました。

具材がでこぼこしてましたがとても美味しかったです。

## 第1位　有栖星（後書き）

という感じで休日ぐらい星を休ませよう作戦でした。

はやて「で、重大発表や！！」

作者「出てくるなよ・・・」

はやて「だって嬉しかったんやもん。私が主人公やなんて。」

作者「まだ何も言ってないんだけど・・・」

はやて「だったら私が言うわ。えっと、皆さんのおかげでこのクソ作者、覚悟を決めました。」

作者「このやろう・・・・」

はやて「ってことでリリカルはやてやります！！」

作者「恐らく原作は全く違う内容となるのでそのへんはスルーでお願いします。」

はやて「楽しみやな・・・・どうなるんやろな・・・」

作者「分かったから静かに待ってな。ということで次はライの話。その後先に夜美をやってからはやてといきたいと思います。」

はやて「これからもよろしくな～」

## 第2位　有栖ライ（前書き）

お待たせしました第2位のライです。

## 第2位　有栖ライ

「ふっふ～ん。」

今日も色々楽しかった。やっぱり学校は最高だな。

勉強がなければ文句無しなんだけど・・・

「あれ？」

レイがいる。ちょうどいいや。レイとどこかに遊びにいこう！！

「レイ～！！」

「ん？ライか、どうしたんだ？」

「何しようか考えて帰っていたらレイを見つけたから。レイ、暇なら一緒に遊ぼう！」

「悪いな、今から本屋に行くつもりなんだ。」

「だったら暇だね。」

「は？」

「じゃあ行こう！！」

「いや、人の話を・・・って引っ張るな！」

レイとどこに行こうかな?

「今日はここ!」

私は行きつけのバッティングセンターに来ました。

「いらっしゃい。」

「こんにちは~!」

「おお、ライちゃんいらっしゃい。あれ?隣は彼氏かい?」

「ち、違うよ!レイはレイだよ!!」

「意味が分からんぞ・・・」

「そんなに照れるな、ほら2人にサービスだ。」

おじさんは太っ腹に3回券をくれました。

3回券は600円なので600円お得です。

「わあ、ありがとうおじさん!!」

「すいません、ありがとうございます。」

「いいって。ライちゃんはうちのマスコットガールなんだから。で

もあげるのはそれだけだから後は買ってくれ。」

「はい。」

「レイ、早く～！！」

「分かった、今行くから・・・じゃあ、すいません。」

「ああ、楽しんでいってくれ。」

「おじさん、ありがとね。」

僕達はバッティングを始めるのだった。

「何故にピッチング？」

「まずはこれでしょ！！」

どこのバッティングセンターにもあるストライクアウト。

簡単に言うと的当てです。

「ここはね、普通のより大きく、５×５なんだ。それで、３つビンゴだと３回券貰えるの。」

「それは良いサービスだな。けど先ずはバッティングじゃないのか？」

「ふっふ～。これを見ろ！！」

僕は隣にある掲示板を指差した。

「パーフェクトゲーム達成者・・・有栖ライ！？」

「ふっふ～ん、凄いだろ！！パーフェクトゲームしたら１０回券が貰えるし、４つビンゴで５回券、３つビンゴでも３回券貰えるんだから１００円得するんだよ！！」

「確かに、２回プレイして５００円だからな。」

我ながら頭良いと思うな。

かなりお得だもん。

「だから先ずはこれをするの、分かった？」

「分かった分かった、早くやろうぜ。」

「・・・ただやるだけじゃつまらないから勝負しよ。」

「勝負？」

「負けた方がハンバーガー奢りね。」

「う～ん、まぁいいか。その代わり単品な。セットはダメだぞ。」

「それで良いよ。」

おバカだなレイは。

僕の実力を知ったくせに挑むなんて。

「なら私から先ね。」

先にプレッシャーをかけてやる！！

「１８枚か・・・」

まあまあかな。４つビンゴも取れたから５回券ゲットだ！！

「お前、女の子だよな？」

「そうだよ、凄いでしょ！！」

「ああ、凄いな。」

そう言ってゲージに入るレイ。

何か余裕を感じる・・・

『パンパカパーン、おめでとうございます。パーフェクトゲームです！』

僕は夢を見ているのだろうか・・・・

凄く綺麗なフォームで流れるように投げるレイ。

まるでプロ野球選手みたいだ。

どういうことなの!?

「久しぶりで本気でやり過ぎたか?」

腕を軽く回しながらゲージから出てくるレイ。

「これで１０回分出来るってかなり得だな。おっと、ライ。ゴチになります。」

ムカ!!

なんだよレイのくせに!!

「ピッチングぐらいで勝ったつもりになるなー!!今度はバッティングで勝負だ!!」

こうなったらバッティングでケチョンケチョンにしてやる!!

「これを見ろ!!」

「また掲示板・・・・ってホームラン王有栖ライ!?」

「どうだ、凄いだろう！！」

「ああ、どれだけ遊び歩いてるかもな。星に報告だなこれは。」

あれぇ～？

「そ、そんなことより、今度はホームラン勝負だ！！ルールはどちらが多くホームランを打てるかね。」

「まぁいいけど・・・」

「負けた方はセットメニューね！！」

「分かったから。で、どっちが先に打つんだ？」

「もちろん僕から！！」

僕の実力を見せてやる！！

僕は１２０ｋｍのゲージに入った。

『パンパカパーン。ホームランです！』

「まぁこんなもんかな。」

３０球中１２本。

僕としては結構いい結果だ。

「凄いじゃないかライ。」

「この勝負僕の勝ちかな。」

「勝負は最後まで分からないさ。」

流石のレイでも12本もホームランは無理だろうな。

ただ飛ばすだけじゃなくて、小さな的に当てなきゃいけないんだし。

「レイはどれくらい打てるかな?」

「パンパカパーン、ホームランです!」

これで7本目。

流石だね、レイ。

でもあと10球。

後5本以上打たないと負けだよ。

ボスっ!!

「ちっ、ちょっと右だったか・・・・・」

後4球。

ボスっ!!

「今度はちょっと左か・・・」

後3球。

カン!!

「ミスったな。」

後2球。

どうやら僕の勝ちかな・・・

カキーン!

『パンパカパーン、ホームランです!』

まぁ1回位・・・・

『パンパカパーン、ホームランです!」

2回目?

『パンパカパーン、ホームランです。』

うそっ、3連続!?

「やっと微調整も出来てきたな。」

微調整!?そんなことできるの!?

そして・・・・・

『パンパカパーン、ホームランです!』

並んじゃった・・・・

そしてこれがラストボール。

こうなったら・・・

「レイ、あっち見て!?あそこに巨乳のお姉さんが・・・・」

カキーン!

『パンパカパーン、ホームランです!』

「ん?何か言ったか?」

「レイのバカ~!!!」

ゲージから出てきたレイを僕は殴った。

「怒るなよ、流石に大人げなかったって思ってるからさ・・・」

僕に炭酸のジュースを渡し、ご機嫌取りするレイ。

僕だって子供じゃないんだ、それくらいで・・・

「賭けも無かったことにしてやるから。」

「それなら許してあげる！」

ラッキー！

お小遣い使わなくて済んだ。

「しかし、ライうまいな。いつからやってたんだ？」

「小学生の時からだよ。スカっとしたい時とか、モヤモヤしたときとかスッキリしたいときとか。」

「・・・なんかＯＬみたいだな。」

大人のお姉さんってことかな？

「ライって好きな球団とかあるのか？」

「阪〇タイ〇ースが大好き！！」

「熱狂的だな・・・」

「あそこは一番熱いもん！！・・・・・レイは？」

「東北楽〇イー〇ルス。あそこのエースが大好きだ。」

「でも弱いじゃん。」

「これから巻き返すんだよ！！」

でも打撃力無いからなぁ・・・・・

エースもケガばっかだし。

多分今年も下だと思うけど。

「で、どうする？」

「まだ打ってく！１４０ｋｍも打ってないし。」

「お前、本当に凄いよ・・・」

「そうかな？」

でも褒められるのはやっぱり嬉しいな。

「じゃあ、打つか。」

「うん！！」

僕たちはそれぞれゲージに入っていった。

「僕、ビックバーガーセット！」

「夕飯食えなくなるから止めろ。チーズバーガーセット2つで。」

ぶぅ～。せっかくレイの奢りだから沢山食べようと思ったのに・・・

あの後僕たちは近くのバーガーショップに行きました。

さっきの事をまだ気にしているのか、さっきの話をしたら奢ってくれることになりました。

ラッキー。

「それに、いい加減にしないと太り始めるぞお前。」

「食べた分動くから大丈夫。」

「まぁそうだけど。でも遊んでばっかで勉強もしないと脳筋になるぞ・・・」

「の、脳筋・・・」

「だから勉強もちゃんとしないとダメだぞ。」

「べ、勉強してるもん！！夜、星達と一緒に！！」

「へぇ、本当に勉強してるんだな。」

しまったぁ～！

つい言っちゃったよ・・・

でも秘密は言わないようにしないと！！

「そ、そう勉強なの！！」

「ん？違うのか？」

「違わないの！レイの言うとおりなの！！」

「分かったから落ち着きな。」

ふと、周りを見るとお客さんが私達を見てる・・・

恥ずかしいよ・・・

「レイの意地悪・・・」

「俺のせいかよ。」

僕はハンバーガを食べながらレイを睨んだ。

レイは苦笑いしてるけど・・・

「ねぇ、レイって野球経験あるの？」

「ん？機嫌悪いんじゃないのか？」

「わ、悪いよ！だけどそれとこれは別。で、どうなの？」

「まぁちょっとやってたかな。」

「えっ！？いつ？」

「いつって・・・・小さい頃から？」

「何で疑問なの？」

「まぁいいじゃん。また行くときは誘ってくれ。まだ１０回券残ってるからさ。」

「ごまかされたような気がするけどまぁいいや。また一緒に行こうね。今度は負けないから。」

「お手柔らかに頼むな。」

レイに負けてばかりだったけど、なんだかんだで楽しかったな。

次も楽しみだ。

「ねぇ、レイ・・・」

「何だよ？」

「僕たちと学校行きたい？」

「いきなりどうしたんだ？」

「いいから！！」

「そうだな・・・・どっちかと言われたら一緒に行きたいかな。」

「・・・・本当に？」

「ああ、俺だってお前たちと行ってみたいよ。ライが授業中言ってる寝言何かも気になるし・・・」

また夜美だな・・・・・

でも僕ってなんて言ってたっけ？

「ハンバーグとか、唐揚げとか、あと俺の名前とか・・・」

え！？レイの名前！？それも教えたの！？

「レイの名前も聞いたの！？」

「ああ、夜美が言ってたぞ。その先も何か言っていたらしいけどそっちは教えてくれなかった。」

その先って確か・・・・・！！

「ライ?顔が赤いけどどうした?」

「な、なんでもない!!それより早く帰ろう!!遅くなると星達に怒られるよ!!」

「わ、分かったから引っ張るなって!!」

夜美、その先は言わないでいてくれてありがとう・・・

『ライ、寝言をなんとか言わないようにしなさい。』

『えっ!?でも星、どうやってやるの?』

『そ、それは分かりませんが・・・』

『うつぶせに寝たらどうだ?横を向いて寝てるから寝言が周りに聞こえるんじゃないか?』

『そうだね!効果的かも。次やってみるよ夜美。』

『寝なければいいのですが・・・』

『多分無理だろうな。・・・でも今日の寝言は本気で焦ったぞ。』

『えっ!?僕なんか言った?』

『ライ、お前レイ大好き、ずっと一緒。って言ってたんだ・・・』

『えええええええっ!!?本当に星!?』

『本当ですよ。流石に私も焦りましたよ。レイがこの学校にいたら確実に殺されてるよ。』

『そうだな・・・・』

『ううっ、恥ずかしい・・・』

『『はぁ・・・』』

「あの時の寝言は言えないよ・・・・」

「どうした?」

「な、なんでもない!!」

寝言なんかでレイに伝えちゃダメだし。

それに、本人に直接言わないとね!!いつか必ず・・・・・

## 第2位　有栖ライ（後書き）

ライは野球が大好きです。

野球を見に行く話でも作ろうかな・・・

それで次は夜美の予定。

どういう風にしようかな・・・

リリカルはやて、随時制作中です。

## 第４位　有栖夜美（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

第４位の夜美です。

一番長くなったし、一番時間がかかったかも・・・

## 第４位　有栖夜美

とある平日の夜・・・・

「よし、大丈夫だよな・・・」

我はレイの部屋の前に立って最後の確認をしていた。

時刻は午前１時半。流石に皆眠りに入っているはずだ。

我は覚悟を決め、レイの部屋をノックした。

「ん？誰だ？入れよ。」

よかった、まだ起きていたみたいだ。

「し、失礼する・・・」

お、落ち着け！！別にただ単にレイに約束を守ってもらうだけだ！

夜這いなどとは違うのだ！！

レイは布団に入ってＰＳＰをしていた。

「いつまでもそこにいないでこっちにこいよ。」

レイはベッドから出て、ベッドに座り、レイの隣に手招きしてくる。

「わ、分かった・・・」

我は緊張しながらレイの隣に座る。

は、恥ずかしい・・・これじゃあ、まるで・・・・・

「で、どうしたんだよこんな夜更けに？」

「レ、レイに約束を守って貰おうと思ってな。」

「約束？」

やはり忘れていたか・・・

緊張していたのが嘘みたいに心が落ち着いた。

「全く・・・遊園地でのことだ！！」

「遊園地・・・ああ！！」

やっと思い出したか・・・

「どこかに連れていくんだっけ？」

「ああ、そうだ。それで、明日にい、一緒に映画見に行かないか・・・？」

何故誘うところで小さくなってしまうのだ我は！？

「映画？」

「あ、ああ。」

「そんなの全然構わないけど、そんなので良いのか?」

「ああ、取り敢えずはな・・・」

「取り敢えずかよ・・・」

仕方ないだろう!!

我だってどこがいいか思いつかないのだから・・・

「まあいいや、明日の学校帰りでいいか?」

「それでいい!!わ、分かってると思うが、レイの奢りだぞ!!」

「奢りかよ!?・・・まぁあの時は世話してもらったし、それぐらいいいか。」

よし!我の財布も問題なしだな。

「じゃあ、ショッピングモールにある映画館の前に集合でいいか?」

「それでいいか。遅れそうになったら連絡するよ。」

「遅れたら怒るぞ・・・」

「勘弁。まぁ今度は遅れずに行くさ。だから夜美ももう寝ろよ。」

「ああ、おやすみレイ。」

「おやすみ～」

何であれデ、デートの約束をしてしまった・・・・

明日は恥ずかしい事がないようにしなくては。

そして出来ればまた一緒に・・・

そんなことを考えながら我は眠りについた・・・

「遅い・・・・」

今の時刻は１６時半。

電話がかかってきてからもう三十分経っている。

「また遅刻・・・・」

そうだったら我流のおはなしだな・・・

「わ、わりぃ・・・」

「レイ、遅いぞ何・・・」

そこにはボロボロになったレイがいた。

回想・・・・・

「じゃあ、今から行くな。」

『分かった、遅れたら・・・』

「分かってるよ。」

俺は電源を切ってポケットに携帯をしまった。

「さて、夜美の所に・・・」

「おい、聞いたか?」

「ああ、やみだってよ。」

「また女だぜ・・・」

「また女だな・・・」

「聖祥7大美女がそばにいながらまだ女・・・」

「諸君！！」

バカの言葉に神崎組が反応する。

「こいつにだけ甘い時間を過ごさせていいのか！？7大美女の近くにいながら、しかもおはなしを受けられる素晴らしい立ち位置にいながら他の女とは・・・・それでいいのか？いいや、断じて良くない！！我らよりも幸せを堪能している有栖零治に地獄の裁きを！！」

「「「「「「「「「「おおおおおお！！」」」」」」」」」」

「何かうるさいな・・・ってうおっ！？」

いきなり神崎組の一人が箒を俺に叩きつけてきた。

「いきなり何を！？ってまた！？」

今度は違う奴が硬式の野球ボールを俺に投げてくる。

「「「「「「「「「「有栖零治に裁きを！！」」」」」」」」」」

「こいつらいかれてる！！」

俺は自分のバックを掴み神崎組から逃れるように教室を出る。

「逃すな！！」

「追え！！」

「捕まってたまるか!!こんなもの、隣の魔王様と比べたら!!」

俺と神崎組の鬼ごっこが始まったのだった・・・・

「それでやっとの思いで逃げ延びたんだ・・・」

「レイの学校は恐ろしいな・・・」

なぜそこまで・・・

「すまなかった!!遅れる気は無かったんだ!!」

「分かったから頭を下げるな!!許すから。」

何事かと周りが見てるぞ!!

「今日はなんでも奢るから!!」

「もういいから取り敢えず行くぞ!!」

視線に耐えられなった我はレイの手を取り、映画館の中に入った。

「で、何を見るんだ?」

「これにしようと思ったのだが・・・」

我が選んだのは最近読んでいる推理小説が映画化したものだ。

霊が見える大学生が霊から話を聞いて事件を解決する話だが、展開が予想外な事が多く、とても面白かった・・・

「へぇ、面白そうかも。」

「そうか!!ならこれで決定だな!!」

レイも興味を持ってくれて良かった。

合わなかったらどうするかと思ったが・・・

「さてチケットを買いに行くか。」

「レイ頼むぞ。」

「分かってるよ、二人分だな。」

レイはチケットを買いに行ってくれたが・・・・

「悪い、学生証貸してくれ!!」

直ぐに帰ってきた。

「バカ？」

「ああ、ハーレム目指してるって堂々と宣言している変な奴。」

映画の時間まで1時間半位あったので、レイと喫茶店でおしゃべりをしている。

本を読みに来ることはあっても、人と話をするために来たことが無いので少し緊張するな・・・

「そいつが今日の元凶なのか？」

「ああ、自分の同士を従えて、俺を襲ってきたんだ。」

「同士？」

「俺は神崎組と呼んでいる。あいつらが自分達を何と呼んでいるか分からん。」

変な奴が大勢いるのだな・・・

「で、そのトップはどんな奴なのだ？」

「分かりやすいぞ。銀色の髪で赤と青のオッドアイ・・・ってお前ら見たじゃん！！」

ああ、言われて思い出した。

あのキザッたらしい男か。

妙に我らをナンパしていたと思ったがそういうことか・・・

「だから、お前らも気をつけろお前ら可愛いんだからあいつの格好の的だぞ。」

「か、可愛い!?」

「そうだろ。じゃなかったらアイツが声かけてないさ。」

レイに可愛いと言われた。

駄目だ、少し落ち着け・・・

「お～い聞いてるか?」

落ち着け、落ち着け・・・

「夜美、お前大丈夫か?顔が赤いぞ、熱でもあるんじゃないか?」

レイに・・・ってレイは何しているんだ!?

レイは我の額に自分の額を当てていた。

顔が近い・・・

「熱はないみたいだな。けど顔がもっと赤くなったような・・・」

レイのせいだ！！

ううっ、初めて顔があんな近くに・・・

「まぁ、熱は無さそうだし大丈夫か。ってそろそろ映画の時間じゃないか？そろそろ行くか。・・・・って夜美聞いてるか？」

「あ、ああ。我は大丈夫だ。」

「聞いてるかって聞いたんだけど・・・」

「い、いいから行くぞ！！」

我はレイの手を取り、喫茶店を出た。

「そろそろだな。」

「ああ・・・・・」

失態だ・・・・

喫茶店のやり取りをそのまま引きずってしまい、色々と迷惑をかけてしまった。

映画を見る直前にチケットがどこにしまったか忘れてしまうし、買ったジュースを足を滑らせてレイにかけてしまうし・・・

レイを呆れさせてしまったかも。

「もしかして気にしてるのか？俺は別に気にしてないよ。制服も俺のバックの中に簡単に入ったし。」

「ああ・・・・・」

でも、その優しさが胸に響く・・・

映画が始まったが、全然集中出来なかった・・・・

「レイ・・・・・」

「ん？どうした？」

映画が終わり、今帰路についている途中だ。

「今日はすまなかった・・・」

「何をだ？」

「今日は散々迷惑をかけてしまった・・・本当に済まない。」

「まだ気にしてたのかよ。俺は別に気にしてないよ。」

また、レイは・・・・・

「だから・・・」

「そうだよな、星やライと遊べば楽しめるものな!!」

「は?」

「どうせ我はつまらないさ!!あのライみたいに面白い話があるわけでもないし、星みたいに気がきくわけでもない。それに比べ我なんて迷惑ばっかりかけてしまう!!」

「いったいどうしたんだよ、夜美。」

「うるさい!!もう我をほおっておいてくれ!!」

我はレイから逃げ出した・・・

「はぁ〜」

ここは我の秘密の場所だ。

海鳴市にある古びた展望台がある忘れられた場所。

ふらふらと散歩をしていたときに偶然見つけた場所だ。
展望台はもう封鎖されているが、登らずともここから見える景色はとても素晴らしい。

「綺麗だ・・・」

今度こそレイは完全に我の事に愛想を尽かしただろう・・・
我はベンチに座りながらそんなことを考えていた。
自業自得なのだが・・・

「なぜ、あんなことを言ってしまったのだろう・・・」

つい感情的になってしまった。
レイには2人といるとき以上に楽しんで貰いたかった。
そう思っていたのに・・・

「はぁ～」

もうどこかへ行きたい・・・

「我はどうして・・・」

そう呟いた時、我の視界が歪んだ。
泣いているのか・・・？

「普段は涙など流さないのに・・・・」

「お前も結構悩んでいるんだな。」

聞き慣れた声が聞こえたのでそっちを振り向いた。

「やっと見つけたぞ。」

そこには汗だくになっているレイがいた。

「ったく本当に疲れたんだぞ。」

そう言いながら自分のバックからコンビニの袋を取り出し、中に入っていたシュークリームを我に差しだした。

恥ずかしかったので涙を拭い、シュークリームを受け取る。

「ほら、腹減ってるだろ。もうこんなに時間も遅いし・・・」

言われて気づいたのだが、暗くなってから時計を見ていない。

携帯で時間を見てみると、８時を回っていた。

「綺麗だなここ・・・」

レイは焼きそばパンを食べながら、レイは言った。

「そうだろ、ここは我のお気に入りの場所だ。」

涙声にならないように注意して我は言った。

そして、私もレイに並んで同じ景色を見る。

「なぁ、夜美。今日はどうしたんだ？いきなり怒り出したからびっくりしたぞ？」

「我は・・・・ライや星と一緒にデートしてる時みたいに・・・いや、それ以上に楽しんで貰いたかった。だけど我は・・・」

本当に情けない。レイにみ迷惑をかけてばかりだった。何故我はこうなのだ・・・

「はぁ～、そんなことかよ・・・」

「！？そんなことだと！！我がどんなに悩んでいたと・・・」

「なぁ、夜美。迷惑かけない人間なんていないんだぞ。星やライだって色々ミスはするんだ。」

「だけど我は・・・」

「ったく、夜美は完璧を求めすぎるんだよ。」

「でも！？」

「夜美がどう思っているか分からないけど、俺は楽しかったぜ。普

段見れない夜美がいっぱい見れたからな。」

レイは笑顔で我に答える。

「普段は真面目で、星以上に落ち着いてる雰囲気がある夜美だけど、いきなり顔が赤くなったり、挙動不振になったり、普段ならミスしない所でミスをしたり。こういうのは2人で行かないと見れないしな。」

「・・・・全て我の恥ずかしい所ばかりではないか。」

「いいんだよそれでも。それに映画だって夜美のチョイスがよかったからものすごく楽しかったし、最後にはこんな綺麗な夜景も見れた。本当に今日はありがとう。だから泣くなよ、楽しんだ俺がバカみたいじゃないか。」

我の頭に手を置き撫でるレイ。

「レイ・・・」

心にあったモヤが晴れた気がした・・・

今日一番欲しかった言葉かもしれない。

『すごく楽しかった、本当に今日はありがとう。』

我は楽しんでもらえたのかな・・・

「それに、俺の罰みたいなものなんだろ?だったら自分が楽しめればそれでいいじゃないか。」

「だ、だが、また一緒に行きたかったから・・・楽しかったと思ってくれたらまた一緒に行ってくれると・・・」

「お前な・・・」

呆れた様子で我の顔を見る。そして顔を近づけてきた。

喫茶店に居たときのように顔が近くなる。

「お前が誘ってくれるなら何処にだってつきやってやるよ。何今更気を使ってるんだ。どれだけ付き合いが長いと思ってるんだよ。」

そう言ってデコピンをしてきたレイ。

「ライや星もそうだが、お前たちといるのが一番落ち着くんだ。お前たちは俺の癒やしなんだよ。」

「レイ・・・」

「だから気軽に誘ってくれ。予定に何もなければいくらでも付き合うよ。」

「レイ!!」

我はレイのYシャツを掴み、顔を近づかせる。

「夜美?」

レイの唇・・・

だんだんと近づいて行き、また顔がさっきみたいに近づく。

「レイ・・・」

もう少しで・・・・・・

ブーブーブー!!

「「!!」」

我に帰った我はレイからバッと離れた。

どうやら電話のようで、レイの携帯からだ。

「もしもし?」

『レイ!!いつまでふらついているつもりですか!!!夜美は見つかりましたか?』

「ああ、見つけたよ。」

『だったらもう遅いのですから、さっさと帰ってきてください!!』

電話を切るレイ。

誰からだろう・・・

「星がもう遅いんだから早く帰ってこいだってさ。」

「そ、そうか・・・」

星め、もう少しだったものを・・・

「さっきはどうしたんだ？いきなり顔を近くにして。」

あんなシチュエーションでも気づいてないのか！？

鈍感にも程があるぞ・・・

「な、なんでもない！！これ以上遅くなったら星に何言われるか分からん、さっさと帰るぞ！！」

レイの手を無理やり掴み走り出す。

「おい・・・」

「いいから行くぞ！！」

こうして走り出した。

「レイ・・・」

「ん？」

「レイ、探してくれてありがとう！！」

我は走りながらお礼を言った。

## 第４位　有栖夜美（後書き）

とこんな感じでキスしそこねた夜美でした。

いいシチュだったのに・・・

で、皆さんにお願いがあります。

神崎組をバカテスのＦＦＦ団みたいにしたいのですが、名前が思いつきません・・・

いい名前を募集します。

皆さん協力してください！！お願いします！！

次回はお待たせ、リリカルはやてです。

## 魔法少女リリカルはやて（前書き）

（注）時期がＡ，ｓですが、色々違います。

・元々が夜天の書。リインフォースもいます。
・はやての足が不自由になっていない。
・グレアムさんが原作以上の復讐鬼
・零治は転生者じゃないです。
・零治が出ており、なのはと共にＰＴ事件を解決している。
・時期は１１月頃。
・零治君がスカさん一味。

と色々と原作とは違いますご注意を。

それと、今回一話だけだったので結構ポンポン進んでいきます。

# 魔法少女リリカルはやて

「アインス・・・」

「マスター!!」

そこには優しい雰囲気をもった青年が腹から血を流しながら倒れており、長い銀髪の美女が膝枕しながら一生懸命声をかけていた。

周辺は炎に包まれている。あちこちに人の悲鳴や叫び声が聞こえる。

「これほどの損害を出してもバグを全ては取り除く事は出来なかった。本当に済まない・・・」

「マスターは私達の為に頑張ってくれました。そんなこと言わないでください!!」

「ふふ、ありがとう・・・でもせめて、次の転生先の人の為にも暴走しているバグは封印する。」

「マスター!!駄目です!!体が持ちません!!」

「どちらにしても僕はもうもたない・・・だが最後に君達に残せるものを残す・・・」

青年の体を古代ベルガの魔方陣が包む。

「マスター！！」

「済まない、ずっと一緒にいる約束を破って・・・でも家族を知らない僕にとってアインス達は僕の一番大事な人達なんだ。だから・・・」

魔方陣が輝きだす。

「君達の為にも！闇の書のバグよ封印されろ！！」

炎に包まれたおぞましいモノに巨大な鎖が現れ、何重にも縛る。

そしておぞましいモノは鎖が出現している魔方陣に飲み込まれていった。

「アインス、これは時間稼ぎに過ぎない・・・転生してから半年ほどの時間が過ぎればまたバグは動き始める・・・だからその前に・・・バグを取り除けるロストギアを・・・ごほっ！ごほっ！」

「マスター！！」

「済まない・・・君達の幸せを願って・・・」

青年のまぶたが閉じ、体から力が抜けていく。

「マスター！！！！」

その叫びも空しく、夜天の書は次の主に転生した・・・

「こんなことが・・・」

一人の管理局員がその光景を見て絶望した。

破壊された建物。ゴミのように転がっている自分達の部下。

そして・・・

「エミリヤ・・・」

若いながらも自分の背中を見て管理局に入った愛娘。

その娘が口から血を出し、死んでいた。

「許さん・・・」

歯を食い縛り言う。

「許さんぞおぉぉ!!」

管理局員ギル・グレアムの絶叫がその場に響き渡った・・・

「ここにもないなぁ・・・」

私は八神はやて。聖祥小学校三年生や。でもそれは仮の姿。本当は魔法少女なんや！！

「マスター、誰に言っているんですか？」

「リイン、心の声に突っ込んだらアカン。」

「主はやて。」

「どうやった？シグナム。」

「ありませんでした、ここも外れのようです。」

残念そうに言うシグナム。

「仕方あらへんよ、ロストロギアってなかなか見つからん物なんやろ？」

「ですが我々には時間がありません。」

「大丈夫や。まだ1ヶ月ある。諦めずに探すんや。」

「マスター・・・」

「リイン達のマスターの為にも必ず見つけるんや！！」

「主・・・」

「マスター、ありがとうございます・・・」

「頑張ろうな。それじゃあシャマル達と合流して今日は帰ろ。」

3人は合流するため移動したのだった・・・・

「ふぁ～あ。」

俺は大きく伸びて、ベットから起きる。

「今日も学校か・・・」

PT事件を解決して5ヶ月ほどたった。

季節は11月。冬に入りかなり寒くなってきた。

フェイトの裁判は無事済み、平和な時間が流れていた。

『レイ、起きたか?』

「ああ、おはようチンク姉。」

ディスプレイに写っている銀髪の少女は俺の姉。チンク姉のモーニングコールで俺は目を覚ました。

俺の家族はスカリエッティ一味だ。

けど俺はチンク姉のように戦闘機人ではない。

小さいとき、飛行機事故にあった俺はふと目を覚ますと大怪我で知らない場所にいた。

手に綺麗なブレスレットを持って・・・

それを助けてくれたのがチンク姉だった。

その後献身的に看病をしてくれて俺の傷も完治した。

治った俺はスカさんに頼んで両親の事を調べてもらったが、その事件に生存者は居なかったらしい・・・

そんな俺をチンク姉達は本当の家族のように接してくれた。

クア姉やトーレ姉はマジで怖いが・・・

だけど今の自分にとって大切な家族だ。

今はスカさんのお願いでこっちで生活している。

元はＰＴ事件の事を調べて欲しいと言われたのでこっちに来たが、チンク姉がスカさんにお願いしてくれて、義務教育まではこっちにいても良いということになった。

ただ、スカさんの笑い方がマジで気持ち悪いからどうにかして欲しいんだけど・・・

『何故だが、悪口を言われたような気がしたんだが、何か言ったかい？』

「いや、何にも。珍しいねスカさん、研究してないって。」

『いや、ウーノに追い出されてね。いい加減臭いから洗浄してくれって言われたよ。』

「ウーノ姉、ナイス。」

『と、そんなにのんびりしてて大丈夫なのかね?』

「あっ、もうこんな時間かよ!?スカさん、連絡事項ある?」

『特にないよ。気をつけて行ってきなさい。』

「あいよ。チンク姉もいつもありがとう。」

『う、うむ。気をつけてな。』

俺はディスプレイを閉じる。

「さて今日も頑張るか。」

俺は学校へ行く準備を始めた。

「「ふぁ〜。」」

「眠そうだね、二人とも・・・」

「また二人とも夜更かししてたんでしょ。」

登校中に零治君、アリサちゃん、すずかちゃんに会ったんで一緒に登校しとる。

「酷いなアリサちゃん。乙女には色々あるんやで。」

「男もな。」

「どうせゲームかなんかでしょ。」

「「モチ！！」」

「自慢するなぁ！！」

拳骨をくらう私と零治君。

相変わらず容赦ないなぁアリサちゃん・・・

「みんなぁ～おはよう～」

走っているんやろうけど、物凄く遅い。

「なのはおはよう。」

「凄い汗だね。」

「えへへ、ちょっと寝坊しちゃって・・・」

「なのはちゃんゲームのしすぎは気を付けた方がええで。」

「あんたが言うな！」

（なのは、またいつものか？）

（うん。）

（オーバーワーク気味だろ、少しは休め。）

（そんな暇はないよ。みんなを守れるくらい強くならなきゃ・・・）

（なのは・・・）

「どうしたんや？」

「ん？ああ、昨日勝てなかったボスにどう勝つか考えていてな。」

「詳しく聞かせてみ？役に立つかもしれへんで。」

こんな感じで私達はいつも一緒だったんや。

あの日までは・・・

「キャア！！」

なのはがビルに吹き飛ばされる。
ガラスが割れ、中に入った。
「まだ・・・まだ!!」
自分の武器、レイジングハートを構え直し、相手に向ける。
「ディバインバスター!!」
桃色の魔力砲は相手を飲み込む。
だが・・・・
「我らヴォルケンリッターにそれくらいの技は効かない・・・」
仮面を着けハンマーを持った女の子がそう呟く。
「だったら・・・」
そう呟いた直後、仮面の女の子に鎖の様なものが拘束した。
「バインド・・・」
「いくよ、これが私の全力全開、スター・・・えっ?」
違和感の先を見ると、機械の腕がなのはの胸を貫いており、そこからなのはのリンカーコアをくわえていた。
「これって・・・」

「油断しすぎだヴィータ。」

「余計なことをシグナム。」

機械が喋っているような感情を感じさせない声で喋る二人。

「あああああああ！！！」

なのはの絶叫が響く。

「安心しろ殺しはしない。」

そう言っているが、なのはには聞こえていない。

やがて、なのはの絶叫が収まった。

「気絶したか。魔力も集め終わった。貴様にもう用はない・・・」

機械の腕を引き抜き、なのはを無造作に捨てる。

「シグナム、新たな反応だ。魔力量はＡＡＡ相当。」

「ちょうどいい、ついでにもらっていくぞ。」

「なのはー！」

そこに到着したのは帯刀状態の刀を持った少年だった・・・

「お前らが！！！」

『マスター！！落ち着いて！！』

俺は怒りで我を忘れながら剣を抜き、なのはの近くにいた仮面の剣士に斬りかかった。

「くっ。」

舌打ちをしながらも相手が受け止める。

「ラグナル！！」

『ロード、カードリッジ』

帯刀状態にし、鞘から薬莢が一つ飛び出す。

「裂空刃！！」

抜刀から放たれた斬撃が無数に相手に襲いかかる。

相手は耐え切れず空に逃げた。

「なのは！！」

俺は慌ててなのはに近づく。

返事は無いが、呼吸をしているところを見ると死んではいないみた

いだった。

だけど・・・

『マスター、なのはさんかなり衰弱しています。』

「一体何が・・・」

『リンカーコアが凄く小さくなっています。恐らく蒐集されたのではないのでしょうか?』

「蒐集?」

『夜天の書が色々な魔法データを得るために魔力を蒐集することです。』

「ラグナル、なぜそんなことを知っているんだ?」

『・・・・何故でしょう?』

「まぁいい、まずあいつらを倒すことが先決だ。」

『了解です。』

俺はなのはを綺麗な場所に寝かせ、その場を後にした・・・

私達がいつものようにロストギアを探して帰路に付いている時やっ

た・・・

「マスター。」

「どうしたんや?リインフォース。」

「誰かが戦闘しております。」

「戦闘?」

「私が見に行きますか?」

「いや、全員で行こう。何が起こるか分からへんからな。」

はやての言葉に頷き、3人は戦闘がある場所に向かった。

「くっ・・・」

2人の仮面を着けた剣士の攻撃に俺は翻弄されていた。

「こんなものか・・・」

「シグナム、夜天の守護騎士が近くに来ている。」

「まだ、見つかる訳にはいかん。ここは引くか。」

そう言って2人は俺から離れる。

「待て！？」

俺の言葉も虚しく、２人は消えてしまった。

「くそおおおおおお！！」

『マスター・・・』

「主？」

「何で零治君が・・・」

「マスターどうします？」

「見つかる前に逃げるで。何か嫌な感じがするんや。」

その場を後にするはやて。

だがこの判断が後に大きな戦いを呼ぶこととなる・・・

「なのは・・・・」

アースラの医療施設で寝ているなのは。

命に別状がないことは分かったが、未だに目を覚まさない。

「零治君、後は私が見てるから少しは休みなさい・・・」

この艦のオペレーターをやっているエイミィさんが声をかける。

「戦いから一度も気を緩んでないでしょ。少しはお姉さんに任せて休みなさい。」

「でも・・・」

「いいから!!」

エイミィさんに無理やり追い出され、俺は医療室を後にした・・・

「ラグナル・・・」

『なんでしょう?』

「あいつらのデータ、持っているのか?」

『・・・少しだけ。なぜあるのか分かりませんが。』

「教えてくれ・・・」

『あの二人は恐らく夜天の守護騎士の４人の内の２人。烈火の将シグナムと鉄槌の騎士ヴィータのだと思われます。』

「夜天の書ってさっき言ってたよな？夜天の書って何なんだ？」

『偉大な魔法技術を収集し、研究するための収集蓄積型デバイスです。』

「なんだか凄いものだな。」

『それ以外は分かりません。まだ解明していない部分にデータがあるかもしれませんが・・・』

「一度スカさんに見せて見るべきかな。」

『嫌なんですけど・・・』

その後も俺は色々とラグナルから聞くが分かったことは少なかった・・・

しばらくして・・・・

なのはも良くなり、学校に通うようになった。

だけど、蒐集の影響か、魔力が回復するまで、時間がかかるみたいだった。

空元気が痛々しい・・

しかし、なぜかはやてに避けられているような気がする。

何かしただろうか？

「零治、どうしたの？」

裁判が終わり、嘱託魔導師となって、同じ学校に引っ越してきたフェイトが声をかける。

「いいや、何でもないよ。」

「もしかして襲ってきた人たちの事を考えてたの？」

「まぁそうだが・・・」

俺が考えていたことは別にある。

昨日・・・・・

「以上が、闇の書に関するデータだ。」

アースラに呼ばれ、説明を受けた内容だった。

説明した人物はクロノの師匠、ギル・グレアム提督だ。

だけど、それ以上に気になったことがある。

（なぜ、闇の書なんだ？もしかして、夜天の書じゃなくてあいつらは闇の書の守護騎士？ラグナル、何か分かるか？）

（いいえ、私にも闇の書しかデータがありません・・・）

意味が分からない、どういうことだ？

「あの・・・」

「なんだい有栖君？」

「闇の書・・・なんですよね？」

「ああ、そうだが・・・」

やっぱり別物なのかもしれない。

スカさんにも聞いてみるかな。

「・・・・・・」

その時、グレアムさんが俺を睨んでいることに気がつかなかった・・・

数週間後・・・・・・

なのはの魔力もすっかりと回復し、なのはのデバイスも修復した。

新機能として、なのはとフェイトのデバイスに俺のと同様にベルガ式のカードリッジシステムを積んだらしいい。

俺の方はスカさんでもまだ難航しているようだ。

「ヴォルケンリッターが出現しました!!場所は22管理外世界です!!」

エイミィさんの声に皆が画面を見る。

けどそこには・・・・

「うそ・・・」

「なんで・・・」

なのは、フェイトが二人とも驚く。

なぜなら・・・・

画面には、烈火の将シグナムと銀色の髪の女性。

そしてクラスメイトの八神はやてがそこにいたのだから・・・

次回予告・・・・・

「何ではやてちゃんがその人たちと一緒にいるの!?」

「それは私がこの子達のご主人様やからや。」

「じゃあ、はやてちゃんが闇の書の所有者!?」

戦う親友同士。

反撃しないはやてたち。

仮面を付けていないことと、雰囲気が違うことに不信感を持つ零治。

その時、零治の取る行動とは!?

次回、「友達だから・・・」

# 魔法少女リリカルはやて（後書き）

って感じでシリアスメインで書いてみました。

もっと細かく書きたかったんですが、字数の関係でポンポン進めました。

ギャグや、ほのぼのを期待していた人たちすみません。

シリアスを書いてみたかったので、書いてみてしまいました。

でも完全にオリジナルではなくＡ，ｓの内容が変わったという中途半端な物に。

なので続けてはやての話を書きました。続けてお読みください。

神崎組の名称はその話の後書きに・・・

## リリカルはやてさん（前書き）

前の話がシリアスだったので、ギャグ、ほのぼのな話を書きました。

のですが、ただの恋愛話に・・・

取り敢えずどうぞ・・・

# リリカルはやてさん

こんにちは、私は八神はやてと言うんや。
いきなりやけど私、魔法少女なんです。
友達には内緒やけど・・・
「誰に話してるんだ、はやて？」
この子は我が家のマスコットキャラヴィータや。
世間では永遠のロリータと呼ばれ、一部のファンから絶大な指示を得ているんや。
「ロリっ子最高おおおお！！」
「いきなりどうしたんだ？はやて・・・」
「主はお疲れなのだろう・・・」
そう言いながらこっちに来たのは我が家１の巨乳、ニート侍のシグナムや。
働かなくとも自身の大きな胸でヒモにしてきた男は数知れず・・・
「そんなことしてませんよ主はやて・・・」
「ハッ！？何故にバレたんや？」

「普通に声に出してたぞはやて・・・」

失態やった・・・

「そんなことより早く帰りましょう。これ以上遅くなるとシャマルが料理を作っているかもしれません・・・」

その言葉に固まる私とヴィータ。

「そやな、さっさと帰るで！！」

私達3人はさっさと家に帰るのだった・・・・

家についた私達やったが・・・・・

「遅かったか・・・」

シグナムの言葉通り、家の中には不穏な雰囲気が溢れ出ていた。

「はやて・・・」

「行くで、ザフィーラが心配や・・・」

私は二人を連れて、敵地へと向かった・・・

「この臭いは・・・」

「ひどい・・・・」

二人の言うことは最もや。

紫のモヤがリビングの部屋中を包んでおり中がよく見えない。

一体何を作ったんや・・・・

「ザフィーラ!!」

ザフィーラを見つけたヴィータが慌てて駆け寄る。

「おい、大丈夫か!?」

「あ、主を連れて・・・に・・逃げ・・・ろ。」

「ザフィーラ!!!」

我が家のペットが・・・

「主、ここは避難したほうがいいのでは?」

「私もそう思えてきた所や。ひとまず、ここは・・・」

「おかえりなさい、3人とも・・・」

「「「!!」」」

この元凶の声を聞き、身構える3人。

「駄目じゃないですか、しっかり食べないといい子になれませんよ？」

「ま、待て、実は我らは外で食事を済ませてきたんだ。だから・・・・」

シグナムの言葉も聞かず、ヴィータに自分の持っていた料理を無理やり食べさせるシャマル。

「な、なんてことを・・・」

「シグナム、早う逃げるで！！」

はやてが声をかけるが、いつも以上のスピードで移動するシャマルにシグナルも犠牲になった・・・

「シグナム・・・」

「はやてちゃん・・・・」

「ははははは・・・不幸や・・・」

はやては目の前が真っ暗になった・・・・

八神はやて。

聖祥大学付属小学校3年生。

夜天の書の主として魔法に目覚める。
現在自身の守護者と共に伝説のロストロギアを見つけ、目覚めない管理人格を目覚めさせるために各地を点々としながら捜索中である。
学校は長期休暇中です。

「って学校には出てるわ!!!」
「はやてちゃん!?」
「あれ、天の声が聞こえた気がしたんやけど・・・」
「相変わらずだなお前・・・」

学校の休み時間、いきなり叫び出したはやてに同じクラスのすずかと零治が突っ込む。

「零治君、抱っこ。」
「気持ち悪いから嫌だ。」
「じゃあすずかちゃん。」
「嫌だ。」
「じゃあ・・・」

「神崎！！はやての奴が・・・」

「ホンマすまんかった！！だから本当に勘弁！！」

神崎大悟、もう一つの小説とは違い、イケメンでもなければオッドアイでもない。

なのに性格はそのまま。

女子からは絶大の不人気を得ている。

「冗抱っこぐらいいいやないか・・・」

「お前、重そうだもん。」

「失礼だよ、零治君・・・」

私は零治君、すずかちゃんと同じクラスや。

零治君と私は幼馴染やったりする。

零治君は私と同じで親がいない。

今は叔母さんの家で一緒に暮らしている。

ちなみに零治君も魔法を使える。何故知っているかというと、私が目覚める前に一度見せてもらった時があったからや。

逆に私が魔法に目覚めたことも知っているんや。

叔母さんはとても若くて、美人さんや。あのおっぱいも人離れしてたしなぁ・・・

そんな零治君、私の親が交通事故にあったときなど、私とずっと一緒に居てくれた。

恐らくその辺からやと思う。

零治君を好きになったのは・・・・・・

だけど・・・

「実は俺、ずっと好きな人がいたんだ・・・」

いきなりの告白。その時世界が壊れた気がしたんや・・・

相手はなのはちゃん。

彼女の真っ直ぐな性格に惹かれたと言っていたんやけど、そんなことはどうでもいい。

心は違いながらも私は零治君を応援した。

嫌な奴やと思われたく無かった。

一人になりたくなかったからや。

そんな時・・・・・

私に家族が出来たんや。

シグナムたち・・・私の大事な家族。

もう一人じゃないんや。

だからちゃんと応援できると思う。

寂しくないんやから・・・・

「はやて？」

「ん？なんや？」

「どうしたんだ？何か最近様子がおかしいぞ？」

「なんでもないんや、だから気にしとんといて。」

「そう・・・か？」

「そうや。それよりなのはちゃんに告白する準備してきたんかいな？」

「こ、告白！？」

「は、はやて！！」

すずかちゃんに聞かれて慌てる零治君。

「いいやないか、どうせ今日告白するんやろ！？」

「まぁ、そのつもりだけど・・・」

「だったら問題なしや！」

そう言って私は立ち上がった。

「はやて？」

「トイレや。」

私はそのまま教室を出ていった。

「私ってバカやな・・・」

トイレで私は呟いたのだった・・・

（はやて！！あのロストロギアの反応があったぞ！！）

（ほんまか！？）

学校が終わり、零治君の告白を覗くために動こうとしたとき、ヴィータから念話が入ったんや。

（どこでや！？）

（それが・・・・ここなんだ。）

（ここって海鳴市！？）

（そう・・・）

（なんでこないな場所に・・・今からそっちに行くわ。）

私は慌てて教室を出た。

『マスター・・・』

「・・・・・・」

「ヴィータ！！」

「はやて、あれ！！」

そこには結界の中で暴れている異形の化け物。

いくつもの触手がウネウネ動いており気持ち悪い。

「なんかエロいわあれ・・・」

「はやて気持ち悪いじゃねか・・・」

「そんなことはどうでもええねん。シグナム達は？」

「あそこで！！」

見ると触手に襲われながらも自身の武器レヴァンテインを振っている。

だが・・・

「しまっ！？」

触手に捕まり、拘束されてしまった。

「離せ！！」

「おお～！！巨乳美人が触手に！！」

「はやて自重しろ！！」

ヴィータが突っ込みながら、相手に向かって自身の武器、グラーフアイゼンを構え突撃するヴィータ。

「ヴィータ！？むやみに突っ込んだらアカン！！」

「えっ！？きゃあ！！」

ヴィータも同様に触手に捕まってしまった。

「ヴィータ！！」

「はやて、助けて！！こいつら気持ち悪い・・・ってなんでカメラで撮ってるんだ！？」

「えっ！？触手プレイって滅多に見れへんから・・・」

「はやて！！！！」

マイペースなはやてだった・・・

「はやてちゃん！！」

結界を一生懸命維持しているシャマルがその様子を見て、名前を呼んだ。

「私の結界もそんなに長く持ちそうにないの！！早めにどうにかしないと・・・」

「けど、シャマル、私の魔法やと2人を巻き込んでしまうし・・・」

そう言いながらも写真を撮ることを忘れないはやて。

「ザフィーラは？」

「鋼の楔で押さえ込もうとしたんだけど、吹っ飛ばされちゃって・・

・」

「どないしよう・・・」

ここで魔法を放ったら、２人を巻き込むやろうし、これから始まるシャッターチャンスをみすみす見逃していいのやろうか・・・

「このアホ！！」

ガツンと頭に鈍い痛みが響く。

「誰やねん！！乙女の頭を殴った奴は・・・・」

そこには・・・

「ったく、ヴィータやシグナムが可哀想だろうが。」

襟のたった白いコートを着た零治君がそこにいた。

「な、なんで？」

「何でって様子がおかしかったから見に行ってみれば、シグナムさんやヴィータが触手に捕まってるし、シャマルさんが辛そうなのにカメラで撮影しているはやてに拳骨しただけだが？」

「そうやなくて、告白は？」

「そんなもん後回しだろ。はやてには俺がいないと駄目だからな。」

「零治君・・・・」

「いいから俺が二人を助けるからドデカイのぶっぱなせよ！！」

「任せといてな。取っておきをお見舞いするで！！」

「それじゃあ。」

「「行くぞ（で）！！」

「ヴィータ・・・」

「んん？」

「ヴィータ・・・」

「ん？」

「ヴィータ！！」

「うおっ！！ってどうしたんだ私・・・ってなんで零治が私を抱っこしてるんだよ！！」

「暴れるなって!!助けてやったのにその反応は酷いだろ!?」

「助けて?ってそうだ!!あいつは!?」

お姫様抱っこされながら周りを見るヴィータ。

だが周りに何もないことが分かりホッとしたようだ。

「っていい加減降ろせ!!」

「そうか?軽いし別によかったんだが・・・」

そう言いながら零治はヴィータを降ろした。

「あ、あの・・・・・」

顔を赤くしながらモジモジし始めるヴィータ。

「どうした?」

「ありがとな・・・・」

「ん?ああ、問題ないよ。」

「でさ、この埋め合わせって訳じゃないんだけど、今度一緒に・・・」

「ヴィータ・・・?」

呼ばれ振り向くと、鬼の表情をしているはやてがそこに居た。

「ちょっと零治君と話があるからあっち行っててな・・・」

「お、おう分かった!!」

慌ててヴィータは遠くに行ったのだった。

「で、話って何だ?」

「なのはちゃんの告白の事や!!一体何考えてんねん!?」

「別に?ただ、慌てて出ていった幼馴染が一体何してるのかと思ってな。」

「そんなことのためなんか?自分で呼んどいてボイコットって何考えてんねん!!」

「断りの連絡はいれたさ。それに・・・」

「それに?」

「気づいたんだよ。俺な、お前が困ったり悲しい顔をしているとほおっておけないんだ。どうしても気になっちゃうんだよ。なのは以上にな・・・」

「えっ!?それって・・・」

「俺はお前が好きなんだ。気になってどうしようもないんだ。だからお前たちが何か困ってるのに、何もできない自分が嫌なんだよ。」

「・・・・・」

「教えてくれ、お前たちは一体何をしている？」

「それは・・・・・」

はやては自分たちの事情を零治に説明した。

「なるほどな・・・」

いつの間にかヴォルケンリッターもそこに居た。

「お前ら相談しろよ・・・」

「だって迷惑かけちゃ悪いと思ったから・・・」

「ったく・・・それぐらい俺も協力してやるよ。」

「でも・・・」

「俺がす、好きな人のために手伝いたいっていったんだ！！それくらい了承しろよ！！それとはやて。」

「な、なんや？」

「お前の答えを聞いてないんだが・・・」

「わ、私は・・・」

私の答えなんて決まってるんや。

「私は・・・」

いつも私の近くにいて私を支えてくれる心強い男の子・・・

「私は・・・」

私の為に手伝ってくれると言ってくれた男の子・・・

「私は！！」

答えなんか決まっとる！！

「私は有栖零治の事が大好きや！！」

今回の暴れていたロストロギアは全くの別物だった。

なので、その後も夜天の書の主とその守護者の旅は続いた。

しかし夜天の書の主の隣には一人の男の子が側にいたのだった・・・

## リリカルはやてさん（後書き）

零治君、はやてさんお幸せに・・・・

なんでこうなったんだろう・・・

うーん・・・・・・

まぁこれで一応終わりなので普段通りに戻りたいと思います。

次はスカさん一家のお話。

これからもよろしくお願いします。

## 第３３話　スカさん家の日常（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

投票も終わったので、本編です。

今回はスカさん一家のお話。

## 第３３話　スカさん家の日常

『と言うことだ、後の戦闘機人の開発は取り敢えずクレイン・アルゲイルに一任する。』

「そうですか。なら我々はどうしますか？」

『別にどうとするつもりはない。奴が失敗した時の保険としてお前が必要だからな。普段通り好きに研究していればよい。』

「分かりました。」

『では。』

通信が切れ、スカリエッティは椅子に深く沈む。

「お疲れ様です、ドクター。」

「全く、老人たちには本当に困ったものだ・・・」

飲み物を持ってきたウーノに愚痴るスカリエッティ。

「あの魔力吸収する戦闘機人が気に入ったみたいだね。」

そう言ってその時のデータを表示する。

「しかし、厄介なものを作ったものだよ彼は・・・」

スカリエッティには珍しい怒りを込めた呟きだった・・・

「いやっほ～！！」

「ウェンディー！！」

ここは訓練場。

今はノーヴェとウェンディが戦闘している。

「波に乗れ！！」

「ちょこまかと！！」

展開したエアライナーを走りながらガンシューターを放つノーヴェ。

「甘いっス！！」

それをエリアルボードの切り返しで器用に避けるウェンディ。

「今私、風になってるっス！」

「分けわからない事言ってるな！！っていうか避けるなって！！」

「嫌っスよ痛いのなんて。」

「ねぇ、トーレお姉さま。」

「何だクアットロ。」

「訓練相手間違ってない？」

「と言われても、ウェンディは私とは訓練したがらないのだ・・・」

2人の戦いをモニター室で見ていたトーレとクアットロが呟いた。

「もう遊びはこれまでっス！行くっスよ～！！」

ウェンディは高々上に波に乗っているように上がっていく。そして・・・

「カットバックドロップターン！！」

そのまま急降下した。

「な、何！？」

その突撃をガンナックルで受け止めるノーヴェ。

「グッ、まだまだ！！」

「もう積みっスよ、エリアルショット。」

「えっ！？そんなの無しだろ！？」

既にガードしているため、モロに食らうノーヴェ。
ダメージの衝撃で自身のエアライナーから落っこちた。
「いえ～い、私の勝ちっス！！私が最強っス！！」
「ほお、それは聞捨てならないな。次は私が相手だ。」
訓練室に入ってきたトーレが呟いた。
「いえいえ、私みたいな戦闘力５のゴミがトーレ姉の相手なんか務まらないっスよ。相手なら砲撃ぶっぱなすディエチ姉なんてどうっスか？」
「ディエチちゃんは今調整中です。」
その後から入ってきた、クアットロが言う。
「クア姉・・・相変わらずのドＳっぷりっスね。なんスかそのタイミングの良さ。だからシスターズでも人気が低いんスよ。」
「・・・・いつそんなのやったのかしら？」
「この前っス。ちなみに一位はチンク姉です。」
「何で、ここにいないチンクちゃんが・・・」
「チンク姉は永遠のロリータっスから・・・」

「絶対違うと思うぞ・・・」

トーレのツッコミもウェンディには届かない。

「大体、クア姉は心が黒いです、真っ黒です。なので体もばっちいです！！」

「なんですって！？私はドクターと違って毎日洗浄してます！！」

「ノーヴェ、聞いたっスか？洗浄て言ったっスよ。洗濯物と一緒っスね～」

「あんたも入っているでしょうが！！」

「私はお風呂っスよ～。ドクターに作って貰ったっス。」

「お風呂！？」

「ごめんなさい、クア姉。私もお風呂に入ってるんだ。」

「ノーヴェちゃん！？」

「すまん、私もだ・・・」

「トーレお姉さま！？」

「ちなみにセインもっスよ。」

「何で！？私聞かされてないんだけど・・・」

「言ってないからっス。」

「ウェンディ！！！」

「へへ～ん、悔しかったらこっちに来るっス～」

怒ったクアットロがウェンディに近づくが、ライディングボードに乗り、空に逃げるウェンディ。

「トーレお姉さま、ウェンディが空に上がりましたよ。」

「助かった、これでウェンディとちゃんと訓練が出来る。」

「はっ！？計ったっスね！？」

「私に勝つなんてまだまだ甘いわよ。」

そう言いながらも拳はプルプル震えていた。

「さて、やるか。」

「来るな、戦闘狂！！」

ウェンディにとって地獄の時間が始まったのだった・・・

「痛いっス・・・・」

「明らかに自業自得だろ・・・」

痛がってるウェンディに冷たく突っ込むノーヴェ。

トーレにボコされてから二人は汗を流すため、お風呂に入っていた。

このお風呂はウェンディがこだわり、大浴場のように広く、大人数でも入れるようにしている。

しかも、水風呂、サウナも完備している。

「流石ドクターっスよね。教えただけでここまで作ってくれたんスから。」

「・・・ウェンディの我侭だろうが。」

実はウェンディ、ウーノのお気に入りとなっている。

その理由はお寿司の件もあるが、妹の中で一番甘えてくるのが大きい。

なので一番ウェンディを甘やかしてる。

さっきの戦闘も、クアットロが仕組んでトーレにボコボコにされたとチクリ、今クアットロはウーノから説教を受けている。

「ウーノ姉が賛成してくれたから良かったものの、味方してくれなかったら、どうなっていたか・・・」

このお風呂の建造の時もスカリエッティは忙しく作っている暇が無

かったのだが、ウーノのおはなし（説得）によって、死ぬ思いでスカリエッティが一日で作り上げた。

その後、スカリエッティは一日中寝ていたらしい・・・・

「せっかくならウーノ姉も誘っとけば良かったっス・・・」

上記の理由もあり、ウェンディはウーノの事が大好きなのである。

「ウェンディ、ノーヴェ～！！」

「セイン～・・・とトーレ姉！？」

「迷惑だったか？ノーヴェ。」

お風呂の扉が開き、入って来たのはセインとトーレだった。

「いや、そんなことは・・・」

「私もたまには妹達とゆっくりと風呂に入りながら話たいと思ってな。」

体をお湯で流し、風呂に入る、セインとトーレ。

「あ～気持ちいい・・・」

「本当だな。お前たちはあっちで毎日味わっていたのだろう？」

「そうっスよ～。こっちより全然狭かったっスけど。」

「ライと入った時はキツキツで大変だったな～」

「ライ姉はおっぱい大きいっスから。トーレ姉といい勝負なんじゃないんスか？」

そう言って、堂々と前からトーレの胸を揉むウェンディ。

「ん？胸など大きいほど邪魔になるだけではないか？」

「・・・・・トーレ姉、女としてそれはどうかと思うよ。」

「だがセイン、我々は戦闘機人だ。性別は女だが、女である必要なんてないだろ。」

その言葉を聞いて一気に雰囲気が暗くなる。

「そうだよな・・・やっぱり私達は戦闘機人・・・」

「普通の人とは違うんだよね・・・」

「レイ兄達は肯定してくれたっスけど、その事実はやっぱり変わらないんスよね・・・」

ハァとため息を付く3人。

「やはりお前らは変わったな・・・・」

そんな3人の様子を見て、しみじみと呟くトーレ。

「出て行く前と帰ってきた時のお前たちはまるで違う。本当に感情

豊かになった。ウェンディは元から変わらないが・・・こんな事を言うとクアットロに怒られそうだが、人間らしくなったよ。」

「そう・・・かな？」

少し照れくさそうに言うセイン。

「というより、このラボ全体の雰囲気っが明るくなったような気がするな。ウーノは前よりも柔らかくなったような気がするし、クアットロは心から感情を露にするようになったと思う。ディエチも前よりは柔らかくしゃべるようになった。何より、ドクターが別人のように感じるようになった。」

「ああ、分かります。前より不気味じゃなくなった気がします。」

「変な笑い方しなくなったしな。」

「そうっスか？相変わらずの臭いと汚さっス。」

「そこは触れていなかっただろうが・・・」

トーレから拳骨を食らうウェンディ。

「ううっ、頭がパーになるっス。」

「お前は元々パーだろうが。」

「黙れ貧乳。」

「おまっ！？姉に向かって！！」

「そうだよ！！貧乳馬鹿にするな！！」

「負け犬が何をほざいてるかっス！！私はトーレ姉のように大きくなるから問題ないっスけど。」

「違うね、ウェンディは今のままでストップだよきっと！」

「そうだな、頭もこのままだろうしな。」

「そんなことないっス、レイ兄にもんでもらって大きくなったんスから。」

「レイはそんなことしたの！？」

「アイツ今度あったらただじゃおかない・・・」

いつの間にかとばっちりにあっている零治はともかく、ギャーギャー風呂で騒いでいる妹３人。

「ふっ、なぜだろうな。こんな風呂も悪い気がしない・・・」

トーレは３人の喧嘩を優しい眼差しで眺めていた。

「ディエチちゃん、手伝って欲しい事があるの・・・」

調整が終わったディチエにいの一番に声をかけたクアットロ。

「ウェンディちゃんを懲らしめたいから、手伝って欲しいの。」

「ごめんクアットロ。私、この調整の時の臭いが嫌いだからお風呂入ってくるね。」

クアットロを避け、お風呂に向かうディエチ。

しばらく固まるクアットロ。

「私ってやっぱり嫌われてる?」

クアットロの悲しい呟きに返事をするものはいなかった・・・

「ふぅ～いい湯だったっス・・・」

「さっぱりした～。」

「ドライヤー、ドライヤー。」

さっさと服に着替えたノーヴェは服に着替え、鏡の前で髪を乾かし始めた。

3人によって、ナンバーズも各自自分の服を着るようになった。

クアットロだけはまだ、あのボディスーツを着ているが、他のナンバーズは訓練以外着ていない。

ガラガラガラガラ・・・・・

「あっ、ディエチ。調整終わったの？」

「うん、だからお風呂に入りにきたの。」

「だったら、トーレ姉お願いっス。相変わらず長湯してるんスよ・・・・」

トーレの風呂は長い。たまに風呂でお酒を飲んだり、サウナに入り水風呂に入るこのローテーションが好きだったりする。なので基本一人で入るトーレだが、度々遭遇するのだ。

トーレは一回フェリアが送ってきたお酒を飲んでからお酒にハマってしまった。

たまに自分で買いに行ったりもする。

「分かったよ。」

着ている物を脱ぎ始めるディエチ。

「ムムム・・・負けたっス・・・」

「ディエチは胸大きいよね。いいな、いいな・・・」

ブツブツ言いながらディエチの胸を凝視するセイン。

「レイ兄もその胸なら、らくらく落とせるっスよ。」

「レ、レイはそんな簡単に・・・」

「それにライがいるからな。上には上がいるだろ。」

「恥ずかしいからあまり見ないで欲しい。」

少し頬を赤く染めぼそぼそと言った。

「あっごめん・・・」

「良いよ、じゃあ私、入るね。」

少し焦った様子で風呂に入って行った。

「慌てたディエチ姉も可愛いっスね～」

「変な目で見てんな!!」

ノーヴェの投げたドライヤーをウェンディは頭で受け止めた。

「ウーノ姉!!」

風呂から上がった三人は書類を持っているウーノと出くわした。

「どうしたのウェンディ?慌てちゃって。」

「ウーノ姉の姿が見れて嬉しくなったっス!!」

「ものこの子ったら・・・」

そう言いながらも顔がほころんでいるウーノ。

「ウーノ姉、ドクターは？」

「今無理やり洗浄させて、休ませたわ。全く老人たちときたら・・・」

「何かあったの？」

ウーノの険しい顔に、ノーヴェは心配そうに聞いた。

「そんなに心配そうな顔しなくても大丈夫よ、問題ないわ。それよりみんなでお菓子でも食べましょ。」

「わーい、やったっス～！！」

バンザイしてはしゃぐウェンディ。

「フフフ、可愛い子ね・・・」

「本当ウーノ姉の前だとキャラ変わっちゃうんだから・・・」

ウェンディの様子を見てセインは呟いた。

『ドクター、今回の休日を利用して一回アジトに帰ろうと思います。
なので妹達からお土産は何がいいか
聞いておいてもらえませんか？』

「皆、ちょっと集まってくれ。」

スカリエッティの声に皆が集まった。

「チンクが一旦帰ってくるのに、お土産は何が良いと聞いてきたんだが、皆欲しいものが何かあるか？」

「では、私はお寿司を・・・」

ウーノが一番始めに言う。

「では、私は日本酒と言うのを飲んでみたい。」

すっかりお酒好きのトーレ。

「なら私はまた翠屋のケーキが食べたいですわ。」

ケーキを頼むクアットロ。

「なら私は・・・」

「私はＰＳＰとモンバス！！」

「私もそれで！！」

「私もっス！！」

ディエチが頼もうとしたときに、３人娘が割り込みで言った。

「モンバス？」

「モンスターバスターっス。あっちの世界だとバカ売れしてるハウンティングゲームっス。」

ウーノの疑問にウェンディが説明する。

ミッドにもＰＳＰに似たものがあるのだが、地球にある物の方がクオリティが高く。３人にはつまらなかった。

「ディエチは何かあるかい？」

「えっと・・・・」

迷うディエチ。

しばらくして・・・・・

「地球にあるアクセサリーが欲しい。」

「ふむ、そんなことでいいのか？」

「うん、あっちの世界のことよく知らないから・・・」

「分かった、チンクにはそう返事をしておこう。皆、それぞれやっていたことに戻ってくれ。」

この後、スカリエッティはチンクに返事を書いたのだった。

## 第３３話　スカさん家の日常（後書き）

ウェンディ我侭し放題・・・

この小説で一番キャラ崩壊していると思う・・・

それとディエチ登場。

ずっとディチエだと思ってました・・・

後、ディエチの呼び方呼ばれ方が今イチ分かりません。

詳しい人は教えてください。

神崎組の名称が決まりました。

前の時に書くと書きましたが忘れていました。申し訳ないです・・・

名称はグラムサイト2さんの聖祥美少女親衛隊、略してＳＢＳに決定しました！！

勝手に親衛隊作ってるところとか面白いと思ったのでこれにしました。

考えてくれた人達本当にありがとうございました。

次回、フェリア帰郷です。

これからもよろしくお願いします。

# 第３４話　フェリア帰郷（前書き）

テイルズオブエクシリア発売！！！

クオリティ凄い。

声優陣豪華だし、ＯＰは浜崎あゆみだし・・・

いつも思うけど、テイルズってすべて抜かないよね。

・・・って脱線した。今回はフェリア帰郷です。

それではどうぞ。

# 第３４話　フェリア帰郷

「ふぅ、やっと着いた。」

お土産の荷物を持ち、フェリアが呟く。

スカリエッティのアジトに着くまで転送５回以上。しかも結構歩いて次の転送装置のある場所まで移動するのでかなり時間がかかっている。

「あっ！？フェ、チンク姉～！！」

フェリアを見つけたセインがすかさず駆け寄った。

「久しぶり！！それとおかえり！！」

「ああ、ただいま。」

「よっす、セイン。」

「よっす！・・・・ってレイ！？」

「そうだよ久しぶりだな。」

そこには私服姿の零治がいた。フェリアと同様にお土産の袋を持っている。

「何でここにきたの！？ドクターに魔導師だってバレちゃうよ！！」

「恐らくとっくにバレてるよ。だからゴールデンウィークの後に接触してくると思ってたんだが、それもない。だから今回何考えてるか話してみようと思ってな。」

「でも・・・大丈夫なの？」

「いざとなったら逃げるさ。それにお前たちもいるしな。」

「微妙だよ、トーレ姉やクア姉もいるし・・・」

「大丈夫だって、なんとかなるさ。」

笑いながら言う零治にセインは不安を感じながらもそれ以上反論はしなかった。

「大丈夫だ、心配することない。」

「うん分かったよ。じゃあ、行こう。」

セインも覚悟を決め、２人をアジトに案内した・・・・・

「で、誰なのですか？」

アジトに着いた3人だったが、早速ストップをかけられた。

ストップしたのはクアットロだ。

「チンクちゃん、男を連れてくるなんて一体どうしたの？まさか結婚報告とか？」

「この人はあっちでお世話になっている有栖零治だ。」

「ああ、あの戦闘機人と戦っていた・・・私はＮｏ．４クアットロと言います。」

「クワトロ？」

「クアットロです！！・・・それでなんのようです？」

「スカリエッティに話がある。」

「ドクターなら忙しくてあなたの相手をしている暇がありません、要件なら私が・・・」

「いいわお連れして。」

「ウーノお姉さま！？」

「失礼しました、こちらにどうぞ。」

零治はウーノに連れていかれた。

取り残された３人は・・・

「・・・まぁおかえりと言っときますわ。」

クアットロはそう言って自分の部屋に行ってしまった。

「えっ！？」

「どうしたの？そんな驚いた顔をして。」

「クアットロがお帰りだと・・・・！？」

「ちょっと、チンク姉！？」

あまりのショックにフェリアはその場でしばらく呆然としていた・・・

俺は紫の髪のお姉さんに案内され扉の前に来た。

「ここにドクターがいます。」

「ありがとうございます。」

俺はお礼を言って、ドアの中に入っていった。

「待っていたよ、はじめましてだね。私はジェイル・スカリエッティ。ここの責任者のなるのかな。」

「有栖零治・・・・知ってると思うけどな。」

「そんなに警戒しないでくれ。別に危害を加えるつもりはないよ。ウーノ、コーヒーを2つ持ってきてくれないか?」

「了解しました、ドクター。」

入口付近にいたウーノが部屋から出ていく。

「取り敢えずそこの椅子にでも座ってくれ。」

俺の予想以上に部屋の中は綺麗だった。

もう少し機械の部品やらが散らばってると思ったけど・・・

「で、君は私に用があって来たんだろう?」

「っと、そうだった。単刀直入に聞くけど、何故仕掛けてこないんだ?」

「・・・・何のことだい?」

「俺達の戦闘も見ていたんだろ?なのに何もないことが逆に不気味でな。だから直接聞きに来たんだ。」

「なるほど、だけど君たちに危害を加えることはないよ。チンクやセイン、ノーヴェにウェンディも君たち家族を気に入ってる。娘達の為にも危害を加えるつもりはないさ。」

軽い口調でスカリエッティが言う。

しかし、スカリエッティってこんなに優しい雰囲気だっけか?

もっと不気味な感じだと思ってたけど・・・

「ドクター、コーヒーを。」

「ありがとうウーノ。零治君、君はブラックで大丈夫かい？」

「ああ、ありがとう・・・」

俺はまだ戸惑いながらもコーヒーを受け取る。

「・・・・・・」

「大丈夫だよ、コーヒーには何も入ってないから。」

信じられるか。

「・・・まぁいい。それじゃあ、今度は私が君に聞きたいのだが・・・」

「なんだ？」

「君は黒の亡霊か？」

「・・・・・何故だ？」

「まず、君のこの能力。」

そう言ってパネルを操作し、ディスプレイにあの時の戦闘の映像が映る。

「ここだ。」

その映像は星を触り、一緒にジャンプしている映像がスローモーションで再生される。

「君は敵の砲撃を避けるのに、彼女を触って転移した。距離は短いが黒の亡霊の転移と同じようだった。そう思い二つを比べてみたんだが・・・」

「どちらも魔力を使っているが、普通の転移とはスピードが違いすぎる。それに魔力の消費が普通の転移とは桁違いに魔力を使ってない。その辺からこの二人は関連性があるのではないかと思ったのさ。」

見事に正解だわ・・・・・・

俺のボソンジャンプの利点は、スピードと魔力の消費量。

普通の転移みたいに違う管理外世界には飛べないけど、その分、瞬間移動みたいにその場から一瞬で消え、現れることができる。ブラックサレナは少し長距離を飛べるようにしたため、消える時と現れるときに3秒ほど時間がかかるのが唯一の欠点だ。

逆に普通の時の欠点は長い距離を飛べないこと。逃げる時などには向かないことが欠点だったりする。

欠点には気がついてないが、どのような能力かは当たっている。

流石だな・・・

「で、私の推測はどうだい？」

「・・・・正解だよ。全く恐れ入った。流石はスカリエッティと言ったところか。・・・・で俺をどうするんだ？もうお前の目的の黒の亡霊は目の前にいるんだぜ。」

諦めた訳じゃないが、これ以上誤魔化せないだろう。

だったらいっそ・・・・・・

「俺には待ってる家族もいるんだ。悪いが抵抗させてもらうぞ。ラグナル！！」

『久々の登場！いつでもＯＫですよ！！』

ラグナルもやる気満々だな。

フェリアやセインたちには悪いが、敵対するぞ！！

「落ち着いてくれ、もう君に手を出すつもりは無いよ。」

スカリエッティはデバイスを出した俺に、慌てず答える。

「何故だ・・・・？」

「セイン達から聞いたのさ。君たちはセイン達を戦闘機人と知りながら家族だと言ってくれた。私はそんな君に興味を持ったのだよ。それで一度ゆっくり話してみたいと思っていたのさ。」

コーヒーを手に取り、そう言ったスカリエッティ。

「お前が・・・!?」

「私としても不思議でね、何故こんな風に思うようになったのかと・・・」

昔の自分を思い出しているのか、上を見ながら答えた。

「今は娘達の変わりようを見ていた方がとても楽しいのさ。そうだ、聞いてくれ!この前セインが私にクッキーを焼いてくれたんだ!!味はしょっぱかったけど、あの嬉しさは今までに味わったことのないものだった!!」

いきなり力説し始めるスカリエッティに俺も戸惑う。

キャラ違くないか?

「他にもクアットロが周りの娘たちとうまくなじめてないんだ、せっかく大きな大浴場を作ったのにクアットロだけ入らないし・・・年頃の娘は難しくてね・・・」

いや、あんたが皆女の子にしたのがいけないんだろ。

「それは私も悩んでいることなんです。」

入口で聞いていたウーノが話に加わってくる。

わざわざ自分の椅子を用意して・・・・

「服も着ないでいつまでもあのボディスーツを着ていますし・・・言ってもきかないんです・・・」

なんか相談会になってる気が・・・・

その後も俺は二人から色々と愚痴を聞く羽目になった・・・

『また私は空気なんですね・・・・デバイスいらないんじゃないですか？』

「遅い・・・」

ドクターの部屋に行ってから2時間は経っていると思う。

「チンク姉・・・」

「ああ、少し遅すぎるな。」

「大丈夫っスよ、案外ドクターと話が盛り上がってるんじゃないんスか？」

「それはねぇだろ・・・」

ノーヴェの言葉にウェンディ以外の2人が頷く。

「分からないっスよ～。そうだ！！せっかくだからみんなで迎えに行くっスよ！！」

「えっ！？でもウーノ姉に怒られないかな？」

「いや、行こう。」

「チンク姉の言う通りだ。あんな奴でも私達の家族だしな。」

ノーヴェの言葉に3人は頷いた。

「それじゃあ、レッツゴーっス！！」

ウェンディの掛け声で4人はスカリエッティのラボへ向かった・・・

「着いたっス～！」

4人は今、スカリエッティの部屋の前にいる。

「さてそれじゃあ・・・」

「入るっスよ～！」

「「「ちょ！？」」」

勝手に中に入っていく末っ子の行動に慌てる姉達。

だが・・・・

「どうしたんだいウェンディ？」

「お腹でもすいた？クッキー食べる？」

スカリエッティとウーノの反応は普通だった。

「あっ、食べるっス。・・・って違うっス！！レイ兄はどこっスか！？」

キョロキョロと周りを見て探すウェンディ。

だが零治の姿は見当たらない。

「まさか、ドクター！！男の体まで興味を持ち始めたのじゃないんスか！？」

「んなわけあるか！！」

後ろからウェンディの頭にチョップを食らわせる。

「痛い～！！ってレイ兄、無事だったんっスね！？」

そう言って飛びつくウェンディ。

だが、零治はそれを避けた。

「あぐっ！？」

「うわっ、痛そう・・・」

「避けることはないんじゃないか・・・？」

「何されるか分かったもんじゃないからな。それとノーヴェ久しぶり。」

「お、おう・・・」

フェリアの後ろから返事をするノーヴェ。

っていうか隠れるなよ。

「フフッ、ノーヴェも嬉しそうですね。」

「そうですか、俺にはそう見えないんですけど・・・」

「私のカンはよく当たるのよ。」

「本当ですか？ウーノさん。」

「どうかしらね。」

「どっちなんスか・・・」

「あれ、なんかフレンドリーじゃない？」

「そうだな。レイ、一体何があった？」

「えっ！？別になんにもなかったんだけど・・・」

取り敢えず、話した内容を簡単に話した。

「レイが黒の亡霊だったとは・・・」

「あの時に言ってくれればよかったのに・・・」

「私達は正直に話したのに、レイは嘘ついてたんだな・・・」

「最低っス、見損なったっス・・・」

ジト目で見られる俺。

まぁ隠してたのは悪いと思うけどさ・・・

「まさか、完璧に気づかれるとは俺も思ってなかったんだよ・・・」

そう言いながらスカリエッティを見る零治。

「まぁいいじゃないか、こうして話せて面白かったよ。」

「まぁ俺も楽しかったけどさ・・・」

「もうすっかり仲良しっスね。」

意外と話があって俺も驚いてるけどな。

俺も最初は星達に苦労したからな・・・

「まあな。ってそうだ！ウェンディ、ちょっと手伝え。」

「何をっスか？」

「それは、ごにょごにょ。」

「ふんふん・・・ごにょごにょ？」

「ボケんでいい。それでやってくれるか？」

「モチっス！！これでクア姉に仕返しが出来るっす・・・」

フッフッフと嫌な笑みを浮かべるウェンディ。

何か恨みでもあるのか？

「じゃあスカさん、ウーノさん。取り敢えずやってみるわ。」

「ああ。」

「お願いね。」

「了解。それじゃあ行くぞウェンディ、案内よろしくな。」

「了解っス！！」

二人はそのままスカリエッティの部屋を出ていく。

「待て、私も行くぞ！！」

「私も！！」

「セイン、待って！！」

フェリア、セイン、ノーヴェも2人に付いていく。

「やっぱり彼といると違うね。」

「それほど、彼の存在が大きいのでしょう・・・」

そう言うが、羨ましそうにみんなが出ていった方を見るウーノ。

「羨ましいかい？」

「そうですね・・・おそらく羨ましいのだと思います。」

「そうか・・・ウーノ、君も変わったね。」

「そう言うドクターこそ。」

そう言ってお互い笑い合う。

「だが、決して悪くない。」

「そうですね、私もそう思います。」

「今度は彼の家族全員で来て欲しいものだな。」

「その時は盛大に迎えましょう。」

二人は画面で零治達の様子を見ながら話したのだった・・・

## 第３４話　フェリア帰郷（後書き）

零治、黒の亡霊とバレるも、スカさんとお友達に・・・

もう完璧にスカさんファミリー良い人達です。

次は零治とウェンディがクワットロを修正します。

カミーユみたいに殴りませんが・・・

それと、作者の夏休みがあと僅かになりました。

課題に、資格のテストが一ヶ月切ったり、エクシリアが発売したし、はっきり言って時間がないです・・・

最後はともかく前の二つが問題です。

なので更新が遅れるかもしれません。

申し訳ないです・・・

## 第３５話　クアットロ修正（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

やっぱり遅れてしまいました・・・

次は出来れば翌日までに投稿したいですが、微妙です。

取り敢えずどうぞ。

（修正）ディエチはクアットロに対し、クア姉と言っていなかったので修正しました。気にしなくても問題ないです。

# 第３５話　クアットロ修正

スカさんの部屋を出た俺たちは、アジトに唯一あるというリビングへ向かった。

ウェンディが言うにはみんな大体ここにいるか、自分の部屋らしい。

ここの部屋だけはアジトとは全く違い、普通の家にあるようなリビングになっている。

ソファーや大きなテーブル。キッチンや冷蔵庫まで、様々な家具が置かれていた。

「次元犯罪者のアジトじゃないな・・・」

「そうっスね。でもここが一番落ち着くっス。」

「うん？ウェンディか。あと君は・・・・」

ソファーに座ってた二人の女性の一人、紫の短髪の女性が話しかけてきた。

確かトーレだっけ？この人・・・

「俺は有栖零治です。」

「君が有栖零治か。私はＮｏ．３、トーレだ。妹達がお世話になったな。」

やっぱりこの人がトーレさんか。

っていうかあの時会ったんだよな。

で、もう一人は誰だ?

茶髪のロングヘアーで後ろを縛ってる女の子。

外見だと俺と同じくらいだろうけど・・・

「私はＮｏ．１０ディエチですよろしくお願いします。」

「ああ、２人ともよろしく。」

「そんなことよりトーレ姉、クア姉見てないっスか?」

「クアットロか?この部屋には来ていないが・・・」

「じゃあまだ自分の部屋っスね、ありがとうっス。レイ兄、行くっスよ!!」

「ちょ!?少しは落ち着けって!!すいませんありがとうございました。」

俺はウェンディに引っ張らながら部屋を出た。

「なんだったんだ?」

「分かりません・・・」

嵐のように去っていった二人と入れ違いにフェリア達3人が入って来た。

「トーレ、レイ達はどこに行ったか知っているか？」

「レイ？」

「零治の事だ。」

「ああ、有栖ならウェンディと一緒にクアットロの部屋に向かったぞ。」

「ありがとうトーレ姉、2人とも行こう。」

セインの言葉に3人もクアットロの部屋に向かった。

「何なんだ一体・・・」

「トーレ姉様、私たちも行ってみませんか？」

「・・・そうだな、私も少し気になる。」

リビングにいた二人もクアットロの部屋へ向かったのだった。

「ここっス。」

ウェンディに案内され、部屋の前にいる。

「しかし、広いよなここ。」

「ドクターが作ったアジトっスから。」

建築士もびっくりな出来だ。

ボスのアジト感は消えてないけど・・・

「それじゃあ入るっスよ。」

ウェンディは相変わらずノックもせずに中に入っていった。

「くっ、みんな少し位協力してくれてもいいですのに・・・もういいですわ、私一人でもウェンディを・・・」

「お前、一体何をした？」

「クア姉をネタに楽しんでいただけっス！！しかし、変な機材ばっかっスね～、つまんないっス・・・」

「あなた達！何勝手に人の部屋に入っているの！！しかも荒らすな！！」

俺はしていないが、勝手に入って勝手に部屋を荒らすウェンディ。

しかし、本当に変な機材ばっかりだな。

「クア姉を修正しにきたっス！！」

拳を作り、堂々と宣言するウェンディ。

「だったら別に荒らす必要ないでしょうが！！そ・れ・に！あなたに姉の私をどうこうできると思ってるの？」

「あさってみれば、意外な趣味が発覚すると思ったんスけど・・・・本当につまらまい姉っス・・・」

「何でそんなに呆れられなきゃいけないのよ！あなた、姉の部屋を勝手にあさってただで済むと思ってるの？」

「姉は関係ないっス！この世は弱肉強食なんスよ。」

「いい度胸じゃない！！いいわ、かかってきなさい！！」

一触即発の雰囲気で2人は身構えている。

どんだけ仲が悪いんだか・・・

なんか殴り合いになりそうだから入っとくか。

「そんなことより俺はクアットロに話があるんだけど・・・」

「なんですか？クズ男。」

「ク、クズ・・・」

「失礼っスよ！訂正するっスよ！！」

流石ウェンディ、俺のことを理解して・・・・・

「レイ兄はクズじゃないっス!!ただの女たらしっス!!」

ってそれクズ男じゃないか!!

「やっぱりクズ男じゃない。」

「違うっス!そう言う男をリア充かチャラ男って言うんスよ。」

チャラ男は違くね?

「さあ、レイ兄!あの名言言っちゃってっス!!」

名言?一体・・・

「ほらほらプリーズ!」

焦らすな!しかしなんにも思いつかない・・・

取り敢えずこれでいいか。

「あ、あげぽよ~・・・」

静まりかえるクアットロの部屋。

「あ~・・・レイ兄、よく頑張ったっス・・・」

「お前の所為だろうが!!!」

見てみろよ、クアットロの俺を見る冷めた目を。
あれはゴミを見る目だぞ!!

「・・・・レイ。」

「見なかったことにしてやるんだぞ。」

「わ、分かったよ。」

こっそり覗いていた3人が心に決めたのだった・・・

「もう、そんなことといいんだよ!!俺はクアットロに話があるんだ。」

それを聞き、嫌な顔をするクアットロ。

もう完璧に警戒されてんじゃないかよ・・・・

「警戒しなくていいって。ただ話をしたいだけだから。」

「ふん、あなたみたいな変態で変人に話すことなんかありませんわ。」

コイツ・・・・

下手に出てたらいい気になりやがって・・・

「変態?変人?誰が?」

「はぁ?あなたに決まってるじゃないですか。頭もおかしくなったんじゃないんですか?」

「おかしいなぁ?ウェンディ、目の前に痴女がいるんだけどな。」

「そうっスね。よく人に変態って言えるっスよね。それに、こんな部屋にこもってるクア姉の方が変人っス。」

「ち、痴女!?それに部屋は関係ないでしょう!!」

「でもそうだろ?そんなムッチリしたスーツ着て羞恥心を全く感じてないんだから。しかも部屋は女の子なのに変な機材ばっか。変人以外なんでもないだろ。」

「そうっスよ、変人は仕方ないとしても、自分の姉が痴女ってとっても恥ずかしいっス。姉妹の恥っスよ。」

「わ、私は痴女なんかじゃ・・・・」

「あんたがそう思っても周りからは痴女に見えるんだよ。だから他の姉妹はちゃんと服を着てるんじゃないか。」

「それなのにそのムッチリスーツを愛用するクア姉はある意味で勇者っス。変態の中の変態っス!!」

俺とウェンディの言葉に顔を真っ赤にしながら何も言えなくなるクアットロ。

「今回のことで反省したなら、今度からはちゃんとみんなと同じように服を着るんだなエロットロ。」

「そうっスよエロ姉。」

「エロットロは止めて!!しかもウェンディはただのエロになってるから!!」

いつもの口調はどこへやら、止めるのに必死になっている。

「だったらちゃんと服を着るようにするか?」

「するから!!エロットロは止めて!!」

よし、これで問題は解決だな。

「えっ～つまんないっス、もっと粘ると思ったんスけど・・・」

「まあな、拍子抜けって感じだな。もっと頑張ってくれよ。」

「勝手なこと言って・・・」

睨みながら俺達に呟いた。

「終わりみたいだな。」

「エロットロか・・・」

「哀れだな、クア姉。」

「ほぅ、何かと思えばこんなことをしていたのか。」

「「「！！！」」」

後ろから声をかけられ驚き、その勢いでドアを開けてしまった。

「「「あ！！」」」

「ん？どうしたんっスか？みんなお揃いで。」

「なっ！？何でみんなここに来てるのよ！？」

「いやぁ・・・」

「その・・・」

「レイが何をするのか気になって来ただけだ。」

セインとノーヴェは言葉を濁すのに対し、堂々と正直に言うフェリア。

「チンクちゃん、余計な事に首を突っ込まない方が身のためよ。」

「そうだな、すまなかったエロットロ。」

「エロットロは止めなさい！！」

「そうだ、姉に対して失礼だろ。私からもちゃんと言っておく、だ

から気にするなエロットロ。」

「トーレお姉さま!?」

「エロ姉、今度私が服選んであげるから。」

「待てセイン、私もエロ姉の服選ぶ!!」

トーレに続き、セイン、ノーヴェも油を注ぐ。

そしてみんなの目線はディエチに向かった。

「えっ!?」

いきなりみんなに見られて驚く、ディエチ。

「えっ～と・・・」

目線はディエチから離れない・・・

「あまりジロジロ見ないでくれ、恥ずかしい・・・エロットロもそんなに睨むな。」

「わあああ!!ウーノお姉さまに言いつけてやる!!!」

泣きながら部屋を出ていったクアットロ。

「私は間違えたのか?」

「ディエチ姉は間違ってないっス。むしろよく空気を読んでくれた

っス！！」

それでいいのか・・・・

「それよりみんな早く逃げよう！ウーノ姉、絶対怒るよ！！」

「そうだな、みんな逃げようぜ！！」

セインとノーヴェはそう言って部屋から出ていった。

「私は大丈夫っス～。ウーノ姉、優しいっスから。」

「ああ、ウーノさんに俺『優しさだけが愛情じゃ無い。怒らないと良い子に育たないぞ』って言ったから恐らく怒ると思うぞ。」

「何気に良い名言！！流石パパさん。って何してくれたんスか、レイ兄！？」

そう言って俺の胸ぐらを掴んで・・・身長が足らないため、持っただけになった。

「はっ！？こうしちゃいられないっス！！私も逃げなきゃ・・・」

そう言ってから、ウェンディもダッシュで部屋を出ていった。

「3人は？」

「逃げたら余計面倒になるだろ。」

「今更、説教って言う年でもないしな。」

「逃げるべきなの？」

諦めているフェリア、あんまり怒られないだろうと余裕のトーレさん。状況がまるで分かっていないディエチ。

結論として俺を含めた４人は怒られる事は無かった。

なぜなら・・・

（うう、正座って足が痛いっス・・・・）

（ちゃんと話を聞かないと長くなるぞ・・・）

（あ、足の感覚が・・・）

さっさと逃げた３人が速攻で見つかり正座で長々と説教を受けたからであった・・・

「さぁ、お待ちかねのお土産だ。」

あの後、説教も終わり、食事の時間になったので、俺は冷蔵庫の中にあったものでオムライスを作った。

と言っても人数が多いので、ウーノさんに手伝って貰ったが。

だけどみんなに好評だったのでよかったかな。

その後にお土産の披露会となった。

「それでは順番に・・・まずはウーノさん。」

名前を呼ばれ、ソワソワしだすウーノさん。

俺は持ってきた荷物の中から小さなクーラーボックスを取り出し、
その中から寿司セットを取り出した。

「名店、海帝寿司の1人前特上。夜美がテレビを見てこれにしたんだけど、買いに行ったフェリアがあまりの行列で大変だったんだよな。」

「ああ、流石テレビで紹介された店と言った所だった・・・」

「そうなの・・・チンクありがとう・・・」

深々と頭を下げるウーノ。

「良かったな、喜んでもらえたみたいで。」

「ああ、苦労したかいがあった。」

フェリアも喜んで貰えて嬉しそうだ。

「次にトーレさんとスカさん。」

「おっ、どんな酒か楽しみだ。」

「私もかい？」

「スカさんのお土産を聞き忘れたから、スカさんもお酒を。スカさんには１８９４年物の赤ワイン。凄くいいやつだからウーノさんと一緒にでも飲んでくれ。」

「ちょっと！？零治君！！」

「いいじゃないか、たまには一緒に飲むのも悪くないだろう。」

「ドクターがそう言うのでしたら・・・」

と言っているが顔は嬉しそうだ。

スカさんと仲良くね。

「で、トーレさんがリクエストした日本酒なんだけど・・・・」

「ど、どうかしたのか？」

「トーレさんって酒に強い？」

「いくら飲んでもベロンベロンにはならないが・・・」

なら大丈夫かな・・・

俺はクーラーボックスからある日本酒を取り出した。

「この霊鉄って言って、日本で霊酒って言われてる日本酒なんだけど、味が凄いんだ。度数も半端なく強くて、飲める人があんまり・・

・・何でシャイデはわざわざこんな日本酒を選んできたのか・・・」

俺は一応中学生なので酒を買えない。だからシャイデに頼んだのに・・・

「面白い！！これはシャイデ殿の挑戦なのだろう、受けて立とうではないか！！」

なんか気合の入ったトーレさん。

この人もはやて家にいる巨乳ニート侍と同じバトルマニア？

まぁ喜んでるしいいか。

さて、フェリアはウェンディ達にお土産を渡しているはずだけど・・・

「最新作だって！！新しく双銃と鎌があるよ！！」

「なら私は双銃使って見るかな。なんかかっこ良いし。」

「私は鎌っス。おらおらおら、死神様のお通りだ～っス！！」

早速最新作のモンスターバスター2をやり始めた3人。

けど取り敢えずウェンディ、その発言はきわどいから止めろ。

フェリアは3人に渡したあとクアットロの所に行ったようだ。

なら、俺はディエチにペンダントを渡すことにするか。

「ディエチ。」

「！？」

ビクッと体が動き、ロボットのように俺の方を向いた。

いい加減慣れて欲しいんだけど・・・

「な、なんですか？」

「お土産だよ。確かペンダントだよな？一番苦労したぞ・・・」

なんて言ったって側にスカさんがいるから、普通やそれなりの物だとスカさんなら簡単に作れそうだからな。

「で、迷った上これにしました。」

綺麗な箱をディエチに渡した。

「中を見てみな。」

言われてディエチは箱を開ける。

「うわぁ・・・・」

中に入っていたペンダントは透き通った青色をしており、光を受けると中にある微粒子が様々な光を出すという珍しい鉱石のペンダントだ。

「綺麗・・・」

「気に入ってもらえて何よりだ。」

「ありがとう・・・・」

お礼を言いながらもペンダントから目を離さない。

あんまり表情を表に出さないと思ってたけど、あんな顔するんだな・・・・・

「レイ。」

クアットロにお土産を渡し終わったフェリアがこっちに来た。

「どうだった？」

「ああ、気に入ってもらえたみたいだよ。・・・・・・・なぁフェリア。」

「ん？」

「俺さ、アジトに来る前はさ、戦闘も覚悟してたんだ。けどさ、いざ来てみるとスカさんはあんな感じだし、姉妹のみんなも柔らかかったし、とても次元犯罪者のアジトとは思えなかったよ。」

「私も最初、クアットロやトーレと話して感じた。だが、悪くない変化だと思う。」

「そうだな、。この光景を見れば誰だってただの大家族にしか見え

ないさ。お前たちは戦闘機人だってこと気にしてたろ？これでハッキリしたよな。」

「何をだ？」

「お前たちは人間だってことをだ。」

そう言って俺はみんなを見る。

ゲームで盛り上がってる3人。相変わらずペンダントを大事そうに見てるディエチ。ＭＹおちょこを持ってきて飲みはじめようとするトーレさん。スカさんと何か話しているウーノさん。

「胸を張って言って良いぞ、私達は人間だって。」

「・・・ああ、ありがとうレイ。」

「それと、これは俺から。」

そう言って俺は懐から小さな箱を取り出す。

「これは？」

「フェリアにプレゼント、姉妹みんなが貰っているのにフェリアだけが貰えないのはかわいそうだと思ってな。」

受け取ったフェリアは箱を開ける。

「これは、ヘアバンド？」

「学校だとポニーテールにしてるだろ。黒ばっかだからと思ってな。」

俺が買ったのは紫のヘアバンド。ディエチのと同じで光を受けるとキラキラと様々な光を出す。

「幻想的でとても綺麗だ・・・ありがとう、大事にする。」

「どういたしまして、これからもよろしくな。」

「ああ、こちらこそ。」

フェリアは早速、貰ったヘアバンドで髪をポニーテールにして鏡に向かった。

満足みたいで嬉しそうだ。

しかし、意外と楽しめた。あんなにスカさんと話が合うと思わなかったし、結構為になった気がする。

「今度は星たちも連れてくるかな。」

そう思いながら、後もスカリエッティのアジトで過ごしたのだった・・・

## 第３５話　クアットロ修正（後書き）

クアットロ、エロットロにならずによかったね。

エロ姉は流石にかわいそうだな・・・

次はすずかの話を書きたいと思います。

なるべく早めに投稿しようとおもうのでこれからもよろしくお願いします。

## 第３６話　零治の過去（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はすずかメインですが、題名通り、零治の話です。

## 第３６話　零治の過去

あれは、私が小学３年生の秋頃だったと思います・・・

放課後、先生に頼まれて、ゴミを裏庭に捨てにいった時の話です。

途中に通る中庭にある芝生でねっころがっている男の子を見たのは・・・

アイマスクを着け、Ｍｙ枕まで取り出してぐっすりと寝ようとしていました。

そんな珍しい男の子に気づいたら自然と私は声をかけていました。

「こんなところで寝てると風邪をひくよ。」

「はぁ？春と秋って言ったら絶好の気温じゃないか。暑すぎず、寒すぎない。だから風邪なんかひかないさ。」

ねっころがっている男の子はアイマスクを外さずそのままの体勢で返事をした。

「で、でも夕方は冷えてくるよ？」

「そうしたら自然に目が覚めるだろ。」

相変わらず起き上がって話すつもりは無いようなので私はこれ以上関わらないことにしました。

これが私、月村すずかと有栖零治の最初の出会いでした・・・・・・

「ずか・・・・」

「ん？」

「すずか！！」

「うひゃ！？」

いきなり耳元に大きな声を聞かされ私は飛び上がりました。

「アリサちゃん！？」

「やっと起きたわね、移動教室だからもう移動しないとまずいわよ。」

「ありがとう、アリサちゃん。」

次は理科の実験だったっけ？

私は机の中から理科の教科書を取りだし、席を立ちました。

そんな時、後ろのドアから大きな音が響き、零治君とフェイトちゃんがやって来ました。

「はぁはぁ・・・零治って・・・いつも・・・こんな鬼ごっこしてるの？」

「ぜぇぜぇ・・・俺だって・・・したい訳じゃねぇよ・・・」

二人共汗だくで息も切れてました。

「どうしたのよ二人共！？」

「フェイトと愛の逃避行してた。」

「違うよ、アリサ！！二人で話してたら、神崎の友達に追いかけられて逃げていただけだよ！！」

「そんな露骨に否定されると流石に・・・」

「まぁあんただからね。」

アリサちゃんのきつい言葉に更にへこむ零治君。

今はこんな風に感情豊かだけど小３の秋から冬にかけては特に酷かったと思う。

あの後、私はあの男の子が気になってクラスを転々と探してみました。

だけど小３の全てのクラスを回ってもあの男の子を見つけられませ

んでした。

そんなとき・・・

「おい！お前！！」

私は不意に物陰に隠れました。

6年生だろうか？見た感じにガキ大将の男の子と3人の男の子があの時の男の子を囲んでいました。

「杉山くんに反抗してただすむと・・・」

「そのでかい図体が邪魔なんだよ。少しは痩せないと女にモテないぜ。」

あの時の男の子は4人の上級生に囲まれてるのに平然としています。軽口まで言いました。

「あれ？」

物陰から覗いていた私は、その5人のやりとりを見ている女の子がいることに気がつきました。

頭の横に2つのお団子を作っている女の子。

今にも泣きそうな顔で様子を見ていました。

「いい度胸じゃねえか、これは教育しがいがありそうだ・・・」

杉山くんと呼ばれた男の子がニヤリとして、あの男の子の肩を掴みました。

「ちょっと付き合え。」

そう言って、何処かに連れていってしまいました。

私はまずいと思って先生を呼びに行こうとしたのですが、団子の女の子がそれを追っていったので私も追うことにしました。

後ろから見つからないように付いていきながら進み、着いたのは裏庭。

「さあ、最初の一発はくれてやる。どこでも好きにしていいぞ。」

杉山くんと呼ばれた男の子は大きな手を広げ、挑発してきました。

ニヤニヤしながら零治君を見ています。

「・・・・・・」

あの男の子は無言で構えます。

だけど次の瞬間!!

あの男の子は杉山くんの頭上までジャンプして、高々と上げた足をそのまま斧の様に降り下ろしました。

「へっ?フゴッ!!」

杉山くんは全く反応できず、もろに食らってそのまま倒れました。

「「杉山くん!?」」

他の3人は大きな杉山くんに向かって叫びました。

3人もまさか3年生に負けるなんて思っていなかったのか慌てて駆け寄ります。

「で、まだやるか?やるんなら容赦しないけど・・・」

男の子はヘラっとしながら言います。

そんな様子に怒った3人ですが、男の子の目が尋常じゃないくらい怖く、3人は動けません。

「やるんだったら、容赦はしないけどな・・・」

また構える男の子

「くそっ、覚えてろ!!」

ありきたりな捨て台詞を吐き、3人は気絶している杉山くんを抱えて逃げてしまいました。

「つまんねえな、暇潰しにもなりやしないや・・・」

あくびをしながらそんなことを呟く、男の子。

「おい、出てこいよ。」

後ろを向いて、私の方を見て言いました。
隠れたけど見つかっちゃった!?
「・・・ごめんね、心配になったから。」
出てきたのは団子の女の子。
私じゃなかったか・・・
「これで問題ないだろ。」
「でも、ここまですることは・・・」
「ただぶつかっただけで女の子にごちゃごちゃ言ってくるコイツが悪い。だけど、お前もちゃんと前見て歩かないと危ないぞ。」
どうやら女の子をかばってこのような状況になったらしい。
実は優しい人なのかも。
「さて、俺は授業をサボるからじゃあな。」
と、どこかへ行こうとする男の子。
「まっ、待って!!」
「ん?まだ何かあるのか?」

「なっ、名前は？」

「・・・有栖零治。」

そう言って零治君は行ってしまいました。

これが初めて零治君の名前を知った出来事です。

「すずか？」

我に帰った私は回りを見てみる。

いつの間にか授業は終わっていて、私の様子をアリサちゃん、フェイトちゃん、フェリアちゃん、零治君が心配そうに見ていた。

「大丈夫か？」

「うん、少し考え事をしていたから・・・」

「大丈夫なの？私で良ければ相談に乗るよ。」

「ありがとう、フェイトちゃん。でも大丈夫だよ。」

「そうか、なら早く戻ろうぜ。今日は魔王様がいないんだ。ぐっすり寝たいし。」

なのはちゃん、はやてちゃんは明日まであっちの世界にいるようです。フェイトちゃんも学校が終わったら直ぐに向かうと聞いてます。

「それはさせるなと魔王様のお達しだ。」

どこからか広辞苑を取り出すフェリアちゃん。

「なのはめ余計なことを。いつかこの復讐を・・・」

「確実に返り討ちね。」

アリサちゃんの言葉に笑いが生まれる私達。

零治君が本気を出せばと呟いているけど多分無理だと思うな。

季節は冬になりました。

あの事件の後、私は零治君をすぐに見つけることが出来ました。

あの女の子とお話している所を目撃したからです。

ちゃんと正面から顔を見れたのは初めてで、初めて見て気がついたのだけど、目がものすごく冷たかったです。

何の希望も持っていないような悲しい目でした。

正直、私はこの時、零治君が悲しみで一杯なのだと思いました。

そして私が小４になった頃。

闇の書事件と呼ばれる事件に巻き込まれて、魔法の存在を知った私は零治君の事をすっかり忘れていました。

あの後どうしているのか。ふと思い出したので見に行く事にしました。

なのでまた教室を見て回りました。

今度もすぐに見つけましたが、私は驚きました。

相変わらず、眠そうにあくびをしていますが、決定的に違う部分があったからです。

目が冷たくなく、柔らかくなっていました。それたけではなく、雰囲気も相変わらず人を避けている雰囲気がありましたが、それでも前以上に柔らかくなっていました。

一体何があったのだろう・・・・

ホームルームが終わり、みんなそれぞれ帰り支度をしていた時です。ふと外を眺めるとダッシュで帰っている零治君を見つけました。

あんなに急いでどうしたんだろう・・・・

その次の日もその後も零治君は放課後直ぐに帰っています。中庭で寝ていることも無くなりました。

その謎は一向に分からないまま、月日だけは流れていきました。

そして、中1の春、初めて同じクラスになることが出来ました。

今までは遠くから見るだけだったので、私は直ぐに行動に出ました。

「ノート貸そうか？」

これが零治君と初めて顔を見て話した瞬間でした。

最初こそ無視されたり、流されたりしましたが、しつこく話している内に少しづつ話すようになりました。

そして今に続きます・・・・・

「ふう・・・」

トイレから帰ってきて、教室に入りました。

時間は放課後。なので教室には誰もいないと思っていましたけど、1人いました。

「どうしたの、零治君？」

「・・・・神崎組から逃げてた。」

よく見ると制服の所々が汚れていました。

また追いかけられてたんだね・・・

「ったく俺も用事があるのに・・・・・」

「ねぇ、零治君。」

「ん？」

ちょうどいい機会だと思い、私は思いきって聞いてみることにしました。

「何で小学3年生の時、あんなに悲しそうな目をしていたの？」

それを聞いて少し驚いた顔をしてましたが、直ぐに表情が元に戻りました。

「・・・・・見てたのか？」

「うん、中庭で寝ていた時、声をかけた女の子って私なんだ。」

「・・・そうか。」

そう言って黙ってしまう零治君。

しばらく無言の時間が過ぎて、零治君が口を開きました。

「俺にとって、あの3年生の1年は凄く意味のある年だったんだ。今までの生きてきた時間を覆すような・・・」

零治君は思い出すように話してくれました。

「3年生のあの時、俺は一つの目標と言うか目的があったんだ。それは俺が生きてきてずっと待っていた事でもあったんだ。だけど、タイミングを逃して俺はそれを逃してしまった・・・それで俺は希望と言うか、生きることがどうでも良くなったんだ。」

「そんな・・・・まだ3年生なのに?」

「それでもだ。それくらい意味のある事だったんだ・・・・だから後はただ毎日が過ぎていくだけだった。もうどうでもよくなったんだ。」

「だからあんなに悲しい目を・・・・」

「でもな、そんな時に俺の前に星達が現れたんだ。ほっとけなくて助けたんだけど、全然世間の事を知らなくてな。面倒見るのに必死だったよ。」

「だから帰りが早かったんだ。」

「ああ、じゃないと何されるか分からなかったから。特にライなんかはいたずらばかりしていたし。」

確かにあの元気のあるライちゃんならありえるかも・・・

「でもあの3人といる内に俺も楽しくなってな。俺が今こういう風にいられるのはあいつらのおかげでもあるのさ。」

これで納得出来た。零治君を変えたのはあの3人だったんだ。

「そうだったんだ・・・」

「ああ、だからこそ俺はあの時に言ったんだ。あいつらに手を出すならお前たちでも容赦しないって。」

「うん、分かるよ。」

私にも大事な家族がいるから。

例え血がつながっていなくても零治君の家族は深い絆で結ばれてるんだと思う。

「ありがとう、話してくれて・・・」

「構わないよ。でもそういえば一年の時にいきなり話しかけたのって・・・・・」

「うん、ずっと気になってたんだ。だから私はあの時直ぐに声をかけたの。」

「ふ～ん、なるほどね。全く気付かなかったよ。おっと、もう遅いし帰ろうぜ。途中まで送って行くよ。」

「うん、ありがとう。」

私は零治君と共に教室を出ました・・・・・

「そういえばあの時の女の子ってなんて言うの?」

「女の子?」

一緒に帰ってるとき、私はふと、あの時に助けた女の子の事が気になったので、聞いてみました。

「上級生から助けた女の子だよ、覚えてないの?」

「えっと・・・・・・・」

本当に覚えていないらしく、一生懸命思い出そうとしています。

「ああ、あの団子頭か、思い出した。・・・けどあいつがどうしたんだ?」

「今どうしてるのかなって、学校でも見ないし・・・・」

「確か親の都合で引っ越したような・・・」

「そうなの!?」

零治君の話を聞こうと思ったんだけどな・・・

「確かな。けどどうしたんだ?」

「別に、ちょっと気になったから。」

「変な奴。っていうかよく知ってたな。」

「だって私もついて行ってたんだもん。」

「マジで!?全然気付かなかった。」

「すごいでしょう!」

「ああ、立派なストーカーになれるんじゃないか?」

「ならないよ!!」

そんな感じで後は雑談をしながら帰りました。

「ふぅ・・・・・」

頭をバスタオルで拭きながら今日の事を考えていました。

零治君の生きる意味。それが星ちゃん達だっていうのを感じた。

「アリサちゃん、ライバルは強敵だよ・・・・・」

私は零治君に恋焦がれている友達を心配しながら呟きました・・・・・

## 第３６話　零治の過去（後書き）

零治の過去でした。

あれ？すずかメインの話を書くつもりが零治の過去話に。

どうしたんだ、俺？

あと一つ、団子頭の少女は中学の内は出す気はありません。

高校に入ってからかなぁ？

次はフェイトの話か、夏に入るかどっちかだと思います。

それと学校が今日から始まります。なので不定期になると思います。

最低でも2日に一回は投稿する気なのでこれからもよろしくお願いします。

## 第３７話　ＳＢＳ団始動！！そんでもって席替え（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

更新遅れてしまって申し訳ないです・・・・

最近スランプ気味で、今回も一回全部消して書き直してました。

夏休みの自分を褒めてあげたい・・・

# 第37話　SBS団始動!!そんでもって席替え

「ふあ～」

「相変わらず眠そうだね。」

「誰かさんのせいで日中の俺の睡眠時間は完璧に消えてしまったからね・・・」

「ということはフェリアちゃんはちゃんと出来たんだね。ありがとね。」

「私も零治のために治すべきだと思ってたところだ。これくらいならいくらでも協力するぞ。」

この悪魔め!!

違った、魔王だ・・・・

「反省してない・・・・・？」

「ごめんなさい・・・・・」

なのはに逆らうとろくなことにならないからな・・・

「みんな!!」

「フェイトか？そんなにあわててどうした？」

「廊下、廊下を見て！！」

慌ててきたフェイトに言われ、俺たちは廊下を見る。

すると廊下にバカを筆頭に男達が順番に並んで歩いており、皆、胸のポケットにバッチみたいなものをつけていた。

そしてバカが一人、クラスに入ってきて俺の所に向かってきた。

「見ろ！！このバッジ、イカスだろ！！」

そう言って胸につけているバッジを見せびらかせてくる。

そのバッジは大きい文字でＳＢＳと書かれている。

「なんだこれ？」

「このマークこそ、我が聖祥美少女親衛隊だ！！」

「だからＳＢＳか。」

「単純だな。」

「単純な方が分かりやすいだろ、フェリ「イーグレイ。」フェ「イーグレイ。」フ「イーグレイ」・・・イーグレイ。」

「そうだな、確かに覚えやすい。」

満足そうに頷くフェリア。

そんなに名前で呼ばれるのが嫌なのか・・・・

「団員は内のクラスで１２名がＳＢＳ団だ。しかもこれからも人数は増えていくだろう。」

暇な奴っていうか、馬鹿な奴が多いなこの学校。

「で、それがどうしたんだ？」

「・・・・・宣戦布告さ。」

「宣戦布告？」

「これからは俺達ＳＢＳ団がお前を容赦しない、覚悟しろって事を言いに来たのさ。」

「ふーん。」

まあ、どうぞお好きに。

「ではこれから集会なので、失礼するよ。」

そう言い残してバカは団員の元へ帰って行った・・・

「面倒な事になりそうだね・・・・」

「主に俺がな・・・・」

頭が痛いぜ・・・・

「ちょっと!!一体何があったのよ!?あのバカが多くの男子とどこかへ行ったわよ!!」

帰ってきたアリサが早々に聞いてきた。

一緒にいたすずかと加奈も事情をよく知らないのだろう。

俺たちはさっきの出来事は簡潔に説明した・・・

「大変やな零治君。」

「なんでかな・・・・」

ニヤニヤしながら言うはやて。

昼休み、俺ははやてと一緒に飲み物を買いに行っていた。

「日頃の行いが悪いせいやで。」

「たまにはやて達があいつらと話してやれば解決のような気がする。」

「嫌や、気持ち悪いもん。」

それは分かるな。

あんなに男子が固まっていたら逆に話しかけづらいし、あそこに混ざりたくないよな・・・・

「となると俺が頑張るしかないか・・・」

「・・・・・なぁ？」

「ん？」

「私たちが零治君に話しかければ問題ないんやないか？」

「う～ん、まああいつはお前たちが俺の所ばかりに集まってるのが気に入らないのもあるだろうけど・・・」

「私達近づかんようにしよか？」

「今更変わんないだろ・・・それに、お前たちがいないとつまんないしな。」

「そうやろか？」

「だからあまり気にしなくて良いと思うぞ、好きにすればいい。」

「・・・・ありがとな。」

といい感じに話していると・・・

「見たか？」

「ああ、見た。」

「あそこだけ空気がストロベリーだ。」

「ストロベリーだな。」

「甘酸っぱいな。」

「あれって許されるのか？」

「いや許せないよな。」

「相手はたぬきのはやてさんだぜ。」

「たぬきのはやてさんだな。」

「殺るか？」

「ああ、殺ろうか。」

「「「「ＳＢＳ団始動！！」」」」

いきなり俺達の周りを４人の男子が囲む。

頭には黒い布を被せ誰だかは分からない。

俗に言う変態だが、どうせ神崎組の奴らだろう。

「なんなんや！？この犯罪予備軍は！！」

「「「「我らはＳＢＳ団！！」」」」

「やっぱり・・・・・」

「「「「「たぬきのはやてさんをたぶらかす有栖零治に死を！！」」」」」

「誰がたぬきや！！」

「「「「有栖零治、死ね！！」」」」

４人一斉に襲いかかって来た。

「こっちにははやてがいるんだぞ！！」

俺ははやてを庇いながら４人の脇を抜ける。

「くそっ逃すな！！」

「はやて！先に戻っていてくれ！！」

「あっ零治君！！」

俺ははははやてをそのまま放置して廊下を走って行った。

「待て！！」

はやてを気にせず４人も俺を追ってくる。
昼休みは追いかけっこで終わる事になった。

「ふぅ、疲れた・・・」

「お疲れ様、はやてちゃんから聞いたよ。」

隣に座っているなのはが授業中に聞いてきた。

「ああ、あいつら体力ないくせにしつこいからな・・・」

実際撒くのは簡単だったが、ずっと探し回っていたため逃げ切るのに昼休みを全部使う羽目になった。

「でも、本当に困ったものだね。みんなに迷惑かけるなんて・・・・」

ちょっと黒いオーラが出ているような気がするけど、大丈夫か。

俺はなのはの黒いオーラにソワソワしながら授業を受けたのだった・・・

「さあこれから席替えを始めるわよ！！」

6月の中旬に入って席替えになった。

本当はテストが終わってすぐにやるクラスが多いのだが、シャイデが忘れていたため、テストが終わって2週間ぐらいたってやることになったのだ。

「席替えだね・・・・」

「俺はここの席気に入ってたんだけどな・・・」

「えっ！？それって・・・」

「やっぱりこの席って居心地よかったからな。なんとか前の席だけは避けないと・・・」

「零治君、歯を食いしばってね・・・」

広辞苑を構えるなのはさん。

「何故！？」

「そこの二人！！仲良くしてないで、席替え始めるわよ！！」

シャイデのおかげで、俺は意識を飛ばすような事は無かった。

なのはが睨んでて怖いけど・・・

「やっと俺だな。」

シャイデの気分で決まった順番はちょうど中間になった。

「番号は・・・・２５か。」

前と同じクジなのだが、今回は引いた番号をそのまま持ち、皆が引き終わってからシャイデが適当に番号を書くという、シャイデが好き勝手する席替えになった。

「さて俺の席は・・・・」

俺の番号を探すと、

「おっしゃあああ！！！！！また同じ席だ！！！！！」

見事同じ席を引き当てた俺。

「あっ私の隣だね。」

そう言ったのはフェイト。

今回はフェイトが隣らしい。

「なのはみたいに起こさないなら大歓迎だ。」

「えっと、考えておくね。」

そこは肯定して欲しかった・・・

「まあ、私がさせないから大丈夫よ。」

言ったのはアリサ。

どうやらアリサが俺の前らしい。

「また固まってるね。」

「なんかイカサマしてないやろな?」

「「「そうだそうだ!」」」

「「「イカサマだ!!」」」

神崎組が何か言っている。

神崎組はまた固まってるみたいだ。

だが・・・

「何で私だけ・・・・」

その中になのはの名前があった・・・・・・・

結果として、

俺、アリサ、フェイトが俺の前と隣。

すずか、はやて、それとフェリアがフェイトの隣の列で固まっている。

そしてなのはだけが・・・・

「私、これからはずっとミッドにいるね・・・・・」

「俺ばっか殴ってる罰だな。」

ちょうど神崎組に囲まれる位置に座っていた。

席替えも終わり、皆いつも通り俺の所に集まっていた。

皆、思うことがあるのかやはり席替えの話だ。

主になのはが・・・

「もういきなり、「おしおき待ってるから。」とか「なのはさんハァハァ。」とか言ってたんだよ・・・」

「取り敢えず訴えたほうが良いと思うぞ。」

なのは大丈夫か?

「フェイトちゃん、席を・・・」

「交換しないからね。」

「ううん、フェイトちゃんが冷たい・・・」

「そりゃそうだろ・・・・」

俺だってあの席は嫌だわ。

「やぁ、なのは！！」

そこにバカがやってくる。

「近くの席になれたね。これからよろしく。」

「う、うん。」

なのは、引いてるな。

そんな時・・・

「どいて。」

後ろからバカが回し蹴りを食らったバカ。そのままロッカーに沈む。

「みんな席替えどうだった？」

回し蹴りを決めたのは加奈だった。

後ろから桐谷も付いている。

「相変わらず、凄まじい蹴りだな。」

「フェリア、邪魔な変態がいたから駆除しただけよ。むしろ感謝されたいくらいだわ。」

「ありがとう加奈ちゃん。」

マジで拝んでるなのは。

「なのは、流石にそれは・・・・」

「いいんじゃないの？これくらいは許してあげなさい。」

あれ？フェイトの言ってることの方が正しいはずなのにアリサの注意の方が正しいと思える俺っておかしいのかな・・・

「一体どうしたんだ？なのはの様子がおかしいんだが・・・」

「それはな・・・」

加奈と桐谷に今回の席替えの結果となのはの事を話した・・・

「なるほどね、それは確かに身の危険を感じるわね・・・」

腕を組んで考える加奈。

しばらくして・・・

「分かったわ、私に任せて。」

そう言って未だに起きないバカに近づいた。

「ちょっと、起きなさい！！」

蹴りを腹に入れ、無理やりバカを起こす。

えげつない・・・・・

「ゲホッ、ゲホッ・・・」

「加奈流石にそれは・・・・」

「兄さんくらいタフだから大丈夫よ。それより・・・・」

そう言ってバカに近づき髪を掴んだ。

「な、何をするんだい？加奈。」

「何勝手に人の名前を言ってるのよ、キモイから名前で呼ばないで。次呼んだらこのバリカンでそのうざったい銀髪さっぱりさせるわよ。」

懐からバリカンを出し、起動させる加奈。

ヤバイ、目がマジになってる・・・・

「わ、わかったからそのバリカンを止めてくれ佐藤。」

「分かればいいのよ。」

バリカンを止めるが、髪は離さない。

「悪いが髪も離して欲しいのだが・・・・」

「だったら私の話を聞きなさい。あなたＳＢＳ団とかくだらない集団のトップよね。」

「ああ、そうだが、くだらなくはないぞ!!このＳＢＳ団はな・・・・」

「誰が口答えしていいと言ったかしら?」

そう言って再びバリカンを起動する加奈。

そしてバリカンを髪へ・・・・

「待て待て待て!!悪かったからバリカンを止めてくれ!!」

自慢の髪なのか止めるのに必死になってる。

「ったく、でね、なのははあなたの団員とあなたに大いに迷惑してるの。だからこれからむやみに話に話しかけないでね。」

「なっ!?せっかく近くに慣れたのに・・・分かった!!気をつけるからバリカンには!!」

「気をつけるじゃ駄目ね。」

「分かった!!むやみに話しかけないから、もう止めてくれ!!」

それを聞いて満足したのか、寸前まで近づけていたバリカンを髪から離す加奈。

「分かってると思うけど、団員にもちゃんと言い聞かせなさい。スッキリしたくなければね・・・・」

「わ、分かりました・・・・」

来た時の陽気さを全く感じないほど小さくなっている。

「恐ろしいなお前の妹は・・・・」

「今までの態度が気に入らなかったから、我慢していたものを一気に開放したんだろうな・・・」

「凄いね・・・・」

「零治君、桐谷君、よく今まで無事だったね。」

「「無事じゃ無いよ・・・・・」」

「やばかったんか!?」

それはもう・・・・

桐谷も俺もずいぶん大変な目にあったからな。

「なんで俺の周りの女の子は凶暴な女の子ばかりなんだろうな・・・・」

「美しいバラにも刺があるってことじゃないのか？」

「刺よりも爆弾とかそれくらいの威力はあると思う・・・・」

「それって誰のことを言ってるのかな？二人とも・・・・」

「そりゃ・・・」

「なのはとアリサと加奈の３人に決まって・・・」

そこまで言った俺と桐谷の口が止まる。

「覚悟は出来てるでしょうね・・・」

「二人ともおはなしなの・・・・」

「ちょっ！？俺は零治じゃないからシャレにならないって！！」

「おまっ！？一人だけ逃がすか！！親友だろうが！！」

「ふざけんな！！お前と違って俺は繊細なんだよ！！」

「俺の方が繊細なんだよ！！」

ドガッ！！

「二人ともうるさい・・・」

広辞苑を持ち、それを2人の頭に落とした。

「うわっ・・・・」

「かなり鈍い音が響いたな。」

「痛そうだね・・・」

結局俺と桐谷は連れていかれ、後はいつもの通りになった・・・

でもこれでSBS団も好き勝手は出来ないだろう。

SBS団のこれからが少し気になりながらも、困ったら加奈に頼めばいいかと違う所で安心した零治だった・・・

「安心・・・じゃねえよ・・・・」

「心を読むな・・・・」

ボロボロになりながら俺と桐谷は言ったのだった・・・

次の日・・・・

「見事に静かだな。」

なのはの周りにいるＳＢＳ団改め神崎組は静かにしていた。

なのはは居心地が悪そうだったが、幾分マシだろう・・・

「これなら大丈夫かな。」

「ああ。加奈のおかげだな。」

やっぱり髪は大事だったみたいだな。

あのまま逆らってたらマジで坊主だったからな。

「それでね、えっと零治・・・・」

「ん、どうした？」

「今週の休日暇かな？」

「まあ、暇っていったら何もないけど・・・・」

「だったら一緒に遊園地に行って欲しいんだけど・・・・」

「・・・・・・・・・えっ！？」

俺はしばらく返事が出来なかった・・・・

## 第37話　SBS団始動！！そんでもって席替え（後書き）

席替えで今度はフェイトが隣になりました。

アリサも目の前にいるので零治はもう寝られることはないでしょう。

次はフェイトとデート！！

あの子も一緒だよ。

## 第３８話　フェイトとデートと追跡者（前編）（前書き）

こんにちはｂｕｌｅｏｃｅａｎです。

今回はフェイトとデートだ！！

今回はあの子もでるよ。

# 第３８話　フェイトとデートと追跡者（前編）

「どうしよう・・・・」

俺は悩んでいた。

ベットの上に散らかってるのは俺の服。

その服達とにらめっこしていたのである。

なぜこのようになっているかというと、明日にある俺の一代イベントが原因だったりする。

『だったら一緒に遊園地に行って欲しいんだけど・・・』

めっちゃびっくりした・・・

数秒固まっちゃったもん。

今までは女の子と１対１でと出かけるなんて星達としかなかったからな。

どうすればいいかイマイチ分からん。

「まあ、なるようになれか。」

俺は出していた服を全部クローゼットに仕舞い込み布団に潜った・・・

明日の気分で決めよう。

「どう思う？」

「僕は誰かとデートだと思うよ・・・」

「我もそう思う・・・」

3人は零治の部屋の前で小声で話している。

「私達の時はあんなに悩んで選んでないのに・・・・・なんか悔しいですね。」

「そうだね、僕たちは悩んで選んでたりするのに・・・」

「しかし、一体誰なんだ？」

夜美の言葉で3人は考え始めるが答えが出ない。

「フェリアなら知っているかも。」

「さっき聞いたがフェリアでも分からないらしい。」

「そうですか・・・」

暫く黙る3人。

「・・・・・明日、私達も付いていきましょう。」

「そうだね、僕も気になるもん。」

「我もついて行くぞ。」

「なら明日は早起きですね。」

星の言葉に頷いた3人はそれぞれ自分の部屋に戻った・・・・・

同時刻・・・・・

「母さん、私、明日遊園地に行くでしょう?こういう時って何を着てけばいいのかな・・・」

「もう、あなたがメインじゃないんだからはやく決めて寝なさい。早く起きてお弁当も作るんでしょ。」

フェイト宅。今、フェイトはリンディと二人で明日のことについて話していた。

「でも、フェイトにも春が来て母さん嬉しいわ。相手の男の子はどんな子?かっこいい?それとも童顔?」

「母さん、顔が近いよ・・・前に言った零治だよ。それに明日付き合ってもらうだけだから。」

娘に男の話なんて無かったリンディにとって恋愛話はとっても興味があった。

「零治君かぁ・・・私も明日一緒に行こうかな。」

「えっ!?いいよ、恥ずかしいから・・・」

「いいじゃない、あっ!?もしかして私がいると邪魔になるかしら?」

「そんなんじゃないって!!・・・・・全く、明日は私の為じゃないんだからね。」

「分かってるわよ。でもね・・・・・やっぱり気になるのよ!!!」

「もう寝る!!」

顔を赤くして部屋に戻るフェイト。

「あらあら、可愛いわね。」

「どうしたんだ~?」

小さな女の子になっているアルフがリンディに話しかけた。

「明日、遊園地にフェイト行くじゃない?それにね男の子を連れて行くんだって。」

「男～!?フェイトにそんな奴がいるのか!?まさか、あの変態じゃあ・・・」

「ああ、神崎君ではないらしいわよ。」

「へぇ～やっとフェイトにも春が来たのか。」

「そうね。私も嬉しいわ。」

と二人で話していると・・・

「何だと!?」

とちょうど帰ってきたお兄ちゃんこと、クロノが驚いた顔をしてリビングのドアの前に立ち尽くしていた。

「相手は誰なんだ!?」

リンディの前に来て焦りながら聞くクロノ。

「ちょっと焦らないでよ。前にフェイトが話してくれた零治君よ。」

「有栖零治・・・・」

クロノは最近貰ったメールの内容を思い出していた。

『今日ね、零治が、またなのはに余計なこと言っておはなしされていたの。なのはね容赦ないんだよ。』

『零治ってね、家族思いでね、今日も買い物頼まれたって学校終わったら直ぐに隣町のスーパーまで買いに行ってるんだよ。』

『この前ね・・・・』

「あいつがフェイトの・・・・」

「ちょっと、クロノ？」

「お前、恐いぞ。」

「こうしては居られないな。」

クロノは２人をスルーしてさっさと自分の部屋に戻ったのだった・・・

「ふぅ・・・・」

現在７時３０分。

駅で待ち合わせをしているのだが、集合時間は８時なので男の面子はたったかな。

「お待たせ。」

フェイトは少し大きめなバックを抱え、右手に男の子と手を繋いできた。

「その子がエリオ君？」

「うん、ほらエリオ。」

手を繋いでいた男の子がおずおずと俺の前にやって来た。

「え、エリオ・モンディアルです・・・」

フェイトの後ろに隠れながら自己紹介する。

やっぱり怖いのかな・・・

「俺は有栖零治だ。今日1日楽しもうな。」

「それじゃあ、行こう。」

簡単な挨拶を済ませ、俺達は電車に乗るのだった。

実はフェイトのお願いはエリオの面倒を一緒に手伝って欲しいとのことだった。

エリオは人工魔導師だとは俺のうる覚えの知識が覚えている。あとそのせいで人間不信なのも。今のエリオは特に男性に対してまだ抵

抗があるらしい。

フェイトの考えは遊園地に遊びながら少しでも人に慣れて欲しいというのがフェイトが考えだ。

それで俺を誘ったのだった。

「でも、俺も男だぜ？大丈夫かよ・・・」

「大丈夫だと思うよ。零治は優しいから。」

信頼されているのは嬉しいけど、不安があるっちゃあるんだけどな・・・

「行くぞ。」

「「うん（はい）！！」」

サングラスと帽子を被った3人の女の子達が駅に入っていった。

「あれが零治か・・・」

夏に近いのにもかかわらず、ロングコートと帽子とマスクを着けて

いる男性も駅に入っていった・・・

現在、電車の中。俺、エリオ、フェイトという順番で座っていた。

ぎこちないエリオに俺は手っ取り早く仲良くなるべく、ゲームを与えてみた。

やっぱりゲームの力は偉大だ!!まだぎこちないが、エリオと少しづつ話せるようになった。

「へぇ、ランスか。意外な武器選ぶな。」

「えっ!?駄目ですか・・・?」

「いや、ダメじゃないさ。自分で使いやすいと思えれば良いんじゃないか。」

「よかった。仲良く出来てるね。」

「おう!俺とエリオはもう家族みたいなもんさ。」

「家族・・・・・」

「おう!!俺も弟を持てて嬉しいしな。今度家に来いよ。家にいるライって奴と夜美って奴もモンバスやってるんだ。一緒にやろうぜ。

」

「は、はい！」

「でも本当に良かった。これなら遊園地も仲良く出来るね。」

「そうだな。それで最初に何から乗るか決めてるか？」

「ううん、私遊園地って余り行かないから・・・・」

「はぁ！？エリオはともかく、フェイト本当に中学生か！？」

「何回かはあるもん！！・・・・・・・・みんなで一回。」

俺は頭を抱えた。

こいつら本当に中学生かよ・・・

今から仕事中毒とかどうしようもないな。

「フェイト、今からそんなだと絶対結婚できないぞ。」

「だ、大丈夫だよ！！多分・・・」

「駄目だな。エリオ、フェイトが売れ残ったらエリオがもらってやれよ。」

「僕がですか！？」

「おう、美人だし自慢になるぞ～！！」

「び、美人だなんて・・・」

「でも、僕なんか・・・」

「私はエリオならいいかな。」

「というか子供に貰ってもらう気になってるフェイトの将来が俺は心配だ。」

「はうっ！？」

「エリオ、さっきから何のゲームしてるの？」

「モンスターバスター2だよ。零治お兄ちゃん、これって面白いね。」

お兄ちゃん！！

やばい、加奈やウェンディとま全く感動が違う。

やっぱり心が清らかだからかな・・・・・

「モンスターバスター？」

「・・・お前、マジで言ってる？」

どんだけＣＭで流れてると思ってるんだよ・・・

「僕、昨日テレビで見たよ。」

「えっ！？エリオ、知ってたの！？」

「うん、見てやってみたいと思ったんだ。そうしたら零治お兄ちゃんが・・・」

「長かったらレイ兄とかでいいぞ。フェリアの妹からはそう呼ばれてるんだ。」

ウェンディだけだけど・・・

「分かったよ、えっと・・・レイ兄。」

うん、子供ってやっぱ素直で良い。

「何か私より仲が良いかも・・・」

少しむっとするフェイト。

「悔しかったら、エリオから大好き！！って言われるくらいエリオを楽しませな。」

「うん、私頑張るよエリオ！！」

「う、うん・・・」

テンションを上げたフェイトに戸惑うエリオだった・・・

「楽しそうだな・・・」

「フェイトは危険ですね。」

「う～、フェイトだったら僕の方がナイスバディなのに・・・」

「「・・・・・・」」

「えっ!?何で2人共僕を睨んでるの?」

「いや、どこからか戯言が聞こえたからな。」

「そんな子にはおはなしするべきですかね?」

「う、うん。そ、そうかもね・・・」

あまりの恐ろしさに何も言えなくなってしまったライだった。

「仲はなかなか良さそうだな・・・」

さっきの男は新聞に穴を開け、そこから零治達の様子を見ていた。

「エリオもあんなに話しかけている・・・・あいつ・・・」

悔しそうにその様子を伺っていた・・・・

「ねぇリンディさん、クロノ君は?」

「何か用があるって朝早く出ていったわよ。」

「あれ?クロノ君、部下の人から急に休みを取ったって聞いたのに・・・」

暫く考える2人。

「まさか・・・・」

「いや、流石に無いわよ。」

「そうですよね。それより、フェイトちゃんの料理どうでした?」

「以外と上手に出来てたわ。もう少し失敗すると思ってたのだけど。味付けも少し薄いぐらいで大丈夫だったし。」

「そうですか。フェイトちゃん、相手に褒めてもらえたら良いですね。」

「そうねぇ・・・」

そういいながら、ぐちゃぐちゃになったキッチンを見た。

「私が間に合って本当に良かったわ。」

2人はキッキンの片付けをした後、家でゆっくりしていたのだった・・・

「はむはむ・・・クロノが変な格好して出ていったって言うべきかな・・・」

フランスパンをもぐもぐしながらアルフが言ったのだった。

「へっくし!!・・・・・・誰か噂でもしてるのか?」

ロングコートでマスクの男、クロノ・ハラオウンは相変わらず新聞に開けた穴で3人を監視しながら、そう呟いたのた。

「到着!!」

「わぁ・・・」

エリオはあまりの広さに驚いているようだ。

「あっちの遊園地より大きい・・・」

「それはそうだよ。遠見ハイランドパークは日本有数の巨大テーマパークだからね。」

「エリオはあっちの遊園地を知ってるんだ?」

「あっ、テレビで・・・」

「なるほど・・・」

まだ、気を使ってる気がするなぁ・・・

もっと子供っぽくても良いだろうに。

「それじゃあ、チケットを・・・」

「はい。」

フェイトから渡されたのはハイランドパーク1日フリーパスだった。

「これは?」

「母さんが新聞屋さんから貰ったの。だから・・・」

「なるほど、だったら早く行くかエリオ。」

「は、はい。」

「あっ、待ってよ!!」

3人は遊園地へと入っていった・・・・

「ハイランドパーク・・・」

「ライ、遊びに来たのではないのですよ。」

「うん、でも一回くらい・・・」

「星、ライのチケットは買う必要は無いぞ。」

「分かった!ごめんってば!だから置いていかないで!!」

マジで置いていきそうな2人に慌てるライ。

3人は一番安いチケットを買って中に入って行った・・・

「一番安いチケットで１５００円もするのか。・・・仕方がない。」

入り口で文句を言う怪しい男、クロノ・ハラオウンは愚痴っていた。

「お客様、持ち物を調べさせていただいてもよろしいですか？ただいま、前の観覧車爆発事件を教訓にテロ対策としまして、持ち物検査を徹底しております。」

「そうか、なら仕方がないな・・・」

クロノは係員の誘導で別室に連れていかれたのだった・・・・

## 第３８話　フェイトとデートと追跡者（前編）（後書き）

さあ、次こそフェイトとエリオと遊園地を回るぜ！！

やっぱり長くなりそうなので区切りました。

楽しみにしてた人たちには申し訳ないです・・・

次もできるだけ早く投稿できるように頑張ります！！

# 第３９話　フェイトとデートと追跡者（後編）（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

また更新遅れてしまいすみません。

フェイトとデートの後編です。

それではどうぞ～

# 第３９話　フェイトとデートと追跡者（後編）

「さて、まずはどれに乗りたい？」

俺は入って直ぐにエリオに聞いてみた。

「え、えっと・・・」

慌ててパンフレットを開けるエリオ。

「私、この３Ｄスクリーンが見てみたい。」

「何でフェイトが答えるんだよ・・・」

俺はエリオに聞いたのに・・・

「僕もフェイトさんと同じで良いです。」

「ほら、エリオが気を使ったじゃないか～」

「えっ！？ごめんねエリオ・・・」

「フ、フェイトさん、僕は大丈夫ですから泣かないでください！！」

泣き真似をするフェイトに慌てるエリオ。

いやぁ、純粋な子はいじりやすい。

「冗談はそこまでにして、さっさと行こうぜ。」

「うん、エリオも。」

「あれっ？フェイトさん？」

エリオの疑問には答えず、二人はエリオを引っ張って行った。

「よし、動いたぞ！」

「ライ、行きますよ！！」

「ゴットスライダー・・・・・」

「ちょっとライ！？」

引っ張って連れていこうとした星が逆に引っ張られる。

「ゴットスライダー・・・」

「力が強い！？夜美手伝って下さい！！」

「ライ、いい加減にしないか！！レイ達を見失ってしまうぞ！！」

「ゴットスライダー・・・」

暫くの間、ライが我に返るまで一生懸命抑えていた2人だった・・・

「凄かったね・・・」

「はい、映像が出てきてビックリしました。」

「楽しんで貰えて何よりだ。それで次はどこに行く?」

「あの・・・僕、ここに行きたいです・・・」

エリオが指さした場所はカウボーイショット。

射的を楽しめ、高得点だと商品までくれる子供に人気のスポットだ。

「おっ、いいチョイスじゃん。じゃあ次はそこに行くか。」

俺たちはカウボーイショットがある場所へ向かった・・・

「っく、かなり時間を食ったな・・・」

あの後事情聴取を受け、暫くしてやっと解放してもらえた。

「このコートと帽子がいけなかったのか?」

事情聴取の原因も怪しいからと言うのが原因だったみたいだ。

地球の漫画でこの様に尾行している場面を見たことがあってこうしたんだが・・・

「仕方ない・・・」

僕は遊園地のロッカーにコートと帽子を突っ込んで遊園地へと入った。

「ふぅ、涼しくなったな。では、フェイト達を探すか。」

クロノ尾行再開・・・・・

「ルールを説明するぜ！！」

カウボーイハットを被り、ウェスタンの格好したマッチョのおっさんが言った。

「制限時間１分３０秒、女性と子供は２分だ。その内に１００００点以上だと商品ゲットだぜ！！」

どうでもいいけど暑苦しいおっさんだな・・・

しかし商品も意外と多いな。

１００００点　カウボーイショット記念ステッカー

１５０００点　商品券１０００円

２００００点　カウボーイショット記念エアガン

２５０００点　遠見市ハイランドパーク一日フリーパスペアチケット

３００００点　？？？

ステッカーとエアガンは男の子とかは嬉しがるのは分かるけど？？？ってなんだ？

「ちなみに３００００点をとったお客様はほとんどにいないぜ！！是非彼女にいいところを見せてやりな！！」

「わ、私は彼女じゃ・・・」

そう言ってチラリと零治を見るフェイト。

「エリオは何が欲しい？」

「う～ん・・・・エアガンが欲しいかな・・・」

「・・・・・・」

「あらら、彼氏さんは弟君の面倒で大変みたいだな。嬢ちゃんいいこと教えてやるぜ。」

「なんですか？」

「いいから耳をこっちに。」

ん?フェイトとおっさんは何やってんだ?

あっ、フェイトが真っ赤になった。

「どうしたんだフェイト?」

俺は心配になり、フェイトの元へ行くが、

「な、なんでもない!!それより早くやろう!!」

慌てた様子でエリオの所に走っていった。

「何を言ったんです?」

「女の秘密さ。」

・・・・あんたのナリで女だったら俺はビルから飛び降りるぞ。

「だがさっきも言ったが、３００００点は今までとった人はほとんどいないから厳しいぜ。まあ頑張ってくれよな!!」

暑苦しくサムズアップするおっさん。

うわ、暑苦しい・・・

「じゃあ、僕からやるね!」

気合を入れて銃を構えるエリオ。

的は出たり入ったりするよく見る奴だ。
小さい的になっていくほど高得点みたいだ。
「てい！！」
エリオは小さい奴から狙っているが、的にうまく当たらず外れている。
そして小さい的は動きが早く、直ぐに潜ってしまいなかなか当てられなかった。
その結果・・・・
「残念！！４５００点だ！！」
おっさんの声が響く。
結局エリオはその後も小さいのを狙っていたが、なかなか当てられずにいた。
「うぅ・・・・」
エリオも悔しそうだ。
商品のエアガンを見ている。
「大丈夫だって、俺が取ってやるから。」

「レイ兄・・・」

「おっさん、やるぜ。」

「零治、頑張って３００００点ね！！」

「いや、俺はエリオのエアガンを・・・」

「３００００点ね！！！」

「・・・・ああ、頑張る。」

何をそんなにマジになってんだフェイト・・・

「まあいいか。」

俺は銃を手に取った。

「ねぇ、零治はこれやったことあるの？」

「残念ながらやったことないな。」

いつもライに付き合って終わりだからな・・・

「銃とかは？」

「ここは日本なんだけど・・・」

銃刀法違反で捕まるわ。

「レイ兄始まりますよ。」

おっと、それじゃあ、いきますか！！

大きい合図と共に弾が飛ぶ。

撃った弾は小さな的の中心に吸い込まれていくように飛んでいく。

弾は見事に中心を打ち抜いた。

「凄い！！レイ兄！！」

「零治凄い！！」

「・・・だろ～！！」

言えない・・・合図にビックリして引き金を引いたなんて言えない・・・

そんなことを感じながら俺は違う的を狙う。

「ちぃ！！」

片手で引き金を引く俺。

気分は白い悪魔。

「なんとぉー！！」

お次は海賊やってたパン屋さん。

「狙い撃つぜ！！」

銃といたらやっぱりこの人。

うわぁ、意外と楽しいかも。

「レイ兄ノリノリだね。」

「けど的に当たってるからいいと思うよ。」

そんな感じで俺はノリノリで銃を撃っていたのだった。

で、結果は・・・・・

「２８５００点！！残念だったな、もう少しで３００００点だったんだがな。」

確かに惜しかった。

残り時間に焦ってリロードしそこねたのが失敗だったな・・・・

「じゃあ、商品のペアチケットを・・・・・」

「あ・・・悪いんだけど、エアガンにしてもらっていいか？」

「ん？構わないけどいいのか？」

「ああ、俺の目的はエアガンだったからな。」

そう言って俺はおっさんからエアガンを貰い、

「ほい、エリオ。」

それを渡した。

「えっ！？」

「約束守ったろ。」

「うん、ありがとレイ兄！！」

喜んで貰って何よりだ。

「じゃあ、最後は私ね。」

気合を入れて銃を持つフェイト。

さて、フェイトはどうなのかな。

「「・・・・・・」」

「悔しい！！もうちょっとだったのに・・・」

「もうちょっと？」

「嬢ちゃん、俺もそこまで外した奴は初めてだ。それなのに２５５００点とは・・・」

おっさんも驚いてるな。

気持ちは分かる。

だってフェイトは狙った的に当ててないのだから。

なのに２５５００点・・・・

なぜこうなったのか・・・・

「やあっ！！」

フェイトが放った弾は綺麗に真っ直ぐ行くことはなく、

バン！！

何故か右斜め上の的に当たっていた。

「やった！当たった！！」

まぁたまたまだろうなって俺とエリオは見ていたんだが・・・・

「フェイトさん、凄いですね・・・・」

「本当にある意味な・・・」

その結果がこの高得点である。

あの後も最初の調子で、狙った所には行かないのに、何故か的に当たるというフェイトマジック？が起こっていた。

「商品のフリーパスペアチケットだ。嬢ちゃん残念だったな。」

「はい・・・」

「まあ、これで彼氏さんとまた来てくれ。」

「だ、だから！！零治は彼氏じゃ・・・」

「別に誰とは言ってないぜ。」

「・・・・・意地悪。」

「はっはっは!!青春してるね若人!!」

でかい声で笑い声を上げるおっさん。

「何か言われたのか?」

「なっ何でもない!」

そう言って外に出ていくフェイト。

「おっおい!!エリオ行くぞ!!」

「はっはい!!」

俺達も慌てて付いていくのだった・・・

その後も俺達3人はそれぞれ色々なアトラクションを楽しんだ。

エリオもフェイトも大いに楽しんでいる。

時間はあっという間に過ぎ・・・・

「そろそろ飯にするか。」

1時30分頃、少し遅めの昼食を取るために、俺が提案した。

「本当だ、もう1時半過ぎてたんだね。だったら・・・・」

「エリオ、何が食べたい？」

「えっと・・・・」

パンフレットを見て迷ってるみたいだ。

そういえばエリオって地球の料理食べたことあんのかな？

「フェイト、エリオって・・・」

「あのね、二人共・・・・」

俺がフェイトに質問しようとしたらフェイトが話を切り出してきた。

「私ね、今日お弁当作ってきたんだ。だから・・・・」

「なんだ、だったら早く言ってくれよ。エリオ、わざわざフェイトがお弁当作ってくれたって。それを食べるぞ。」

「うん、ありがとうございます、フェイトさん!!」

「でも、お弁当作るの初めてで、美味しくないかも・・・」

「問題無いよな？」

「うん、だから早く食べよう！フェイトさん。」

「ありがとう２人共。」

俺たちは弁当が食べられそうな場所へ移動したのだった・・・・

「全く、ライの所為で完璧に見失ってしまったではありませんか・・・」

「ごめんね・・・・ゴットスライダーを見たら無意識に乗らなくちゃいけない気になっちゃったから・・・」

「それで許されると思ってるのか？取り敢えずここの昼食代はライ持ちだな。」

「えっ！？合計３０００円以上するんだよ夜美！！星も何か言ってよ！！」

「すみません、このスフレチーズケーキ追加で。」

「星！！！」

ライの絶叫も２人には届かなかった。

なんだかんだ言って遊園地を満喫している３人だった・・・・・

「くっ！！ここは何処なんだ・・・」

クロノは現在迷子中・・・・

解放されて焦って探し始めた為、今自分がどこにいるのかも分からない。

仕方なくクロノは近くにいるお客さんに声をかける事にした。

「すみません。」

「はい？」

クロノが声をかけたのは近くにいる女子大生３人。

「ここ、どこか分かりますか？」

「えっとここって、この場所？」

「はい、初めてなもので迷ってしまって・・・・」

と言った所で女子大生の３人は後ろを向いて相談し始めた。

「ねぇどうする？新手のナンパかな？」

「でもかっこよくない？」

「うん、私すっごくタイプ！」

「だったらこのまま昼食に誘って一緒に遊びましょうか？」

「「異議なし！！」」

3人は再びクロノに振り向く。

「あの、私たちが案内しましょうか？」

「えっ！？ですがいいんですか？」

「はい！！私達も女3人で男の人と遊びたいなぁなんて思ってたんです。」

「あっ、いや僕は・・・」

だが3人の内2人に腕を絡められ、身動きを封じられた。

「先ずは一緒に食事でもしましょう。」

「いや、僕は妹の・・・」

だが、クロノの思いも虚しく、そのまま流されてしまうのだった・・・

「ここにしようぜ。」

俺が選んだのはちょうどいい感じにあった芝生だ。
アトラクションの外れた場所にあり、結構静かだ。
「いいのかな？」
「怒られたら違う場所に行けばいいだろ。」
俺の答えに渋々納得したフェイトは持ってきたバックからシートを取り出し敷いた。
「はい、どうぞ。」
「「おおっー！」」
弁当はおせちに使うような弁当箱で3段あった。
1段目がオニギリとお稲荷さん。
2段目が卵焼きとウインナー。
・・・・二種類なのは何も言わないほうがいいよな。
だけどほとんど卵焼きで埋まってるってなんか凄いな。
一体どのくらい卵使ったんだが・・・
3段目は恐らく冷凍商品だろう。

J○商品に似たグラタンなど、昔の俺も作るのが面倒なときよくお世話になった為見覚えがある。

今は星が色々と作るため、お世話になる機会が減ったが・・・

「えっと、どうぞ・・・」

「「いただきます～！！」」

俺は箸を、エリオは箸使えないのでフォークを持ち、それぞれ食べ始める。

「ふふ、召し上がれ。」

俺達の様子を見て、フェイトも嬉しそうだ。

先ずは俺もエリオもお稲荷さんを食べる。

ちゃんと染みてて美味しい。

フェイトも箸を持って食べ始めるが目線は卵焼きに。

ってなるほど・・・・

「さて・・・」

「！！」

やっぱり。

俺が卵焼きに手を付けようとしたとき、フェイトは俺の様子を見てる。

箸で挟んで口に運ぶ。形はちょっと崩れてるけど、いい感じに半熟で旨そうだ。

そして俺は卵焼きを口に運んだ。

「ど、どう・・・？」

「普通にうまいよフェイト。半熟でとろりとしていたし。けど、しいて言えばもう少し甘いほうがもっと美味しかったかな。まぁ俺は好きだけど。」

「あ、ありがと・・・」

少し恥ずかしそうにお礼を言うフェイト。

いいね、なんかこういうの。

「本当だ、美味しい！！」

「だろ！！」

「ありがとう、二人共・・・」

その後も俺たちは楽しく食事をした。

けど、エリオの食べっぷりには驚いた。

もしかしてあの量だったのってエリオがかなり食うためか！？

「あれ？」

ふと、ライが歩くのを止めた。

我はまたアトラクションに心を奪われてのかと思い、星とアイコンタクトしてライを抑える準備をしたが、

「クロノが女の人と囲まれているよ。」

「「クロノ？」」

「フェイトのお兄さん。」

そういえば、レイから聞いたことがあるような・・・

パシャ！！

「ライ？何故、写真なんか撮っているのですか？」

「ちょっとエイミィさんに教えようかなって。」

「エイミィさんって？」

「フェイトのお姉さんって所の人かな。この前仲良くなったの。」

そう言いながらライは携帯を操作して、メールを打っていた。

「これでＯＫ。じゃあ、再開しよう。」

我たちは再びレイ達探しを再開した・・・・

「そろそろパレードだな・・・」

空も暗くなり、遊園地の目玉パレードの時間となった。

あの後色々回ったが、戦慄病院だけ、二人共かなり拒否ったので行かなかった。

どんな反応するか楽しみだったんだけど・・・・・

まぁそれは次の機会だな。

「あっ始まるぞ！！」

「わぁ・・・・・」

「綺麗・・・・」

フェイトもパレードを見るのは初めてらしく、大いに楽しみにして

た。

2人共目がキラキラしていらっしゃる。

「・・・ありがとね。」

「ん？いきなりどうしたんだよフェイト。」

「今日付き合ってくたから。おかげで今日は楽しかったよ。」

「僕も！！」

「そうか、俺も楽しかったよ。」

特にエリオは俺と話すことに問題ないみたいだ。

これで少しは安心できるかな。

「でね、それで・・・あのね・・・・」

「また3人できたいな。」

「う、うん！！また3人で一緒に遊びにこようね！！」

俺の言葉に嬉しそうに反応するフェイト。

「僕もまたレイ兄とフェイトさんと来たいです。」

「そうか、じゃあ、また一緒に来ような。」

俺たちは新たな約束をして最後まで楽しく遊園地で過ごした。

「うぅ、結局見つからなかったね・・・」

僕たちはあの後もレイ達を探していたけど、見つからずパレードの時間になっちゃった・・・

「そうですね、今日は疲れました・・・」

「我もだ、一体何しに来たんだろうな・・・」

2人はかなり疲れてるみたいだけど、僕は楽しかったな。

なんか刑事になった気分だったし。

「でも、これを見れたのはよかったかもしれませんね。」

「確かに綺麗だな・・・」

「そうだね・・・」

レイ達もいい雰囲気になってたりするのかな?

でも男の子もいたし、大丈夫か。

取り敢えず帰ったらしっかり話してもらわなきゃね。

「ただいま・・・・・」

あの後、３人の女性に色々付き合わされ、フェイトを探すところでは無かった・・・

なんとか隙をみて逃げたが、時間はもう夜だった。

仕方がなかったから帰ってきたが、フェイトは一体どうなったのだろうか・・・

「ク・ロ・ノ君？」

「ああ、ただいまエイミィ・・・！？」

何故かエイミィは鬼の形相で僕を見ており、アホ毛がピクピク動いていた。

「今日はさぞかし楽しかったんでしょうね。地球の女の子に囲まれて。」

「一体何を言って・・・！？」

そう言おうとしたとき、エイミィの携帯を目の前に見せられた。

「これは！！」

そこには僕と今日振り回された女性３人が腕を組んでいる所が写っていた。

「誤解だ！！今日は別のようで・・・・」

「そうですか、別に私には関係ないけど、仕事休んでまで女の子と遊んでいるのってどうかと思うよ。」

「違うんだ～！！！」

結局、エイミィの機嫌を良くするのに、ミッドの最高級レストランを奢ることとなった・・・

## 第３９話　フェイトとデートと追跡者（後編）（後書き）

クロノドンマイ・・・・

エリオ君はまたどこかで出そうと思ってます。

次は美少女コンテストの話になってくると思います。

これも2，3話続くかな？

それが終わったら夏休みに入ろうと思います。

次もなるべく早く投稿しようと思うので、次もよろしくお願いします！！

## 第４０話　みんなで勉強会ＩＮ有栖家（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回は期末テスト。

コンテストは次くらいになるかな・・・

# 第４０話　みんなで勉強会ＩＮ有栖家

「また、勉強会しようよ。」

さて、季節も夏に入った。今年の１年は長いなぁと早くも思い始めた今日この頃。

授業中、何の前ぶりもなく隣のフェイトが提案したのだった。

「またやるのか？」

中間の苦労を思い出し、俺は嫌な顔をした。

「そんなに嫌がらなくても・・・・」

「するのはまだいい。だけど、アリサとすずかが今度は途中で帰らないって言うんならいいぞ。」

「えっ、私！？」

聞き耳を立ててたのか、反応するアリサ。

「聞いてたのかよ・・・まあいい、アリサとすずかがいれば俺が教える必要が無いからな。」

「そ、そんなに私がいないと駄目なの・・・？」

「ああ、是非アリサには居て欲しい。俺の為にも。」

「そう・・・・」

なにやら深く考え始めたアリサ。

大丈夫か？

「・・・・・・」

何故か分からんけどフェイトは俺を睨んでるし、一体何なんだ？

「と、いうことでまた勉強会をしたいと思います～！！」

昼休み、隣のクラスの加奈と桐谷を加えて一緒に昼食を食べていた時、何故かなのはが皆に宣言した。

「勉強会？必要ないんちゃうか？」

「・・・はやて、アンタ中間成績悪かったじゃない。今度悪いと夏休みも学校に来る羽目になるわよ。」

「ちょ！？それは堪忍や！！」

「私も成績決して良かった訳じゃないから・・・」

「だよね・・・」

ブルーになる現役魔法少女達。

「よっしゃ、なら今回は気合入れてこか！！じゃあ、今度の週末、零治君の家に集合や！！」

「はいちょっと待て！！本人無許可で何勝手に決めてんだ！？」

「いいやないか、週末も美女と一緒にいられるんやで。」

「いや、そんなに飢えてないから。家は無理だろ！！星達も居るんだし、勉強する場所なんてねぇよ！！」

「どうなんや、フェリアちゃん？」

「いや、大きい机出せば大丈夫だろ。」

「フェリア！！！」

何、真正直に教えてんだ！！

「なら決定やな。皆もそれでええか？」

「「「「「異議なし！！」」」」」

「桐谷君は？」

「別に構わんよ。」

「なら決定や！！」

「フェリア・・・」

「いいじゃないか、友達を家に呼ぶって楽しそうだしな・・・」

つくづく、人間ぽくなっていくな・・・

こうして、家主を完全に無視して、我が家で勉強会をすることとなった・・・・・・

「はぁ～・・・会長、茶！」

「零治君、ここは喫茶店じゃないわよ。」

「そんなことよりどうしたんですか？」

その日の放課後、俺と桐谷は生徒会室に呼び出された。

「前に話していた。人気総選挙の話よ。」

「・・・なんか変わってね？」

「こっちの方がいいじゃない、アイドルみたいで。」

「まぁどうでもいいけど。」

「詳細はもうこっちで決めてるわ。資料にまとめたから目を通しておいて。」

そう言って俺と桐谷に資料を渡した。

「・・・・また随分とこってるな・・・」

「こんなに大規模にやって構わないんですか?」

「大丈夫よ、先生方からはちゃんと許可をいただいたから・・・・」

なんか裏があるような言い方だったような・・・・

「それで日時なんだけど・・・」

「ちょっといいですか?」

「何、桐谷君。」

「俺に何故、資料を渡すのですか?」

「何故って、零治君と一緒に司会をやってもらうからに決まってるじゃない。」

「はい!?」

今更かよ・・・

最初の方で気づけ。

「いや、俺は司会なんて・・・」

「大丈夫よ零治君に突っ込んでくれるだけでいいから。」

「・・・拒否権は？」

「ありません。」

それを聞いて溜息を吐く桐谷。

まぁドンマイだな。

「取り敢えず、テストが終わってから細かく打合せするから、その資料見といてね。」

「了解。」

「分かりました。」

こうして総選挙の司会は俺と桐谷がすることとなった・・・

そんでもって週末・・・・

ピンポーン。

「あっ、私が出ます。」

そう言って玄関に向かう星。

あの後、星達にも聞いたのだが、速攻でＯＫが出た。

３人もみんなでまた勉強しようと考えていたらしい。

「「「「おじゃましま～す。」」」」

「いらっしゃい、みんな！！」

「よく来たな。」

ライと夜美も４人を迎える。

「あれ、桐谷君と加奈ちゃんは？先に来てるって聞いてたけど・・・」

「加奈はフェリアの部屋、桐谷は俺の部屋で漫画読んでると思う。」

そう言っている内に３人とも部屋から出てきた。

「おお、いらっしゃい。」

「フェリア、なんか親父臭いわよ。」

「そうか？加奈の家でのくつろぎ方の方が酷いと思うのだが・・・」

「それは俺も同感。」

「何か言った？桐谷。」

「・・・いいえ何も。」

「相変わらずだね・・・」

「そういえばはやてちゃんは？」

「ああ、あいつは反省中。」

「「「「反省中？」」」」

俺はリビングに４人を連れていきベランダを見せた。

「何やってるのよあんた・・・」

ベランダには、ガムテープで、手首足首、口を塞がれて身動きできない状態で放置されてるはやてがいた。

「んん～！！」

「零治、一体何があったの？」

「早めに来たと思ったらいきなり俺の部屋に入って荒らし始めたから、オシオキしてベランダに放り投げた。」

「零治君、厳しいね。」

「当たり前だ！！人の家なんだから最低限のマナーは守れや。小学生じゃあるまいし・・・」

「ははは・・・・」

苦笑いしか出ないフェイトだった・・・

「あのバカたぬきは無視して勉強始めるか。」

「んん～！？（バカたぬきってどう言う事や！？）」

何か言っているみたいだが知らん。

俺たちははやてを無視して勉強を始めたのだった。

「ふぅ・・・ひどい目にあったわ・・・」

「自業自得なの。」

「あんたは少しは礼儀を覚えなさい。」

勉強を始めて一時間程。

はやても開放され、本格的に勉強会がスタートした。

宴会用のデカイ机を引っ張り出してきたが、やはり人数が多い為、全員で一緒に勉強できなかった。

なので、俺と桐谷、なのは、ライが普段飯を食べるときに使う机で、後の皆は宴会用の机で勉強している。

「友達、ましてや思春期の男の子の部屋は宝石箱みたいなもんなんやで！！今日だって、ベットの隠し棚から・・・」

「バカ！！はやて！！」

「ほぉ・・・」

俺は声のした方を見ると、黒いオーラを出している星が・・・

「まだあったのですね・・・」

そう言って立ち上がる。

「ま、待て！！それはこの前中島から・・・」

「問答無用です・・・」

そう言ってさっさと俺の部屋に向かう星。

「はやて、お前の所為でまた処分させられるじゃねぇか！！」

「いやぁ、おおきに。」

褒めてねぇよ！！

「そんなことしてていいのか？」

「そうだった！！」

俺は自分の部屋に走ってった。

「レイやっぱり・・・」

「星、頼む！！今回は見逃してくれ！！」

エロ本を持って何か呟いてる星に俺は土下座する。

「私だってあと3年すればこれくらいの色気・・・」

「星・・・？」

「はっ！？駄目です！！こんな卑猥な本はレイには必要ありません。」

「いや、男には必要だって！！」

「必要ありません！！レイには一生必要ないものです！！」

「何でだよ！！俺だって男なんだから・・・」

「いいんです！！反論は認めません！！」

うぅ・・・初めて一人暮しが恋しくなってきた。

「ということでこれは処分と言うことで。」

ああー！！！

「うぅ、心の傷が・・・・」

「ホンマ災難やったな・・・」

テメェのせいだろ！！

「でも零治君も悪いと思うの・・・」

「そうだね、中学生でア、ア、アダルトな本は・・・」

後ろの方は恥ずかしいのか、声が小さくなるフェイト。

無理しなくていいぞフェイト。

「アンタ、やっぱり変態だったのね。」

「いやいや、男はみんな変態なのさ。」

「そうかな?桐谷君は違うと思うけど・・・」

「甘いなすずか、桐谷は結構な趣味な持ち主で・・・」

ドゴン!!

俺の腹に鋭い痛みが響く。

「キ、桐谷・・・」

俺はそこで意識が途絶えた。

「さて、バカはほっといて勉強始めるぞ。」

(((((((((口封じした!!)))))))))

「は!?俺は一体・・・」

「レイ起きました?もうすぐお昼なので手伝ってもらっていいですか?」

「昼?」

俺は時計を見ると確かに１２時を過ぎていた。

「そうだな、たまには一緒に作るか。」

俺は起き上がりキッチンに向かう。

「アンタ、料理なんて出来るのかしら?」

「・・・なんでみんな家にいるんだ?」

「アンタ、頭大丈夫?今日勉強会よ。」

勉強会?・・・・・・・・そうだった!!

「じゃあ、何で俺寝てたんだ?」

「お前が居眠りしたからみんなそのまんまにしておいたんだよ。」

酷いな、学校ではいつも無理やり起こすくせにこういう時には起こさないのかよ・・・

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

「ん?何だみんな。」

「桐谷君、結構酷いの・・・」

「いつもおはなししてるなのはには言われたくない。」

それに対して何も返せなくなるなのはだった・・・

「レイっていつもこんな扱いなんだね。」

「これでも優しい方だぞ。」

「・・・レイのこの先がとても心配なんだが。」

フェリアの話を聞いて、レイの身がとても心配になった2人だった・・・・・・

「さあ、出来たぞ!!」

今日の昼食はパッと作れて手間暇掛からんオムライスをチョイスした。

人数が人数なので、星と二手に別れて作った。

いつも食べている席にライ、夜美、加奈、桐谷、フェリア。

でっかい机にその他の皆様。

勉強道具は取り敢えず片付けました。

「これ、本当に零治君が作ったの!?」

「何驚いてるんだなのは。こんなのケチャップベースのチャーハン

に玉子を乗せるだけじゃん。」

「まぁ、ざっくり言うとそうやな。」

「はやてだってこれくらいパパっと作れるだろう?」

「そりゃあ当たり前や!伊達に家族の料理作ってるわけやないで!!」

「そりゃ、はやてはそうだけど・・・・」

「ん?アリサ、お前もこれくらい作れるよな?」

「そそそうよ!私だってこれくらいは・・・・・」

俺のオムライスを見てその先の言葉がでなくなるアリサ。

「私、こんなに綺麗に玉子乗ったことないの・・・・」

「すごく綺麗・・・」

なのはとフェイトも相当ダメージが大きそうだ。

なんか負のオーラが漂ってるような・・・

「どうしたのですか?皆さん、早く食べて勉強を再開しましょう。」

星が自分の作ったオムライスを持ってきて言った。

「「「・・・・・」」」

あれ?アリサ、なのは、フェイトが固まってるような・・・

「星ちゃん、料理上手なんやな。すごく綺麗やで!!」

「フフ、ありがとうございますはやて。私、料理好きなので。」

「いやぁ、私でもこんなに綺麗に作れるか分からんわ。」

「もう・・・それより早く皆さん食べましょう、冷めてしまいます。」

「そうだな、よし!食べるか。」

俺の号令にみんな反応して各々席に着き、

「それじゃあ・・・」

「「「「「「「「「「いただきます!!」」」」」」」」」」

みんなで仲良く言った。

「美味しい・・・・」

「美味しいね・・・・」

「私の料理より断然・・・・」

さっきの三人組は食べても負のオーラを出し続けている。

「味合わなかったか？」

「ううん、美味しいよ。ただ・・・」

「そうね・・・・・」

「女として負けた気がして・・・・」

「俺は男なんだが・・・・」

何かこっちまで暗くなりそうだし、ほっとくか。

「すずかとはやてはどうだ？」

「美味しいで。」

「美味しいよ。」

そりゃ、良かった。

星の方を見ると星も嬉しそうだ。

「そういえばすずかも料理とか作るのか？」

ふと、気になった俺はすずかに聞いてみた。

「私は余り作らないかな。コックさんが作ってくれるし。」

ハハッ、すずかがお嬢様だって忘れてた・・・・・

「じゃあ、全く作れないのですか？」

「ううん。私の姉が、『結婚して、料理出来ないなんて恥ずかしいだけよ。』って結婚仕立ての頃教えてくれて、色々勉強してたの。」

「なるほど、たまにはいいこと言うんだな忍さん・・・」

「えっ！？お姉ちゃん知ってるの？」

「ああ、小学校の時翠屋で。」

あの人は大変だったな・・・・

いじるだけじゃなく、俺をモルモットとして色々しようとしてたし・・・

しかも美由希さんも便乗するし。

恭也さんが止めてくれなかったら俺どうなっていたんだろう・・・

「そうなんだ・・・お姉ちゃん一言も言ってなかったよ。」

「零治君、意外と私達の知り合いと親しかったりしとるな・・・」

「たまたまだよ・・・」

避けてたけどね。

「レイ、お茶要ります？」

「おっ、サンキュー。」

俺のコップにお茶を入れてくれる星。

「はぁ～うまい・・・」

「お粗末様です。」

やっぱお茶は緑茶に限る。

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

何か同じ席に座っているみんなの目線が鋭いんだけど。

特にアリサ、フェイト、はやて、なのは。

ぶっちゃけ怖いです・・・

「星、僕も～」

「我にもくれ。」

「私も頼む。」

「星、私にもお願い。」

「桐谷はどうします？」

「じゃあ頼む。」

そう言って星はライ達にもお茶を入れに行った。

そうしたら何故か鋭い視線も収まった。

一体なんなんだよ・・・・

昼も終わり、勉強を再開して2時間程過ぎた頃。

「オヤツだぁ～！！」

ライの大声に集中していた空気が一気に吹っ飛んだ。

「いきなり大声を出すな！！」

「オヤツだよ！オヤツの時間だよ！！星！なのはが持ってきてくれたケーキ早く！！」

「分かりましたから落ち着いて・・・・」

相変わらず子供な奴だな・・・

まぁ、ちょうどいいか。

みんなの集中力も一旦きれたし良いか。

「みんな一旦休憩しよう。」

「もぐもぐ・・・美味しい～！！」

それはもう本当に嬉しそうになのはが持ってきたケーキを食べるライ。

可愛いいんだが、いい加減もう少し大人に・・・

「レイ、あ～ん。」

パク。

もぐもぐ・・・

「うん、うまい。」

「でしょう～！！」

流石は桃子さんだな。相変わらずいい仕事をしてる。

「「「「「・・・・・・・」」」」」

そんな様子を唖然と見ているなのは達。

「ライのすることでいちいち驚いてたらきりがありませんよ・・・」

そんな星の言葉に5人は驚愕するしかなかった・・・・・

「そろそろお開きにするか。」

時刻は夕方6時。そろそろ空も赤く染まってきた。

「そうね、もうこんな時間経っていたのね。」

「頑張った～」

「ライ、頑張りましたね。」

「えへへ・・・」

ライの頭を撫でる星。

ライもうれしそうだ。

「で、ライは実際どんな感じなんだ夜美？」

「結構いい点数を取ると思うぞ。」

「マジで！？」

夜美は嘘なんんか滅多につかないし、信憑性はあるけど、にわかに信じられないな・・・

「でも結構頑張ってたよ。」

すずかにもお墨付きをいただきました。

「なら今回はみんな大丈夫だな。」

「それが・・・・」

申し訳なさそうにすずかが言う。

「なのは達が・・・」

「ああ、現役魔法少女か・・・」

「なんかその言われ方嫌なの・・・」

「いいから、なのは終わった？」

「ふぇっ！？もう少し待って！！」

「はやてとフェイトは終わったわよ。」

「ええっ!?2人とも早いよ!!」

「フフン、なのはちゃんとは違うんやで!」

「だけど、はやては半分出来てないわよ。」

「なんやて!?」

大変だな魔法少女・・・

確かに6月は忙しそうにしてたからな。

まぁ頑張れ・・・・

俺は3人の夏休みが無事に送られる事を祈って手を合わせた・・・・

## 第４０話　みんなで勉強会ＩＮ有栖家（後書き）

勉強会ＩＮ有栖家でした。

エロ本を処分された零治君。前々から片っ端に星と夜美に処分されています。

今回は星でしたが・・・

中島君についてはいつか出ると思います。

次こそコンテストの話です。

この話も長くなると思います。

# 第４１話　美少女人気総選挙（前準備）（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

ＰＶが３００万突破しました！！

皆さん読んで下さってありがとうございます。

前みたいに投稿出来ませんがこれからも頑張って行こうと思うます。

# 第４１話　美少女人気総選挙（前準備）

さて、期末テストも終わった。

今回は中間のはやてみたいに点数が悪かった奴が出なかった為、皆夏休み学校に来ることは無くなった。

んで、取り敢えず今は全てテストが返し終わった放課後。

俺はなのは、フェイト、はやてと話していた。

「取り敢えず一安心や。」

「そうだね、私達夏はミッドにほとんど居なくちゃいけないから補習なんてなったら困ったよね。」

「ホントだね～」

夏休みも働く気か、この仕事中毒共が。

ピンポンパンポーン・・・・

『２年Ａ組の有栖零治君、２年Ｂ組の加藤桐谷君、至急生徒会室まで来てください。』

「零治君、呼ばれてるよ。」

「そうみたいだ。じゃあ、仕事もほどほどにしないと女として行き遅れるぞ。」

「余計なお世話や～！！」

俺は3人と別れて生徒会室に向かった・・・

「ちわ～す。」

生徒会室に入ると会長以外の生徒会メンバーもそこに居た。

「よく来たね。」

「会長、いい加減放送で呼ばれるのは恥ずかしいんだけど・・・」

「仕方ないじゃない、君たちどこにいるのか分からないんだもん・・・」

「だもんって・・・」

可愛いい子ぶっても裏がありそうで不気味なんだけど。

「失礼します。」

そんな時桐谷もやって来た。

「おっ遅いね桐谷君、遅刻だよ。罰としてみんなの前で一発芸を・・・・」

「失礼しました。」

何事もなかったかのように流れる様に生徒会室を出ていく桐谷。

「ちょっと!!桐谷君、冗談だからカムバァーク!!」

桐谷はその後、生徒会メンバーに無理やり確保されました。

「で、いいかな?」

「・・・・なんですか?」

うわ、凄く嫌そうだな・・・

未だにロープを巻かれ、逃げられないように縛られてる桐谷。

当たり前だが機嫌が悪い。

「そう怒らないで欲しいんだけど・・・取り敢えず総選挙の準備について話そうと思ってね。」

まあ、そうだろうとは思ってたけど。

「でね、取り敢えず明日から3日間募集することにしたの。もちろん推薦有りでね。」

「あいつらだけじゃないのか?」

あいつらと当然なのは達のことである。

「それじゃあ女子にはつまらないでしょ。それに彼女たちが不審に思うわよ。だから一応応募は自由、推薦もね。」

まあ、確かにすずかやフェリアは感づきそうだ。はやてはこの計画について一応知ってるんだもんな。

「多分人数も少ないと思うからそんなに心配してないけど、多かったら総選挙の前に投票して、絞ろうと思うわ。」

なるほどね・・・そうすればなのは達も変には思わないか。

「はやてはどうするんだ？」

「彼女の説得は零治君に任せるわ。」

「・・・多分無理ですよ。アイツ自分がいじられるのは嫌うだろうし。」

「そうなったら逃げないように当日連れてきて。」

「そうだったら全員逃げるような気がするんだが・・・」

「桐谷君、それをなんとかするのが２人の役目よ。」

「「・・・・・・」」

「それ以外の準備を私達がやるから、２人ともしっかりね。」

俺と桐谷は不安しか思わなかった・・・・・

次の日・・・

『聖祥美少女総選挙！あなたも是非エントリー！！』

学校の掲示板にあちこち貼られていた。

そして小さく、

『推薦も受け付けています。』

・・・・これなら確かに少ないだろうな。

気づいた人がいてもあくまで噂になりそうだし。

「へぇ、一体誰が出るんだろうね？」

「さあ？フェイト、アンタ出たら？人気あるんだし、Ｎｏ．１になれるんじゃない？」

「ええっ！？私はいいよ・・・」

「知らんとは幸せやな・・・・」

「はやては諦めたのか？」

「あの会長から逃げれへんと思うしな・・・」

意外とすぐ折れたな。

これなら結構楽かも。

「まあ、はやても結構可愛いからどっちにしても推薦あると思うけどな。」

「そ、そうやろか・・・？」

「ただ、その性格をどうにかしないと一部の男子にしか人気は出ないだろうな。」

「一言余計や！！」

はやては久々に取り出したハリセンで俺を思いっきり叩いた。

大きい音がその場に響く。

「相変わらずいい音がなるな。」

それに全然痛くないし。

「フフフ、そやろ。メンテにも抜かりなしや！！」

「メンテ必要だったんだな・・・」

一体何でハリセン作ってんだか・・・

次の日・・・

「何で私達の名前があるのよ！！」

朝、フェリアと共に学校に来ると、いきなりアリサの声が響いた。

まだ教室なら別に構わないのだが・・・

ここは昇降口なのである。

1年、3年の目がとても痛い。

本人は気づいていないみたいだけど・・・

アリサは昇降口入ってすぐにある掲示板の前で騒いでいる。

恐らく、人気総選挙についてだろう。自分は出ることが無いと思っていたのか、大いに驚いるんだろうな。

「というよりみんなだね・・・・」

すずかがそう呟き、一緒にいたなのはとフェイトも掲示板に駆け寄

る。

「本当だ・・・」

「私の名前まである・・・」

因みにはやて、フェリア、加奈の名前もちゃんとある。

「一体どういうことよ!!」

そんな時、階段から怒りを露にしながらこっちに来る加奈。

「何で私達の名前があるのよ!!私達出るなんて言ってないわよ。」

「まあ推薦だからな。」

「推薦？」

俺は手招きして加奈を掲示板の所へ呼び寄せる。

「あっ、零治!!これ一体どういうことよ!!」

「朝一番が文句かよアリサ。」

「でもこれは私達も納得出来ないよ。」

なのはの言葉にすずかとフェイトも頷いている。

「ちょうどいいや、一緒に説明するから。・・・それじゃあ、みんなここを見てくれ。」

俺はそう言ってポスターの右下を指差した。

「何にもないじゃない。」

「よく見てみろ。」

その場にいる6人が覗きこむ。

おーおー、みんな気づいたのか、怒りに怒ってるな。

「何これ!?これじゃあ、詐欺みたいなもんじゃない!!」

「仕方ないだろ、会長の指示なんだから。」

「私出たくないよ・・・」

「まあ気持ちは分かるが、せっかく推薦してもらったんだからその人たちの為にも出てはくれないか?フェイトなら絶対みんなも喜んでくれるからさ。」

「・・・・・零治も?」

「俺としては会長の脅威から逃れられるからマジで助かる。」

「そう言う意味じゃないんだけど・・・」

何故か不機嫌になるフェイト。

「で、やっぱり駄目?」

「・・・・はぁわかったよ、零治にはこの前にお世話になったし協力するよ。」

「そうか！ありがとうフェイト！！」

そう言って俺はフェイトの手をとった。

「れ、零治！？」

「いやぁマジで助かったよ、このまま出てもらえなかったら会長になんて言われるか・・・」

「分かったから・・・手を・・・」

「おっ、悪い。」

俺はフェイトの手を離す。

「・・・分かったわ、私も出る！！」

「アリサちゃん！？」

「何で！？」

なのはと加奈が驚く。

「べ、別に零治の為じゃないからね。ただ、私を推薦してくれる人に悪いから・・・・それに・・・」

そう言ってフェイトを見るアリサ。
何でフェイトを見てるんだ？
「なら、私も出ようかな。」
「すずかちゃん！？」
「アリサちゃんの言うとおりだよ。それに水着になれとかそういうのはないんでしょ？」
「ああ、そう決まってる。」
「ならいいじゃない、一緒に出ようなのはちゃん、加奈ちゃん。」
「・・・・・うん。」
「仕方ないわね。」
なのははまだ少し納得出来ていないようだが、加奈はもう切り替えたようだ。
でも、これで無事みんな出てくれそうだ。
一応一安心だな。
「皆、私も応援してるから頑張ってくれ。」
「フェリア、お前も出るんだぞ。」

「な、何だと!?」

放課後・・・・

「ここか・・・・」

「ああ、確かここだったはずだ。」

俺と桐谷はとある開き教室に来ていた。

「行くぞ。」

「ああ・・・」

俺たちは静かにその教室の後ろから侵入して行った・・・

『何を言うか!?あの時々見せる恥ずかしい顔が萌えるのではないか!!』

『いいや、あのツンツン具合がいちばん萌えるね!!』

そうだそうだー!!

発言している覆面の男の周りにわんさかいる覆面の男たちが言う。

『それは貴様らの趣味からなるのもだろ!!だが我らのフェイト姫は全国民共通の姫だ!!ツンデレなどを利用しなくとも皆から愛される!!』

そうだそうだー!!

今度は反対側の覆面男の周りにいる覆面男が・・・・

「分かりづらい・・・」

「だよな・・・」

みんな覆面被ってるから説明しづらい・・・

取り敢えず、覆面被った男共が萌について熱く語り合ってると理解してくれればいいです。

「貴様は有栖零治!!」

語り合ってた男共全員が一斉にこちらを向く。

それぞれ武器を持って・・・・・

「どっから出したんだよ・・・」

「本当にこの学校にはまともな奴が少ない気がする・・・」

俺と桐谷はそんな光景に呆れつつ、俺は話を切り出した。

「悪い、そんなに敵対心持たないでくれ。今回は生徒会からの要請で協力を仰ぎにきたんだ。」

「協力？」

「罠じゃないのか？」

「なんでもいいからコイツ潰そうぜ。」

「俺、今日のために鎌持ってきたんだ。」

「俺は鎖鎌。これなら逃げられないだろ。」

「「「「「あったま良いー！！」」」」」

「いや、頭すっからかんだろ。」

俺のツッコミもあいつらに届かない。

奴らはそれぞれ自分の武器を持ってゆっくり近づいてくる。

人数はざっと２０人弱。

また増えてるな・・・

「ちょっと待て、聞けって！！総選挙の話で、あんまり勝手な事をやりすぎるなって言いに来ただけなんだから！！だから武器しまっ

て!?うおっ!!駄目だ、逃げるぞ桐谷!!」

斬りかかってきたのを躱し桐谷に声をかけた。

「ああっ!!」

バットを持って近づいてきた男に回し蹴りをかましながら返事をする桐谷。

吹っ飛んだ男のおかげで奴らが巻き込まれてる。

「今だ、行くぞ!!」

俺達二人はなんとかにげきったのであった・・・・・

「で、どうだったの?」

「微妙。ていうか、釘を指しても好き放題しそうだけどな。」

生徒会室に逃げ込んだ俺達はお茶を飲みながら報告していた。

「ちっ、使えないわね・・・・」

「最近俺の使い方が荒くないか?」

「気のせいよ・・・仕方ないからSBS団はスルーするわ。恐らく暴動は起こらないと思うから。終わるまでは・・・・」

「だろうな・・・・」

恐らく自分の好きな子の応援をするだろうから、それぞれ分裂するだろう。

そんでもって結果に不満を持ち暴れ始めると思う。

さっきの状態であの様子からなのだから不安で仕方ない。

「それで、エントリーは今の所どうなってるんですか?」

「今のところはね・・・あの7人と一年生の川名さんと3年生の金山さん。」

推薦か?よくエントリーしたな・・・

「取り敢えず明後日まで募集するつもりだけど、恐らく12人位になると思うわ。」

「結構多いですね。」

「いいんじゃないかしら。そっちの方が盛り上がるわ。」

う~ん、悲惨な結果に成らなければいいけど・・・

「ふふ、今から楽しみね・・・」

なんだかんだ言ってこの人が一番楽しみそうだよな。

だけど、タダで楽しませる気はないぜ会長。
その後俺たちは生徒会室を後にした・・・・

「桐谷。」

「ああ、分かってる。他の生徒会メンバーの協力も得られる。」

「やっぱり皆に慕われてるんだな。」

「それはそうだ、生徒会長なんだからな。」

「まあいい、みんなと協力してもらいながら会長にも参加してもらうか。」

俺達は早速行動に移した・・・・・

## 第４１話　美少女人気総選挙（前準備）（後書き）

と言うことで次回本番です。

かなり長くなりそうです。

更新遅れてしまったらごめんなさい。

最低でも明後日までには投稿したいです。

それが終わったら夏休み。

有栖家とスカさんファミリーをメインに書いていこうと思います。

# 第４２話　美少女総選挙（前編）（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

お待たせしました美少女総選挙です。

どぞ～

# 第４２話　美少女総選挙（前編）

『さあ、皆さんお待たせしました！！急遽！！我が生徒会長水無月楓先輩が企画した聖祥美少女総選挙、開幕します！！』

うおおおおおおーーーー！！

男子から大声援が響く。

大きい体育館でやっているこの企画、放課後の自由参加だというのに全生徒の８割は来ている。

『さて今回も司会を担当させて頂くキャンディーは直ぐに噛んでしまう、有栖零治です！！』

『それ言う必要あるのか？』

『こっちは今回のもう一人の司会、ジュースの氷は全部食べちゃう加藤桐谷君です！！』

『だから言う必要ないだろ・・・・加藤桐谷です。皆さんよろしく。』

きゃあああああ！！

『わーい女子から黄色い声援が・・・・・これだからイケメンは。馬に蹴られて地獄に落ちろ。』

『それは人の恋路を邪魔したやつだろ。いいから早く始めるぞ。』

『そうですね。それでは始めましょう！！』

楓ＳＩＤＥ

流石だね二人共。大勢の前でも臆せず普通に話せる。

しかも二人共アドリブでやるって言ってたし、やっぱり二人には是非生徒会をやってほしいな。

これにはやてちゃんを足して、真面目な人を入れれば完璧。

う～ん、どうやって入りざるおえない状況を作ろうか・・・・・・

『それでは企画説明、イケメンで頭脳明晰の桐谷君よろしく。』

『・・・お前根に持ってるだろ？』

『そんなことないさ～』

『はぁ・・・今回は１２人の女子が登場します。まず、それぞれ説明を零治君が説明し、各々一言意気込みを言ってもらいます。そしてそのあとが本番。季節は夏なので彼女達には浴衣を着てもらいアピールをお願いします。それを踏まえて投票をお願いします。』

うおおおおお！！

『嬉しいか野郎共！！こんなチャンス滅多にないからしっかり目に焼き付けろ！！』

『女子の人達も是非投票お願いします。』

『因みに撮影は禁止だ。怖い生徒会メンバーが監視してるから気を付けろ。』

『それでは早速参りましょう。まずはエントリーナンバー1番。アリサ・バニングスさんです！』

ステージ脇から現れるアリサさん。すると・・・

アリサちゃーん！！

おお、やっぱり人気あるねぇ。

男子の声援が大きい。

『彼女のクラスは2－A。【燃える女】の異名を持ち、世界を狙える右を持つ彼女。得意技はリバーブローとガゼルパンチ。1番強い技が・・・すいません、調子に乗りました、俺が悪かったので右手を下げて！！』

今のは零治君が悪い。

アリサさんは零治君に近づいてマイクを奪い、自己紹介を始めた。

『アリサ・バニングスよ。このバカが変なことを言ったけど、普通

の女の子と変わらないからコイツの言葉は流してね。』

『アリサさん、意気込みを。』

『取り敢えず、推薦してくれた人のためにも最低限の事はするわ。』

そう言ってマイクを零治君に渡すアリサさん。

なんとまあ、さっぱりしてますね。

けれど、これも人気の1つなのかな。

「「「「「アリサ様ー！！！」」」」」

1番前にいる覆面の男子達が大声で声をかけている。

と言うより、最前列、横に端から端まで覆面姿って不気味ね・・・

『はい、上から目線のコメントありがとうございました。』

『余計なことは言わんでいい。続いてはエントリーナンバー2番、月村すずかさんです！』

桐谷くんの声と共にすずかさんがステージ脇から現れた。

アリサさんの時も思ったけど、大勢の前なのに平然としてるわね。

流石お嬢様と言ったところかしら？

『彼女もまた、2－Aです。持ち前の雰囲気とスタイルは中学生離

れしており、性格も良い彼女は男女共クラスの人気が高いです。間違いなく今回の本命でしょう。』

あれ？今度は全くボケないわね零治君。

『珍しく普通だな。』

『それくらい完璧なんですよ彼女。本音を言うと、我がクラスの魔王様以上に怒らせたら大変そうだから。』

『何故そう思うんだ？』

『俺の勘がそう警鐘をならしている。』

そう思ってるのに口にできる零治君に敬意を送るよ・・・

『零治君・・・』

『ハッ、なんでしょうか！？』

『マイクを貸して。』

『かしこまりました。』

そう言ってマイクを渡す零治君。

『初めまして月村すずかです。今回推薦という形でることとなりました。期待に応えられるように頑張りたいです。』

パチパチパチパチ！！

拍手がわき、すずかさんはマイクを零治君に渡しました。

あれ？何か耳元で話してますね。あ～あ、零治君の顔が真っ青に・・・

『ありがとうございました。続きまして・・・って、零治、顔が真っ青だぞ？』

『だ、大丈夫。この企画が終わるまでは・・・』

『？まあいい。エントリーナンバー３番はこの人、高町なのは！』

次はなのはさんね。彼女はある意味有名だからみんな知っているわね。

『た、高町なのはです。皆さんよろしくお願いします。』

桐谷くんからマイクを受け取り、少し緊張しながらも自己紹介するなのはさん。

『彼女も２－Ａですが、彼女の事は誰もが知っているでしょう。だが敢えて説明しましょう！！彼女こそ２－Ａに住む【魔王】の称号を持つ人物です！！可愛い外見とは裏腹に“おはなし”と言うキーワードを言えばそれを聞いたものを地獄に突き落とす・・・』

それ以上の言葉は出なかった。

なぜなら・・・

『おはなし・・・する？』

どこから取り出したのか、広辞苑を右手に持ち、零治君の頭に落としたから・・・

それによって零治君が倒れました。

一気に会場が冷めたわ。

『あ、ありがとうございました。おはなしは終わった後でお願いします。』

桐谷君がすかさずフォローする。

『分かったの・・・・』

取り敢えず収まったけど零治君は倒れたまま。

これは不味いかも・・・

『ハッ!?俺は一体何を・・・』

『おい、今は総選挙本番中だぞ。ぼーっとしてるなよ。』

『そうか？・・・すまない。けど頭に鈍い痛みがある気がするんだけど・・・』

『昨日、寝違えたんだろ。』

『ああ、なるほどな。』

納得するの！？

『では、気を取り直して。次はエントリーナンバー４番フェイト・Ｔ・ハラオウン！』

桐谷君が同じ要領で発表し、フェイトさんがステージ脇から出てきたけど・・・

物凄く、カチコチで手と足が一緒に出てる。

なんか凄く可愛い・・・

『ふぇ、ふぇ、フェイト・Ｔ・ハラオウンで、です。えっと・・・その・・・が、頑張ります！！』

うおおおおおー！！！！！

「「「「「フェイト姫ー！！！」」」」」

もう、男子から大声援。

頑張ってー！！と応援する女子すらいる。

『今のを見た通り、いつもの時とは全く違うギャップ。これほど恐ろしいものがあるだろうか、いや無い！！』

うんうんと最前列の覆面の男子も頷いてる。

いいぞ、我らが宿敵！！なんて言っている人も。

『気合い入ってるな・・・』

『当たり前だ。彼女も優勝候補筆頭だからな。しかし、一体総選挙はどうなるのか？桐谷君、次よろしく頼むよ。』

『分かったよ。エントリーナンバー５番、フェリア・イーグレイ！』

今度はあの小さい子か。

綺麗な銀髪でちょっと羨ましいなあ・・・

『フェリア・イーグレイだ。皆、よろしく頼む。』

あら、本当に一言ね。

『フェリアさんも２－Ａです。世の男共、彼女の良さは言わずとも分かってるだろう。だからこそ敢えて説明しない。だが、一言言わせてもらおう。これもアリだ！！』

あれ？涙流して頷いている男子いるけど一体どうしたの！？

『あっ、でも実際変なことをしたら捕まるから絶対するなよ。』

ブーブーブー！！！

うわっ今度はブーイングの嵐だ・・・

『やかましい！！当たり前だろうが！！桐谷、ドンドン行くぞ。』

『・・・・分かったよ。続いてはエントリーナンバー６番、佐藤

加奈！』

わあああああー！！

歓声は小さいわね・・・・

まあ転校してきたばかりだから仕方ないかもしれないけど、ちょっと寂しいわね。

『佐藤加奈です。私の兄がお騒がせして申し訳ありません。後でシメますので・・・・』

その言葉を聞いて会場のみんなが引いた。

『お前、やる気あるのか？』

『それ以上に余計な事言ってばかりいる兄さんをシメておきたいから。後で調教ね。』

手をポキポキ鳴らしながら言う加奈さん。

「女王様キタ――――（ ゜∀ ゜）――――！！」

「俺も調教されたい！！」

「むしろ踏まれたい！！」

M男達にはかなり人気みたいね。

『うるさいわね、一回シメるわよ！！』

その発言に更に盛り上がるM男達。

『加奈、そのくらいにしろ。・・・・続いてエントリーナンバー7番、八神はやてさんです！』

『みんな、久しぶりや～！みんなのアイドル、八神はやてやで～。』

マイク片手に大きく手を振ってみんなに話しかけるはやてちゃん。

流石、イベントになるといいノリするわね。

『変なこと言うなよ、どこらへんからアイドルなんだ？』

『上から下までに決まってるやないか。それに私も一応推薦で選ばれたんやで。』

『いや、お前はお笑い要因として俺が推薦しといた。』

『零治君かい！！』

ドカン！とどこから取り出したのかはやてちゃんはハリセンで零治君をぶっ叩いた。

ドカン？

『はやて変な音が聞こえたんだけど・・・』

『ふふふ、よくぞ聞いてくれたで零治君。今回ハリセン５２号を改造したんや。ハリセン５２号改めハリセン５２号改！！今回は様々

な音を出すことに成功したんや。』

そう言ってもう一度零治君の頭をハリセンで叩いた。

ブヒ！

『今度は豚さんや。他にも5つ位あるで。』

『おおっスゲェ！！』

『今度はカスタム化するつもりやで。』

『次は一体何になるんだ！？』

『どうでもいいわ！！』

桐谷君が二人で盛り上がり始めている零治君達に拳骨を食らわせる。

『お前ら何大勢の人の前でくだらない話を始めてんだよ。今回の企画分かってるか？』

『えっと・・・・総選挙？』

『何で疑問形なんだよ・・・』

『だって・・・・』

ブーブーと文句を垂れるはやてちゃん。

桐谷君がいなかったら止まらなかったわね・・・

『はぁ・・・さて次は・・・』

『ちょ！？もう出番終わりなんか！？』

『零治、つまみ出せ。』

『イエッサー。』

ずるずるとステージ脇に連れて行かれるはやてちゃん。

まあ、なんというか・・・どこにいても零治君とはやてちゃんは変わらないね・・・

『さて、零治がつまみ出していますが、次にいきたいと思います。エントリーナンバー８番・・・』

こんな感じで自己紹介は進んで行った・・・・

楓ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

『エントリーナンバー１１番、真田佳苗さんです！』

『初めまして、真田佳苗です。図書委員をやっています。私なんかが出ていいのか分かりませんが、皆さんよろしくお願いします。』

メガネをくいっと上げながら自己紹介する真田先輩。

紹介もとうとう後1人となった。

何かこれが終わったら俺殺される気がするんだけど・・・

まあ取り敢えず今回のこの企画を終わらせることだな。

『真田さんは会長と同じクラスの3－Cで親友です。会長と同じ雰囲気を持っているので、ものすごく不安を感じますが紹介します。生徒会が調べたところ・・・・・・・・・』

『どうした?』

『・・・・・データが無い・・・』

『えっと・・・・これは・・・』

俺と桐谷が真田先輩に問いかけるように見ると、

『あら、女性のプライバシーをバラすなんて男として駄目よ。』

そう言ってニヤリと笑った。妖美な感じで観客から歓声が上がっているが、俺と桐谷は苦笑いしかでなかった・・・・

（（この人絶対会長と同じだ・・・））

『エ、エントリーナンバー12番、菊池カナタさんです。』

『みんなー初めまして、1－Bの菊池カナタでーす!!』

「「「「「カナタちゃーん！！」」」」」

『みんなーありがと～！！』

大きく手を振り歓声に答える菊池。

なんでも有名なアイドルだとか。

興味無いから知らないけど。

『彼女は現役アイドルユニットＣＵＶＥのメインボーカルをしている彼女。今回の本命と言っても過言じゃないです。』

『普通だな・・・』

『いや、資料にはこれしか書いてないし、俺は興味なかったから。それに余計な事を言うなって会長にも言われてんだ。』

『ちょっと、失礼過ぎない！？』

『そんなの今更だ。はいこれで全員だよな。』

『だから勝手に終わらせるなって！！』

『そうよ！もっと私を紹介しなさいよ！！』

『残念！尺が無い。はやて！その子つまみ出してくれ。』

『了解や！』

ステージ脇からはやてがやって来て無理やり菊池を連れて行く。

『ちょっと、やめなさいよ！！』

『文句なら零治君に後で言ってや。』

そう言ってステージ脇に消えて行った。

『・・・今更だけど本当にやりたい放題だったな。』

『まあいいじゃん。それじゃあ、ここで特別参加の紹介に行きたいと思います。』

『今回この企画の発案者であり、生徒のトップ、水無月楓さんです！』

『会長カモ～ン！！』

俺の掛け声で生徒会メンバーに引っ張られながら現れる会長。

おお、睨んでる睨んでる・・・

『・・・どういうことかな二人共？』

『日頃のしかえｓ・・・お礼です。』

『思いっきり仕返しって言おうとしてたよね。』

『いやいや、会長にはお世話になってばかりで俺は本当に・・・』

『桐谷君はどうなの？』

『零治が勝手に計画して俺と生徒会メンバーはそれに仕方なく協力してるだけです。』

ちょ！？

よく見るとステージ脇にいる生徒会メンバーも頷いてるし・・・・・

『まあ、協力した時点で許す気はないんだけどね。みんな覚悟しといてね。』

ものすごくいい笑顔で言う会長。

この瞬間、生徒会メンバーから笑顔が消えた・・・・

# 第４２話　美少女総選挙（前編）（後書き）

次が浴衣審査です。

何かいつものアレと変わらないとかは言わないで・・・

思いつかなかったです。

真田さんと菊池さん、会長の紹介をして欲しいと言われたので軽く紹介を。

水無月　楓

聖祥中学生徒会長。

腰まで伸びている黒髪にカチューシャを着けた大和撫子な先輩。
策士な一面を持ち、零治とはやて、桐谷、生徒会はその恐怖を知っているので、なかなか逆らえない。

真田佳苗

３年。会長と同級生の図書委員。黒髪のショートで髪留めを付けている。
本が好きで休み時間にはほとんど図書室にいる。

大人っぽさとミステリアス雰囲気を持ち、同級生からの人気が高い。
のだが、ミステリアスさが強いため少し引かれ気味。会長とは親友。

菊池カナタ

１年。縦ロールの金髪。
アイドルグループＣＵＶＥのメインボーカル。今回唯一の立候補者。
学園期待の生徒。
自分に絶対の自信を持っていて自分が一番でないと気が済まない。
そんな性格なためグループでも浮いている。

ただ、歌の実力はピカイチ。

とこんな感じですね。

これから先出るかどうか分かりませんが、取り敢えず。

次は後編。

なるべく早めに投稿したいです。

後、誤字や表現がおかしい所があったら指摘お願いします。

# 第４３話　美少女総選挙（後編）（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

更新遅れてすみません。

週末は特に忙しかったのと疲れて一番書いている深夜帯になかなか書けなかったのが原因です・・・・

申し訳ないっす

# 第４３話　美少女総選挙（後編）

『それじゃあ取り敢えずみんな知っているでしょうけど・・・水無月楓です、推薦で総選挙に出ることになりました。』

さっきの怒りは何のその、いつも通りの会長に戻った。

『みんな、よろしくね！それじゃあ桐谷君、浴衣審査の説明よろしく。』

『あ、はい。浴衣審査ですが、各自こちらで用意した浴衣を着てもらい披露してもらいます。それも踏まえて１番美少女だと思った人に投票をお願いします。』

『はい、良くできました。じゃあ私も準備してくるからあとよろしく。』

そう言ってステージ脇に消える会長。

『それでは皆さん少々お時間をいただきます。今のうちにトイレ休憩などを済ませておいてください。』

桐谷の説明で見ていた生徒達もそれぞれ動き始める。

「俺たちも少し休むか。」

「ああ、そうだな。」

俺は桐谷に声を掛けてステージ脇に入っていった。

「ほら。」

「ああ、サンキュ。」

桐谷が投げてくれたお茶のペットボトルを受け取り、口をつけた。

俺たちは今、ステージ脇のパイプ椅子に座って休憩している。

「しかし結構盛り上がってるな。」

「それくらい人気があるってことさ。」

というよりここの学校には変わり者が多すぎる。ＳＢＳ団みたいな覆面かぶった奴らもいれば、中学生で幼女趣味な奴など。

転生する前の中学生はこんなんじゃなかったはずだ。

「それもそうか、確かに彼女たちは皆美人だしな。」

「誰か気になる奴とかいないのか？」

「俺は・・・・まあいないかな。確かに彼女たちは美人だが、すでにご執心な人物がいるみたいだかし。」

「ふ～ん。まあ、アイツらも女の子だから気になる奴ぐらいいるだろうな・・・ってどうした桐谷、頭を抑えて、頭痛でもするのか？」

「・・・原因は分かってるよ。」

「そうか？ならいいけど。でもお前もフェリアと一緒に勉強したりしてるじゃないか。結構まんざらでもないんだろう？」

「まあ、フェリアとは話が合うが、特になんとも。」

動揺なく淡々と言う桐谷。

つまんねぇな・・・

転生前からそうだったが、コイツはいつもこうだ。

時折、女より男の方が好きなんじゃないかとも思ったりするが、ちゃんとエロ本を持ってたりするところを見るとそうでもないみたいだ。

せっかくイケメンなのに本当に勿体ない・・・・・

神崎までとはいかなくとも俺もアピールすると思う。

「それに俺はそんな資格なんか・・・・・」

「ん？何か行ったか？」

「いや・・・それよりお前はどうなんだ？フェイトとデートしたん

だろう？」

「まあデートというより子供の面倒の手伝いだな。しかし弟はいいな・・・エリオって言うんだけど、純情でさ、すごく可愛かった。俺も本当は口うるさくない弟が欲しかったぜ。・・・っていうか何で知ってるんだ？俺、誰にも話してないんだけど。」

「フェリアに聞いた。詳しく言えば星達に聞いたフェリアだけどな。」

「アイツら・・・帰ったら説教だな。」

付いてきてやがったな・・・・・

「俺から聞いたって言うなよ。」

「分かってるよ。」

「二人共、準備出来たぞ!!そろそろ再開だ!!」

生徒会の男子生徒に言われ俺達は立ち上がる。

「じゃあ、行くか。」

「ああ。」

俺たちは再びステージに向かった・・・・・

『皆さんお待たせしました!!準備が整いましたので美少女総選挙再開します!!』

『彼女達はどんな浴衣を選んだのでしょうか?・・・・それでは順に入場です!!』

俺がそう言ったと同時に体育館の明かりが消える。

そして今流行りのヒップホップな曲が流れ、ステージ上の中心がライトアップされる。

しかし凝ってるな・・・

マジでファッションショーみたいだ。

『先ずはアリサ・バニングスさんの登場です!』

桐谷がそう言うとアリサがゆったりとステージ脇からステージ中心へと歩いていき、中心の明かりに照らされた。

「な、何よ・・・・・」

「い、いや・・・・・」

俺はマイクで喋ることを忘れて見とれてしまった・・・・

アリサは赤を基本とした浴衣で白い花（恐らく菊?）が綺麗にマッチしている。

「零治、司会司会・・・・」

そうだった！！

『素晴らしく美しい！！流石燃える女、素晴らしいです！！』

『綺麗ですね。これは皆さんにも高評価ではないでしょうか？』

会場はさっきの様子とは別に感じるほど静まっている。

アリサが中心から脇に帰って行く。

ステージ脇に帰ってから・・・・・・

うおおおおおおお！！！

きゃあああああああ！！！

大喝采が湧き上がった・・・・

「良かった・・・・」

「ううん、アリサちゃん綺麗だったよ。」

「うん、零治君も見とれてたもん。」

「そ、そうかな・・・・」

すずかとなのはに言われて私も嬉しかった。

前半とは違って盛り上がらなかったから失敗だったのかと心配したけど盛り上がってくれて良かった。

それにしても見とれてくれたんだ・・・・・

確かにじっと見られたような気がしたけど・・・・

「フフ・・・」

「アリサちゃん？」

「何でもないわよ。それより次はすずかでしょ。準備したほうが良いわよ。」

「あっ！？それじゃあ私行くね！！」

「うん、すずかちゃん頑張って！！」

ステージへと向かうすずか。

すずか、あの鈍感男を驚かせてあげなさい！！

『続いては月村すずかさんです、お願いします！』

桐谷がそう言うと、再びステージ脇からすずかがゆっくりと歩いてくる。

すずかの浴衣は無難な紺だが、すずかの髪の色とマッチしており、凄く綺麗だ。

「月村さん、綺麗・・・」

「羨ましい・・・」

女子からも声が聞こえる。

さっきのアリサのギャップに不覚にも見とれてしまったけど、すずかの浴衣も予想通りであるけれども素晴らしかった。

『大変綺麗でしたね。特に男子達は歓声が上がらないほど見とれていますね。』

『これこそ大和撫子と言っても過言じゃない！この学校でよかった野郎共！！』

「オオーッ！！」

「当たり前だー！！」

「すずか様最高！！」

いいね、変な奴が多い学校だけどノリの良さは最高だ。

『続いては高町なのはさんお願いします！』

桐谷の言葉でなのはが歩いてくる。

中心に現れたなのはは白の浴衣。そこに様々な色の星のマークが入っている。　前の二人とは違い、今時の若者の浴衣って感じだ。

だけど、それもアリだ！！

「なのは可愛いー！！」

「こっち向いてー！！」

「「「「萌え～！！」」」」

『はい男子、直接萌え～は気持ち悪いから心の中にだけにしとけ。』

そう俺が言うと顔を真っ赤にして頷くなのは。

いいね、いつも魔王様じゃなくてこっちの萌えなのはだったら最高なのに・・・

『高町さんありがとうございました。続いてはフェイト・Ｔハラオウンさんです！』

次はフェイトか・・・

予想では黒だと思ってたけど、黒の浴衣ってちょっとな・・・

と思いながら見ていたらフェイトは黄色の浴衣を着ていた。黒の模様が所々入っており、可愛い。しかも、恥ずかしがってモジモジしているのを見ると思わず抱きしめたくなってしまう。

「「「「「可愛い～！！！」」」」」

「「「「「フェイト姫萌え～！！！」」」」」

「生きてて良かった・・・」

うわっ、泣きながら言ってる奴もいるよ・・・

確かに萌えるけどさ・・・

『次は佐藤加奈さんです！』

我が愚妹の登場。

水色の爽やかな浴衣を来ており、これだけ見ると明るい清純そうなイメージを感じる。

でも、実際は・・・

「・・・・・・」

アイツ、本当に俺の心読んでないか？

メッチャにらんでるし・・・

（何でアリサみたいに見とれないのよ。いつもとは違う雰囲気の浴衣選んだのに・・・）

『加奈さん、ありがとうございました。続きましては・・・・・・っと皆さんにお知らせです。
次のフェリアさんとはやてさんですがお二人で一緒に登場することになりました！それではお願いします！』

前回と同様にゆっくりと中心に進む二人。しかし二人は手を繋いでいるみたいだ。

そして、二人が中心にやって来たが・・・

「ぐはっ！？」

「は、反則だろ・・・」

「じいちゃんばあちゃん、俺今行くよ・・・」

ＳＢＳ団に壮絶なダメージ。

殆どの人数が倒れた。

『お前ら・・・』

俺も頭を抑えた。

なぜなら・・・

『何で浴衣審査って言ったのに犬耳と尻尾つけてんだ！！』

二人は同じミニスカートの浴衣（模様の色は別）に犬耳、尻尾を着けていたからだ・・・

これじゃあコスプレみたいなもん・・・・

『違うわ！私のは狸耳と狸の尻尾やで！』

『んな事どうでもいいんだよ！』

『零治、私は狼だ。』

『だから知らねえって！！しかも何で嬉しそうなんだよ！？』

『かっこいいではないか。それに浴衣とは耳と尻尾を着けるのではないのか？』

『そもそも前提が間違ってるから！』

誰だ、フェリアに変な事吹き込んだの・・・

しかも二人共何故か声が響いてるし。

ふと、ステージ脇を見ると顔をだした会長がサムズアップしてた。

かいちょうー！！！

結局、あのままになりました。

コスプレっぽくなってしまったのでどうかと思ったが観客は大盛況だったのでそのままスルー。

そして次々と進んでいき、前半同様後3人になった。

『さて次は真田佳苗先輩です！』

中央に現れた真田先輩はすずかに負けないほどの大和撫子だったのでものすごく青い浴衣が似合ってる。

動きなども一つ一つ大人っぽくて流石だと感じました、ごちそうさまです。

SBS団も静かにガン見だったからな・・・・

『次は菊池カナタさんです！』

「「「「「カナタちゃーん！！！！！」」」」」

ファンクラブか？

男の声が体育館に響いた。

『みんなありがとー！！』

手を振りながら中央に現れる菊池。

しかし・・・・・

カラフルな浴衣に異様に短いスカート。少しジャンプしたらパンツが見えそうだ。

ＳＢＳ団は姿勢を低くして覗こうとしてるし・・・・・

マイクもどっから持ってきてんだよ・・・

いや、似合ってるし可愛いんだけどね。

『最後は我らが会長、水無月楓さんです！』

急遽参加になった会長が中心に現れる。

花火を連想させるような柄が入った浴衣に狐のお面を頭に着け、うちわを持っている。

大人っぽい会長が子供っぽく見えて・・・・・やべ、アリだ！

『零治君？そんなエロい目で私を見ていいのかな？』

『見てねえよ・・・・・いいから早く下がってくださいよ。投票してもらわないと・・・』

「この変態ー！！」

「女の敵ー！！」

『よーしそこの覆面共、とっとと出て行け。それとお前らにだけは絶対に言われたくない！！』

『投票するんだろ？喧嘩売るな・・・・・』

桐谷に静止され俺も怒りを抑える。

『そうだな・・・・さっさと終わらせて逃げないと・・・・・』

さっきからステージ脇から感じる殺気が半端ない・・・

俺、生きて星達に会えるかな？

そんでもって投票。

生徒会メンバーが高速で集計。

その時間わずか３０分。

流石生え抜きのメンバー。あの会長は人を見る目があるよな・・・・・

「はぁ～やっぱりお茶はほうじ茶よね～」

その会長はこんなんだけど・・・

『皆さん、お待たせしました!!投票結果を発表します!!』

桐谷も進行にすっかり慣れたな。

現在、ステージ上に横一列で浴衣美女達が並んでいる。

『今回の結果は中々の接戦でした。さあ、誰が優勝でしょうか?』

『では結果発表です!!』

ステージが暗くなりスポットライトが動く。

『それでは優勝は・・・・・』

桐谷がためる・・・・・

『優勝は八神はやてとフェリア・イーグレイ!!』

「えっ!?」

「うそやろ!?」

『アンケートは接戦でしたがこの二人のペアが一番票が多かったです。』

『何か二人分って感じがするけど・・・・でも結果はこのようになりました。それでは二人共一言ずつお願いします。』

俺ははやてからマイクを近づけた。

『みんな～おおきにな～！！』

『えっと・・・・・か、感謝する・・・』

『それでは二人にはトロフィーの授与を、会長お願いします。』

桐谷がそう言うと会長がステージ脇に行ってトロフィーを取りに行く。

『二人共おめでとう。』

『『ありがとうございます。』』

『二人に盛大な拍手を！！』

そう言って俺は拍手を始めるとそれにのって会場の皆が拍手をしてくれる。

『これにて美少女総選挙を終了にします！！』

こうして第一回美少女総選挙が終わった・・・・

「零治君・・・・」

「覚悟は・・・・」

「いいかな・・・・？」

ただいま俺は3人の美女の前に正座しています。魔王様、燃える女、すずか様の・・・・・

今から起きるであろう身の不幸に俺は不安でしょうがない・・・

「まあいいじゃない。それくらいにしてあげなさいよ。」

は！？まさかの会長が俺に助け舟！？

一体どうしたんだよ！？

「それより気になること・・・・ない？」

それを聞いて3人が首をかしげる。

「零治君が誰に投票したか・・・・」

「「「！！！」」」

「そういえば零治君は誰に投票したんや？」

「私も気になる。」

「ちなみに桐谷君は？」

「俺はすずかに。一番似合ってると思ったからな。」

「あ、ありがとう・・・」

真っ直ぐ言われて照れるすずか。

よし、このままどさくさに紛れて・・・・

「零治君、何処に行くのかな？」

会長が逃げようとした俺を見つけやがった。

「ちくしょう、捕まってたまるか！！」

「あっ零治君が逃げた！！」

「逃がさないわよ！！」

直ぐに反応したなのはとアリサが追ってくる。

「絶対捕まってたまるか！！」

絶対言いたくない！！

「あ～あ、逃げちゃった・・・」

「それで桐谷君、零治君は誰にいれたの？」

残ったメンバーで零治の話を始める。

「いや、流石に・・・・」

「言ったらオシオキ無しにしてあげる。」

「アリサにだよ。いつもと違うギャップに凄く驚いたらしい。」

「へぇ・・・」

「でも確かにアリサちゃん綺麗だったよ。」

「というか簡単に親友を売りすぎなんちゃう？」

「命とは代えられん、親友なら許してくれるさ。」

「何気に酷いな桐谷・・・・」

「それより加奈、さっきから何落ち込んでんだ？」

みんなと少し離れた場所で座っていた加奈。

「ほおっておいて・・・今、どうやって鈍感兄にお仕置きするか考えているんだから。」

「そ、そうか・・・・」

異様な雰囲気の加奈に桐谷はそれ以上何も言えなくなった。

ただ分かってることは・・・

「零治、ドンマイ・・・」

「ぎゃあああああああ!!」

そう呟くと同時に零治の絶叫が聞こえる。

桐谷は零治の無事を祈り、お祈りをしたのだった・・・

## 第４３話　美少女総選挙（後編）（後書き）

優勝ははやてとフェリア～！！

あれ？でもそんなつもりはなかったのに・・・

まあ、これで夏休みに入ると思っていたんですけど、その前にやり忘れたイベントをやって・・・・・

ということでプールの授業になると思います。

それが終わったらスカさん家の話になると思います。

これからもよろしくお願いします。

## 第４４話　水でふざけるのはやめましょう（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回は学校のプールでの話。

今回クラスで仲の良い友達二人が登場します。

どぞ～

## 第４４話　水でふざけるのはやめましょう

美少女総選挙も終わり、後はあと少しの授業を消化するだけになった。

そんなある日・・・

「あちぃ・・・」

朝、クーラーの無い教室に生暖かい風が入ってくる。

私立なのでクーラーがあるにはある。しかし、我らがＡクラスはクーラーが壊れており、他のクラスとの温度差が１０度位あるのだ。

しかも今日は最高気温３７度、猛暑である。

隣のクラスにいけばいい話だが、クーラーがつくのは先生が来た時だけなので今行っても意味がない。

「アンタ、そうやって伏せてると余計暑いわよ。」

うちわで体の中に風を送りながらアリサが言う。

どうでもいいけどブラ見えてるぞ・・・

「アリサちゃん、零治君にブラ見えとるで。」

「!?この変態!!」

いきなり放たれた右ストレートは俺の顔に・・・

「ぐはっ!!」

勢いそのまま、俺は後ろに倒れてしまった。

「れ、零治君!?」

「だっ大丈夫!?」

「大丈夫じゃない・・・」

俺は顔を押さえながら起き上がる。

「何よ、アンタが悪いんじゃない・・・」

「別に見せてなんて言ってないけどな!」

「アンタが私のブラ覗いたんじゃない!!」

「はぁ、別に興味ねぇよ・・・」

「零治君ってコッチ?」

ホモのポーズをして俺に言ってくるはやて。

「お前、馬鹿にしてるのか?」

「いや、分かっとるけどそれはそれでおもろそうやから。」

「はやては冗談だって分かってるけど、純粋なそこの3人はマジでそう思ってるじゃないか！！」

俺の指を指した方を見るはやて。

なのはとフェイトがかなりのドン引きしてる。

「なのはちゃん、フェイトちゃん！？冗談やから本気にしたらアカンよ！」

「そ、そうなの？」

「よ、よかった・・・」

ホッと安心する二人。

「ホンマ二人は素直やなぁ・・・」

「本当だよ・・・どこぞの狸さんみたいに汚くなってもらいたくないものだ・・・」

コッコー！

とハリセンで叩かれたが気にしない。

「いつの間にか話題が変わったわね・・・」

と呟きながらもうちわで相変わらず中に風を送るのをやめないアリサ。

「だから見えてるっての。」

「もう気にしないわ、所詮下着だし。」

「だったら殴るなよ・・・」

不幸だ・・・と呟き俺は机に突っ込した。

「は～い、席に座って。ＨＲ始めるわよ。」

シャイデがやった来てなのはとはやて、フェイトはそれぞれの席に戻る。

「しかし本当にこの教室は暑いわね・・・さっさと職員室に行きたいわ・・・」

担任が自分の生徒達を見捨てて楽な所へ逃げようとしてるよ・・・

「そういえば今日の学活の時間なんだけど・・・・」

そういえば今日は何をするんだ?

暑いから動きたくないんだけど・・・

「プールを借りたからみんなで入るわよ!!」

一旦教室が静かになり・・・・・

「「「「「「「よっしゃあー！！！」」」」」」」

男子の声が響いたのだった。

しかし・・・・・・・

「先生、水着はどうするのですか？」

「あっ・・・・」

一人の女子生徒の指摘によって、教室がまた静かになったのだった・・・・

「あつ・・・・・・」

結論から言います。クラスの八割が持ってきてました。

なかった人は借りるか、購買で買うか、見学するか。

ちなみに見学組はいなかった。みんなこの暑さに参ってたんだな・・・・

そんでもって今は5時間目。今日の学活は2時間あるので2時間は

遊べる。

「お、おいまだかよ・・・・」

「スク水はぁはぁ・・・・・」

「やばい起ちそう・・・」

犯罪予備軍ことＳＢＳ団の興奮度も半端ないことになってる。

なぜかというと、いつもの体育のプールだと、女子と男子は別になるからだ。

女子がプールの時は男子は外で、男子がプールの時は女子が外といった感じだ。

なのでぶっちゃけＳＢＳ団だけでなくクラスの男子みんなテンションが高くなっている。それが分かってるからこそ女子もこうも出てくるのが遅いのだろう・・・

ただ・・・・・

「もったいないな、神崎。あいつならテンション上がっただろうに・・・」

あのおバカさん、今日に限ってミッドでお仕事らしい。

ざま～（笑）

ちなみに今話しかけてきたのは中島良介。

クラスで仲がいい男子の2人の内の1人だ。前に星に捨てられたエロ本の持ち主でもある。

めがねをかけた知的な少年で大人っぽい。しかし高校生でＡＶやらエロ本を集めるのが趣味という残念な性格をしている兄を持ち、その影響で良介自身もオープンではないがむっつりスケベになってしまった・・・

コイツ彼女いるのに・・・・

「2人共、女子出てきた?」

俺たちに話しかけてきたのは小林圭。

大家族の長男で野球部だ。

決してイケメンってわけではないが、野球部のキャプテンとして皆を引っ張っており、スポーツマンな所から何気に女子から隠れファンが多かったりする。

ただし、下ネタなど恥ずかしい話を聞くと直ぐに顔が赤くなる。

「いや、まだみたいだ。というかあいつらがあんなに興奮してたら出てきたくないだろ・・・」

「確かに・・・」

コイツらともこんなに話せる仲になれたのはイケメン対決が原因だったりする。あの後クラスの皆に話しかけられるようになった俺は、この二人とは特にウマが合い、仲良くなったのだ。

良くも悪くも、俺の学校生活が変わる出来事になった・・・

「おっ、出てきたぞ。」

ＳＢＳ団の誰かの声に男子皆が反応する。

恥ずかしそうに胸などを軽く隠して出てくる。

ただその中にも例外がいるわけで・・・

「良く～ん！」

反対側のプールサイドからこっちに手を振るツインテールの女の子、坂巻渚は良介の彼女だ。スタイルは至って普通だが元気っ子で男子からの人気も高いらしい。（圭談）

「手を振ってるぜ色男。」

「相変わらず仲がいいなぁ。」

「アイツは・・・」

恥ずかしいのか、目頭を押さえるマネをする良介。

「渚～！はしたないから静かにしてろ～！！」

「じゃあ、後で一緒に遊ぼうね～！！」

「くそっリア充が・・・」

「マジで死んでくれないかな・・・」

「呪われろ、呪われろ・・・」

「・・・・・二人共、俺達友達だよな。」

「嫌だ。やっと俺だけ狙われる事が無くなったんだ。この期を逃してなるものか！」

良介が坂巻渚と付き合い始めたのはつい最近。テスト勉強中に告白したらしい。幼なじみの二人は元々仲が良かったが、付き合い始めると思わなかったＳＢＳ団は情報を得ると同時に粛清に走った。

お陰さまで俺への被害が半分に減ったのは言うまでもない。

「まぁ二人とも頑張れ・・・」

「ん？何で俺も入ってるんだ・・・」

圭が指差した方を見るとはやてが手を振っていた。

「零治君～、シャイデ先生からビーチボール借りたんや、一緒にやらへんか～？」

「またアイツだ・・・」

「何でアイツばっかり・・・」

「やはり海外から銃を・・・」

最後の奴、洒落にならんから止めてくれ！

「頑張れ二人共。」

「良介・・・」

「ああ・・・」

俺と良介は即座に圭を逃げないように掴み、

「はやて～、圭と良介も一緒で構わないか～？」

「別に構わへんよ～。」

「なっ！？俺は別に・・・」

「一人だけ逃がすか！！」

「そうだ！楽させてたまるか！！」

ギャーギャー口論になる俺達。

そんなとき、

「なに騒いでるのよアンタたち。」

シャイデが１番遅く現れた。

黒のマイクロビキニという色気ＭＡＸの格好で。

「「「「「ぐはっ！！」」」」」

「っておい、またかよ！！」

ＳＢＳ団が吐血して一斉に倒れた。

幸せそうな顔で・・・・・・

「お前らそんなんで良いのかよ！？」

良介が叫ぶが反応がない。

「う～ん、刺激が強すぎたかしら？」

そう言って水着の位置を直すシャイデ。

だったらそんなの着てくるなよ・・・

俺がふと残りの男子を見てみると立っていた男子が前屈みになっている。

だったら座れ！！

「まぁいいわ。さぁみんな！６時間目が終わるまで好きに遊んでいいわよ！！」

倒れているＳＢＳ団は無視して俺達は遊び始めた。

「行くぞオラッ！」

俺はビーチボールを高々に上げる。

「すずか！」

「はい！」

アリサの声に答えながらすずかがボール返す。

「フェイト！」

「うん！」

少しライナー気味に来たボールを上手くフェイトが返す。

今、俺達がやっているのは水上バレーのようなもの。

あらかじめコートの大きさを決め、相手のコートにボールを落とせば勝ち。

2対2のチームでやるのだがこれが結構難しい。

普通に弾道を低く返せば良いと最初は思っていたのだが、意外に直ぐにボールが沈むため、容易にスマッシュなど打つと自分のコートに落ちてしまう。しかも水の中で打ち返さのでスピードも出ず、簡単にはじき返される。何より泳いで移動するため中々ちゃんとした体制で打ち返せないため、結構打ち返すのすら難しかったりする。

「アリサ！」

「任せて！」

ふらふらっと低めの弾道でゆっくりとボールが無人の相手コート右側に落ちていく。

（間に合え！）

アリサは急いで泳いでいくが、アリサの頑張りもむなしく、ボールはプールに落ちた。

「9対8！零治君、フェイトちゃんペア、マッチポイントだよ！」

「よっしゃ！ナイスショットフェイト！」

「うん、このまま勝とうね。」

「ごめんすずか・・・」

「ううん、今のはフェイトちゃんが上手かったよ。それにまだ逆転できるよ！！」

「そうね、まだ勝負は分からないわね！」

気合いを入れ直したアリサ。

いいね、そうじゃなきゃ面白くねぇ。

「油断せずに行くぞフェイト！」

「うん！」

今度はすずかのサーブからゲームが始まった・・・・・・・

「疲れた・・・・」

なんとかサドンデスになりながらも２０対２２で勝った俺とフェイトペア。

かなりの死闘となった。

あそこでフェイトが拾ってくれなければ分からなかった・・・

「盛り上がってたな。」

俺がフェンスに寄りかかって休んでる所に圭が隣に座ってきた。

「っていうか次はお前の番じゃないのか？」

「先に八神、イーグレイペアと中島、坂巻ペアが先だ。」

「ふ～ん・・・」

そんなたわいもない話をしていると試合が始まった。

「なあ零治・・・」

「なんだよ？」

「女の子って最高だな・・・・」

「お前大丈夫か!?いつもならこんな話になると顔真っ赤にしてうまく話せなくなるくせに・・・」

「俺だって興味はあるんだよ!!だけどお前と中島の二人の話がレベルが高すぎてついていけないだけだ!!」

う～ん、実際そうかもな・・・・・

確かにＲ１５位じゃ済まない話のような・・・・

「そうか・・・・で、圭君的には誰が好みかい?」

「俺は・・・・やっぱり月村かな。あのスタイルとあの性格はもう完璧すぎるだろう。でもハラオウンの時々見せる慌てる姿も捨てがたい・・・・」

「・・・・結構マジな答えだな。」

「零治は?」

そう言われ俺は考える・・・・・

「大きさから言ったらすずか、フェイト、なのは、アリサ、はやて、フェリア・・・性格から考えるとフェイト＝すずか＝フェリア、アリサ、なのは、はやての順だろ・・・・と考えると・・・」

暫く考え、

「確実に駄目なはやてにしてやるか。考察してててかわいそうになった。」

「俺は好みを聞いたんだけ・・！！」

「ん？どうした？手なんか合わせて。何か神様に頼むことでもあるのか？」

「アンタが私達をどういう風に見ていたかよ～く分かったわ、ありがとう。」

「だろ、結構自信が・・・」

振り返って高評価をくれた人物を見ると・・・

グーの拳を作った怒りのアリサ様がそこにいました。

「まて、これには山よりも大きく海よりも深い訳が！！」

「問答無用！！」

アリサは俺の腹にボディーブロー、たまらず立ち上がった俺に今度はアッパーを食らわせプールの方に吹っ飛ばしたのだった。

「ったくアンタもいい加減にしなさい！！」

「零治・・・惜しい友達を無くした。」

いつもの事でスルーしているクラスメイトを除き、小林だけが零治に涙を流したのだった・・・

「零治君？」

「ハッ！？俺は何を？」

目覚めるとそこにはフェイトの顔が。

「良かった、起きたね。早く行こうよ。」

「行こうよって何処に？」

「決勝だよ。」

「決勝？」

「水上バレー。」

おお、そう言えば・・・・

「そうだった！フェイト、絶対勝つぞ！！」

「うん！！」

俺は最高のパートナーのフェイトと共に最後の戦いへと赴いた。

「相変わらずだなアイツ・・・」

「さっきまで溺れてたのにね。」

「アリサちゃん・・・」

「うっ、分かってるわよ。後で謝るわ・・・」

そんな様子を見ていた、小林、なのは、すずかアリサが話していたのだった・・・

「よく来たな。」

「せやけど、私達最強ペアは倒せへんで。」

「相手ははやて、フェリアペアか・・・・」

「油断しないで、中島と渚、なのはと小林ペアを倒したんだから。」

男子がいるペアに勝ったか、確かに油断できないな・・・

「では、行くぞ!!」

フェリアサーブから試合は始まった・・・・

「零治！」

「こなくそ！！」

懸命に手を伸ばすが、ボールは無常にもプールに落ちる。

「８対４はやて・フェリアペアリード！」

「ナイスショットやフェリアちゃん！！」

「はやてこそ。」

ハイタッチするはやてとフェリア。

「くそっ！！」

「フェリアちゃん速すぎるよ・・・」

そう、このような結果になっているのはフェリアが原因だったりする。

始めはあの小さい体には不利だろうと思っていたのだが、潜水して底から一気にジャンプし、スマッシュを決めたときにはマジで驚いた。

というかそんな運動神経ある人間なんているのか！？

試しに俺もやってみたがそこまで高く飛べず、なおかつボールを空

ぶった。

だけどこれにも弱点があり・・・・

「これでマッチポイントだ！！」

「ここだぁ！！」

うまく落下地点を呼んだ俺がボールを返す。

「しまった！？はやて！！」

「任せてな！！」

はやてはなんとか追いつくが、ボールははやてたちの後ろに飛んでいった。

「8対5！！はやて・フェリアリード。」

「やってもうた・・・」

「いや、コースを読まれた私が悪い。」

このようにコースを読み、返せばジャンプしたフェリアは動けないので拾うのは一人になる。そうすれば得点のチャンスになるのだ。

「ナイス零治！」

「たまたまだ、でもなんとか拾うぞフェイト！！」

「うん！！」

こうして死闘は続く・・・・・・

「１０対６ではやて・フェリアペアの勝ち！！」

「やったで！！」

「ああ、完全勝利だ！！」

「「・・・・・」」

恥ずかし！！

何さっきの俺！？あんだけカッコつけて結局負けるのかよ！？

しかも点差離れてるし・・・・

フェイトもどうやら同じ気持ちらしい。恥ずかしそうにプールから上がる。

「なんや二人共、あれだけカッコつけといてあっけなく負けよったなぁ。」

「はやて、気にしてることを・・・」

「かっこよかったで二人共『何としても勝つ！！絶対負けてたまるか！！』熱いわ～『私も絶対負けたくない！！絶対拾うね！！』ってその後直ぐにスマッシュ決められっとたからなぁ・・・」

「もう止めてはやて！！」

その後俺とフェイトは、はやてから言葉攻めを食らってました・・・

・

「ねぇ零治・・・・」

「ん？どうしたアリサ？」

授業も終わり教室に戻る時だ。

アリサに声をかけられ俺は止まる。

「私のせいで溺れかかったから謝ろうかと・・・」

「ああ、そんなことか。っていうかアリサは短気すぎる。」

「えっ！？」

「なのはもそうだけど簡単に手を出しすぎなんだよ。冗談なんだか

ら受け流せばいいじゃないか。」

「だけどアンタの場合冗談に聞こえないのよ！！」

「それでも結局暴力に行くのはどうかと思うぞ・・・」

「うっそれはそうだけど・・・・」

「まぁ今度はお手柔らかに頼むよ。」

「あたっ！？」

俺はアリサに軽くデコピンする。

「これはお返しだ。」

俺はそう言って教室に向かった。

「バカ・・・・・・・」

その呟きは零治には届かなかった・・・・

次の日、教室では大声で叫び声を上げた銀髪のイケメンがいたとかいないとか・・・・・

「なぜだぁ～！！！！！！」

## 第４４話　水でふざけるのはやめましょう（後書き）

これで次にスカさんの話をやって夏休みに入りたいと思います。

オリキャラと言うより準オリキャラって感じのキャラなので学校の話以外では中々出てこないかも。

なので2学期に入るまではなかなか出番はないかなぁ・・・

次はスカさんの話。

作者の大好きなキャラを出したいと思います。

## 第４５話　ゼストさん、スカさん家に帰る（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回独自解釈な部分があります。ご了承を・・・

# 第４５話　ゼストさん、スカさん家に帰る

『そうかい、修行はもういいのかい？』

ここはとある管理外世界。

そこには中年だが、年を感じさせないがっちりとした体をした男と、５，６歳位の小さな女の子が一緒にいた。

「ああ、ルーテシアもそれなりに魔法を使えるようになった。だから一度そちらに戻ろうと思う。」

『分かった、もてなす準備をしておこう。楽しみにしておいてくれ。』

「余計なことはしなくていい。」

『つれないねぇ・・・まあ新しい子もいるから楽しみにしておいてくれ。』

そう言ってゼストは回線を切る。

「行くぞ、ルーテシア。」

「うん・・・・・・・」

こうしてゼスト・グランガイツとルーテシア・アルピーノはスカリエッティのアジトに向かった・・・・

「これは一体どうしたんだ!?」

まず、スカリエッティのアジトに着いたゼストは驚きを隠せなかった。

昔のアジトとは違い、怪しげな機械は全て稼働しておらず、静かだった。

まるでどこかに襲撃されたような・・・・

「ルーテシア、注意しろ・・・」

「うん・・・・・」

二人はゆっくりと歩き出す。

すると・・・・・・

「声か?」

小さいながらも声が少し先の部屋から聞こえる。

あそこには大きなホールがあったはず。

思い出しながらゼストはその部屋へと入っていった。

「おかえりなさい、騎士ゼスト。」

「あっ、ダンディーなおっさんと紫幼女が来たっス。」

「こらウェンディ失礼だよ、お久しぶりですゼストさん。」

「セイン・・・・？」

「そうですけど覚えていませんか？」

「いや・・・・」

「ルーお嬢様。」

「ただいまウーノ・・・・」

（何があったんだ・・・・）

ゼストは大いに驚いていた。
前は質素な機械の壁だったのに対し、普通の家庭みたいなリビングになっている部屋。そして戦闘機人の子達の服装。

（まるで年頃の女の子達のようだ・・・・）

「ルーお嬢、一緒にゲームしようっス！」

「ゲーム・・・？」

「地球で大人気のやつっスよ。」

「やってみたい・・・」

ウェンディに近づいていくルーテシア。

「とその前にドクターが御二人にお話があるようなのでドクターのラボに行ってもらっていいですか？」

ウーノの提案に断る理由も無いので、二人はまずスカリエッティのラボに向かった・・・・

「やあ、久しぶりだね騎士ゼスト、ルーお嬢様。」

「ドクターお久しぶり・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「どうしたんだい、騎士ゼスト？」

「一体どういうことだ！！」

いきなり大声を上げたゼストにルーテシアも驚く。

「静かにしたまえ、ルーお嬢様が驚いているじゃないか。」

「叫びたくもなる！！どうしたんだ！？アジトは碌に稼働していなければ、ナンバーズはのほほんと過ごしている。一体何があった！

？」

「それを今から説明しようと思ってここに呼んだのだが・・・」

そして、スカリエッティは今までの経緯を説明し始めた・・・・・・

「なるほど、そんなことがあったのか・・・」

「ああ、研究は継続しても構わないと言われているが、それならやる必要ないからね。今は残りのナンバーズの稼働を優先的にね。」

「・・・それでいいのか？」

「復讐なんかより、娘達の成長を見ていた方が楽しいからね。」

「変わったなスカリエッティ・・・・」

「自分でもそう思うよ。」

苦笑いしながらゼストに言うスカリエッティ。

「お前がそう決めたのならそうすればいい。俺は俺のしたいようにする。」

「元からそうするつもりさ。そしてルーお嬢様。」

「何？ドクター・・・・・」

「君の母親、メガーヌアルビーノだが、もう少しで処置が終わる。」

「処置・・・・・・・・？」

「貴様！！まさか・・・・・」

「違うよ、君の母親は本当はレリックが無くても目覚めるんだよ。」

「えっ・・・・・・！？」

「何だと！！」

そう言ってゼストはスカリエッティの胸ぐらを掴み、持ち上げた。

「貴様！！最初からルーテシアを利用するために！！」

「否定はしないさ、始めはそのつもりだったのだからね。だけどその必要も無くなったし、何より親と子供を離すなんて今の私には耐えられない。だからもう少し待ってくれ、そうすれば君の母親は目覚める。」

「そう・・・・・」

嬉しそうにもなくルーテシアが頷く。

「おや、反応が薄いねぇ。」

相変わらずゼストに持ち上げられているのにも関わらずいつもと変

わらない様子で言うスカリエッティ。

「私には『心』が無い・・・・・だから嬉しいか分からない・・・・・
でもお母さんと会えれば・・・・・」

「そうかい・・・・なら戻るといいね。」

「うん・・・・・」

とルーテシアが返事したと同時にゼストはスカリエッティを降ろした。

「おや、殺さないのかい？」

「今お前を殺せばメガーヌが帰って来ないかもしれないからな。」

「そうか・・・・感謝するよ。」

「だが、俺は貴様が許せない！！」

「当然だね、恨まれることを私はやった。」

（・・・・コイツ、本当にジェイル・スカリエッティか？）

ゼストは彼の変わりように心から驚いていた。

出会った頃はこんなにも慈悲深くなかったし、こんなに清々しくも無かった。

歪んで、人ともかけ離れ、周りからマッドサイエンティストと言われる変態だった彼が・・・・・・

「ゼスト・・・・・・」

ルーテシアに声をかけられゼストは我に返る。

「・・・・分かってる。お前の話を信じ、様子を見ることにする。」

「それで構わないよ。もし私が裏切るような事をしたら私を殺したっていい。」

真顔で言うスカリエッティにゼストは顔をしかめた。

「さて、話は終わりだ。ルーお嬢様はウェンディ達と遊んできなさい。ウーノ、ルーお嬢様をリビングに連れていってくれ。」

「分かりました、ドクター。さぁ、ルーお嬢様行きましょう。」

「うん・・・・ゼスト、行ってくる・・・・」

「ああ・・・・・・」

ウーノと手を繋ぎ、ルーテシアは部屋から出ていった。

「さて騎士ゼスト、一杯どうかな?」

「酒か?」

「そうだよ。トーレに貰った日本酒に私もすっかりハマってしまっ

てね。騎士ゼストもどうだい？」

近くに置いてある冷蔵庫から氷を取り出し、２つの小さなガラスのコップに入れる。

「俺はいい。」

「固いこと言わずに・・・ととっ。」

スカリエッティはゼストの了承無しにコップに日本酒を入れ、ゼストに渡した。

（酒なんて何時振りだろうか？）

そう思い、ふと昔を思いだす。

あの時は自分がストライカーとして地上の部隊で戦っていたとき。思い出すのは自分の部下のクイント、メガーヌ、そして上司兼親友のレジアス。

クイントが酒に酔って夫の愚痴を言い始め、それを流しながらメガーヌが俺とレジアスの仕事の話に耳をかたむけていた。

思えば俺とレジアスは酒を飲む場でも仕事の話ばかりだった。あれほど地上の未来について熱心に語っていたレジアスが何故違法なことに手を染めてしまったのか？しかも友人である俺に相談なしに・・・

それはいつか確かめなければ・・・・

「騎士ゼスト？」

「ん？ああ、済まない。いただこう。」

俺はスカリエッティがくれた酒ということもすっかり忘れて酒を飲み始めた・・・・・

ウーノＳＩＤＥ

「ルーお嬢様！行ったっスよ！！」

「竜撃砲・・・・・」

「ウェンディ、避けて！！」

「うおっ！？いつの間にブレスが目の前に！？」

「邪魔だ、ウェンディ！・・・コイツを喰らえ！！」

「全くあいつらは・・・・」

目頭を抑えて呟くトーレ。

あなた、最近時間があればお酒を飲んでばかりいますね。

現に今も飲んでいますし・・・・

「ウーノお姉さま、ディエチと買い物へ行ってきますわね。」

「分かりました、けれどクアットロ、ディエチ、くれぐれも遅くならないで帰ってきて下さいね。」

「分かってるよウーノ姉・・・・」

ディエチが言って二人は部屋を出ていきました。

クアットロはあの事件以来、服に気を使うようになったのですが、外のものに興味を持ったのか、定期的に近くの街に行くようになりました。ディエチを連れて・・・・

いつも強引に連れていくような気がしますが、ディエチも買い物嫌いでは無いので嫌がってはいないようです。

「セイン、回復薬を分けてくれ!!」

「えっ!?私無いよ!!ルーお嬢様は?」

「私もない・・・・・」

「ちなみに私もないっス!!」

「威張るな!!」

ウェンディ、セイン、ノーヴェは暇さえあればゲームをしています。

何かやっとG級を受けられるって更に気合が入ってましたが、何の事かサッパリ。

あの3人はこれでいいのか正直分かりません。

恐らく駄目な気がしますが・・・・・

今度、零治君に聞いてみることにしましょう。

「あら、もうこんな時間。食事の準備に取り掛かろうかしら・・・・」

そう呟いて、ウーノは台所に向かった・・・・・

ウーノＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「ただいま！」

「ただいま・・・」

リビングにそんな声が響く。

時刻は７時前。ウーノもとっくに食事の準備を終え、４人（セイン、ノーヴェ、ウエンディ、ルーテシア）のやっているＷＩＩを見ていた。

トーレはソファーに気持ちよさそうに寝ている。

今帰ってきたのは買い物に行ってきた２人だ。荷物を持ってきていない所を見ると、２人とも先に自分の部屋に荷物を持っていったようだ。

「おかえりなさい二人共、今帰ってきて悪いのだけれどドクターとゼストさんを呼んできてもらっていいですか？」

「分かったウーノ姉。」

「ディエチ、私も行きますわよ。」

二人は部屋から再び出ていった。

「さて。セイン達も一回ゲームやめなさい、ご飯にするわよ。」

「みんな・・・・・ご飯。」

「そうっスね。」

「お腹減った～」

「飯何かな？」

ＷＩＩを終わらせた４人がテーブルにつく。

「みんな、お皿とか準備して。それと、寝てるトーレを誰か起こして上げて。」

それを聞いて３人は顔をしかめる。

まず、最初に行動を起こしたのはセインだった。

「ルーちゃん、一緒に準備しよう！」

「うん、いいよ・・・・・」

セインはルーテシアの手を掴み、台所へ向かう。

「あっ、ずるいっス！！」

「私がルーの面倒を見る！！」

ウェンディとノーヴェがセインからルーテシアを奪い、喧嘩を始めた。

これで分かったと思うが、セイン、ノーヴェ、ウェンディはルーお嬢様と呼ばなくなった。

セインはルーちゃん、ウェンディとノーヴェはルーと。

今までででかなりフレンドリーになっている。

「誰でもいいからトーレ起こしてきなさい・・・」

ウーノは溜息をつきながら喧嘩している3人に言ったのだった。

結果・・・・・・・・・

「ふぇ～ん・・・・・」

「セイン、元気出して・・・・・」

「うぅ、ルーちゃんありがとう・・・・・」

頭に大きなタンコブを作って泣いているセインをルーテシアが慰めている。

「すまなかった・・・・」

「トーレ、あなた一週間禁酒ね。」

「ま、まてウーノ！それだけは！！」

腕を掴み、一生懸命懇願するトーレ。

「駄目です、あなた飲みすぎなんです。少しは自重なさい。」

そんな・・・と絶望しているがウーノはそっぽを向いている。

「そう言えばクアットロとディエチは？」

呼びに行ってから2人は帰ってきてない。

流石に遅すぎるような・・・・

「ノーヴェ、ウェンディ、おかずつまんでないで食べる準備をしておいて。私はドクターを呼んでくるわ。」

「分かった。」

「ＯＫっス～」

ウーノは2人に任せてスカリエッティのラボに向かった・・・・・

「さてと・・・・・」

ドクターのラボの前に来てみましたが、部屋の中がものすごく静かです。
もしかして寝ているのかもしれません。けれどそれならクアットロとディエチはどこに・・・

そう思いながらラボにウーノが入っていった。

「うっ、酒臭い・・・・」

ラボの中は酒の臭いで充満していた。

「ドクター・・・・・」

ドクターにしては珍しく酔いつぶれたようだ。
床に大の字になって寝ている。

騎士ゼストはラボにあるソファーに座って寝ていた。

取り敢えず私はドクターを騎士ゼストが寝ている反対側にあるソファーに運ぶことにしよう。

「・・・・・ウーノか？」

「騎士ゼスト、起こしてしまいましたか？」

「いや、構わない。・・・・少し眠っていたようだな。」

「はい。」

「全く、お前のドクターときたら飽きずに娘達の自慢と愚痴をずっと聞かされたぞ。」

「も、申し訳ありません・・・・」

「まぁ、俺も中々楽しかったから構わないが・・・・時にウーノ、妹達を余り甘やかしすぎるのはいけないな。」

「うっ・・・・やはりそうなのでしょうか？」

今度真剣に零治君に相談することにしましょう。

「そうだ。食事が出来たのですが、騎士ゼストはどうしますか？」

「俺はこのまま休む。食事はいい。」

「分かりました。よければお風呂はどうですか？」

「風呂？」

「湯あみですよ。」

「・・・・そうだな、せっかくだからそうするか。」

「では、案内しますよ。」

私はソファーにドクターを寝かせ、騎士ゼストを風呂場へと案内した。

「そう言えばクアットロとディエチは・・・・」

「あの二人ならスカリエッティが酒を飲ませてダウンしたからラボにあった仮眠室に寝かせているぞ。」

「く～く～」

「すぴー」

仮眠室には一つのベットに一緒になって寝ているクアットロとディエチがいた・・・・・

## 第４５話　ゼストさん、スカさん家に帰る（後書き）

とこんな感じでスカさん家にゼストさんとルーちゃんがやって来ました。

メガーヌさんはもう少し後ですね。

しかしゼストさんは作者ものすごく大好きです。
なぜ、ゼストさんはこんなにかっこいいのにレジアスさんはあんなに残念なんだ・・・・

二次創作で読んでいてゲンヤさんみたいな感じを想像してましたが、実物をみてかなりがっかりしました。

次は有栖家、スカさん家に遊びに行くです。

それと今回の投稿からスマホに変えたことにより、慣れるまで投稿がかなり遅くなると思います。

これからもよろしくお願いします。

## 第４６話　スカさんのお願い（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はほんのちょこっとバトルがあります。

ちょこっとですが。

# 第４６話　スカさんのお願い

「おおーっ！！ラスボスのダンジョンみたい！！」

ライが興奮ぎみに叫ぶ。

あながち間違いじゃないけど・・・・・・・・

俺達有栖家は夏休みに里帰りするフェリアと共にスカさん家に遊びに行くことにした。

前回の移動が複雑だったのを踏まえ、朝早めに来たのだが・・・・

「ふぁ～あ。で、なんで俺達も？」

「そうよ。」

「お前らな・・・・・」

桐谷はあくびを、加奈はだるそうに言う。

そして今回桐谷と加奈もスカさんの家へ連れてきた。

この先何があるか分からないし、この世界のスカさんを信じていないわけではないが、もし敵になった場合に顔ぐらい分からないと困るだろうと思ってだ。

なのに等の本人たちは無関心である。

「フェリア、セイン達は？」

「おそらく皆ホールにいると思う。」

「よし、それじゃあ早く・・・・・」

「待て。」

俺は先に行こうとしたライの首根っこを掴む。

「ぶぅ～何すんだよレイ・・・」

「何って、お前場所分かるのか？」

「あっ・・・」

その場にいた全員がため息をついたのは言うまでもない・・・・・

「ライ！！」

「セイン！！」

二人は顔を合わせた瞬間抱き合った。

フェリアの案内でホール（リビング）に来たが、そこには本を読んでいたセインがいた。

「・・・・大きくなった？」

「うん？身長は伸びてないよ。ブラジャーは新しいのを買わなくちゃいけなくなったけど・・・・」

それを聞いた女性陣（有栖家の面々と加奈とセイン）の顔が・・・

ライめ、また余計なことを。

「皆さんよく来ましたね。」

「こんにちはウーノさん。」

台所にいたウーノさんがこちらに来て挨拶をした。

「初めまして、有栖星です。」

「有栖ライだよ。」

「有栖夜美だ、よろしく頼む。」

「佐藤加奈です、よろしくお願いします。」

「加藤桐谷だ、よろしく頼むな。」

そう言った桐谷をウーノが見た。

「何か？」

「あなたがあの赤いロボットの操縦者？」

「ロボットの操縦？」

「あれはあなたが操っていたのではないのですか？」

「あれは、えっとバリアジャケットだっけ？あれみたいなもんですよ。さしずめ“バリアアーマー”って所ですかね。」

「アーマー・・・だからあんなに硬いのね。ということは零治君の黒の亡霊も・・・」

「まぁコイツの言ったバリアアーマーって呼んだほうがいいっすね。」

俺の場合はパージも出来るし。

そんな話をしていると・・・

「チンク姉、レイ兄、星姉、ライ姉、夜美姉、加奈姉、桐谷兄。」

俺達の後ろから名前を呼ぶ声が聞こえた。

この声はウェンディだな。

「あっウェンディ、お久しぶ・・・・」

星はそこまで言って固まった。

「どうした星？」

固まった星に夜美が声をかけた。

とその時、

「きゃあああああ！！」

星の叫び声がスカさんのリビングに響く。

星の目の前には緑色の半魚人がいた。

「レ、レイ～！」

星は涙目になりながら、俺の後ろに隠れた。

「は、は、は、半魚人が！」

「星、恐らくウェンディだぞ・・・・・」

夜美は呆れながらも冷静に言った。

「えっ！？ウェンディ？」

「ちぇ、やっぱ夜美姉にはお見通しっスか～」

半魚人はそう言って頭を取り始めた。

「頭が取れた～！！！」

俺の腕に泣きつく星。

「落ち着けって！ウェンディなんだよ！！」

「ぐすっ、でも恐いんだもん・・・・」

ヤバい、凄く可愛いんだけど。何この生物。

で、結局・・・・・・

「ごめんなさいっス、少しやり過ぎたっス・・・・」

「全くです・・・グスッ、もうあんなことしないでください。」

俺の服の袖を掴んだまま、目の赤い星は説教をしていた。

いつもの感じはなく弱々しい。

（星姉可愛いっス。）

「聞いてますか、ウェンディ？」

「バ、バッチリっス。星姉は萌えるっス！！」

笑顔でサムズアップするウェンディ。反省のはの字も無い。

「今の星じゃ、いくら説教しても迫力が無いな。」

「今度から星を驚かせれば、説教も優しくなるんじゃないかな？」

「ライ、そんなことしたら俺が代わりに説教な。」

「うっ・・・」

「あれ、チンク姉？それにみんな？今日だったっけ？」

「久しぶりだな、ノーヴェ。」

星も落ち着き、リビングでのんびりとし始めた頃、ノーヴェが部屋に入ってきた。

「ノーヴェ、他のみんなを見ていませんか？」

「見てないぜ、みんなまだ部屋だと思うよ。」

「ならお客様が来ているのだから挨拶ぐらいさせないと。皆を連れてくるわね。」

そう言ってウーノさんは部屋を出ていった。

「ノーヴェ、早くこっちに来るっス！みんなで狩りに行こうぜっス！！」

ＣＭみたいに誘うウェンディ。

「分かったから、ＰＳＰ取ってくるからまだ始めるなよ。」

今度はノーヴェも自分の部屋に戻る。

「なぁ零治・・・・」

「何だ桐谷。」

「何であんなに馴染めてるんだ?」

俺、桐谷、加奈、星は大きなテーブルの椅子に座り、はしゃいでるライ達を見ていた。

「私、こんな変な場所怖いわ・・・・」

まぁ加奈の反応が正しいよな。稼働してないとはいえ、不気味だし。いっそのこと建て替えろよスカさん・・・

ライだけはテンションが違かったけど・・・・・

「うぅ・・・・」

「星、まだ駄目か?」

相変わらず俺から離れない星。

「すみません、もう少しこのままで・・・・・」

「まぁ構わないけど・・・・・」

加奈の視線がものすごくキツイんですよね・・・

「やあ、いらっしゃい。」

と、そんなときスカさんがやって来た。

紫の髪をしたロリっ子を連れて・・・

「スカさん、アンタやっぱりロリコンだったか・・・フェリアを造った辺りから怪しいと思っていたが・・・」

「何か勘違いしているようだが・・・この子はルーテシア。」

「ルーテシア・アルピーノです・・・・・」

ルーテシアって・・・・・・

ああ!!バカでかい虫を召喚したり、なんか虫の要素を感じないガリューだっけ?を召喚する虫大好き少女だったよな。

「俺は有栖零治だ。よろしくな、ルー。」

「あなたがレイ兄?」

「ん?ウェンディにはそう言われてるけど。」

「ウェンディがよく話に出す・・・・」

「・・・何か嫌な予感しかしない。」

「小さい子が好きだから気を付けろって・・・・」

「ウェンディ！！！」

俺はウェンディに制裁を与えるため、レアスキルでジャンプした。

「初めて直接見たが、やはり便利なレアスキルだね。」

「遠距離は流石に無理だけどな。」

あの後、俺はウェンディにお仕置きをし、今、とても爽やかな気分になっている。

俗に言ういい仕事をしたなぁって感じである。

「ジェイル。」

「ああ、すまない。さっきも言うようにここの羽の部分にもブースターをつければいくらか安定すると思うんだけどね。」

「羽ではないのだが・・・それに、これ以上重量が増えると更に操るのが難しそうだ。」

「要するに今使っている物で安定させて欲しいってことだね？」

「ああ、出来るか？」

「面白いね、やらせてもらうよ。先ずは・・・」

普通に馴染んでるな桐谷・・・
加奈と星はウーノさんと話が弾んでるみたいだ。
ルーはウェンディ達の所へ行ったようだ。

「っとそうだ、零治君、頼みがあるんだが・・・」

「何？」

「ルーテシアの事なんだが・・・・」

そう言ってスカさんは俺にメガーヌさんの話をし始めた。

「なるほどね。スカさんも心を入れ替えたってことか。」

「だけど、目覚めさせるのに必要な物があるんだ。」

ああ、成る程。

「それを取ってきて欲しいってことか。」

「その通り。すまないが・・・」

「それくらい構わないさ。・・・でもナンバーズに行かせても良かったんじゃないか？」

「ナンバーズには別にやってほしい事があるのでね。」

「ナンバーズにね・・・・」

俺はそう言ってセイン達を見た。

「ライ行ったよ！！」

「任せて！！」

「うわっ！？ルー！そっち行ったっス！！」

「任せて、これで決める・・・・」

「ノーヴェ、そっちにいたか？」

「ううん、こっちには居ないよチンク姉。夜美は？」

「こっちもいないみたいだ。」

「これでな・・・・」

遊んでばっかりじゃないのか？

前に来たときもウェンディ達は遊んでいたような・・・

「彼女達じゃないよ。トーレ、クアットロ、ディエチさ。彼女たちにはまだ早いからね。」

まぁあんなんだからな・・・
何するか分からないけど、ウェンディなら１００％失敗するところしか思い浮かばない。

「ふ～ん。まあいいや。何処に行けばいいんだ？」

「第６管理世界のアルザス地方さ。」

「で、何でお前らまで来てるんだ？」

「いいじゃない、手伝ってあげるんだから感謝しなさい。」

「頼んでないし。」

「いいじゃないか、俺にとってもジェイルが作ってくれたプログラムを試して見たいし。」

「いや、戦闘になるとは限らんし。」

「わ、私はレイがいないと不安で・・・」

「星、お前はそんなキャラじゃないはずだ！」

うる目で懇願する星。

俺を萌え死にさせる気か・・・・

今の会話で分かる通り、星、加奈、桐谷が付いてきた。

ここは一応管理世界なので管理局員も少なからずいるはず・・・

せめて星と加奈は帰ってもらいたかったが、星を見て折れた。

まぁ心配しすぎか。

只今俺達はアルザス地方にある大森林の中を歩いている。

探しているものは光蓮花と呼ばれる花で、白く透き通った花で、暗い洞窟の中で光輝くらしい。

それを探しに来ているのだが・・・・

「砕氷刃！」

氷の刃で茂みから出てきた大きな蜘蛛をバツの字に斬り付けた。

「何でこの世界は生物が大きいのよ！！」

フェアリーを操りながら加奈が叫ぶ。

加奈が叫ぶのも分かる。何せ襲ってきた生物が大体３メートル以上なんだよ。

俺でも叫びたくなるわ。

しかも・・・・・

「どけっ！！」

ヒートホーンで近づいてきた巨大カブトムシを桐谷が吹っ飛ばす。

今俺達は大量の虫に囲まれている。それを相手にしてるのは俺と桐谷。

星と加奈は後衛でバインドとフェアリーによる攻撃で敵を抑えている。

星の魔法だとどうしても爆発で目立つのでバインドのみ。

桐谷もクレイモアは禁止。爆発音が響くからな。

派手に戦うと管理局員が来るかもしれないし。

だけど・・・

「ったく、切りがない。」

「レイ、どうします？」

星が虫たちにバインドを多重にかけ、虫たちを動けなくする。

「仕方ない、前方の虫を吹っ飛ばして逃げるぞ！」

「それしかないか・・・・」

「また走るの！？」

「加奈、文句を言うな！！星頼む！！」

「分かりました、皆さん道を開けてください！！」

ルシフェリオンを前に構え、星が言う。

「ブラストファイヤー！！」

星の砲撃が虫の大群に一直線に伸びる。
それにより虫達は吹っ飛び、目の前に一直線の道ができた。

「みんな行くぞ！！」

俺たちはその道をダッシュで進んだ。

「ふぅ、なんとか逃げ切ったな・・・・」

俺たちはあのまま虫たちを振り切り、綺麗な湖に出た。
日差しが湖に降り注ぎ、綺麗さを更に引き立てている。

「もうへとへと・・・」

加奈はその場にへたり込んだ。

「私も少し休みます・・・」

星もその場に座る。

やっぱり女の子にはキツかったかな・・・

「俺、少しこのへんの様子を見てくる、桐谷その間頼むな。」

「ああ、気を付けてな。」

俺は湖の周りを歩きだした。

「静かだな。」

俺は歩きながら湖を観察していた。

「綺麗だ。」

そんな感じで少し油断していたんだろう。

「おわっ！？」

いきなり茂みから何かが現れ、俺にぶつかった。

いつもなら警戒してぶつかったりしないのだが・・・・・

だが、その衝撃は弱く、逆にぶつかったほうが軽く吹っ飛んだ。

「痛た・・・」

ぶつかった所をさすりながら俺はぶつかってきたものを見る。

どうやら虫ではないようだ・・・・って！！

「人間！？」

そこには気絶したピンク色の髪の毛の女の子と小さな白い竜がいた・・・

## 第４６話　スカさんのお願い（後書き）

名前には出してませんが分かりますよね。

次はピンクの髪の女の子の話です。

いやぁ～ずっと出したかった。

光蓮花の名前はその場の思いつきです。スルーしてくださいな。

活動報告にも出しましたが、スマホにしました。
なれないため誤字がものすごいことになってると思います。

申し訳ないですが指摘していただけるとありがたいです・・・・

## 第４７話　キャロの思い、零治の思い（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回はピンクの少女について。

シリアスとバトルが少々になっています。

# 第47話　キャロの思い、零治の思い

???SIDE

「強い力は争いしか生まぬ。済まぬなキャロ、お前をもうこの里に置くことは出来ないのじゃ・・・しかしお前には黒き竜の加護を受けておる、きっと大丈夫じゃ。」

そう言われ、里を追放されて一週間が経ちました。

あの後、私はフリードと共に森をさ迷い歩きました。

なんども襲われて、逃げて隠れて、それの繰り返し。

あらかじめ貰った食料も底を尽き、食べ物ももう無いです。

視界も眩んできました・・・

私、ここで死んじゃうのかな?

なんで私にこんな力があるのかな?

私がいられる居場所ってあるのかな?

私って生きてちゃいけないのかな？

そんな時、

「おわっ！？」

私は何かとぶつかり、その衝撃で私は倒れました。

「痛た・・・・」

私も痛いです・・・・

あれ？意識が・・・・・

「おい！しっかり・・・・・」

何か言ってるけど・・・私にはもう・・・

やっぱり、私死んじゃうのかな？

でも、やっぱり死ぬのは嫌だな・・・・

？？？ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「加奈！！」

俺は女の子をお姫様抱っこして星達の所へ走った。

「零冶！？」

「どうしたの・・・・・って兄さん！？」

「レイ、その子は？」

「話は後だ、加奈、この子に回復を頼む！！かなり危険な状態なんだ！！」

「分かったわ！！」

俺は星が敷いてくれたタオルの上に女の子を寝かせる。

「命を照らす光よ此処に来れ、ハートレスサークル。」

緑の魔法陣に女の子が包まれる。

すると徐々に女の子の傷が消えていく。顔にも生気が戻ってきたのか顔色も良くなった。

「どうだ？」

「大丈夫みたいだ。」

「でも油断は出来ないわ、暫く様子を見ましょう。」

加奈の提案に俺達3人は頷いた。

???SIDE

「こ・・・こは・・・」

私は目を覚ました。

私はどうやら寝ていたみたいです。

（生きている・・・・）

私は体を起こしてそう実感したとき、自然に涙が溢れました。

（良かった・・・・・）

心の底から安堵しているうちに、自分の体の調子に違和感を感じました。

（痛みがない？）

というより傷がありませんでした。

あれだけ傷だらけだったのに・・・・・

それだけでなく、悪かった体調も随分良くなっていました。

「気がついたか！！」

そう言って私の目の前に一人の男性が現れました。

「大丈夫か！？」

「は、はい！！」

いきなり大声で声をかけられて驚いてしまいました。

「レイ、そんなに大声で話しちゃビックリするじゃないですか。ごめんなさい、悪気があったわけじゃないんです。」

「い、いいえこちらこそ・・・・」

男の人と一緒にいた、栗色の短髪の女の人が優しく話しかけてきてくれました。

凄い美人さんだな・・・・・

「私は有栖星と言います。あなたのお名前は？」

「キャ、キャロ・ル・ルシエです・・・」

「キャロ、可愛い名前ですね。」

そう言って私の頭を撫でてくれる星さん。

暖かい手・・・・

「さっきは驚かせてすまなかったな。俺は有栖零治、よろしくな。」

「はい、零治さん・・・」

あれ?苗字が同じって事は・・・

「お二人は夫婦ですか?」

「ふ、夫婦!?」

「ああ、違う違う。星は俺の家族さ。」

星さんは驚いてるけど、零治さんは慣れたようにスルーしました。

いつも言われてるのかな?

「兄弟ですか?」

「いいや、違うよ。」

じゃあ、一体・・・・

ぐぅ～!!

あっ!!

「・・・まずは何か食べるか?」

「・・・お願いします。」

恥ずかしいです・・・・・・

キャロＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「もぐもぐ・・・」

「がつがつ・・・」

いやぁ、いい食べっぷりだな、キャロとフリードは。

まさか原作キャラと出会うことになるとは・・・・・・

ほとんど忘れかけてるけど、こんなメインキャラを忘れる事は無かったみたいだな。

「あの・・・おかわりいいですか？」

「いいですよ、どんどん食べてください。」

「クキュー。」

「はいはい、フリードもいいですよ。」

そう言いながら、持ってきたパンを二人?に与える。
かなりの食いっぷりから随分食べていなかったみたいだな・・・

あの後、フリードもちゃんと紹介してもらい、俺達が持ってきた食料を二人に与えた。

桐谷と加奈は周辺の捜索と食べれそうな物を探しに行ってもらってる。

もう既に持ってきた食料の4割は食べちゃってるからな。ほとんどフリードだけど・・・・
まぁ仕方がないか・・・・・

「零治。」

と、そんな時、桐谷と加奈が帰ってきた。

「どうだった?」

「一応木の実やフルーツっぽい物はあったわよ。エタナドにも見てもらったから毒なんかもないわ。味は保証しないけど・・・・」

「そうか、まあこの際贅沢は無しだな。」

「あの・・・・」

「ああ、紹介が遅れたな、こっちが加藤桐谷、こっちが佐藤加奈だ。」

「キャロ・ル・ルシエです・・・・」

「よろしくな。」

「無事でよかったわ、本当に。兄さんが慌てて連れてきたときにはどうなるかと思ったわよ。」

「そうなんですか？」

そう言われて俺を見るキャロ。

そんなに見つめられると恥ずかしいんだけど・・・

「でも、本当に無事で良かったですよ。けれど一体何があったのですか？」

自己紹介が終わり、星がキャロに話を切り出した。

「それは・・・・・・」

少し戸惑いながらキャロは話し始めた。

「そんな・・・・こんな子供に・・・・・」

「酷い！！何でそんなことが出来るの！？」

星は悲しそうな顔で、加奈は今にも暴れそうな感じでそれぞれ言った。

言った本人のキャロもその生活を思い出したのか、震えていた。

俺は二次創作で読んでいたので、ある程度把握していたつもりだったけど・・・・

「許せねぇ・・・・」

怒りが抑えられなかった。

「・・・・・・・」

桐谷も俺を見て頷いている。

そうか、やっぱり考えている事は同じか・・・・・・

「行くぞ・・・」

俺はキャロの手を掴んで歩き出す。

「ちょっと、何処に行くのよ！？」

「集落に行って一発殴ってくる。」

「レイ、駄目ですよ！桐谷も何か言ってください！」

「悪いな星、今回は俺も零治と同じ思いだ。」

「アンタたちやめなさいよ！そんなことしたらキャロが余計居づらくなるじゃない！」

「だけど！！」

「いいんです！！」

いきなり大声で叫んだキャロに俺たちは黙った。

「私のこの力が悪いんです・・・集落の人達は悪くありません・・・」

「そんな事・・・」

「違うんです、私は一回力を暴走させて集落を半分燃やしてしまった事があるんです・・・」

それを聞いて、星も何も言えなくなってしまう。

「みなさんも私から離れた方がいいです。この力は危険ですから・・・」

悲しそうな目で言うキャロ。

「何で私ばっかり・・・こんな力望んでないのに・・・・」

小さく呟いたつもりだろうが、俺にはハッキリ聞こえてしまった。

「やっぱり私は生てきちゃいけないんだ・・・・」

それを聞いて俺は我慢出来なくなった。

「そんな事ねぇよ・・・」

「兄さん?」

「零治?」

「レイ?」

「そんな事ねえ!!」

俺はそう叫んで、キャロの両肩を掴む。

「誰だってな、生きてちゃいけない人間なんて居ないんだよ!!」

「でも・・・私にはこんな危険な力があるんですよ、他の人を危険な目にあわせるだけじゃないですか。」

「そんなことない!!その力は必ず人の為になる。今は駄目かもしれない、だけど努力すれば・・・」

「でも・・・でもその間にまた暴走してたくさんの人を・・・」

「そんなこと俺がさせない、俺達がさせない!!だからガキが一人で全部詰め込むな!!」

「でも、私はあかの他人ですよ？」

「そんなことどうでもいい。それでも納得出来ないのなら俺の家族になれ！！それなら文句ないだろ！！」

「ちょっと、兄さん！？」

「零治・・・・・・」

加奈が驚き、桐谷が呆れたように言うが気にしない。

「今更子供一人くらい増えても問題ない。」

「そうですね。」

「ちょっと、星！？」

「レイのお節介はいつものことですよ。」

「で、キャロ。お前はどうする？」

「私は・・・・」

「お前が協力してほしいというなら協力する。だけど・・・」

「どうするかはあなたが決めるべきです。」

「星さん・・・・・でも、もし私の力で皆さんに怪我を負わせたら・・・・・」

あ～もうじっれったい！！

「俺が何とかしてやる、それなら文句ないだろう？」

「でも私が暴走させちゃったのって、“真竜”クラスのヴォルテールって竜なんです。」

ふ～ん、真竜クラスねぇ・・・・・

「それがどうした？」

「えっ！？」

「問題ねぇって言ったんだよ。俺がそのヴォルテールを黙らせてやればいいんだろ？やってやるぜ！」

「兄さん・・・」

「零冶・・・」

「レイ・・・」

「だからもう生きちゃいけないなんて悲しいこと言うな！」

そう言って俺はキャロを抱きしめた。

「ふぇっ！？」

「つらかったよな、怖かったよな、もう大丈夫だ。これからは俺が

キャロを守るから。」

「ううっ・・・・・ふぇ～～～ん!!」

我慢していたのだろう、まだ5歳の女の子だもんな。

俺はキャロが泣き止むまでずっと抱きしめていた。

それから俺たちは森の中でも見晴らしの良い場所を見つけ、そこに結界を張った。

「よし、ここなら暴れても問題ないだろ。キャロやるぞ!!」

「は、はい!!」

キャロは赤い目のまま、召喚の準備を始める。

だが・・・・

「キャロ?」

いつまでたっても召喚されなかった。キャロを見ると手が震えている。

「キャ・・」

「私が行きます。」

俺は励ましに行こうとしたが、星が行くと言ったので俺は星に任せることにした。

「キャロ。」

「星さん、やっぱり無理です。私、零冶さんを危険な目にあわせたくないです・・・」

「キャロ、レイを信じてくれませんか？レイは無理なことを出来るとは言わない人ですから。」

「ですけど・・・・」

「レイは強い人ですよ。強さだけでなく、心も。特に家族のためなら絶対に折れたりなんかしません。だから負けませんよ。」

「でも、私は家族じゃ・・・」

「キャロにまだその気がなくてもレイはもうその気でいますよ。」

「でも、私は血もつながっていないし・・・」

「有栖家は誰一人血なんかつながっていませんよ。」

それを聞いてキャロは驚く。

「前にレイが言ってました。『血なんかよりも深い絆があればそれはもう家族だ。その絆はどんなものよりも固く、強い。それはもう立派な家族だ。誇っていいほどにな。』ってね。」

「絆・・・・・」

「そうです。」

「絆・・・いいですね。」

「クキュー！」

「ふふ、フリードも気に入ってくれたみたいですね。それにレイにとってはもうすでにキャロとフリードも入っているのかもしれませんけどね。」

笑ってキャロに言う星。

「私もですか？」

「ええ、でなければここまでしませんよ。」

しばらくキャロは俯いていたが、覚悟を決めた顔になって・・・

「・・・分かりました、私も零治さんを信じようと思います。」

そう言って零治の方を向くキャロ。その手には震えは無くなっていた。

「零治さん、いきます！！」

「ああ、来い！！」

「竜騎召喚、ヴォルテール！！」

キャロの召喚に、

「グオオオオオオオ！！」

凄まじい咆哮と共に１５メートルほどの竜が・・・・・って、

「デカっ！？」

『マスター！』

「待てっ！もしかしたらキャロが・・・・」

「ごめんなさい、やっぱり！！」

『はやっ！？』

「いや、元々そのつもりだ。行くぞラグナル。」

『はい！ブラックサレナ展開！！』

ラグナルの声により俺の体にブラックサレナの装甲が展開された。

「行くぞ！！」

俺はフィールドを展開してそのまま突っ込んだ。

「零冶さん・・・・・」

キャロは空中で激闘をしている零冶を見ていた。

「心配？」

「はい、でも私決めましたから、零冶さんを信じるって。」

「そうですね、信じましょう。」

「ラグナル」

『ジャンプ！！』

飛んできた火球をボソンジャンプで避ける。

「こなくそ！！」

相手の視界に現れて両腰にあるレールガンを射出するが・・・

「効いてないか・・・」

『はい、さすが真竜クラスと言った所ですね。うろこの硬さが半端ないです。』

しかも攻撃したことにより俺の位置をヴォルテールに気づかれてしまった。

「フルチャージのグラビティブラストはどうだ?」

『与えられると思いますが、それでも・・・それにフルチャージだと魔力に限界が・・・せめて弱点があれば・・・』

弱点ね・・・

俺は相手の巨大な爪によるなぎ払いを避けながら考える。

(いかに、硬いうろこでも内からなら・・・しかしそんなこと出来ないし、いっそボソンジャンプで腹の中に・・・ってそれじゃ殺しちまうし・・・)

『マスター!!!』

「やべっ!?」

火球とは違う、巨大な砲撃が俺に一直線に伸びる。

「ディストーションフィールド最大出力!」

『イエス、マスター!!』

とっさに分厚いフィールドを張るが、耐え切れず砕かれた。

「何っ！？」

俺はその巨大な砲撃に飲まれた・・・・

「零冶さん！！」

ヴォルテールの巨大な砲撃に飲まれる零冶さん。
やっぱり零冶さんも・・・

「星さん・・・」

「大丈夫ですよ。レイはこんなんじゃ負けないですよ。」

そう言い切る星さん。その顔に心配の色は無かった。

（私も信じると決めたんだ。星さんみたいにちゃんと信じてるんだ。）

キャロは再び目線を零冶に移す。

現れたのは赤い線の入った白い鎧を纏った零冶だった・・・・

『マスターうまくいきますかね？』

「やるしかねぇよ。俺はヴォルテールを殺すつもりなんか無いからな。」

そうだ、殺すんじゃない。あくまで目的はキャロを安心させるためだ。

ヴォルテールは後に必ずキャロのために力になってくれる。

だから・・・・・

「行くぜ、ラグナル。」

『はい、翻弄してあげましょう。前のときみたいに行きませんませんからね！』

自分の身長ほどある銃、パルチザンランチャーをヴォルテールに構え、動いた。

「まずはEモード！」

『どうぞ～！！』

パルチザンランチャーを構え、動きながら二つの銃口の上からビームの魔力砲を打つ。

ヴォルテールに直撃したが、ダメージは無いみたいだ。

だけど、

「そらそらそら！！」

俺は高速移動しながらパルチザンランチャーを撃つ。

一発でだめなら１０発、それでも駄目なら１００発。

その姿は幾つものアーベントが一斉射撃しているように見える。

「グゥ！？」

チビチビ与えているせいか、反応が少し変わったヴォルテール。

だけど・・・・

「それだけじゃねえぞ、Ｂモード！」

『こっちはさっきより痛いよ～！！』

パルチザンランチャーの二つの銃口の下

の部分、そこから大きな魔力弾が撃ちだされる。

こっちは連射できないけど・・・

「一発の威力はさっきより効くぞ！」

一発撃って、パルチザンランチャーを一回転回し、再び撃つ。それを3回続けた。

ダメージは対したことなさそうだが、じわじわと効いてくるだろう。

「グオオオ！！」

うっとおしく感じたのか、さっきと同じように巨大な砲撃を撃とうとしている。

この姿で食らったら一発でお陀仏。

だけど・・・

「それを待っていた！！」

俺は瞬時にヴォルテールの懐に潜り込み、パルチザンランチャーの持っていない左手にアルトアイゼンほどではないが、それでも大きいステークを展開した。

「口の中を火傷しな！！くらえ、Gインパクトステーク！！」

俺はアーベントの唯一の近戦武器、Gインパクトステークであごを思いっきり突いた。

貫くことは出来なかったが、それによってヴォルテールの口はしっかりと閉じ、中に貯めたエネルギーが口の中で爆発する。

「グギャアアアアア！！！！」

「うわっ痛そう・・・」

さっさと離れた俺はその光景を見ていた。口をあけて暴れている姿は痛々しい・・・

だけど・・・

「キャロの為だ、悪く思うなよ。」

『フルドライブ、ブラスターモード！』

白い鎧にあった赤い線が青くなる。

それと同時に背中にある翼が大きく開き、パルチザンランチャーの銃先が変形してさらに長くなる。

「ラグナル、速攻で決めるぞ。パルチザンブラスターFモード！」

「チャージ開始・・・・・・・・・・・・OKですマスター。」

「パルチザンブラスターフルバースト！！」

さらに大きくなった二つの銃口に赤と青のエネルギーが螺旋状に集まる。

貯まったエネルギーが一気にヴォルテールの口へ放出された。

きれいに赤と青の螺旋を描いた魔力砲は、一直線に大きく開けたヴォルテールの口へ行き

「グギャアアアアアアアアアア！！！！！」

大きな悲鳴のような声を上げヴォルテールはその場に倒れたのだった。

キャロＳＩＤＥ

「うそ・・・・」

私は目の前の光景が信じられませんでした。

信じていましたし、負けるとも思っていませんでしたが、こんなに簡単にヴォルテールに勝つとは想像していませんでした。

「ね、勝ったでしょ。」

「は、はい。」

「とりあえず、レイの所へ行きますか。」

「は、はい！」

私たちは急いで降りてきた零冶さんの所へ向かいました。

私たちが着いたころには加奈さんと桐谷さんが既に話しかけていました。
ヴォルテールも消えていて、結界も解除されていつもの森に戻っています。

「しかし凄いわね、兄さん。」

「いや、暴走してなかったらかなり苦戦したよ。やっぱり真竜は伊達じゃないわ。」

鎧を解いて苦笑いしながら言う零治さん。その場にすぐに座りました。

すぐさま、加奈さんが回復魔法をかけています。

「最後のあれが言っていたブラスターモードか?」

「ああ、アーベント版のフルドライブだな。やっと砲撃を撃てるようになったってとこ。・・・けれど、これで少しでも動いたら3日は全身筋肉痛で動けなかっただろうな・・・」

話しかけた桐谷さんに、苦笑いで答えています。

確かに重々しそうに動いています。

「キャロ!」

「!!」

私に気づいた零冶さんが話しかけてきました。
けど・・・・
「行っていいのですよ。」
「・・・はい！！」
星さんにそう言われて私は零冶さんの胸へ飛び込みました。
「おおっと。キャロ、見てたか?ちゃんと勝っただろ。」
「はい、でも心配しました・・・・」
「・・・・まあハッキリ言ってかなり強かったからな。」
苦笑いしながら零治さんが答えます。
「けれど、これで今日からお前は有栖キャロだな。」
「・・・・いいんですか?」
「何をだ?」
「私なんかが零冶さんたち・・・あたっ!?」
そう言いかけたらデコピンされました。
「うぅ～何するんですか・・・」

ジト目で睨みますが、笑ってごまかされました。

「もう家族なんだから他人みたいな言い方は駄目だ。俺のことは呼び捨てかレイと呼べ。」

えっ!?でも・・・・・

「どうした?」

「年上の人を呼び捨てで呼べません・・・」

「そうか?俺は気にしないんだが・・・」

そう言われても・・・・・

「だったらお兄ちゃんはどうですか?」

星さんが笑顔で言ってくれました。

ああ、それなら・・・

「待て!!それは・・・・」

「駄目ですか?お兄ちゃん・・・・」

そこで否定されると悲しいのですが・・・・

「全然問題ないです!!」

良かった。即ＯＫもらえました。

「「「ロリコン・・・」」」

「待て！？今のタイミングでそれを言われると俺、社会的に抹殺された気がする！！しかも星、お前が提案したんじゃないか！！」

「まさかそんなにテンションが上がるとは思いませんでしたから。」

「変態に人権は無いわよ。」

「桐谷さん、ロリコンって何ですか？」

「キャロ、知るのはもう少し大人になってからだ・・・・」

むぅ、子供は知ってはいけないことなのでしょうか？

「俺はただ単に純粋無垢な子供と小さい動物や可愛いものが好きなだけだ！！断じてロリコンではない！」

「十分ロリコンで通じるわよ。星、ちゃんとキャロを見てなさいよ。何するか分からないから。」

「はい、分かってますよ。」

「何もしないっての！！」

お兄ちゃんをいじって楽しんでる加奈さんと星さん。

二人とも楽しそう・・・・・

お兄ちゃんは今にも泣きそうに・・・

「くすっ」

「・・・やっと笑ったな。」

「そう言えば・・・」

追放されてから笑ったことなんか無かったな。

「私、お兄ちゃんと出会えてよかったです。」

「そうか・・・・」

しばらく私はお兄ちゃん達のことを見て笑っていました。

辛い事ばかりでしたが、私は最後に家族を得ることが出来ました。

こんな私にも居場所があったんですね・・・・

これからは有栖キャロとして生きていきます。

キャロＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「あっ、光蓮花！！」

「「「あっ・・・」」」

森を出て、転送装置に乗り、帰ろうとした直前に星の一言で本来の目的を思い出した俺たちだったが、キャロがたまたま逃げ込んだ洞窟に見つけたらしく、念のためと摘んでくれたおかげで、戻らずにすみました。

キャロ、マジでありがとう・・・・・

## 第47話　キャロの思い、零治の思い（後書き）

と言うことで有栖家に新たな家族が加わりました。

今回原作とは違い、ヴォルテールが暴走し、それによって追放されたことにしています。

後、ヴォルテール弱すぎでしたかね？

それが一番気になるところですね・・・・・

次はスカさん家に帰っての話です。

今回結構長いうえに、早めに終わったため誤字がすごいかもしれません。

3度程読み直していますが、違和感や、誤字など気がついたら気軽に教えてください。

これからもよろしくお願いします。

## 第４８話　キャロ、スカさん家に行く。スカさん家の異変（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

今回も早めに投稿することができました。

キャロメインのハズが、そんなに目立ってないかな・・・・

# 第４８話　キャロ、スカさん家に行く。スカさん家の異変

「皆さんはじめまして、有栖キャロです。」

「「「「「・・・・・」」」」」

「ん、どうしたんだみんな？」

「ウェンディ、管理局に電話。」

「任せろっス、チンク姉。このロリコンは社会から抹殺されるべきっス。」

「ちょっと待て、落ち着くんだ２人共。ここを管理局に知られると私達が困る！！」

慌ててスカさんが二人を止める。

「お前らな・・・俺がロリコンに見えるか？」

「「「「「うん！！」」」」」

ゲーム好きのいつものメンツが頷く。

コイツら・・・・

「私も流石に否定できないな・・・・」

「スカさんまでに言われるとは・・・一体俺が何をした！？」

「「「「「「「「「「幼児誘拐。」」」」」」」」」」

「違ぁう！！！」

俺の叫びは奴らに届かなかった・・・・

「ウーノ、ロリコンって・・・・？」

「ルーお嬢様には早すぎます！」

「成る程、そんなことがあったのか・・・」

星達の説明により、何とか誤解は解けたが、俺のガラスのハートが・・・・・

「大丈夫です、お兄ちゃんは悪くないです。」

「うぅ、キャロ・・・・・」

そう言って頭を撫でてくれるキャロ。ちくしょう、優しさが目に染みるぜ・・・・

「レイごめんね・・・」

「確かに我も言い過ぎた、すまない。」

「レイ、ごめん・・・」

「悪かったな。」

「すまんっス！！」

「ウェンディ、お前謝る気ないだろ・・・それに、俺はただ単に純粋無垢の子供とか、小さくて可愛いものや小さい動物が好きなだけだ。けっしてロリコンじゃない！！」

（（（（（（（（結構スレスレの気が・・・））））））））

と、そこにいる全員が思ったが、これ以上零治をいじるとおかしくなりそうだから誰も何も言わなかった・・・

その後、ナンバーズの紹介も終わり、いよいよ有栖家の面々の自己紹介となった。

「で、俺の家族の紹介だけど・・・・」

「僕は有栖ライだよ！！よろしくね。」

右手を上げて元気よく自己紹介する。

「はい！よろしくお願いします、ライお姉ちゃん。」

「レ、レイ！！！お姉ちゃんだって、私！！」

呼ばれたのが嬉しかったのか、凄くテンションが高いライ。

「いや、ウェンディに呼ばれてるだろ・・・・」

「ウェンディはバカにしてるから別だよ！！いやぁ、私もお姉さんかぁ・・・・」

目をキラキラしながら自分の世界に入るライ。

「ちょっとアホな子だけど、良いやつだから。」

「は、はい・・・」

頼むから引かないであげて・・・・・

「我は有栖夜美だ、よろしく頼む。」

「は、はい、こちらこそよろしくお願いします、夜美お姉ちゃん。」

夜美が差し出した手を掴み握手するキャロ。

「ふふ、姉と呼ばれるのは悪くないな。困ったことがあったら相談してくれ。いつでも相談に乗るぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「夜美は頼りになるから気軽に相談するといいぞ。ただし！！余計な事まで覚えなくていいからな。」

「失敬な、我が変な事でも教えると思ってるのか？」

「ああ、例えば本棚の後ろに隠してある、乙女ぼｎグフッ！？」

頬をグーパンされ、それ以上言えなかった。

「そ、それをどこで知った！？」

「・・・ラグナルが掃除と称して勝手に侵入して部屋を漁ったとき。」

頬を抑えながら俺は正直に答える。

『ちょ！？マスター！？』

「レイ、お前のデバイスちょっと貸してくれないか？」

「いや、絶対壊すから貸さない。」

そう返事をしたが、無理矢理でも取ろうと俺に襲いかかってくる夜美。

「渡せ！！そいつは我の知られざる秘密を知ってしまった！！すぐにこの世から排除せねば！！」

「止めろって、別にお前がどんな趣味を持とうと俺は引いたりしないから！」

『そうですよ、私とマスターは口が堅いですから夜美が乙女ぼｎ・・・』

「やめろーーーー！！！こうなったら二人ともあの世へ行ってもらう！！！」

デバイスを展開して襲いかかる夜美。

それから俺は夜美によるリアル鬼ごっこが始まった・・・

「あの・・・・自己紹介は？」

「全く・・・・・派手にやってくれたね。」

「「すいません・・・・」」

俺と夜美はスカさんのアジトで鬼ごっこをしていた為、夜美が放った魔力弾がスカさんのアジトをボロボロにしてしまった。

そんな俺たちは、丁度調整の終ったゼストさんに捕まり、スカさんの前にやって来たのだった・・・

「まあ、損害は使っていない施設だったからよかったものの、もしまだ稼働していないナンバーズの部屋だったら・・・・」

「「すいません・・・・」」

「次から気を付けてくれ。・・・・・まあ説教はこれくらいに、2人は初めてだよね。彼はゼスト・グランガイツ、今は私の協力者だよ。」

「ゼスト・グランガイツだ、よろしく頼む。」

「我は有栖夜美だ。」

「俺は有栖零治です、よろしくお願いします。」

「お前が黒の亡霊か・・・管理局時代は世話になったな・・・」

「ハハハ、覚えがないです・・・」

ごめんなさい、よく覚えています。

「そうか?あの時はよく仕事を邪魔をされ、どれだけ迷惑だったか・・・」

そんな事言われてもな・・・・こっちだって仕事だし・・・

「か、過去のことなんてどうでもいいでしょう!!過去より今です!!」

「そうだな、これからの為に一戦本気の模擬戦〈・・・〉をお願いしたいのだが・・・」

ヤバい、この人ボコす気満々だ!!

「えっと、考えておきます・・・」

そう返事をしたとき、夜美がゼストさんに聞こえない声で話しかけてきた。

（レイ、一体何をしたんだ?）

（昔に傭兵の仕事で管理局の邪魔をしたことが結構あってさ・・・特に地上部隊にはかなり迷惑極まりなかったと思う。）

（と言うことは・・・）

（そう、ゼストさんはあの頃、地上のエース級魔導師だったんだ・・・）

（それは怒るのも分かるな・・・）

そう言って話すのを止める夜美。

なんだよ、冷たすぎるだろ・・・・

終始ゼストさんに睨まれていた俺は早くゼストさんの前から逃げた

かった・・・・

「お帰りなさい二人とも。何か飲みますか？」

あのプレッシャーをなんとか逃れた俺はウーノさんのお姉さんオーラに包まれた。

全く、あの人のプレッシャーはなんなんだよ・・・

いつか『我は悪を断つ剣なり！！』とか言って襲ってきたり・・・・

ってあの人デバイス槍か。

「取り敢えずほうじ茶を下さい・・・」

「おいレイ、地球でないのだからそんなもの・・・」

「ありますよ。」

「あるのか！？」

甘いな夜美、ここは既に地球かぶれになってるのだよ。

「夜美ちゃんはどうします？」

「あ、じゃあ同じのを頼む。」

ふと俺はリビングを見る。

「あれ？あいつらは？」

「そう言えば・・・」

ふと見るとリビングには誰も居なくなっていてとても静かになっていた。

しかも桐谷やキャロといった、帰ってきたメンツもいない・・・・・

「確か、帰ってきた桐谷君達は汗を流しに行くって大浴場に。ゲームしてた子達は、ゲーム飽きたから鬼ごっこするって出ていったわ。」

へえ～鬼ごっこね・・・・・・・・・

「レ、レイ・・・・」

「そうだ、ライ！！」

アイツ方向音痴だ！！

「夜美、俺、ライ探してくる！！」

俺は慌てて部屋を出ようとする。

「どうしたのですか！？」

「ライの奴、方向音痴なのだ。ただでさえ迷うくせに・・・・・言い出せなくて断れなかったな・・・」

「だから行ってくる、ウーノさん!!」

「待ってください、こういう時は私に任せてください。」

ウーノさんはテーブルの上に用意してくれたお茶を置き、

キーボードに手を置くように何もないところに手を添えると、そこから複数のディスプレイが現れた。

「ウーノさん、これは?」

「私はアジトのＣＰＵと直接繋がっていますから、アジトにいれば、どこでも接続可能なのです。」

おお!!始めて戦闘機人っぽい能力を見れた気がする。

「それで、ライさんのいる場所ですが・・・・」

そう言ってウーノさんは捜索を開始してくれた。

「どうやらＦ―１７地点の方まで行ってしまったようですね・・・」

「「Ｆ―１７?」」

「このアジトはＡからＦでそれぞれ２０ブロックあります。ライちゃんはそれのＦ―１７にいますね。」

それって一番端っこって事だよな?

「おかしいですね、今はあそこにいけないようにDブロックに障壁を展開しているのですけど・・・・・」

「まぁ・・・」

「ライだからな・・・」

あいつは結構予想外の事をしたりするので、普通に図ってはダメなのだ。

「取り敢えず場所は分かりました。ここまでの道は私やドクター、クアットロ位しか行かないので迷うと思います。だからこちらで指揮をしますのでこれを・・・・」

ウーノさんは俺と夜美に耳に付ける通信器を渡した。

「では、お気を付けて。」

「はい、行ってきます。」

「行ってくる。」

俺達はライ捜索に出た・・・・・

お風呂にて・・・・・・・

「どっぽーん・・・・・・・」

「ダメだって!!ルーちゃん!!」

私はルーちゃんを止めようと注意しますが時すでに遅し、ルーちゃんは大きなお風呂にダイブしてしまいました・・・・

「大きい・・・・・」

「本当ね・・・・・」

加奈はアジトにこんなに大きなお風呂があることに驚き、キャロは普通に初めての大きいお風呂に驚いているようです。

「ルーちゃん、一旦お風呂から出なさい!」

私に怒られ、渋々お風呂から出るルーちゃん。

「でも、ウェンディがこれが正しいお風呂の入りかたって・・・・・・」

「あの子の言うことの８０％は嘘です！！」

「それは・・・・・・・・言い過ぎでもないな・・・・」

「えっ！？」

その頃、男子風呂・・・・・・

「ふぅ～、温まるな・・・・」

一人、リラックスしながらお風呂に入る桐谷がいた・・・・・

「バシャバシャバシャ・・・・・」

「お風呂でバタ足も駄目です！！」

「星、厳しい・・・・」

「そうよ、少しは多めにみてあげなさい。」

「そうですけど・・・・・」

注意され顔しかめる星。

星はそのまま隣でお風呂を満喫しているキャロに声をかけた。

「どうですか、お風呂は。」

「ポカポカして気持ちいいです。大きくてみんなで入れて楽しいです。」

「そうねえ、確かにたまには大勢で入るのもいいわよねぇ～」

加奈の言うとおりですね。確かに大勢で入るのもたまにはいいものです。

「・・・・・・・・・」

「どうしました、ルーちゃん?」

「星、セイン達よりおっぱい大きい・・・・・・」

「な、何を言って!?」

「そう言えば・・・・」

「大きいです・・・・」

「きゃ、キャロまで・・・・・」

そんなに見られると恥ずかしいのですが・・・・・

「一体何を食べてればここまで大きくなるのかしらね・・・・」

そう言いながらジロジロ見る加奈。

「お乳・・・・出る？」

「出ません！！」

それは・・・・・恥ずかしくて言えません！！

「・・・・・私も大きくなるかな？」

「きっとなりますよ。ライも沢山食べて大きくなりましたから。」

「そう言えばライお姉ちゃんも大きかったです。」

「あの子のスタイルは中学生じゃないわ・・・・・あんなの化け物よ・・・」

そこまで言わなくても良いと思うのですが・・・・

「キャロ、背中洗いっこしよう・・・・」

不意にルーちゃんがキャロに声をかけた。

「えっ！？は、はい！！」

嬉しそうにお風呂から上がるキャロ。

「よかったです、これならルーちゃんとも友達になれると思います。」

「そうねぇ、年も同じくらいだろうしいいかもね。ただ・・・・・」

「そうですね・・・・」

「「ウェンディの悪影響がなければ!!」」

「「？」」

私と加奈は二人の様子を見てそんな事を思ったのだった。

この後も女性陣はお風呂を楽しく満喫したのだった・・・・・

「ふぅ、やっと着いたな。」

「はぁはぁ・・・」

「・・・・・・・・」

C―11。

今、任務を終えた3人がスカリエッティのアジトに着いた。

「情けないぞ、クアットロ！それくらい走っただけで倒れるな！！」

「何言ってんのよ、この飲んだくれバトルジャンキーが・・・・」

「クアットロ、聞こえたらトーレ姉に殺されるよ・・・・」

トーレは元気そのものだが、ディエチとクアットロの二人はヘトヘトである。

特にクアットロはアジトに着いたとたん、その場に座り込んだ。

「しかし、ここはどこだ？いつもの場所に転移したはずだよな？」

「そういえば、あれ？確かにいつもの座標の筈ですけど・・・・」

そう言ってクアットロはディスプレイを展開させる。

「Ｃ－１１？何故こんなところに？」

そんな時だった、

（！？）

いきなりディエチは壁に何者かに掴まれ、壁へ体全体を引きずり込まれる。

（た、たす・・・）

だが、口を塞がれた為、声も出せず、

二人に気づかれる間もなく、壁にあった隠し扉の中へ引きずり込ま

れたのだった・・・・・

「？」

「どうしたスカリエッティ？」

「いや、何かアジトがおかしくなっているような気がしたのだが・・・」

スカリエッティは展開しているディスプレイをよく見る。

「？いや、何も異常はないみたいだが・・・・」

ゼストの言うとおり、ディスプレイには何も変化は無かった。

「そうみたいだね、それじゃあ、続きといきますか。」

「まだ飲むつもりか・・・・・・」

アジトの異変にも気づかぬまま、二人は酒盛りを続けるのだった・・・・

## 第４８話　キャロ、スカさん家に行く。スカさん家の異変（後書き）

アジトに異変です。

アジトのブロック分け、A～Fのことですが、今のスカさん家の面々はAとBしか使ってません。

軽く説明を・・・・

Aは主に住居。転移してくる場所もここで、風呂とリビング、ラボもここにあります。

Bは訓練場と遊び場。ライ達もここで鬼ごっこしていたのですが、はぐれてしまいます。

CとDはガジェット製作所。主にここでガジェットを作ってます。今は稼働していないので滅多にここに来ません。

Eは廃棄所。失敗作などを捨てる場所。
はっきり言って気持ち悪いです・・・・

Fは???
次の話で分かります。ライはここにいます。

って感じに大体的に書きましたが、恐らく一話で終わらせる予定です。

メインは零治と夜美。

キャロも目立たせたいですけど、どうなるかなぁ～

次もよろしくお願いします。

## 第４９話　ダンジョン探索『ライを求めて・・・』（前書き）

こんにちはｂｌｕｅｏｃｅａｎです。

前の後書きに１話で終わらせるとかほざきましたが、全然終わりませんでした。

ＰＶが４００万突破し、お気に入りも３０００件突破してユニークも５０万人突破と何か色々突破してました。

皆さん読んでくださってありがとうございます。

これからも誤字だらけの作者をどうかよろしくお願いします・・・

# 第４９話　ダンジョン探索『ライを求めて・・・』

C―1・・・・・

『ではここから指示を出します。この先１００mを右折してください。』

ここはC地点。ウーノさんの話だとこの場所でガジェットを製作していたらしい。
明かりも薄暗く、かなり不気味だ。

「足元気をつけろよ。」

「ああ、分かって!?」

つまずく夜美を支える。

「言ってるそばから・・・」

「す、済まない・・・」

そんなことをしていると・・・・

ウィーン・・・ウィーン・・・

機械音が聞こえてきた。

「なんだこの音？」

「何か動いている？」

その音は俺たちが進む道の先から聞こえてきた。

「あれは・・・・」

暗く、まだよく見えないが、シルエットは見えてきた。

カプセルみたいな丸いシルエット・・・・

「ガジェット？」

スカさんにデータを見せてもらったから見覚えがあるけど・・・・

『ガジェットですか！？おかしいですね、今は全て製造を中止していて稼働させていないはずなのですけど・・・』

と、そんなことを話していると・・・

「うわっ！？」

足元に熱戦を放ってきた。

「コイツ・・・ラグナル！！」

『分かりました。』

「セットアップ！！」

俺はラグナルをセットアップする。

「我も・・・」

夜美も俺に続いてセットアップした。

『何故、稼働しているのか分かりません。今こちらで調べてみます。』

「どうすればいいですか？」

『破壊しながら先を進んだほうが良いと思います。Ｉ型は数も多いので、戦うだけ無駄です。ＡＭＦも使えますので、魔力残量にお気を付けて。』

「分かりました。聞いたとおりだ夜美。基本俺が前衛で、夜美が後衛で行こう。」

「分かった。」

「取り敢えず道を作ろう。夜美、頼む。」

「分かった、任せろ。」

そう言って杖を真上に構える。

「新技だ。闇に飲まれろ、インフェルノ！」

杖から巨大な闇の魔力弾が次から次へとガジェットに向かって飛ん

でいく。

直撃するたびにガジェットを破壊し尽くした。

「・・・・・・俺っていらなくね？」

「どうした、行くぞレイ！！」

「あいよ・・・」

俺たちは更に奥へと向かって行った。

リビング・・・・・

「おかしいですね・・・・」

ウーノは零治たち指示を出しながら、なぜガジェットが動き出したのかを調べていた。

「どうやっても異常なしとしか・・・・」

「ウーノさん、どうしたのですか？」

その声を聞き、ウーノは振り返ると、風呂上がりの星達がそこにい

た。

「おかえりなさい、お風呂はどうでした？」

「気持ちよかったですよ。キョロも大喜びで。」

「はい、気持ちよかったです！」

「クキュー！」

「フリード！！」

ソファーの上で寝ていたフリードがキャロのところへ飛んできた。

「ふふ、二人は仲が良いですね。」

「はい、フリードはいつも一緒でしたから。」

笑顔で語るキャロにその場にいたルーテシア以外の女性陣が和んだのだった。

「そう言えば、レイと夜美はどうしたのですか？」

「それなのですが・・・・」

ウーノは今起きている出来事を説明し始めた・・・・・

D―8・・・・・

「ディエチちゃ～ん、どこにいるの～？」

クアットロが呼びかけるが返事はない。

「一体どうしたというのだ、ガジェットが稼働しているだけでも驚いているのに、まさか襲ってくるとは・・・」

「ドクターが何かやらかしたのではなくて？」

「それはないのではないのか？しかし・・・・はぁ・・・」

目の前にまた現れた？型と？型にトーレはため息を吐く。

「全く、次から次へとゾロゾロと現れて・・・・・面倒だがさっさと倒して先に進むぞ。」

「仕方ないですね、ディエチちゃんには今度おごってもらうことにしましょう。」

トーレとクアットロも先に進んでいく・・・・

C－１４・・・・

「魔神剣！！」

斬撃を生み出し、ガジェットを吹っ飛ばす。

「エニシアルダガー！」

ナイフ型の魔力弾を連射する夜美。

「くそっ、キリがない！！」

「もう少しで次のフロアだ！頑張れ夜美！」

節約しながら前に先に進む俺達。

「よし！！」

なんとか抜けた俺たちはその場に座り込んだ。

進んできて分かったことだが・・・

・あいつらはフロアの境目を超えてこない。その場合、目の前にいても攻撃もしてこない。
・フロアによっては出てくる数も変わる。
・フロアによっては、明るかったり、部屋が狭かったりと、そのフロアごとに特徴が違う。
・なぜかＡＭＦを使わない。
・経路は複数あり、どこにつくのかは分からない。

と、こんな感じだ。

俺たちは今ちょうどフロアの境目に到達し少し休んでいる所だ。

「全く・・・さっきの場所はガジェットかなり多かったな。やはり選ぶ場所を間違えたのではないのか？」

「そうかもしれないな・・・・真ん中を行くべきだったか？」

あの後、ウーノさんがアジトのＣＰＵに異常を発見したらしく、ガジェットが動いているのは、対侵入者迎撃用にスカさんが作った、『迷宮ダンジョン迎撃システム』が原因らしい。

スカさんが遊び半分で作ったもので、随分前に廃棄したとウーノさんは言っていた。

話によると、上記で言ったとおりの事が起き、それで侵入者をダウンさせるのが目的だとか・・・

だけどちゃんと最後まで行けるようにしたのはスカさんの遊び心らしい。

これによりウーノさんのバックアップが無くなった俺たちは自分たちで進むしかなくってしまった。

しかもそれだけでなく、Ａ～Ｆに上がっていくに連れて難易度が上がっていくらしい。

今回ライはＦフロアにいるため最後まで行かなくてはならない。道のりはまだまだ先だ。

「でも一気にＣ－１９まで来れたな。結構短縮出来たみたいだぞ。」

「そうだな、少し休んだらまた先に進もう。」

俺たちは少し休むことにした・・・・・・

C―10・・・・・

「IS、ランブルデトネイター!!」

「でやっ!!」

フェリアのISとノーヴェのガンナックルによる攻撃でガジェットが爆発する。

「やったっスねチンク姉!ノーヴェもよくやったっス!!」

「よくやったじゃねぇ!!お前も戦え!!」

お茶らけて言うウェンディにノーヴェが怒る。

「だって、ここのフロアじゃ狭すぎて私のISじゃ、邪魔するだけっスよ・・・」

「んなことないだろ!現に今ボードの上に乗ってるじゃねえか!!」

「こんな場所じゃ高機動戦闘も出来ないっスよ~」

「喧嘩は後にして2人とも。少し先に転送装置があるよ。」

セインに言われ、ノーヴェとウェンディは喧嘩をやめ、セインの言った転送装置へ向かう。

今、ここにいるのはフェリア、セイン、ノーヴェ、ウェンディ。

鬼ごっこ途中で消えたライを探しにCフロアへ入ったのだが・・・・・

「何で迎撃システムが作動しているのだ?」

入って早々にガジェットに襲われた4人。

フェリア以外、これといった実戦をしていない3人だったが、問題無く戦っている。

いや、主にフェリアとノーヴェの二人だが・・・・

セインは元々戦う能力では無いので、自身のISでフロアの偵察をしている。

これのおかげで敵の位置を把握しているので大いに役にたっている。

一応、ウェンディもエリアルボードを持ってきてはいる。

何故持っているのかと言うと、単純に鬼ごっこで逃げている時に使っていたからである。

直ぐに皆に文句を言われ、使用不可となっていたが・・・・

「でも、本当に持ってきておいて良かったっス。」

移動中、ウェンディはライディングボードの上に乗って移動していた。

姉が歩いているのにも関わらず・・・・

「お前な・・・・」

「いいから行くぞ、ノーヴェ。」

「分かったよ、チンク姉。」

「みんなここだよ。」

そこには怪しく光っている転送装置があった。

「何処に繋がっているんだ?」

「分からない、私もこんなものがあるなんて聞いたことが無い。」

「どうする、チンク姉?」

「そうだな。」

「当然乗るっス!!」

そう言って後先考えず転送装置に乗るウェンディ。

「おい勝手な事するなよ!!」

「こういう時はショートカット出来るってゲームだとお約束っス！！大丈夫っスよ！！」

３人は暫く考えたが、ハッキリ分からない以上、転送装置に乗らない方が良いという判断になったが・・・

「みんなも早く来るっス！！」

ウェンディが操るライディングボートに押され、３人共転送装置に乗ってしまった。

「「「ウェンディ！！！」」」

「無限の彼方へ、さあ行くぞっス！！！」

こうして４人は目的地の分からない場所に転移したのだった・・・・

リビング・・・・・

「大丈夫かな、夜美お姉ちゃん、お兄ちゃん・・・・・」

キャロが心配そうに呟く。

「大丈夫ですよ、元々ドクターが初期に遊び半分で作ったものなの

であんまり危険性はなかった筈です。」
ウーノの言葉に少し明るくなったキャロ。
しかし・・・・・
『さて、それはどうかな?』
ウーノ展開していたディスプレイに黒い影の男が現れた。
「あ、あなたは!?」
『私はメルフィス、貴様なら私の名前を知っているだろう、ウーノ。』
と影の男は言っているが・・・・・
「・・・・・・・・誰でしたっけ?」
『俺はお前らが作ったアジトの自己防衛プログラムのコアだろうが!!!!』
もの凄い怒鳴り声でウーノに怒った。
「・・・・・・・・・・ああ。」
『絶対思い出してないだろ!!』
「私は覚えていないのですが・・・・ドクター?」

ウーノは回線を開き、スカリエッティのラボへ通信を送る。
すると、スカリエッティの部屋がディスプレイで表示された。

「ドクター？」

『なんだいウーノ・・・・ヒック・・・・』

「ドクター・・・まさか・・・」

『今私、思いついたのだけどね、今度みんなでピクニックなんてどうかな？せっかく零治君達もいるのだから、どこかへ連れて行くべきだと思うのだけれど・・・』

「ドクター！！その零治君達がピンチなんですよ！！」

『そうなのかい？またどこかの少女を引っ掛けてきたのかな。全く、私の娘たちもいつか彼の毒牙にかかると思うと・・・・』

ブツブツと自分の世界に入るスカリエッティ。

「ドクター・・・・」

頭を抱えるウーノ。

「使えないな・・・」

冷たい言葉で罵る加奈。

「そんな事言っちゃ駄目ですよ加奈・・・」

「ルーちゃんどうしたの？」

「ゼストが大の字で寝てた・・・・・」

少しムッとした顔で言うルーテシア。

そんなルーテシアを見て、キャロは苦笑いしかでなかった・・・・・

D―5・・・・・

順調に進んでいた俺たちだったが、ここに来て奇妙なフロアに出た。

「夜美、見てみろ。」

「なんだ？」

次のフロアに入った俺達はそこにポツンと置いてある箱に目が行った。

「これって・・・・・」

「宝箱だな・・・・・」

そう、そこにはゲームみたいに宝箱がぽつんと置いてあった。

「どうする？レイ。」

「開けてみるか。」

俺は全く躊躇せず、箱を開けた。

「これは・・・・」

中には、２本のビンの飲み物と紙が入っていた。

『魔力回復薬。失った魔力を回復します。』

「「・・・・・」」

二人は無言になり・・・・

「「一応持っていこう・・・・」」

使わずに一応持っていくことにした。

Ｃ－１３・・・・・

「やっぱり駄目っス！！こんなフリがあったら試さないと芸人じゃないっス！！」

「落ち着け、ウェンディ！！お前は芸人じゃないはずだ！！」

「そんなの関係ないっス！！人としてフリがあったならそれに乗らなければ腐ってしまうっス！！」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！！」

「・・・・・・・はぁ・・・・」

そんな様子を見ていたフェリアはため息がついた。

今の状況を説明しよう。

ウェンディがしようとしていること、それは・・・・

『修理中、使用してはいけません』

と転送装置の隣に立て札が立っていた。

「行かなければならないっス！！ダメと言われると無性にやりたくなるっス！！」

「やめろって！！またスタート地点に戻りたいのか！？」

さっき４人の転移先はまさかのＣ－１、『スタートに戻る』だった。

フェリア達はまた一から始めてここまで来たのだ。

「いやっス！！絶対に使うっス～！！」

そんなウェンディを3人がかりで抑えて今回はスルーしたのだった・・・・・

リビング・・・・・

ウーノＳＩＤＥ

「一体何が目的ですか？」

今、リビングではメルフィスによって、３組のダンジョンの様子をディスプレイで表示され、私達はそれを見ています。

トーレとクアットロもこのダンジョンにいることに驚きました。多分アジトに着いたとたん、巻き込まれたのでしょう。

しかしディエチはどこに行ったのでしょう？

『そんな事決まっている。私はスカリエッティに復讐するために行動を起こしたのだ。』

「復讐？」

『私は作られてすぐに気に入らないとＦフロアに破棄されたのだ！！気に入らないのその一言で！！Ｆフロアに捨てられた私は、気づかれないように少しづつデータを吸収してきた。全てはスカリエッ

ティに復讐するために・・・そして私に転機が訪れた！！』

「転機とは？」

『スカリエッティがいきなりガジェットの製作をストップし、Ｄフロアから先を遮断したのだ。そうなれば後は自由だ。そこで私は一気に周りの残っていたデータを吸収し、様々なデータを手に入れ、アジトのＣＰＵの掌握方法を見つけ、今に至ったというわけだ。このアジトのＣＰＵを掌握出来ればこちらのものだ、これでスカリエッティにも復讐できる。』

やられましたね・・・
廃棄したものをちゃんと確認しとくべきでした・・・

『だが安心しろ。まだ彼女達に手をかけるつもりはないさ。しばらくはこのショーを楽しませてもらうとしよう。その後、全ガジェットを使ってこのアジトを破壊することにする。』

「くっ・・・・」

タイミングの悪い・・・・
ドクターがいれば何とか出来ると思いますが、今は泥酔していて訳が分からなくなっていますし、お酒の入った頭で何とか出来るとは思えません。

「大丈夫ですよ、ウーノさん。」

そんな私を見て星ちゃんが言いました。

「レイと夜美に任せれば大丈夫です。」

「零治君と夜美ちゃんですか？」

「はい、あの二人なら必ず成し遂げてくれます。それに・・・・・」

そう言って零治君達の映像を見る星ちゃん。

「レイは家族のピンチに絶対負けません！！」

そう力強く宣言したのだった。

「それに加奈にジェイルさんを起こしに行くように頼みました。加奈は容赦無いから多分正気に戻ると思います。」

それはそれでドクターは大丈夫でしょうか？

## 第４９話　ダンジョン探索『ライを求めて・・・』（後書き）

ダンジョン探索まだ続きます。

今度こそ次で終わると思います。

ギャグっぽく書きたかったのですけど、結構まずい状況に・・・

無事ライを救出出来るのか！？

ディエチはどこにいるのか！？

ウェンディ達は先に進めるのか！？

スカさんは無事なのか！？

次回もよろしくお願いします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4021v/

魔法少女リリカルなのは　平凡な日常を望む転生者

2011年10月19日05時06分発行